

活動報告 2018

2019年12月20日

東北大学東北アジア研究センター

活動報告 2018

2019年12月20日

巻頭言	1
2018年度行事表	2
総合的自己評価	3
(1) 理念と目的	4
(2) 概念図	5
(3) 東北アジア研究センターの組織構成と運営	6
(4) 特筆すべき活動	12
I 数値指標	12
I-1 数値実績	12
I-2 数値指標の向上・改善・維持に向けた取組又は数値データの補足説明	13
II 過去三年間の特筆すべき取組	15
III 目指す方向性や将来に向けた取組、不十分な取り組みや課題	20
組織運営活動	21
(1) 人員配置と業務分担	22
(A) 教員等の配置、研究組織構成状況(2019年3月現在)	22
(B) 現職専任教員等の年齢、勤続年数、博士号取得状況(2019年3月31日現在)	23
(C) 専任教員の最終出身大学院(2019年3月31日現在)	23
(D) 研究支援組織の整備・機能状況(2019年3月31日現在)	24
(E) 学術研究員(旧職名：教育研究支援者)受け入れ状況	24
(F) 外国人研究員(海外)受け入れ状況	24
(G) 兼務教員受け入れ状況(2019年3月現在)	31
(H) 非常勤講師受け入れ状況(2019年3月現在)	31
(I) 東北アジア研究センターフェロー	32
(J) その他研究員	32
(K) センター内委員会構成図(2019年3月31日現在)	34
(L) 委員会名簿(2018年度)	34
(2) 研究資金	41
(A) 経費総額	41
(B) 歳出決算額(国立学校特別会計／大学運営資金・寄付金)	42
(C) 科研費の申請・採択状況	43
(D) 外部資金受入状況	44

研究活動	51
(1) プロジェクト研究ユニット	52
(A) 2018年度センター・プロジェクト部門研究ユニット一覧	52
東北アジアにおける大気環境管理スキームの構築研究ユニット	53
東北アジアにおける地質連続性と 「石」文化共通性に関する学際研究ユニット	55
東北アジア地域の環境・資源に関する研究連携ユニット	57
東アジアにおける社会変化と文化的持続に関する人類学的研究ユニット	62
災害人文学研究ユニット	64
最新科学による遺跡調査ユニット	67
(2) 共同研究	69
(A) 2018年度センター・共同研究継続課題一覧	69
族譜編纂活動における現代中国人の歴史意識の研究	70
蔵王火山の活動の熱的・地球化学的モニタリング	72
東北アジア諸地域における清朝統治の歴史的意味に関する比較研究	75
移動と流行：移民がもたらしたもの／持ち帰ったもの	78
地中レーダによる遺跡探査の推進	81
オーラルヒストリーによる旧ソ連ロシア語系住民の口頭言語と 対ソ・対露認識の研究	83
南三陸・仙台湾地域を対象とした次世代ジオツーリズムの構築	88
中国における新しい石炭政策が大気汚染および 温暖化を緩和する可能性の把握	91
自然災害の発生による政治・社会構造の変容に関する比較研究	95
地質遺産の持続可能な保全のための学際研究：広域変成地域の伝承的信仰	99
東北アジアを中心としたアジア地域における動物資源利用問題と 「人間性」- 生業、娯楽、奢侈の観点から -	102
東北アジアの地質的多様性に対する「石」文化の技術的適応	108
規範と模範：東北アジア地域における近代化と社会共生	113
根室半島～歯舞群島・色丹島の前弧マグマがもたらす地域環境システム	117
北東アジアにおける日本のソフトパワー	120
東日本大震災後のコミュニティ再生・創生プロセスと 持続可能性に関する実証的共同研究	124
東北アジア辺境地域多民族共生コミュニティ形成の論理に関する研究	130

(3) 上廣歴史資料学研究部門報告書	137
(4) 研究紹介発表	167
(5) 学術協定	168
(A) 学術協定による海外の学術機関等との連携強化	168
(6) 研究成果公開	169
(A) 既刊の刊行物	169
(B) 2018年度に実施された公開講演、共同研究会等	172
教員の研究活動	197
ロシア・シベリア研究分野	
寺山 恭輔	198
高倉 浩樹	201
塩谷 昌史	207
モンゴル・中央アジア研究分野	
岡 洋樹	211
柳田 賢二	215
中国研究分野	
瀬川 昌久	219
明日香壽川	222
上野 稔弘	225
日本・朝鮮半島研究分野	
石井 敦	228
デレーニ・アリーン・エリザベス	231
宮本 毅	235
地域生態系研究分野	
千葉 聡	238
鹿野 秀一	242
地球化学研究分野	
辻森 樹	245
平野 直人	249
後藤 章夫	254
環境情報科学研究分野	
工藤 純一	257

資源環境科学研究分野	
佐藤 源之	260
菊田 和孝	268
鄒 立龍	270
寄附研究部門 上廣歴史資料学研究部門	
荒武賢一朗	271
高橋 陽一	276
友田 昌宏	279
藤方 博之	282
研究支援部門	
内藤 寛子	284
プロジェクト研究部門 災害人文学研究ユニット	
福田 雄	287
専属教員以外の研究者の研究活動	291
矢口 哲朗	292
アハメド アンワー セイド アブデルハミード	292
是恒さくら	292
金 丹	293
田中 利和	294
李 善姫	296

巻頭言

2018年度は、東北アジア研究センターにとっては、国際化強化の年であった。具体的には学内の競争的事業・知のフォーラム「東北アジアの大陸地殻安定化と人類の環境適応」に係わり文学研究科、理学研究科、環境科学研究科と協力し、地質学・考古学・人類学・宗教学に係わる4つの国際シンポジウムを行ったからである。国内外の300名以上の研究者の参加を得ることができた。これ以外に人間文化研究機構の北東アジア地域研究事業の東北大拠点として環境政策、歴史学、人類学に係わる大小様々な国際研究集会を開催した。また指定国立大学災害科学研究事業に係わり、災害科学国際研究所、文学研究科などと連携する研究活動を行うこともできたことも留意しておく必要があるだろう。東北大学付置研究所・センター連携体による若手アンサンブル公募事業を通して、若手研究者が独自の視点で、学内連携を行うことができたことは喜ばしい。その他、生態学・地質学・工学分野でもめざましい研究成果が出た。

東北アジア研究センターは、文学部附属日本文化研究施設をその前史としてもっている。この組織や文学部などで従前から学内で蓄積されてきた日本研究・中国研究の伝統に加え、新たにそれまで東北大ではほとんど不在だったロシア＝シベリア研究、モンゴル・内陸アジア研究を導入し、さらにこれらの地域に関わる生態学・地質学・工学を含む研究所型組織として23年前に発足した。今までになかった研究領域を発展させるかたちで、東北大学の研究の独自性構築に貢献してきた。ここ数年は、学外の様々な研究事業と連携させた研究プログラムを実施してきている点に特徴がある。我々のセンターは、研究所型組織の独立した部局であるが、附置研究所ではないし、また文科省の全国共同利用共同研究拠点でもない。そうした条件のなかで独自そして特徴的な研究運営体制を構築し、研究成果をあげていく確固とした仕組みを作っていくことが求められていると思う昨今である。

センター長 高倉 浩樹

2018年度行事表

期 日	行 事
2018年4月23日	センター運営会議
2018年5月28日	センター運営会議
2018年6月25日	センター運営会議
2018年7月30日	センター運営会議
2018年9月12日	部局評価総長ヒアリング
2018年9月26日	センター運営会議
2018年10月22日	センター運営会議
2018年11月26日	センター運営会議
2018年12月25日	センター運営会議
2019年1月28日	センター運営会議
2019年2月23日	東北大学東北アジア研究センター公開講演会 地球生命の起源と進化：ヒトの誕生と現在から近未来の 課題まで
2019年2月25日	センター運営会議
2019年3月3日	東北大学東北アジア研究センターシンポジウム Bringing the State Back in: New Frontiers of Governance Studies in China
2019年3月25日	センター運営会議

総合的自己評価

(1) 理念と目的

センターについて

本研究センターは、国立大学法人東北大学東北アジア研究センター規程第二条で「学内共同教育研究施設等として、東北アジア（東アジア及び北アジア並びに日本をいう）地域に関する地域研究を学際的及び総合的に行う」ことを目的として掲げている。その前身は1962年に設置された文学部附属日本文化研究施設であるが、1996年に日本・朝鮮半島・中国・モンゴル・ロシアを総合的に捉える地域研究を設置目的とした全国唯一の研究型組織（部局）として、また人文社会科学と理学・工学による学際研究施設として発足した。東北（北東）アジア研究の大学設置研究所型組織としては日本で最大である。

理念と目的

本センターは、東北アジアという地域理解の枠組みを確立し、普及させることを第一の目的としています。東北アジア研究センターが設立された1996年以後の23年間は、まさに東北アジアが地域枠組みとして実質化していった時代だったと言えます。中国の経済発展と日本・韓国などの結びつき、ロシア、モンゴルのアジア太平洋国家としての再定義と東アジアとの関係構築、そして中国とロシアを中心とする関係調整機構の出現など、今やロシアのシベリア・極東、中国、朝鮮半島、モンゴル及び日本から成る東北アジアは、冷戦時代とは比較にならないほど密接な関係をもっています。北アジア、東アジアといった既存の地域概念では、現今の状況を捉えることができなくなっているのです。しかしわが国では、未だに日中・日露・日韓などといった二国間関係の枠組みでの理解を克服できておらず、日本が東北アジアの一部としてあることも十分に認識されているとは言えないのが実情です。東北アジア地域概念の確立は、わが国にとって急務であると言えます。

地域研究に求められるのは、実践性です。経済発展の中で、東北アジアは今急激な変化を経験しています。変化への戸惑いは、ときに深刻な亀裂を社会に走らせます。開発に伴う環境問題、民族の対立、歴史認識、領土問題などなど、亀裂の露頭はじつに様々な形で現れます。そのような課題を、広域的枠組みにおいて共有することが重要です。一方で東北アジア地域内では、すでに多くのものが共有されています。地域の文化的な価値をどのように評価し、何を残し、何を変えなければならないのか。正負の遺産にどのように向き合うのか。それが東北アジア地域研究に求められている課題です。特に重要なのは、研究者と地域住民の協働です。地域研究とは、学者が一方向的に分析結果を提示するのではなく、地域住民が継承・創出しようとする文化のあり方をともに考えていくことです。

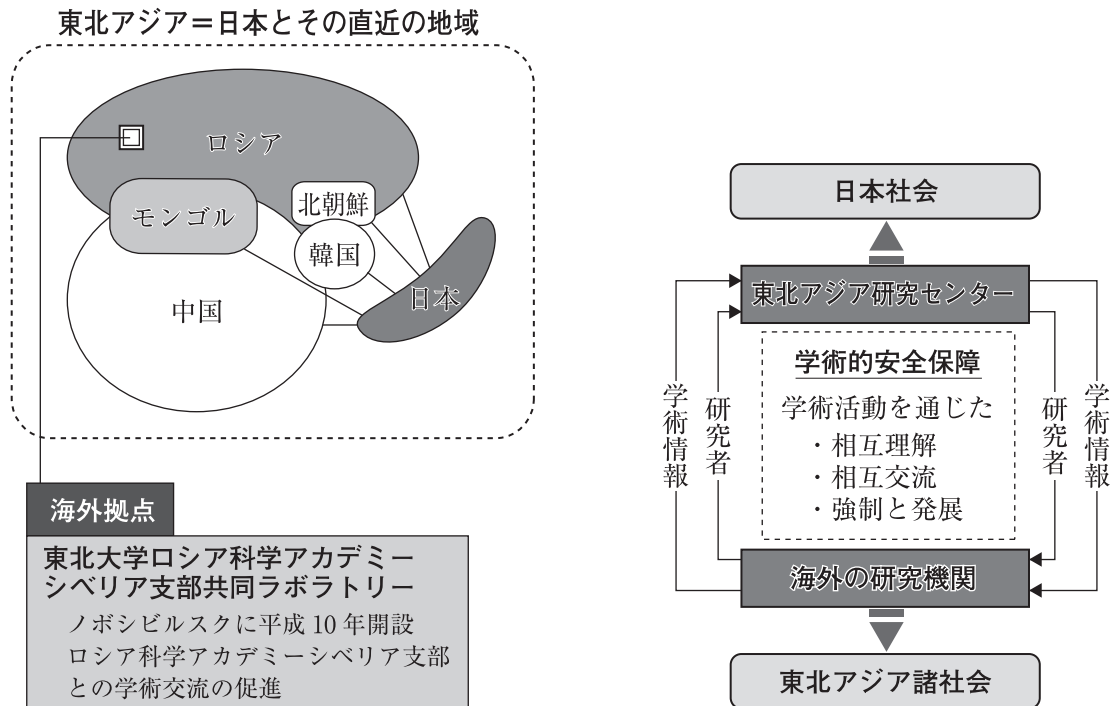
地域研究への要請は、けっして地域住民の社会・文化の領域にとどまりません。地域の山河も、そこに住む人々が生を営む、人間的な意味づけを与えられた「環境」としてあります。ですから「自然環境」の研究も、地域研究の対象にほかなりません。地域研究において学際性が要求されるのは、学問が細分化されているからではなく、地域「環境」の多様性とそれに与えられた意味の包括性に起因するのです。

それゆえ東北アジア研究センターは、文系・理系のさまざまな研究分野の連携によって、地域を見つめる多様な視座を確保することをめざします。我々は、高度に専門化し、分厚い蓄積をもつ諸学の成果を有しています。地域研究の学際性とは、専門研究の到達点を安易に否定することではなく、その蓄積を地域理解のために動員し、活用することです。文系・理系の研究者の連携を確保し、諸学がそれぞれの分野で東北アジアを考えることで、地域のより多様な課題を視野に収めることが可能となります。

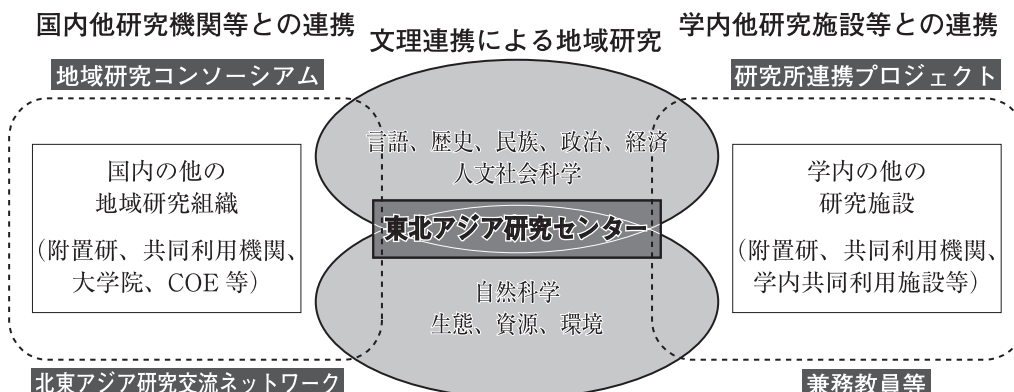
また地域研究者にとって、地域の研究者達の研究成果と向き合いことなくして、研究は成り立ちません。我々が彼等を研究するように、彼等も我々を研究しています。我々には、東北アジアの研究者コミュニティの一員として、そのような双方向性をもった東北アジア地域研究を進めていくことが求められています。

(2) 概念図

〔東北アジア研究センターの地域研究理念〕



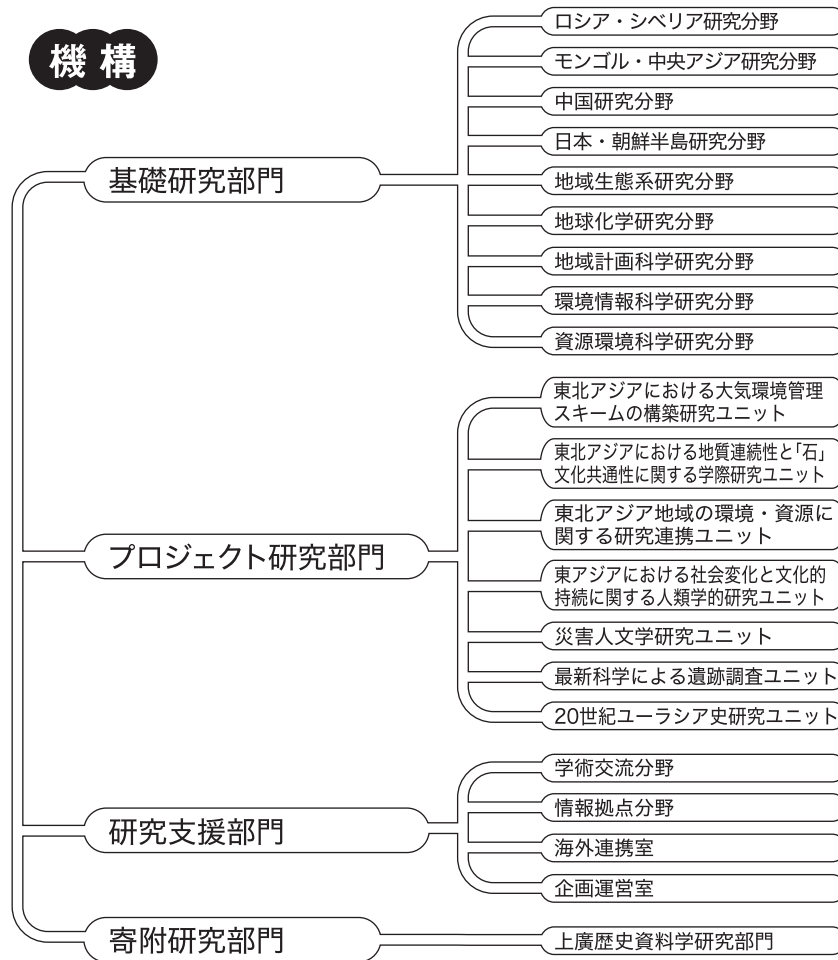
〔東北アジア研究センターの研究戦略〕



(3) 東北アジア研究センターの組織構成と運営

〔組織構成〕

東北アジア研究センターは、9つの分野からなる基礎研究部門と、センターのスタッフが組織する時限的な研究組織としてのプロジェクト研究部門、外国人研究員（客員教授・准教授）ポストと研究支援に関わるセクションを置いた研究支援部門、寄附研究部門である上廣歴史資料学研究部門（上廣倫理財団）が設置されている。



基礎研究部門は、「ロシア・シベリア」「モンゴル・中央アジア」「中国」「日本・朝鮮半島」の4分野に文系の教員が配置されており、「地域生態系」「地球化学」「地域計画科学」「環境情報科学」「資源環境科学」の5分野に理系分野の教員が配置されている。

プロジェクト研究部門は2006年以降設置され、東北アジアに関わる多様な研究を、内外の研究者との共同研究によって遂行する組織的デバイスとして機能している。各ユニットは、科研費などの外部資金を獲得しながら、学内外の研究者を組織した共同研究を実施することで、個別テーマでの研究拠点機能を果たしている。2018年度は7ユニットが活動した。ユニットを立ち上げた場合、スタッフの研究は主にユニットで展開されるが、ユニットを持たないスタッフは、基礎研究部門の各分野で研究を展開している。

各ユニットでは、ユニットの目的に即した研究プロジェクトを組織し、センター外の研究者との共

同研究を行っている。これらの共同研究のあるものは、科研費などの外部資金によって運営されており、ユニットの研究成果を具体化していると言える。2017年度中に実施されたのは、17件の同研究であり、センター外からの参加者が多く、本センターの拠点機能を示している。

2018年度に活動を展開したプロジェクト研究ユニット及びユニットが実施している共同研究については、「研究活動」の章を参照されたい。

センター内部で分配される研究経費は、教員個々に配分される研究費とユニット・共同研究への傾斜配分経費から成る。また教育研究支援者やRA 経費の支給も、ユニットを対象としており、基礎研究部門の分野を単位とした研究費や支援人員の配分は行っていない。このことは、基礎研究部門の分野の教員がユニットや共同研究を組織して研究を行う上で槓桿となっている。この結果センターの教員の活動の重心は、次第にプロジェクト研究部門の諸ユニットに移りつつあり、その分基礎研究部門の各分野はバーチャルなものとなる傾向があるように思われる。研究がユニットを場として行われることは、センターのスタッフによる研究の固定化を防ぎ、研究期間の終了により新たな課題設定を行うことで研究の流動化・機動性を高める効果を生み出している。

センター長裁量経費による学術研究員は、2018年度は4名を雇用した。これらの措置は、学際的・国際的な機動的活動を行い、拠点機能を果たす仕掛けとしてのユニットの構築を進めるための傾斜的予算措置にほかならない。

各ユニットは中間年度と最終年度に外部評価を受けることとしており、一方共同研究についても、センター全体で外部の研究者に共同研究モニターを依頼し、評価を受けている。評価結果はセンターの運営を検討する材料となっている。

また上廣歴史資料学研究部門は、上廣倫理財団の寄附により、5年間の期間で設置された寄附研究部門である(2017年度より更に5年の延長継続が認められた)。教授(兼務)1、准教授1、助教3から成る。この部門は、「歴史研究に関する学識や技能を活かし、歴史資料保全・地域協力・学術研究を柱とした各種事業を展開」することをミッションとして設置されたものである。本部門は学内諸部局や地域住民との協力を基盤として、講演会やセミナーなどの活動を積極的に展開しており、本センターの特色ある研究ユニットとなっている。運営は、東北アジア研究センター長を委員長とする運営委員会によって行われているが、日条の活動について意見交換をする場として諮問委員会を設置している。これには、文学研究科・災害科学国際研究所・仙台市博物館など活動に協力している組織から委員が参加している。

他部局に所属する研究者との協力のために、兼務教員を採用している。文学研究科4名、教育学研究科1名、理学研究科1名、災害科学国際研究所2名の兼務教員が在籍した。

研究支援部門には、外国人研究員のポスト「学術交流分野」が配置されている。このポストには、海外から指導的研究者が招聘され、1ヶ月から4ヶ月間滞在して研究協力を行う、滞在型の制度である。ロシア、モンゴルほか計7名の研究者が招聘されている。センター創設以来外国人研究員として招聘された海外の研究者は120名にのぼる。また、海外連携室が併設され、国際交流委員長の下に外国人助教1名が配置され、外国人研究員招聘手続きや滞在情報の英語での提供、センター内の外国人留学生(研究所等研究生)への英語による情報提供を担っている。

センターに在籍する研究員として、日本学術振興会特別研究員、専門研究員がある。学振特別研究員5名、専門研究員3名が在籍した。

〔東北アジア研究の拠点的機能：公募型共同研究〕

東北アジア研究センターでは、各分野・ユニットで共同研究が組織され、学内外の研究者と協力し

た研究活動が行われている。一方で、東北アジアの多様な課題に対応し、かつ全国的な拠点としての機能を果たすことを目的として、共同研究の公募を行っている。この公募は、センター外の研究者がチームを組んで申請し、センター内のスタッフを世話教員として実施されるもので、「(A) 環境問題と自然災害」「(B) 資源・エネルギーと国際関係」「(C) 移民・物流・文化交流の動態」「(D) 自然・文化遺産の保全と継承」「(E) 紛争と共生をめぐる歴史と政治」の五つの研究領域を設定して募集される。採択された研究には、一件30万円までの研究費が支給されており、各共同研究は独自の研究会のほか、年度末に開催されるセンター研究成果報告会で成果報告を行うことが義務づけられている。その成果の一部は東北アジア研究センターの刊行物としても出版されている。

2018年度に実施された公募型共同研究は以下の通り。

「東北アジアを中心としたアジア地域における動物資源利用問題と「人間性」- 生業、娯楽、奢侈の観点から -」(辻 貴志)

「規範と模範：東北アジア地域における近代化と社会共生」(高山陽子)

「東北アジアの地質的多様性に対する「石」文化の技術的適応」(洪恵媛)

〔コラボレーションオフィス〕

2009年度に設置されたコラボレーション・オフィスは、文系七部局(文学研究科・経済学研究科・法学研究科・教育学研究科・国際文化研究科・東北アジア研究センター・教育情報学研究部・教育部)の部局長協議会の下に設置された運営委員会により運営されている。オフィスは、理事提案による総長裁量経費と東北アジア研究センターの経費によりまかなわれ、リベラル・アーツ・サロンの開催支援、文系諸部局の学術企画の支援、東北アジア研究センターの広報・出版活動への支援を主業務としている。現在職員2名が雇用されている。

〔運営体制〕

センターの運営は、センター長を長として、2名の副センター長、2名の総務委員、事務長から成る執行会議が日常的な運営を行っている。執行会議委員は、それぞれセンター内の委員会を所掌することによって、さまざまな分野の業務の円滑な遂行を図っている。各委員会の所掌状況は、毎月開催される執行会議において担当の総務委員から報告がなされ、運営状況や、問題点の確認を行っている。また教育研究支援者、専門研究員の人事も執行会議で決定が行われる。

【センター全体会議】センター全体会議は、センターの専任教員、教育研究支援者、専門研究員、研究支援部門、コラボレーション・オフィス、図書室のスタッフ全員が出席する会議であり、執行会議の決定事項、センター長報告による部局長連絡会議などの全学情報の周知、外部資金などの受入に関する報告、センター内委員会報告、学内委員会の委員からの報告が行われる。

【運営会議】運営会議は、専任の教授・准教授により構成され、センターの人事、予算などの重要事項に関する審議が行われる。諸事項は、運営会議の議を経て、センター長によって決定される。

【各種委員会】センターには、執行会議メンバーが分掌する各種の委員会が設置されている。この内、総務担当副センター長の下に将来計画委員会・教務委員会、研究戦略担当副センター長の下に研究推進委員会、国際交流委員会が置かれ、情報担当総務委員の下に広報情報委員会、評価データ委員会、研究支援担当総務委員の下に編集出版委員会、図書資料委員会が設置されている。センター長直轄の委員会として、コンプライアンス委員会、ハラスメント防止対策委員会、ネットワーク委員会、片平まつり実行委員会、地域研究コンソーシアム委員会、北東アジア研究交流ネットワーク委員会、公開講演会・シンポジウム企画委員会が置かれている。また事業場ごとに安全衛生委員会が機能しており、

安全衛生に関わる問題も国際文化研究科と本センターを事業場として委員会が組織されている。上廣歴史資料学研究部門の運営のために、センター長を委員長とする同部門委員会が設置されているほか、同部門の日常的な活動について意見交換を行う運営諮問委員会が活動している。また、2015年度以降公正なコンプライアンスに関わる公正な研究活動推進室が設置されている。各委員会は、必要に応じて毎月の執行会議に活動を報告するとともに、センター全体会議でセンター内に報告・周知している。

〔全国的組織協力〕

本センターは、国立大学附置研究所・センター長会議第3部に所属しているほか、2004年に発足し、全国99組織が加盟する地域研究コンソーシアム(JCAS)や、北東アジア研究交流ネットワーク(NEASE-Net)で幹事組織として活動している。後者では、広報委員会を担当し、ネットワークの『年報』『ニューズレター』を編集・刊行している。これらの全国組織との連携のために、上述のように、センター内に地域研究コンソーシアム委員会、北東アジア研究交流ネットワーク委員会を設置して、活動している。

全国的な東北アジア地域研究連携態勢の構築と拠点機能の強化を目指して、国立大学共同利用機関法人人間文化研究機構との協議を重ね、同機構のネットワーク型基幹研究「北東アジア地域研究推進事業」が運営されている。

この事業では、同機構の国立民族学博物館を中心拠点として、機構から同博物館、国立歴史民俗博物館、国立日本文化研究センター、国立地球環境学研究所、機構外から北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、東北大学東北アジア研究センター、富山大学極東地域研究センター、島根県立大学北東アジア地域研究センターの八組織が連携し、それぞれの専門分野の特色を活かしながら研究テーマを分担して北東アジア地域研究を全国的に推進することとなった。具体的には、国立民族学博物館拠点(国立歴史民俗博物館と連携)が「人とモノとシステムの移動・交流からみた自然と文明」、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター拠点が「地域フォーラムの軌跡と展望に関する研究」、東北大学東北アジア研究センター拠点(国立地球環境学研究所と連携)が「環境・資源問題に関する社会文化と政策の総合化研究」、富山大学極東地域研究センター拠点が「国際分業の進化と資源の持続可能な利用に関する研究」、島根県立大学北東アジア地域研究センター拠点が国立日本文化研究センターと連携して「近代的空間の形成とその影響」をテーマとして分担することになった。

〔外部資金獲得〕

科研費採択率は71%と、高い率を維持している。科研費を含めたすべての外部資金の獲得額は100,692千円である。金額、採択率ともにここ数年のうちで最高水準となった。専属教員23名の中で、ひとりあたりの申請数は1.58件/人、獲得額は189万円/人であった。

科研費以外の外部資金では、民間との共同研究が3件・6,000千円、受託研究が4件・9,207千円、受託事業が1件・6,795千円、寄付金が4件・33,290千円であり、合計12件・55,292千円であった。科研費と合わせてこれらを総括すれば、専属教員ひとりあたりの獲得額は、4,195.5千円/人となり、極めて高い水準と言える。

研究活動

研究の理念・目標実現のための研究推進企画・立案の組織的な取り組みとして、本センターの目標とする学際的研究を推進するために、総務担当副センター長のほかに研究戦略担当の副センター長を置いている。同副センター長は研究推進委員会と国際交流委員会の委員長を兼務し、国内外に目配りをした研究を推進する体制を構築している。また、将来計画委員会等、将来的な研究展開のあり方に関する検討も行っている。

センターの研究活動は、スタッフがそれぞれの研究分野で個別に実施する研究と、研究グループを組織して実行する共同研究、プロジェクトユニットがある。特に後者では、成果および進捗状況報告を行う場として、年一回の発表会を実施し、研究の推進を図っている。プロジェクトユニットの活動はすべてが十分な研究資金獲得に成功しているわけでは無いものの、それぞれ国際的・学際的な研究協力体制の構築を進め、更に多くの共同研究を誕生させるという重要な役割もあり、研究成果にも現れている。

研究推進委員会は、これらセンター教員・研究員等の研究を相互に理解し、関連する情報を交換するため、毎月一回1人ずつ(持ち時間20分)、センター全体会議(構成員:教授・准教授・助教・教育研究支援者など)後に研究紹介を行っている。

教育活動

〔大学院教育・研究生〕

本センターは部局として学生定員を持たず、教育は学内の大学院に設置された協力講座と、全学教育において行っている。本センターの教員による協力講座は、下表のように大学院環境科学研究科、理学研究科、情報科学研究科、生命科学研究科、文学研究科および工学研究科に設置されている。本センター教員を指導教員とするこれらの研究科の大学院生(および学部学生)、学術振興会特別研究員、研究所等研究生は本センターを拠点として研究活動を行っている。各研究科の大学院学生(および学部学生)のうち本センターを研究拠点とする者は、文系の学生に関しては合同棟内の3室を合同研究室として提供しているほか、理系の学生は各教員の実験室・学生室を利用し、指導を受けている。全学教育について、20コマの負担原則に対して26コマを提供した。

生活支援等に関する学生のニーズの把握に関しては、文系学生合同研究室を担当する教員を1名配置するとともに、学生側には各室1名の連絡係を設置し、随時そのニーズが教員側に伝わる態勢をとることで、ニーズ把握に万全を期している。大学院生の履修指導や生活相談は、基本的に所属各研究科において個別に行っている。また本センター教員の研究室ならびに実験設備等は、基本的には指導大学院生等が随時出入りできる体制をとっており、学習相談も適切に行われている。

日本学術振興会特別研究員(DC、PD)は、5名受け入れた。これらの学生・研究員は本センターの教員が開催する共同研究やセミナー、シンポジウムに参加することで、専門的な研究環境に接することが可能となっている。受け入れ教員は、それぞれの専攻分野に関するきめ細かい指導を行っている。

〔全学教育〕

全学教育では、学務審議会より20コマを東北アジア研究センターの担当原則として求められている。これに対して、平成29年度は本センターから基幹科目1コマ、展開科目7コマ、共通科目18コマ、合計26コマを担当した。いずれの講義でも担当教員は自分の専門分野をテーマとする講義を行うが、これを通じて東北アジアに関わる内容が全学教育の場で学生に教授されている。また、本センターの教員は、全学教育において東北アジア言語の講義を提供しており、現在は中国語・ロシア語・モンゴル語の講義を担当し、本学における言語教育の多様化に貢献している。

東北アジア研究センター教員の協力講座

氏名	職名	担当開始日	研究科名	専攻名	講座名
寺山 恭輔	教授	H12.4.1	文学研究科	歴史科学	比較文化史学
辻森 樹	教授	H27.9.1	理学研究科	地学	—
平野 直人	准教授	H21.6.1	理学研究科	地学	—
後藤 章夫	助教	H11.8.1	理学研究科	地学	—
宮本 毅	助教	H12.4.1	理学研究科	地学	—
工藤 純一	教授	H8.4.1	情報科学研究科	情報基礎科学	広域情報処理論
千葉 聡	教授	H25.4.1	生命科学研究科	生態システム生命科学	地域生態学
鹿野 秀一	准教授	H13.4.1	生命科学研究科	生態システム生命科学	地域生態学
佐藤 源之	教授	H15.4.1	環境科学研究科	先進社会環境学	環境応用政策学
菊田 和孝	助教	H29.10.1	環境科学研究科	先進社会環境学	環境応用政策学
瀬川 昌久	教授	H15.4.1	環境科学研究科	先端環境創成学	東北アジア地域社会論
上野 稔弘	准教授	H15.4.1	環境科学研究科	先端環境創成学	東北アジア地域社会論
高倉 浩樹	教授	H15.4.1	環境科学研究科	先端環境創成学	東北アジア地域社会論
塩谷 昌史	助教	H29.10.1	環境科学研究科	先端環境創成学	東北アジア地域社会論
明日香壽川	教授	H15.4.1	環境科学研究科	先端環境創成学	東北アジア地域社会論
石井 敦	准教授	H17.4.1	環境科学研究科	先端環境創成学	東北アジア地域社会論
岡 洋樹	教授	H15.4.1	環境科学研究科	先端環境創成学	東北アジア地域文化論
柳田 賢二	准教授	H15.4.1	環境科学研究科	先端環境創成学	東北アジア地域文化論

社会貢献活動

研究内容の社会への還元は大学の果たすべき重要な使命の一つである。これに加え、研究の社会還元を通じて「東北アジア」という地域概念の普及と定着をはかり、同地域に対する認識の向上や人的交流の拡大の実現が、本センターの第一義的な社会貢献であると考えている。また、国際的な学術交流活動の促進を通じ、相互理解を深めることは、我が国の安定した発展には不可欠であるとの立場から、ロシア、モンゴルなどと大学間交流協定・部局間交流協定を活用しつつ、学術交流を積極的に展開してきた。

本センターは、創設当初から、社会貢献を意識した活動を行っているが、学術成果の実践的社会還元という立場からプロジェクト研究部門に設置されたユニット等を通じた研究活動を展開している。

東北アジアを広範な地域と捉え、そこでの自然環境と人間社会の関わりという観点からの研究を進めている。明日香壽川教授は中国の環境問題、特に大気汚染問題また、日本および世界における原発問題、地球温暖化問題、エネルギー問題を巡る現状と課題に関して様々なメディアを通して発言をしている。石井敦准教授は環境問題に関して社会が当該問題についてどのように認識するかを大きく左右する環境メディア研究について積極的に取り組んでいる。また、本センターが開設以来関わってきたロシアとの研究交流に関して、工藤純一教授が本学ロシア交流推進室メンバーとして世界展開力事業（ロシア）を支援している。

〔東北アジア学術交流懇話会〕

本センターの研究を社会に還元するための外部組織として、「東北アジア学術交流懇話会」が活動している。本センターは、懇話会ニュースレター「うしとら」を編集し近刊の出版物とともに会員に配布することで、東北アジアに関する情報提供を行っている。本年度は、「うしとら」75～76号を刊行し会員に配布した。毎号多様な視点から東北アジアを見る冒頭の「論点」や「東北アジア通信」は、様々な研究のきっかけを提示し、シンポジウム報告等活発な東北アジア研究活動を報告することによって、国内多くの東北アジア研究の輪を広げる手段として、大きな役割を果たした。

(4) 特筆すべき活動

Ⅰ 数値指標

I-1 数値実績

No.	評価対象項目 (A)	数値実績 (B)
1.	博士前期（専門職学位）課程 入学定員充足率／超過率	
2.	博士後期課程入学定員充足率／超過率	
3.	博士前期（専門職学位）課程 収容定員充足率／超過率	
4.	博士後期課程収容定員充足率／超過率	
5.	博士後期課程学位授与率	
6.	博士前期（専門職学位）課程 外国人留学生比率	
7.	博士後期課程外国人留学生比率	
8.	国際コース設置率	
9.	派遣日本人学生比率	
10.	外国人教員比率	8.0%
11.	外国人教員採用比率	50.0%
12.	外国人研究員受入日数	52.3
13.	FW 女性教員比率	-0.362
14.	FW 女性教員採用比率	0.058

15.	日本学術振興会特別研究員の採択	0.080
16.	科研費申請率	0.935
17.	科研費採択率	62.1%
18.	大型科研費申請率	0.097
19.	大型科研費採択率	33.3%
20.	FWCI (Field Weighted Citation Impact)	1.18
21.	被引用度の高い (Top10%) 論文数	0.355
22.	研究者一人当たりの外部資金獲得額	4,450,512円
23.	国際発表論文等比率	39.4%
24.	国際会議開催数	0.440
25.	国際会議招待講演数	0.226
26.	国際会議基調講演数	0.355
27.	国際共同・受託研究数	0.226
28.	企業との共同・受託研究数	0.226
29.	共同研究講座・共同研究部門	—
30.	全学教育科目コマ数	1.280
31.	シラバス英語化比率	

I-2 数値指標の向上・改善・維持に向けた取組又は数値データの補足説明

○9 派遣日本人学生比率

大学院生の指定校への短期・長期留学：平成29年度において、センター所属教員の指導大学院生1名（理学研究科）がノボシビルスク国立大学/ロシア科学アカデミーシベリア支部地質学鉱物学研究所に留学（4か月）、1名（環境科学研究科）がノボシビルスク国立大学に留学（1年）、1名（環境科学研究科）がロシア政府主催の第7回ロシア語学短期留学プログラム（モスクワ・プーシキン大学）に留学（1か月）した。

○10 外国人教員採用比率

男女共同参画推進センター平成29年度「杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業」に係わり部局公募型プログラムに採用され、その後女性限定の公募を行ったところ、最終的にデンマークの大学所属准教授（米国籍）の採用が決まった。平成30年4月1日に採用され、外国人、女性教員双方の採用に寄与した。

○12 外国人研究員受入日数

本センターには研究支援部門学術交流分野に配置された外国人研究員（客員教授等）があり、文系と理系それぞれの分野で、3ヶ月程度を目安に滞在している。平成28年～30年度にかけて（30年度は一部計画）本センター所属教員と研究協力を行う海外の有力な研究者を毎年平均で7名について客員教授として招聘した。

東北アジア研究に関わるロシア、中国、欧米などからの研究者が中長期間滞在することで、研究・教育・学術交流を進めている。センターの運営会議（教授会相当）に併せて、東北アジア談話会を設けているが、そこで研究発表してもらい、受入分野の研究室だけでない交流の場を設けている。また日本学術振興会外国人特別研究員は平成30年度に2名、私費による外国からの客員研究員は平成30年度2名（1名は1月～3月）を受け入れている。また日本学術振興会特別研究員は5名受入があり、若手同士の交流を深めるために、附置研究所・センター連携体の若手アンサンブル事業での参加を促すなどして、広く学内での共同研究を推奨している。

○17 科研採択率

科研費採択向上のため、毎年、ベテラン教員による説明会を開催している。また科研費を問わず、すべての競争的外部資金を取った場合には金額の多寡にかかわらず、教授会相当の会議で情報を公開することで、所内の外部資金獲得意識の向上に務めている。

○20 FWCI

東北アジア自然環境研究の推進：平成28年度には、地球科学グループや生態学グループなどでは、その成果を被引用率の高い一流国際誌に発表した。Ann Rev Earth Planet Sci (IF=8.6)、EPSL (IF=4.7)、Current Biology (IF=9.6)、Proc R Soc Lond B (IF=5.1) など。特に地球惑星科分野の学術雑誌においてトップ1%の優秀査読者に選出（2年連続）された。構成員の少なさを勘案すれば、期待される水準を上回る成果と言える。

○23 国際発表論文等比率

平成28年度以降、地球科学及び文化人類学分野の教員・研究員が、関連する分野の国際学術雑誌10誌、国際学術図書シリーズ2種（Arctic Worlds in Routledge等）の編集委員会に関わっている。

○27 国際共同・受託研究数

平成30年3月から5月までの3ヶ月間、学術協定校である吉林大学からCOLABS制度で交換留学生4名を受け入れるとともに、同大学との間で地中レーダーによる環境計測に関する研修ならびに共同研究を行った。

○30 全学教育科目コマ数

東北アジア研究を行う上での基盤となる言語教育のため中国語・ロシア語・モンゴル語の授業(18コマ)を積極的に受け持つと共に、方法論という意味では歴史学・文化人類学・生命科学・地質学等で専門分野の序論となる講義(9コマ)を提供している。

II 過去三年間の特筆すべき取組

【平成28年度取組】

〔教育〕

○ロシアとの学術交流への学生参加を支援

国際的な人材育成のため、ロシア・ノボシビルスク大学人文学部・ロシア交流推進室・大学院文学研究科・大学院国際文化研究科とJapan Russia Workshop, Asian Studies at NSU and TU(日露ワークショップ)を企画開催し、アジア研究をテーマとして、ノボシビルスク大学と本学の学生計6名による英語での研究発表会を開催した。このための準備として、本学から参加した文系学生に対して、英語発表のトレーニングも実施した。これは第3期中期計画I-1(1)(3)ならびに第3期中期計画I-5に対応する成果である。

〔研究〕

○国際ネットワークによるモンゴル・シベリア史に関わる国際シンポジウム

東北アジア研究センターでは、平成15年以来、ウランバートルで内陸アジアの遊牧民の歴史的・現代的な研究をテーマとする国際シンポジウムをほぼ隔年で開催してきた。平成28年は学術協定機関のモンゴル科学アカデミー歴史研究所・中国内蒙古大学・ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学北方民族問題研究所と共同で、平成28年9月8～9日にウランバートルで国際シンポジウムを開催した。また平成26年に実施した国際シンポジウム「17世紀の東北アジア史」をもとに、英語・ロシア語・モンゴル語3言語による学術論文集『ユーラシアの遊牧：歴史・文化・環境』(サンプルドンドヴ・チョローン・胡日查・アンドリアン ボリソフ・岡洋樹編、東北大学東北アジア研究センター)として刊行した。これらは、第3期中期計画I-2(1)(2)に対応する成果である。

○日本学に関する国際的展開

上廣歴史資料学研究部門を中心に、平成28年6月13-17日にシカゴ大学歴史学部・東アジア研究所と共同で、近世日本の歴史資料分析をテーマに「くずし字ワークショップ」を開催した。これは、

同大学およびアメリカ在住の研究者・大学院生を対象に、国際日本学研究の発展を企図したものである。また同年7月18-23日にフランクフルト大学人文学部日本学科と共同で、近世日本の歴史資料分析をテーマに「くずし字ワークショップ」を開催した。同大学およびドイツ・フランス・スロベニア在住の研究者・大学院生が参加したほか、最終日には国際日本学のシンポジウムを行った。また東北大学学際重点研究「世界発信する国際日本学・日本語研究拠点形成プロジェクト」事業として、「歴史資料学と地域史研究」と題する国際シンポジウムを開催し、ハーバード大・ウィーン大・シンガポール大等から研究者を含む内外17名の研究者が参加した国際会議を行い、日本史研究の国際化に貢献した。これらは、第3期中期計画Ⅰ-2(1)(2)ならびに第3期中期計画Ⅰ-3に対応する成果である。

〔社会貢献・その他〕

○被災地の民俗芸能調査の国際的発信

災害と地域文化遺産に関わる応用人文学研究ユニットが、宮城県からの受託研究として実施した東日本大震災被災地の民俗芸能に関するデータベース作成のノウハウを広く海外に紹介するため、ニュージーランド、インドネシア、中国、デンマークの研究者を招聘して国際ワークショップ「地震災害後の人文学プロジェクトの回顧と研究者の役割の探求」及び講演会を開催した。そして、それらの活動成果を、イギリス社会人類学会モノグラフシリーズ51「World Anthropologies in Practice」(Bloomsbury Publisher)として国際共著図書の形で刊行した。これらは、第3期中期計画Ⅰ-3ならびに第3期中期計画Ⅰ-4に対応する成果である。

○レーダ技術を用いた減災研究の推進

減災をめざした電波科学研究ユニットが、レーダ技術の応用による社会貢献の一環として、宮城・岩手県等で遺跡調査の効率化のための計測を行うとともに、東日本大震災津波被災者に関わる遺留品の搜索活動を福島・宮城・岩手県内で各県警と協力で行い、新聞・テレビなどで報道された。また仙台東署では地中レーダによる搜索について講義も行った。これらの活動に対して、福島県警察本部、仙台東警察署から感謝状が贈られた。これらは、第3期中期計画Ⅰ-2(1)、第3期中期計画Ⅰ-3、ならびに第3期中期計画Ⅰ-4に対応する成果である。

【平成29年度取組】

〔教育〕

○若手研究者による分離融合・学際研究の展開

東北大学研究所・センター連携体における若手アンサンブル事業に対し、積極的に若手が参加、活動した。本センター受け入れの日本学術振興会外国人特別研究員や教育研究支援者が中心となり、学内の理学研究科、農学研究科、災害研、英国レディング大学の若手と共同企画した共同研究プロジェクト Tectonic Erosion in Japan: 500 Million Years of Crustal Loss, Earthquake and Tsunamis など、4件が企画され、そのうち二件がグラント対象となった。また同事業のワークショップ賞として、「福島県双葉町広野町における作業員と住民との関係の文化人類学」を含む地域研究に関わる二件が受賞した。第3期中期計画Ⅰ-2(2)、Ⅱ(1)に関わる成果である。

〔研究〕

○大学間連携によるネットワーク型地域研究の推進

人間文化研究機構の北東アジア地域研究事業に対し、拠点機関として参画し（2016－2021年）、国立民族学博物館、北大スラブ・ユーラシア研究センター、富山大極東センター、島根大北東アジア研究センター、総合地球環境学研究所との連携に基づいて、東北アジア研究に関わる国内の拠点的機能を高めた。特に本センターは環境、資源問題を重要課題として取り組み、平成29年度は、上記の国内機関のほか、7回の国際研究集会と6回の講演会活動を行った。その結果、ロシア科学アカデミー社会政治学研究所やロシア科学アカデミー極東支部考古学民族学研究所、米国ジョンボプキンス大学、香港中文大学、中国・中央民族大学、中国・社会科学研究院などの従来交流のなかった海外機関との研究交流を実現することができた。また「Globalization of Low-Carbon Technologies the Impact of the Paris Agreement」（共著、Springer、2017年）として国際共著学術図書を刊行したほか、環境問題にかかわる重要な国際誌である Climatic Change、Energy Research and Social Science、Sustainability Science などに、国際共著論文を発表した。第3期中期計画 I－2（1）（2）、I－5（1）に関わる成果である。

○国際共同研究による北極・シベリア研究

ロシア・シベリア分野のグループは、平成28年度から北極域研究推進プロジェクト（文科省補助事業）に参画し、ロシア科学アカデミーシベリア支部の研究所とのMOUを締結したうえで、地球温暖化による永久凍土の影響と地域社会への影響に関わる文理融合の国際共同フィールドワークを実施した。こうした活動により、永久凍土の文理融合研究という新しい研究領域を開いた。その成果を第二回アジア永久凍土会議（国際永久凍土学会他主催、平成29年7月）及び第五回国際北極研究シンポジウム（国立極地研他主催、平成30年1月）において永久凍土の自然と文化に関わるセッションをロシア及びドイツの研究者と合同で開催し報告した。またその成果を国際学術図書「Global Warming and Human – Nature Dimension in Northern Eurasia」（共編著、Springer）として刊行したほか、過去500年にわたるシベリアにおける永久凍土と人類文化に関わる国際共著論文を本分野の重要な国際誌である Anthropocene に発表した。第3期中期計画 I－2（1）（2）、I－5（1）に関わる成果である。

○東北アジア自然史および文理融合研究

地球科学研究グループは日本の国石に選定された「翡翠（ひすい）」について文理融合的な研究を進めており、これをテーマに国際誌に編集するとともに、その成果を国際誌に多数発表した。また、日本海溝沖のプチスポット火山におけるマグマの生成条件を、高温高压熔融実験によって研究し、その火山のマグマが、プレート直下のアセノスフェアが部分的とけたものに由来することを明らかにした。生態学グループは人間活動が生態系に及ぼす影響の研究や、東北アジアの生物相について進化ゲノミクス研究を展開し、その成果は国際誌に発表されるとともに、国内外のTVニュース、新聞等で広く報道された。第3期中期計画 I－2（1）に関わる成果である。

〔社会貢献・その他〕

○民俗文化と古文書の保全活動の展開

平成29年度4月に公益財団法人上廣倫理財団の寄付により、センター上廣歴史資料学研究部門第二期が設置された。本部門では、宮城県教育委員会やNPOと協力し、16件の古文書保全、宮城県内での8回の講演会などを行い、7回の古文書講座、2回の展示をおこなった。講演会の参加者は1061人、古文書講座は少人数で演習式に行われ一回あたりの平均受講生は23名である。これらの活動によって、東北アジア研究センターは東北地域史に関心をもつ市民にとっての知縁コミュニティの中核として機能している。宮城県内の津波被災した無形民俗文化財研究のグループは、福島県や岩手県の研究者、東京文化財研究所との研究交流を進め、無形民俗文化財の減災についての提言を含む学術図書を刊行した。また、岩沼市からの委託を受けて震災に関わる市史編纂事業に、文学研究科とともに貢献した。第3期中期計画 I-3, 4に関わる成果である。

【平成30年度計画】

〔教育〕

○日露学術交流事業

大学間協定をもつノボシビルスク大学との連携強化に関わり、アジア研究の国際的な教育交流事業を同大学と共同で構築してきた。具体的にはノボシビルスク大学での訪問授業日本アジア講座(10月:教員派遣)と本学における日露ワークショップ(2月:教員及び院生招聘)である。今年度も計画しており、10月には文学研究科考古学分野、災害科学国際研究所の日本史分野、本センターからは経済史分野の教員が講義することになっている。ノボシビルスク大学との交流では、同大学が企画する「文化遺産研究プログラム」に関わり、本センターの教員が2ヶ月間滞在の客員教員として招聘され、アジア研究に関わる教育研究プログラムの共同開発を行う事になっている。第3期中期計画 I-1 (1) (2) (3), I-5 (1) に係わる成果である。

〔研究〕

○知のフォーラム実施による東北アジア研究の拠点機能強化

知のフォーラム「東北アジアの大陸地殻安定化と人類の環境適応」を実施する。地質学・考古学・人類学・宗教学に係わる学際研究を行う学内組織を作り、なぜ東北アジアが寒冷なのか地球史をひもときながら、そこでの人類文化史を討論する場を設けることになっている。ハーバード大学、カリフォルニア大バークレー校、(露国)極東連邦大学、ロンドン大学、アバディーン大学等から関連分野の世界的に著名な研究者を招へいし、前期(6月・8月)には考古学と宗教学の研究集会、後期(2月)には地質学と人類学の合同研究集会を開催し、文理連携による人類史を射程にいった東北アジア研究の挑戦を内外発信する。学外のコーディネーターとして本センター外国人研究員(客員教授)制度も併用し、ラップランド大学北極センターから著名人類学教授を3ヶ月招へいすることで、東北アジア研究センターの国際拠点的機能を強化する。第3期中期計画 I-2 (1) (2), I-5 (1) に係わる成果である。

○若手研究者による地域研究方法論に関する国際ワークショップ

東北大学研究所・センター連携体事業の研究所若手アンサンブルプロジェクトに係わり、平成30年度アンサンブル小規模研究会として承認された企画「新たな地域研究方法の創出を目指して：移動・流通とインフラに関する越境的研究」を、2018年9月17日に英国ロンドン大学東洋アフリカ研究学院(SOAS)で実施する。本センター助教、学術研究員と日本学術振興会特別研究員(本センター受入)が中心となり、SOASの研究員と共同する企画であり、グローバル化した社会の地域研究方法論を検討する。本学の若手研究者のイニシアティブによって進められ、次世代の東北アジア地域研究の国際的発展の基盤となるものである。第3期中期計画I-2(1)(2), I-5(1), II-(1)に係わる成果である。

○災害人文学研究の推進

指定国立大学災害科学世界トップレベル研究拠点事業に関わり、東北アジア研究センター長が副拠点長及び災害人文学領域代表となり、また複数の本センター教員及び文学研究科、災害科学国際研究所の教員が加わる事になった。この領域の効果的運用のためセンター内研究プロジェクト部門に災害人文学ユニットを設置し、助教を配置したほか、独自の財源で学術研究員を雇用し、東北歴史博物館との学術協定を元に、同学芸員を非常勤講師(客員准教授)として配置する体制を構築した。ここで民俗芸能と地域健康、3Dスキャナーを用いた文化財情報と地域振興、映像アーカイブと震災記録、高精度解析による歴史文書資料保全といった研究活動を展開している。12月には国立文化財機構アジア太平洋無形文化遺産研究センターとの共催による国際研究集会を企画しているほか、本事業の成果として学術図書『Crisis and Disaster in Japan and New Zealand』(共著、New York: Palgrave Macmillan)を10月に、『福島原発事故と震災復興の公共人類学』(共編著、東京大学出版会)を2月に刊行予定である。第3期中期計画I-2(1)(2), I-4に係わる成果である。

〔社会貢献その他〕

○文系部局との協力によるリベラル・アーツサロンの企画・開催

文系諸部局の連携強化を機能とするコラボレーション・オフィス運営委員会を設置し(本センター長が委員長)、市民向けのリベラルアーツ・サロン(年6回)を継続的に企画・運営している(昨年度までに51回)。今年度は、比較文化分野として「フランス文化」と「中国文化」、日本社会論として「少子化問題」と「家族と葬儀」、社会科学論として「信頼」と「相関関係と因果関係」について実施する予定である(すでに2つは実施済)。一方的な講義ではなく、相互討論を深めることで、生活における幸福感の達成や社会問題の解決に寄与する生きた人文知や社会科学的視点を市民とともに構築する機会を提供している。昨年度のサロン参加者は442名に上り、今年度は平均89名の参加者があり、市民の高い関心を集め、本学の知縁コミュニティ形成に貢献した。第3期中期計画I-3, V-4に係わる成果である。

III 目指す方向性や将来に向けた取組、不十分な取り組みや課題

研究所型組織ということもあり、毎年数多くの国際シンポジウムや公開講演会を実施しているが、その会場は常に別部局の管轄にある会場を借用する形で行っている。これらの際に予定が重複すると、管理部局の予定が優先されることが多い。また管理部局によって会場借用ルールが異なり、例えば一年前からの会場予約は出来ないという場合がある。新規の会議場の建設を求めるつもりはないが、優先的に利用できる会場の割り当てが欲しい。

また川内キャンパスには教室は十分にあるが、かならずしもそれらは外国から著名研究者を招聘しての会場としては向いていない場合がある。国際会議等を行うための雰囲気があり、設備の整った会場を、既存施設の改修などによって実現して欲しいと考える次第である。

組織運當活動

(1) 人員配置と業務分担

(A) 教員等の配置、研究組織構成状況 (2019年3月現在)

部門	分野	職位／在職期間	氏名	専門領域	
基礎研究部門	ロシア・シベリア研究	教授	2013.4-	寺山 恭輔	ロシア・ソ連史、日露・日ソ関係史
		教授	2013.4-	高倉 浩樹	社会人類学、シベリア民族誌
		助教	1999.2-	塩谷 昌史	ロシア経済史、ロシアとアジアとの経済関係
	モンゴル・中央アジア研究	教授	2006.4-	岡 洋樹	東洋史、モンゴル史
		准教授	1997.4-	柳田 賢二	言語学、ロシア語学、言語接触の研究
	中国研究	教授	1996.5-	瀬川 昌久	文化人類学、華南地域研究
		教授	2004.4-	明日香壽川	環境政策論
		准教授	2001.4-	上野 稔弘	中国現代史、中国民族学
	日本・朝鮮半島研究	准教授	2004.10-	石井 敦	国際関係論、科学技術社会学
		准教授	2018.4-	テレニ アリオン	文化人類学、日本民族誌、沿岸文化
		助教	1997.5-	宮本 毅	火山岩岩石学、火山地質学
	地域生態系研究	教授	2013.4-	千葉 聡	生態学、保全生物学、進化生物学
准教授		1997.4-	鹿野 秀一	微生物生態学、システム生態学	
地球化学研究分野	教授	2015.9-	辻森 樹	地質学、変成岩岩石学	
	准教授	2013.4-	平野 直人	地質学、岩石・鉱物・鉱床学、地球宇宙科学	
	助教	1999.2-	後藤 章夫	火山物理学、マグマ物性	
地域計画科学研究					
環境情報科学研究	教授	2001.4-	工藤 純一	環境情報学、デジタル画像理解学	
資源環境科学研究	教授	1997.4-	佐藤 源之	電磁波応用工学	
	助教	2017.4-	菊田 和孝	計測工学	

部門	ユニット名	代表者	備考
プロジェクト研究部門	東北アジアにおける大気環境管理スキームの構築研究ユニット	明日香壽川	
	東北アジアにおける地質連続性と「石」文化共通性に関する学際研究ユニット	辻森 樹	
	東北アジア地域の環境・資源に関する研究連携ユニット	岡 洋樹	
	東アジアにおける社会変化と文化的持続に関する人類学的研究ユニット	瀬川 昌久	
	災害人文学研究ユニット	高倉 浩樹	
	最新科学による遺跡調査ユニット	佐藤 源之	
	20世紀ユーラシア史研究ユニット	上野 稔弘	

部門	分野	職位／在職期間		氏名	専門領域
プロジェクト 研究部門	災害人文学 研究ユニット	助教	2018.4-	福田 雄	社会学、災害研究

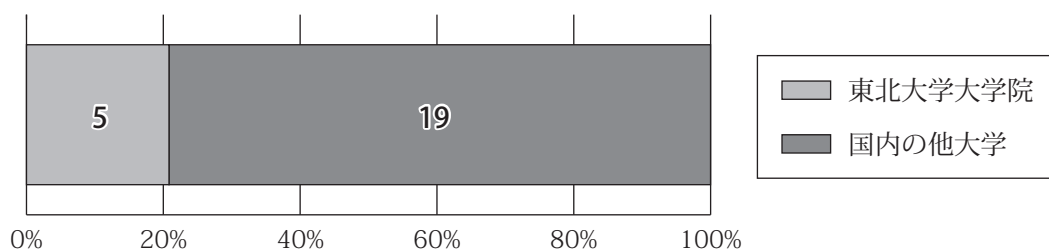
部門	分野・室	職位／在職期間		氏名	専門領域
研究 支援 部門	学术交流 分野	教授		外国人研究員	→別表参照
		助教	2017.4-	内藤 寛子	現代中国政治、比較政治
	情報拠点 分野	国際交流委員長		瀬川 昌久	国際的学术交流推進
		助教		内藤 寛子	
	海外連携室	国際交流委員長		瀬川 昌久	
		助教		内藤 寛子	
	企画運営室	総務担当 副センター長		千葉 聡	研究推進事業の企画・立案、国内外の研究者との研究連携支援
		助教		内藤 寛子	

部門	分野	職位／在職期間		氏名	専門領域
寄附 部門 研究	上廣歴史資料学 研究部門	准教授	2012.4-	荒武賢一朗	日本近世・近代史
		助教	2012.4-	高橋 陽一	日本史、近世旅行史
		助教	2013.10- 2018.9	友田 昌宏	日本近代政治史
		助教	2018.10-	藤方 博之	日本近世史、家族史、武家社会論

(B) 現職専任教員等の年齢、勤続年数、博士号取得状況 (2019年3月31日現在)

区 分		教 授	准 教 授	助教・助手
教員の平均年齢	(2019年3月現在)	57.4歳	50.4歳	41.1歳
教員の平均勤続年数	(2019年3月現在)	12年6ヶ月	12年4ヶ月	11年3ヶ月
博士号取得者数	(2019年3月現在)	9人	4人	8人

(C) 専任教員の最終出身大学院 (2019年3月31日現在)



(D) 研究支援組織の整備・機能状況(2019年3月31日現在)

所 属	職 名	氏 名
事 務 室	国際文化研究科事務長	山木 幸一
	専 門 員	高谷 敏晶
	主 任	清水 俊和
	主 任	鈴木 智子
	事務職員(限定)	横山 尚子
	事務補佐員	前川 順子
	事務補佐員	及川 二美
	事務補佐員	鈴木恵理子
図 書 室	事務補佐員	佐々木理都子
	事務補佐員	海口 織江
コラボレーション・オフィス	事務職員(限定)	畠山 瑞
	事務補佐員	熊谷 香

(E) 学術研究員(旧職名:教育研究支援者)受け入れ状況

氏 名	期 間	受入プロジェクトユニット等名称	受入教員
宮後 裕充	2018.4.1～ 2019.3.31	東北アジアにおける大気環境管理スキームの構築研究ユニット	明日香壽川
田中 利和	2018.4.1～ 2019.3.31	東北アジア地域の環境・資源に関する研究連携ユニット	岡 洋樹
李 善姫	2018.4.1～ 2019.3.31	東アジアにおける社会変化と文化的持続に関する人類学的研究ユニット	瀬川 昌久
是恒さくら	2018.4.1～ 2019.3.31	災害人文学研究ユニット	高倉 浩樹
アハド アンワール セイド アゲルハミド	2019.1.1～ 2019.3.31	最新科学による遺跡調査ユニット	佐藤 源之
矢口 啓朗	2018.8.1～ 2019.3.31	20世紀ユーラシア史研究ユニット	上野 稔弘

(F) 外国人研究員(海外)受け入れ状況 ※太字が本年度招聘者

〔氏名/在任期間:所属〕

カザンツェフ, セルゲイ・V. / 1996.10.1～1996.12.31

: ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部 経済産業技術研究所副所長

石 昌渝(セキ ショウユ) / 1997.1.1～1997.6.30

: 中国、中国社会科学院大学院教授

オチル, アユールダイ / 1997.10.1～1998.3.31

: モンゴル、モンゴル科学アカデミー歴史研究所所長

李 仁遠(リ インウォン) / 1997.12.1～1998.3.31

: 韓国、韓国弘益大学校都市土木工学科教授

セリベルストフ, ビアチェスラフ / 1998.4.1 ~ 1998.6.30
: ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部経済・産業管理技術研究所副所長

スミルノワ, タマラ / 1998.5.1 ~ 1998.8.31
: ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部 無機化学研究所主任研究員

許 志宏 (キョ シコウ) / 1998.8.1 ~ 1998.11.30
: 中国、中国科学院冶金研究所 上級教授

ゲレル, オチル / 1998.9.1 ~ 1998.12.25
: モンゴル、モンゴル技術大学教授

朴 星來 (パク ソンネ) / 1999.1.1 ~ 1999.3.31
: 韓国、韓国外国語大学校人文大学史学科教授

クズネツォフ, フョードル, A. / 1999.1.1 ~ 1999.3.31
: ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部 無機化学研究所長

劉 世徳 (リュウ セトク) / 1999.4.10 ~ 1999.7.9
: 中国、中国社会科学院文学研究所教授

イワノフ, ヴィクトル / 1999.5.1 ~ 1999.8.31
: ロシア、ロシア科学アカデミー極東支部 火山研究所教授

朝 克 (チョウ コク) / 1999.8.1 ~ 1999.10.31
: 中国、中国社会科学院民族研究所教授

セナラス, ユダヤ ガミニ / 1999.9.1 ~ 1999.11.30
: スリランカ、モラツワ大学上級講師

鄭 在貞 (チョン ジェジョン) / 1999.12.2 ~ 2000.3.5
: 韓国、ソウル市立大学校教授

ブラック, ジョン アンドルー / 1999.12.1 ~ 2000.3.31
: オーストラリア、ニューサウスウェールズ大学教授

キム・レチュン / 2000.4.1 ~ 2000.6.30
: ロシア、ロシア科学アカデミー世界文学研究所主席研究員

モシキン, ミハイル / 2000.4.1 ~ 2000.7.31
: ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部 動物分類・生態学研究所教授

李淵昊 (ソ ヨノ) / 2000.7.1 ~ 2000.9.30
: 韓国高麗大学教授

イローヒン, ゲナディ / 2000.8.1 ~ 2000.11.30
: ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部

確精扎布 (チョイジンジャブ) / 2000.10.1 ~ 2001.1.15
: 中国内蒙古大学教授

高 哲煥 (コウ チュルワン) / 2000.12.1 ~ 2001.2.28
: 韓国、ソウル大学校海洋学部教授

馬 建釗 (マー チエンチャオ) / 2001.2.10 ~ 2001.5.31
: 中国広東省民族研究所所長

劉嘉麒 (リュウ ジャーチ) / 2001.4.1 ~ 2001.6.30
: 中国科学院地質学地球物理学研究所所長

タマーラ エセノヴァ / 2001.6.1 ~ 2001.9.15

：ロシアカルムイク国立大学
ミカエル エポフ／2001.7.1～2001.10.31
：ロシア科学アカデミーシベリア支部地球物理科学研究所副所長
恩和巴图／2001.9.16～2002.2.28
：内蒙古大学蒙古語文研
Dendevin Badarch／2001.11.1～2002.2.14
：モンゴル科学技術大学学長
Victor Okurgin／2002.2.15～2002.6.14
：ロシア科学アカデミー極東支部 火山学研究所
鄭 永振／2002.3.31～2002.8.31
：中国延辺大学・渤海史研究所教授
Fan-Niang Kong／2002.6.15～2002.10.14
：ノルウエー土木研究所
アレクセイ A. キリチェンコ／2002.9.1～2003.1.10
：ロシア科学アカデミー東洋学研究所
ウラジミール ロマノビッチ ベロスロドフ／2002.10.15～2003.2.14
：ロシア科学アカデミーシベリア支部 無機化学研究所教授
王満特嘎／2003.1.11～2003.5.14
：モンゴル中央民族大学言語学院 蒙古語言文学部
Wolfgang-Martin Boerner／2003.2.17～2003.6.14
：イリノイ大学シカゴ校教授
ツイムジト プルブエワ ワンチコワ／2003.5.16～2003.9.30
：ロシア科学アカデミーシベリア支部モンゴル学チベット学仏教学研究所
金 旭／2003.6.15～2003.10.14
：中国吉林大学・地球探測科学興技術学院教授
朴 承憲／2003.10.1～2004.1.31
：中国・延辺大学東北亜研究院院長
レオポルド イサク チェルニャフスキー／2003.11.10～2004.2.29
：ロシア科学アカデミーシベリア支部 無機化学研究所情報研究部部长
ネリー レシチェンコ／2004.2.2～2004.5.31
：ロシア科学アカデミー東洋学研究所・上級研究員
サンドラ ジェロニモ カテーン／2004.3.7～2004.6.30
：フィリピン大学国立地質学研究所助教授
S. V. Rasskazov／2004.7.1～2004.10.31
：イルクーツク州立大学教授
尹 豪／2004.6.1～2004.9.30
：吉林大学東北亜研究院・副院長
ミン・ビョンウク／2004.10.1～2005.2.10
：釜山大学校師範大学国語教育科教授
ウラジミール ロマノビッチ ベロスロドフ／2004.11.1～2005.2.28
：ロシア科学アカデミーシベリア支部無機化学研究所固体統計熱力学研究部門教授

- フグジルト / 2005.2.11 ~ 2005.5.31
：内蒙古大学教授 兼副学長
- A. Yurlov / 2005.3.1 ~ 2005.6.30
：ロシア科学アカデミーシベリア支部動物分類学生態学研究所主任研究員
- 銭 杭 (チエン・ハン) / 2005.6.1 ~ 2005.9.30
：中国 上海社会科学院歴史研究所研究員
- 金 喜俊 / 2005.7.1 ~ 2005.10.31
：釜山大学教授
- S. A. Papkov / 2005.10.1 ~ 2006.1.31
：ロシア科学アカデミーシベリア支部歴史研究所上級研究員
- 金 垂秋 / 2005.11.1 ~ 2006.2.28
：中国 復旦大学教授
- S. Bouterey / 2006.2.13 ~ 2006.6.30
：カンタベリー大学言語文化学部助教授・学部長
- N. Yurlova / 2006.3.1 ~ 2006.6.30
：ロシア科学アカデミーシベリア支部動物分類学生態学研究所上級研究員
- 魏 海泉 / 2006.7.1 ~ 2006.10.31
：中国 地震局地質研究所副研究員
- S. Formanek / 2006.7.17 ~ 2006.11.30
：オーストリア国立学術アカデミーアジア文化・思想史研究所上級研究員
- 劉 財 / 2006.11.3 ~ 2007.2.28
：中国 吉林大学教授・地球探測科学と技術学院長、地球物理研究所長
- ダシダワー, チョローン / 2006.12.2 ~ 2007.3.15
：モンゴル科学アカデミー歴史研究所長
- L. Kondrashov / 2007.3.13 ~ 2007.6.30
：ロシア ハバロフスク州立自然環境管理訓練所長
- ツオルモン, ソドノム / 2007.3.16 ~ 2007.6.30
：モンゴル科学アカデミー歴史研究所 シニア・サイエンティスト
- Ignatyeva Vanda / 2007.7.1 ~ 2007.9.30
：ロシア サハ共和国アカデミー人文科学研究所政治学社会学部門部長
- Belosludov Vladimir / 2007.7.2 ~ 2007.10.31
：ロシア科学アカデミーシベリア支部無機化学研究所教授
- 特木爾巴根 / 2007.10.1 ~ 2008.1.15
：中国 内蒙古師範大学蒙古語文学研究所教授
- Voytishkek Elena / 2007.11.5 ~ 2008.2.29
：ロシア ノボシビルスク国立大学准教授
- Yadrenkina Elena / 2008.1.16 ~ 2008.5.15
：ロシア科学アカデミーシベリア支部動物分類学生態学研究所上級研究員
- 白音門徳 / 2008.3.1 ~ 2008.6.30
：中国 内蒙古大学蒙古言語研究所教授
- Jan Olof Svantesson / 2008.5.19 ~ 2008.8.31

：スウェーデン ルンド大学教授
飯坂 讓二／2008.7.1～2008.10.31
：カナダ ビクトリア大学地理学科教授
布仁巴図／2008.9.1～2009.1.15
：中国 内蒙古大学蒙古学学院教授
Black John Andrew／2008.11.1～2009.3.31
：オーストラリア シドニー大学建築、設計計画学部教授
Stammler Florian／2009.1.16～2009.7.15
：フィンランド ラップランド大学北極センター上級研究員
Dubinina Nina／2009.4.1～2009.6.30
：ロシア ハバロフスク国立教育大学教授
Dashi D. Darizhapov／2009.7.1～2009.12.31
：ロシア科学アカデミー・シベリア支部ブリヤート科学センター物理学部リモートセンシング
研究室長
Erdene Purejav／2009.8.1～2009.11.30
：モンゴル科学アカデミー言語文化研究所言語研究部門主任
嘎日迪／2009.12.1～2010.3.31
：内モンゴル師範大学蒙古学学院教授
曹三相／2010.1.1～2010.5.31
：韓国 釜山大学韓国研究所 研究員
Boyakova Sardana／2010.4.11～2010.7.15
：ロシア ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学・北方民族問題研究所 20-21世紀歴史
学部門部長
朴慶洙／2010.6.1～2010.8.30
：韓国 江陵大学校人文大学日本学科教授
那順烏日図／2010.8.1～2010.11.30
：中国 内蒙古大学蒙古学学院教授
李晶／2010.9.1～2011.1.31
：中国 広東海洋大学外国語学院教授
ウラジミール・ヤクボフ／2010.12.1～2011.3.31
：ロシア トムスク国立大学教授
セルゲイ・ソコロフ／2011.2.1～2011.2.28
：ロシア科学アカデミー地質研究所教授・所長代理
金 旭／2011.3.1～2011.6.30
：中国 吉林大学教授
哈斯巴特爾／2011.6.1～2011.9.30
：中国 黒竜江大学・教授
Boerner Wolfgang-Martin／2011.7.1～2011.9.29
：アメリカ イリノイ大学シカゴ校・名誉教授
斯琴巴特爾／2011.10.1～2012.1.31
：中国 内蒙古大学・教授

敖特根 / 2012.2.1 ~ 2012.5.31
：中国 西北民族大学・教授

Sreenen JARGALAN / 2012.2.1 ~ 2012.4.30
：モンゴル モンゴル科学技術大学・教授

Gavrilyeva Tuyara / 2012.5.1 ~ 2012.8.31
：ロシア サハ共和国北方地域経済研究所・主任研究員

烏力吉巴雅爾 / 2012.6.1 ~ 2012.8.31
：中国 中央民族大学・教授

Koch Magaly / 2012.9.1 ~ 2012.11.30
：アメリカ ボストン大学リモートセンシングセンター・研究准教授

陳 正宏 / 2012.10.1 ~ 2012.11.30
：中国 復旦大学・古籍整理研究所・教授

Borisov Andrian / 2012.12.1 ~ 2013.3.31
：ロシア ロシア科学アカデミーシベリア支部・人文学北方先住民研究所・上席研究員

Chimtdorzhiiev Tumen / 2013.1.1 ~ 2013.1.31
：ロシア ロシア科学アカデミーシベリア支部・ブリアート科学センター・物理物質研究所副
所長

Laikhansuren Altanzaya / 2013.4.1 ~ 2013.7.31
：モンゴル モンゴル国立教育大学・歴史・社会科学部・教授

潘 建国 / 2013.9.1 ~ 2013.11.30
：中国 北京市北京大学・中文系・教授

巴雅爾 / 2013.9.2 ~ 2013.12.31
：中国 内モンゴル師範大学・旅游学院・教授

Ligthart Leonardus Petrus / 2014.2.1 ~ 2014.3.14
：オランダ デルフト工科大学・名誉教授

Sampildondov Chuluun Khar Aduutan / 2014.4.1 ~ 2014.7.31
：モンゴル モンゴル科学アカデミー・歴史研究所長

Prozorova Larisa / 2014.4.18 ~ 2014.6.16
：ロシア ロシア科学アカデミー極東支部・生物・土壌科学部門・主席研究員

Kulinich Natalia / 2014.5.1 ~ 2014.8.31
：ロシア 太平洋国立大学・哲学文化学科・副学科長

Chernolutckaia Elena / 2014.9.1 ~ 2014.11.30
：ロシア ロシア科学アカデミー極東支部・歴史・考古学・極東諸民族人類学研究所・主任上
級研究員

巴達瑪敖德斯爾 / 2014.10.1 ~ 2015.1.31
：中国 内モンゴル大学・教授

Kondrashin Viktor / 2015.1.20 ~ 2015.4.19
：ロシア ベリンスキー名称国立ペンザ教育大学ロシア史・歴史教授法学科長・教授

Chen Zhining / 2015.3.13 ~ 2015.4.23、2015.5.19 ~ 2015.5.29
：シンガポール シンガポール国立大学・教授

Fondahl Gail Andrea / 2015.4.6 ~ 2015.6.30

：カナダ ノーザン・ブリティッシュ・コロンビア大学・副学長・教授
Dilek Yildirim/2015.5.28 ~ 2015.8.21
：アメリカ 国際地質科学連合会副会長・マイアミ大学・教授
Delaney Alyne Elizabeth/2015.10.1 ~ 2016.1.31
：デンマーク アールボルグ大学・准教授
葉 爾達 /2015.10.1 ~ 2016.1.31
：中国 中央民族大学・蒙古語言文学系・教授
Abera Deraje Ayalew/2016.2.4 ~ 2016.3.26
：エチオピア アジスアベバ大学・教授
胡格吉夫 /2016.3.1 ~ 2016.4.30
：中国 中央民族大学・蒙古語言文学系・教授
Vladimir Malkovets/2016.11.1 ~ 2017/1.14
：ロシア ロシア科学アカデミーシベリア支部・ソボレフ地質学鉱物学研究所・上級研究員
Tsevel Shagdarsuren/2016.11.1 ~ 2017.1.31
：モンゴル ウランバートル国際大学・教授・モンゴル学研究所長
Giovanni Nico/2017.1.16 ~ 2017.3.31
：イタリア 国立研究機構 (CNR) 応用数学研究所・研究員
Sergei Andreevich Papkov/2017.2.1 ~ 2017.3.31
：ロシア ロシア科学アカデミーシベリア支部・歴史研究所・上席研究員
Kazi A Kalpoma/2017.4.1 ~ 2017.6.30
：バングラデシュ アメリカ国際大学バングラデシュ・教授
Menno Schilthuizen/2017.5.6 ~ 2017.7.6
：オランダ ライデン大学・教授
蔡 金河 /2017.7.1 ~ 2017.8.31
：台湾 国立東華大学・教授
Nelson Boniface/2017.7.1 ~ 2017.9.30
：タンザニア ダルエスサラーム大学・上級講師
Jean-Michel Friedt/2017.10.1 ~ 2017.12.28
：フランス 大学間マイクロエレクトロニクスセンター・ポストドクトラルフェロー
Dmitriy Zedgenizov/2018.1.5 ~ 2018.3.30
：ロシア ロシア科学アカデミー・教授
Tamara Litvinenko/2018.1.10 ~ 2018.3.30
：ロシア ロシア科学アカデミー地理学研究所・上級研究員
Habeck Joachim Erich Otto/2018.4.1 ~ 2018.6.30
：ドイツ ハンブルグ大学・教授
Sharygin Igor/2018.5.1 ~ 2018.7.27
：ロシア ロシア科学アカデミー・シベリア支部ソボレフ地質学鉱物学研究所・上級研究員
Aldo Tollini/2018.7.1 ~ 2018.8.31
：イタリア ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学アジア・北アフリカ研究学部・准教授
Islamov Bakhtiyor/2018.8.1 ~ 2018.10.31
：ウズベキスタン プレハーノフ記念ロシア経済アカデミータシケント校・教授

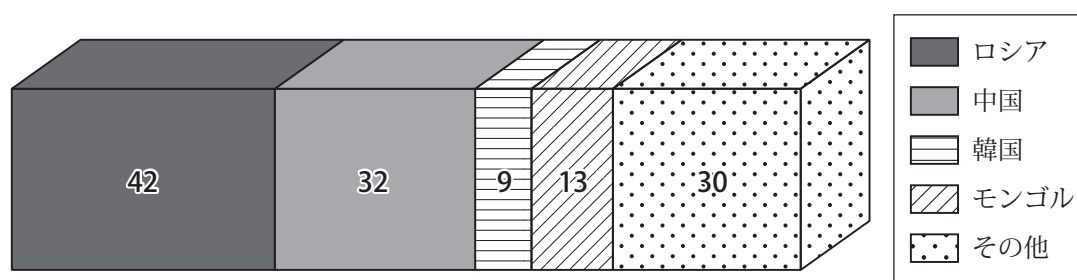
Munkhtseren Zolzaya/2018.12.17～2019.3.15

：モンゴル モンゴル国立芸術文化大学芸術文化研究学院・准教授

Stammler Florian/2019.1.18～2019.3.29

：フィンランド ラップランド大学北極センター・教授

[外国人研究員(海外)の出身国(1996年度～2018年度)]



(G) 兼務教員受け入れ状況(2019年3月現在)

阿子島 香	文学研究科 教授(考古学、先史学)
中村美千彦	理学研究科 教授(火山学、岩石学、地殻流体)
奥村 誠	災害科学国際研究所 教授(土木計画学、交通計画)
山田 仁史	文学研究科 准教授(宗教学、文化人類学・民俗学)
李 仁子	教育学研究科 准教授(文化人類学、在日移民研究)
川口 幸大	文学研究科 准教授(文化人類学)
木村 敏明	文学研究科 教授(宗教人類学、インドネシアの社会と宗教)
Boret, Penmellen Sebastien	災害科学国際研究所 准教授 (記念化行為、グリフケア、先住民の知識、アーカイブ)

(H) 非常勤講師受け入れ状況(2019年3月現在)

伊藤 正直	有限責任会社ミツバ テクラス ルス(ロシア政策論)
河野 公一	東北工業大学(衛星画像処理、リモートセンシング)
永谷 泉	国立研究開発法人産業技術総合研究所(衛星画像処理、リモートセンシング)
柳澤 文孝	山形大学理学部(地球環境学)
園田 潤	仙台高等専門学校(計算電磁気学)
小谷 竜介	東北歴史博物館(民俗学)
平川 新	宮城学院女子大学(日本近世政治経済史)
栗原伸一郎	東北大学大学院文学研究科(日本近世政治経済史)

(I) 東北アジア研究センターフェロー

氏 名	所 属
和田 春樹	東京大学名誉教授
渡辺 之	元日本鋼管取締役・技監、元東北アジア研究センター環境技術移転寄附研究部門教授

客員教授

氏 名	期 間	所属部門名
平川 新	2014.4.1 ~ 2019.3.31	寄附研究部門

客員准教授

氏 名	期 間	所属部門名
小谷 竜介	2018.4.1 ~ 2019.3.31	プロジェクト研究部門 (災害人文学研究ユニット)

(J) その他研究員

客員研究員 ※太字は2017.3.31現在受入中

氏 名	期 間	研 究 課 題
劉 四新	2007.7.5 ~ 2007.10.1	ボアホールレーダの数値計算並びに実験
キム チョンホ	2007.7.25 ~ 2007.8.25	近世韓日の科学技術史と科学技術政策の政治思想的特性に関する比較研究
包 聯群	2007.4.1 ~ 2010.3.31	モンゴル語と周辺言語との言語接触の研究
ハーリッド フォウド アブド エルワケール	2007.5.1 ~ 2010.3.31	陸域生態系の物質循環における土壌動物の役割に関する研究
アンナ ステムラー ゴスマン	2009.1.16 ~ 2009.7.15	北方におけるコミュニティ適応・脆弱性とレジリエンス、境界領域の関係と交易に関する比較研究
王 三慶	2009.5.27 ~ 2009.8.26	日本の漢文小説研究
ハタンバーナル ナツァグ ドルジ	2009.6.10 ~ 2009.8.29	エルデニ・ゾー寺院の歴史
ダリチャポフ ブラット	2009.9.18 ~ 2009.12.31	日本企業のシベリアへの投資に関する研究
カジ エ カレポマ	2009.11.1 ~ 2011.3.31	人工衛星の画像処理とデータベース構築
恩 和	2010.6.1 ~ 2010.6.30	福沢諭吉にみる民族主義思想の形成
チョローン ダシダワー	2011.8.23 ~ 2012.6.30	モンゴルにおける日本人抑留兵(1945-1947年)
シャルグラノワ オリガ	2012.3.15 ~ 2013.3.14	東北アジアにおけるモンゴル系移民の民族的統合の構築：民族社会学と宗教の諸要素
Chen Jie	2012.11.16 ~ 2013.1.14	環境リモートセンシング
Kazi A Kalpoma	2013.8.1 ~ 2013.12.31	衛星画像の可視化処理
Yu Quan	2013.10.1 ~ 2014.10.31	中世モンゴル語の研究
Webster Sophie	2015.3.28 ~ 2015.5.27	東アジアの陸生貝類の生物地理学研究
丁 澤剛	2016.4.6 ~ 2016.7.15	地中レーダの設計に関する研究
劉 麗	2016.5.22 ~ 2016.11.22	地中レーダの設計に関する研究

Fetime Roberto Chauque	2017.10.1 ~ 2018.3.31	モザンビーク、テテ地域モザンビーク帯南部の地史
桂 花	2017.10.1 ~ 2018.9.30	清朝服属以前のハルハ・ザサクト・ハン部の歴史研究
IVANOVA AYTALINA	2019.1.10 ~ 2019.3.31	北東アジアの牧畜民と都市部へ移住したその子孫達の法人類学的安全保障について

フルブライト米国人招聘講師・研究員

氏 名	期 間	研 究 課 題
Koch Magaly	2014.9.1 ~ 2015.7.31	乾燥地域におけるリモートセンシングによる環境計測

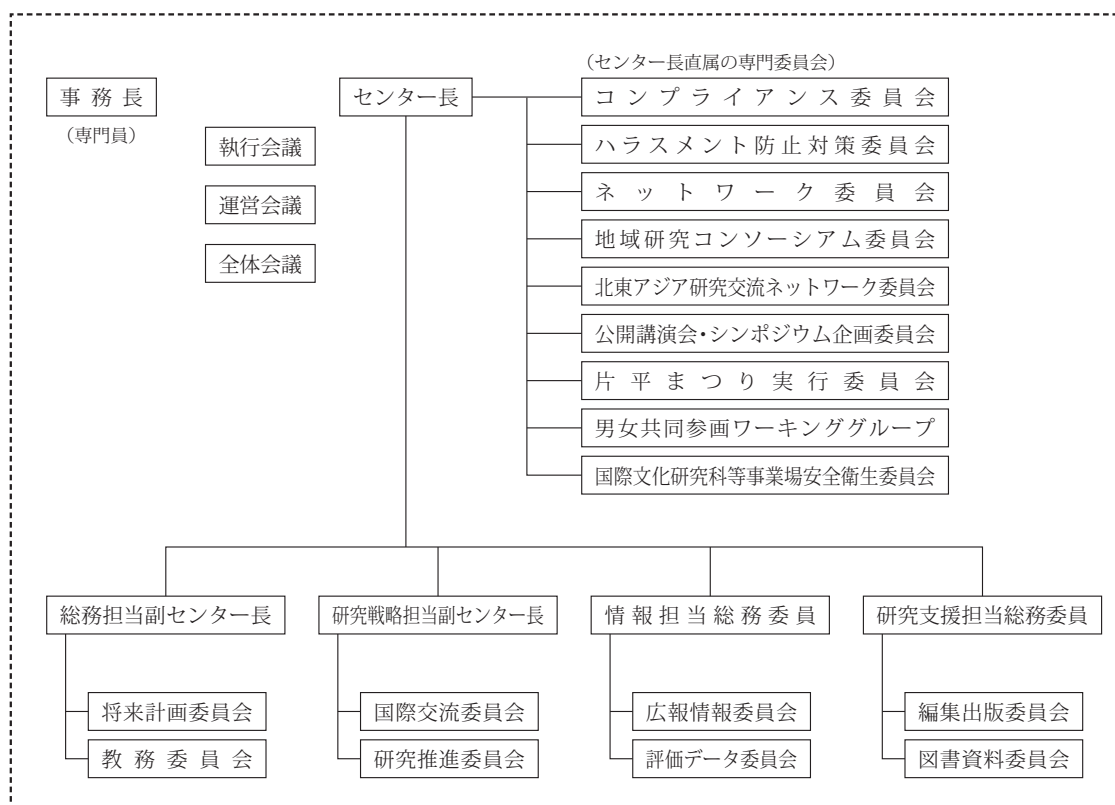
専門研究員 ※編集注記：2009年度版より掲載年度受入れの者に限り記載

氏 名	期 間	専 門 分 野
矢口 啓朗	2018.4.1 ~ 2018.7.31	ロシア史
佐藤 勇輝	2018.4.1 ~ 2020.3.31	地学
友田 昌宏	2018.10.1 ~ 2020.3.31	日本近世史

日本学術振興会特別研究員 ※編集注記：2009年度版より当該年度受入者に限り記載

氏 名	期 間	受 入 教 員	資 格
井上 岳彦	2016.4.1 ~ 2018.9.30	岡 洋樹 教授	PD
大石 侑香	2016.4.1 ~ 2018.9.30	高倉 浩樹 教授	PD
齋藤 匠	2016.4.1 ~ 2018.3.31	千葉 聡 教授	DC1
内田 翔太	2017.4.1 ~ 2020.3.31	千葉 聡 教授	DC1
泉 佑太	2018.4.1 ~ 2021.3.31	佐藤 源之 教授	DC1

(K) センター内委員会構成図 (2019.3.31現在)



(L) 委員会名簿 (2018年度)

〈学内各種委員会〉

委員会名	委員氏名	任期	備考
安全保障輸出管理アドバイザー	佐藤 源之	24.4.1 ~	
安全保障輸出管理アドバイザー兼安全保障輸出管理委員	後藤 章夫	28.4.1 ~	
安全保障輸出管理担当者	清水 俊和	27.7.1 ~	
運輸交通専門委員会			(本部推薦)
エネルギー連携推進委員会委員	センター長		
〃 幹事	佐藤 源之	設置期限設けない	
学術資源研究公開センター運営専門委員会	辻森 樹	30.4.1 ~ 32.3.31	教授・准教授
学生生活支援審議会(仮称)	辻森 樹	30.4.1 ~ 31.3.31	委員
	明日香寿川	〃	代理出席者
学務審議会	明日香寿川	29.4.1 ~ 31.3.31	
学友会全学協議会(職員委員)	工藤 純一	29.4.1 ~ 31.3.31	教授・准教授
片平まつり実行委員会	上野 稔弘	29.4.1 ~ 31.3.31	5研究所と東北アジアの開催

川内北キャンパス協議会	センター長	29.4.1 ~ 31.3.31	
川内キャンパス環境整備協議会			輪番表に基づき割当(施設部総務) アジアは輪番表に入っていない 30.4.17確認済
川北合同研究棟管理委員会	高倉 浩樹	任期なし	センター長
環境・安全委員会安全管理専門委員会 危険物質総合管理システム専門部会専門部員	千葉 聡 (管理責任者)	30.4.1 ~	千葉先生(運用担当者) 高谷専門員(事務担当者)30年度から
環境保全センター運営専門委員会			研究所群から1人 (本年度割当て無)
基金企画推進室員	岡 洋樹	21.4.1 ~	(本部推薦)
貴重図書等委員会	寺山 恭輔	29.4.1 ~ 31.3.31	
キャンパス将来計画委員会	センター長	29.4.1 ~ 31.3.31	
教育研究評議会	センター長	29.4.1 ~ 31.3.31	評議員
教養教育改革会議	センター長	19.10.16 ~	
研究推進・支援機構研究設備マネジメント 専門委員会	佐藤 源之	29.5 ~ 31.3.31	29.5設立
研究推進・支援機構テクニカルサポート センター運営委員会委員	平野 直人	29.7.25 ~ 31.3.31	29.7.12施行 教授・准教授
研究所長会議	センター長	29.4.1 ~ 31.3.31	部局長
研究所長会議若手アンサンブルプロジェ クト担当教員	千葉 聡	30.4.1 ~	研究所長会議「研究所連携 若手交流会」WG 委員27年 度解体
研究所長会議 WG 委員	内藤 寛子	29.4.1 ~	H28.3第5回研究所長会議で 決定
研究所連携プロジェクト GL 会議	平野 直人	25.4.1 ~	第4期プロジェクト H24 ~
研究推進審議会	千葉 聡	29.4.1 ~ 31.3.31	
研究推進審議会研究倫理専門委員会	千葉 聡	29.4.1 ~ 31.3.31	
(研究用微生物安全管理規定) 微生物安全 主任者	千葉 聡	25.4.1 ~	(微生物取扱責任者: 鹿野秀 一(26.3.20 ~))
研究大学強化促進事業実施委員会	瀬川 昌久	29.4.1 ~ 31.3.31	職の指定なし
グループウェア担当者(東北大学ポータル サイト)	鹿野 秀一	29.4.1 ~	センター ネットワーク委 員長
広域交通計画等検討委員会			(本部推薦)
広報連絡員	鹿野 秀一	29.4.1 ~ 31.3.31	
国際連携推進機構国際交流委員会	岡 洋樹	30.4.1 ~ 32.3.31	教授又は准教授から1名(セ ンター任期2年・単年ごとに 推薦必要)

国立大学附置研究所・センター長会議	センター長	29.4.1～ 31.3.31	通称「全国研究所長会議」
コラボレーション・オフィス運営委員会	岡 洋樹	29.4.1～ 31.3.31	人文社会系諸部局
産学連携推進会議	高倉 浩樹	25.4.1～	
障害者差別解消推進監督者及び部局相談員	監督者 千葉 聡 相談員 瀬川昌久		H28.4.1施行
情報公開・個人情報開示等委員会			研究所群から1人 (本年度割当て無)
情報公開・個人情報開示等審査委員会			研究所群から1人 (本年度割当て無)
情報シナジー機構 情報システム利用連絡会議(部局実施責任者) (部局技術担当者)	平野 直人 後藤 章夫	30.4.1～ 25.4.1～	センターネットワーク委員長担当(30年度は異なる) H30年度はネットワーク委員長鹿野先生のまま
全学教育科目委員会			
外国語(中国語)	上野 稔弘		30年度末まで
外国語(ロシア語)	柳田 賢二		
社会科学、総合科目、外国語 広報編集委員会			
総長特別補佐			
大学情報データベース委員会	千葉 聡 平野 直人 寺山 恭輔 宮本 毅		(評価責任者) 千葉教授 (運用責任者) 平野准教授 清水 俊和(事務室)
男女共同参画委員会	上野 稔弘	30.4.1～ 31.3.31	29年度～31年度まで石井准教授だったが30年度からサバティカルのため交代
「東北大学サイエンスカフェ」WG 委員	高倉 浩樹 岡 洋樹		センター長
東北大学出版会評議員会	センター長	29.4.1～ 31.3.31	
日本学国際共同大学院プログラム構想委員会 日本学国際共同大学院検討 WG	センター長 瀬川 昌久	30.4.1～ 31.3.31 29.4.1～ 30.3.31	28.4.1設置
入学試験審議会	センター長	29.4.1～ 31.3.31	研究所長会議代表() 29年度担当
入試実施委員会			研究所群から2人 (29年度割当てなし)
ハラスメント全学防止対策委員会			研究所群から1人 (本年度割当て無)
評価分析室	工藤 純一	28.4.1～ 31.3.31	(本部推薦)
部局長連絡会議	センター長	29.4.1～ 31.3.31	部局長
附属図書館商議会	瀬川 昌久	30.4.1～ 32.3.31	教授

文系サマープログラム実施 WG 委員	高倉 浩樹	25.4.1 ~	
文系部局長連絡協議会	センター長	29.4.1 ~ 31.3.31	部局長
埋蔵文化財調査室運営委員会			委員長指名 (アジアはなし) 30.4.17確認済 (施設部総務)
埋蔵文化財調査室運営専門委員会			川内キャンパス整備委員会 推薦
埋蔵文化財調査室運営専門委員会調査部会			
リーディングプログラム推進機構リーディングプログラム部門教務委員会委員	岡 洋樹	29.4.1 ~ 31.3.31	
リサーチアドミニストレーター (UR A) 連携協議会	金 丹	28.4.1 ~	(26.6制定) 客員研究支援者 OK
ロシア交流推進室員	高倉 浩樹	29.4.1 ~	(室員)
	岡 洋樹	29.4.1 ~	(室員)
	塩谷 昌史	29.4.1 ~	(室員)
	柳田 賢二	29.4.1 ~	(室員)
六カ所村センター検討委員会 (仮称)	佐藤 源之	29.4.1 ~ 31.3.31	

〈センター内各種委員会〉

委員会名	委員氏名	任期	備考
センター長	高倉 浩樹		
副センター長			
総務担当 副センター長	千葉 聡		
研究戦略担当 副センター長	瀬川 昌久		
総務委員			
情報担当 総務委員	平野 直人		
研究支援担当 総務委員	寺山 恭輔		
執行会議	センター長		
	副センター長 2名		
	総務委員 2名		
	事務長		
執行会議の参議	専門員及び関係教員が必要に応じて参加		
総務担当副センター長 (千葉) が担当して、委員長を兼任する委員会			
将来計画委員会 (6人)	瀬川 昌久		副委員長
	佐藤 源之		
	寺山 恭輔		
	辻森 樹		
	明日香寿川		
教務委員会 (3人)	柳田 賢二		留学生・学生発表会担当
	瀬川 昌久		

研究戦略担当副センター長（瀬川）が担当して、委員長を兼任する委員会			
国際交流委員会（6人）	工藤 純一		
	柳田 賢二		
	鹿野 秀一		
	塩谷 昌史		
	内藤 寛子		
研究推進委員会（6人）	工藤 純一		
	荒武賢一朗		
	後藤 章夫		
	宮本 毅		
	高橋 陽一		
情報担当総務委員（平野）が担当して、委員長を兼任する委員会			
広報情報委員会（6人）	柳田 賢二		
	荒武賢一朗		
	後藤 章夫		
	宮本 毅		
	友田 昌宏		
評価データ委員会（4人）	塩谷 昌史		（部局評価責任者）千葉教授
	菊田 和孝		
	内藤 寛子		
研究支援担当総務委員（寺山）が担当して、委員長を兼任する委員会			
編集出版委員会（7人）	明日香壽川		
	岡 洋樹		
	瀬川 昌久		
	上野 稔弘		
	後藤 章夫		
	高橋 陽一		
図書資料委員会（4人）	岡 洋樹		
	塩谷 昌史		
	後藤 章夫		
センター長直属の専門委員会			
コンプライアンス委員会（4人）	センター長		コンプライアンス推進責任者
	総務担当 副センター長		コンプライアンス推進担当者
	研究戦略担当 副センター長		
	事務長		事務長

ハラスメント防止対策委員会(4人)	センター長		
	副センター長2名		
	事務長		
ネットワーク委員会(5人) ※通常4人体制、30年度は5人体制 (高倉センター長より)	辻森 樹		
	鹿野 秀一		委員長 (学内情報システム部局実施責任者)
	後藤 章夫		
	宮本 毅		
	菊田 和孝		
片平まつり実行委員会(4人)	上野 稔弘		委員長
	佐藤 源之		
	宮本 毅		
地域研究コンソーシアム委員会 (3人)	菊田 和孝		
	辻森 樹		委員長
	荒武賢一郎		
北東アジア研究交流 ネットワーク委員会(3人)	塩谷 昌史		
	明日香寿川		委員長
	上野 稔弘		
公開講演会・シンポジウム 企画委員会(3人)	岡 洋樹		委員長
	辻森 樹		
	内藤 寛子		
国際文化研究科等安全衛生委員会	辻森 樹		
	上野 稔弘		
	海口 織江		
その他			
ハラスメント相談窓口	柳田 賢二		
	内藤 寛子		
	高橋 千秋		
親睦会	上野 稔弘		
	宮本 毅		
	高橋 陽一		
上廣歴史資料学研究部門委員会	平川 新		
	荒武賢一郎		
	高倉 浩樹 (執行会議)		
	千葉 聡 (執行会議)		
	瀬川 昌久 (執行会議)		
	平野 直人 (執行会議)		
寺山 恭輔 (執行会議)			

上廣歴史資料学研究部門運営諮問委員会委員（平成26年7月1日から設置）		
委員長	高倉 浩樹	センター長
学内	柳原 敏昭	文学研究科 歴史科学専攻 日本史専攻分野 教授
学内	佐藤 大介	災害科学国際研究所 人間・社会対応研究部門 歴史資料保存研究分野 准教授
学外	菅野 正道	仙台市博物館
部門	平川 新	上廣歴史資料学研究部門 客員教授

研究不正部局通報窓口担当	千葉 聡	
公正な研究活動推進室 （研究倫理推進責任者） （構成員）	千葉 聡（相談窓口担当者） 瀬川 昌久（ " ）	（事務担当者） 清水 俊和

(2) 研究資金

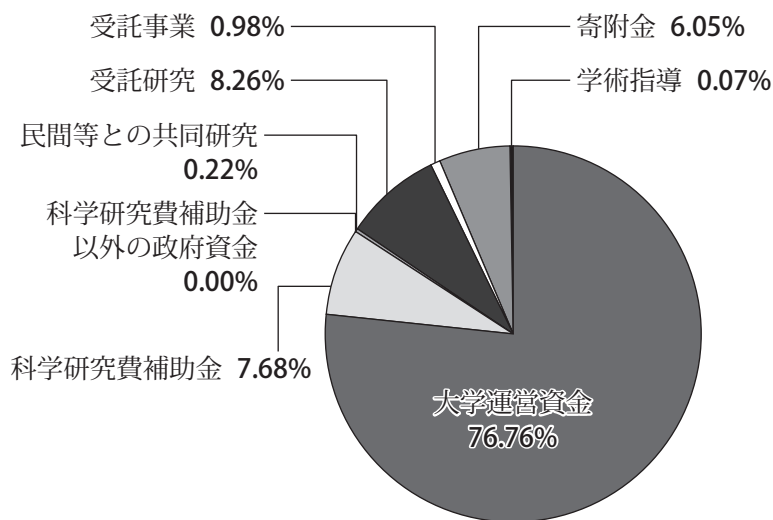
(A) 経費総額

(単位：百万円)

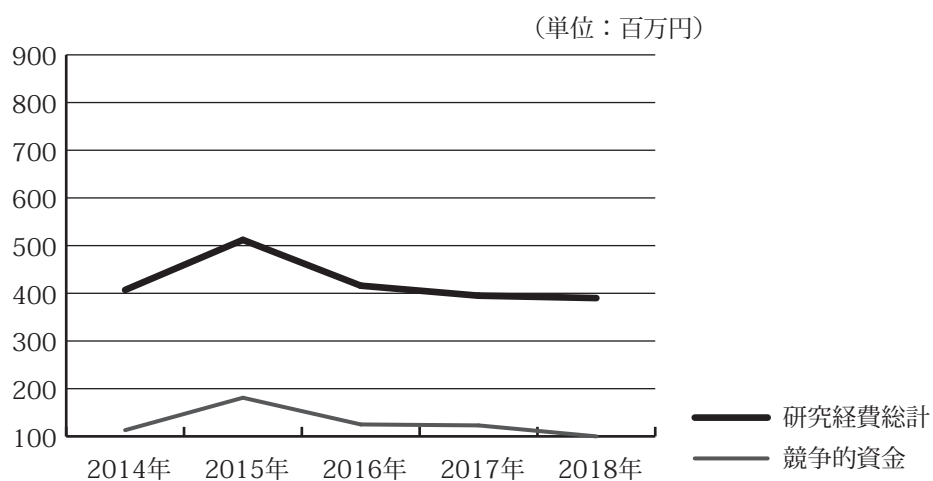
区 分		2014	2015	2016	2017	2018
大学運営資金		407	512	416	395	390
競争的資金	科学研究費補助金	40	46	38	43	45
	科学研究費補助金以外の政府資金	0	0	0	0	0
	民間等との共同研究	0	0	0	0	6
	受託研究	39	100	46	34	9
	受託事業	1	3	9	7	7
	寄附金	33	32	32	37	33
学術指導	0	0	0	2	0	
総 計		520	693	541	518	490
総計に占める競争的資金の割合		22%	26%	23%	24%	20%

※競争的資金の各区分ごとの100万円未満の額は50万円以上切り上げ、50万円未満切り捨て。このことにより他の集計結果と合致しない場合がある。

研究活動関連経費の構成 (2013～2017年度の平均)



経費総額と競争的資金の推移



(B) 歳出決算額 (国立学校特別会計／大学運営資金・寄付金)

(単位：百万円)

区 分		2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度
人件費	運営費交付金	258	253	231	234	256
物件費	運営費交付金	84	138	103	95	84
	その他	65	121	82	67	50
計		407	512	416	396	390

(C) 科研費の申請・採択状況

〈種目別実績〉

(単位：百万円)

研究種目	2014年度		2015年度		2016年度		2017年度		2018年度		計	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
特別推進研究	(1) 0		(0) 0		(0) 0		(0) 0		(0) 0		(1) 0	0
新学術領域研究 (総括班)											(0) 0	0
新学術領域研究 (計画研究)	(2) 0		(1) 0		(0) 0		(0) 0		(1) 0		(4) 0	0
新学術領域研究 (公募研究)											(0) 0	0
基盤研究(S)									(1) 0		(1) 0	0
基盤研究(A)	(3) 2	13	(2) 1	5	(2) 1	5	(1) 1	5	(1) 1	4	(9) 6	32
基盤研究(B)	(7) 2	7	(9) 3	11	(7) 4	13	(8) 6	21	(8) 6	24	(39) 21	76
基盤研究(C)	(11) 8	7	(15) 8	9	(15) 5	5	(16) 7	8	(15) 9	9	(72) 37	38
萌芽研究 (2008年度まで) 挑戦的萌芽研究 (2009年度から)	(6) 3	2	(6) 3	3	(8) 3	3	(2) 2	2			(22) 11	10
挑戦的研究 (開拓)							(1) 0				(1) 0	0
挑戦的研究 (萌芽)							(2) 0		(1) 0		(3) 0	0
若手研究(A)			(1) 0								(1) 0	0
若手研究(B)	(11) 6	7	(8) 4	4	(6) 5	3	(2) 2	2	(2) 2	2	(29) 19	18
若手研究 (スタートアップ) (2009年度まで) 研究活動 スタート支援 (2010年度から)	(2) 1	1			(1) 0	0	(2) 1	1	(1) 1	1	(6) 3	3
特別研究員 奨励費	(2) 2	2	(4) 4	4	(6) 6	3	(6) 6	5	(7) 7	5	(25) 25	19
研究成果 公開促進 (学術図書)	(2) 1	1	(0) 0		(1) 0		(0) 0				(3) 1	1
研究成果 公開促進費 (研究成果データベース)	(1) 1	3	(1) 1	4	(1) 1	3	(0) 0		(1) 1	1	(4) 4	11
計	(48) 26	43	(47) 24	40	(47) 25	35	(40) 25	44	(38) 27	46	(220) 127	208

※件数の上段()書は申請件数、下段は採択件数。金額は採択された直接経費の金額を表す。

※各種目ごとの100万円未満の額は50万円以上切り上げ、50万円未満切り捨て。このことにより他の集計結果と合致しない場合がある。

※年度途中で転出又は廃止となった課題は、転出又は廃止となった年度の当初に交付決定又は基金支払を受けた額により計上している。

〈一人当たりの申請率（申請件数／教員数）〉

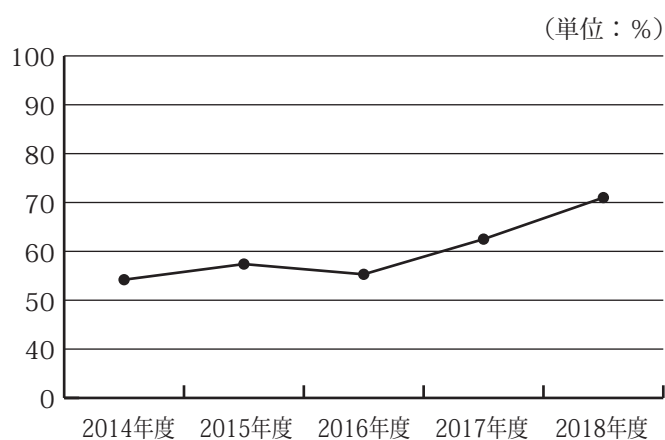
2014年度 (教員数23名)	2015年度 (教員数23名)	2016年度 (教員数23名)	2017年度 (教員数23名)	2018年度 (教員数24名)	平均
2.09	2.04	2.04	1.73	1.58	1.90

〈一人当たりの獲得額（採択金額／教員数）〉

(単位：百万円)

2014年度 (教員数23名)	2015年度 (教員数23名)	2016年度 (教員数23名)	2017年度 (教員数23名)	2018年度 (教員数24名)	平均
1.86	2.00	1.63	1.91	1.89	1.86

〈科研費採択率実績（2014年度～2018年度）〉



(D) 外部資金受入状況

〈民間等との共同研究、受託研究、奨学寄付金受け入れ状況〉

(金額単位：千円)

区 分		2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度
民間等との共同研究	件数	3	3	3	3	3
	金額	0	0	495	275	6,000
受 託 研 究	件数	5	7	5	4	4
	金額	38,616	99,951	45,845	33,599	9,207
受 託 事 業	件数	1	1	2	1	1
	金額	54	2,232	9,484	6,650	6,795
寄 附 金	件数	4	3	3	6	4
	金額	33,420	32,100	31,850	36,660	33,290
学 術 指 導	件数	0	0	0	1	0
	金額	0	0	0	2,333	0
計	件数	13	14	13	15	12
	金額	72,090	134,283	87,674	79,517	55,292

〈科研費以外の外部資金明細〉

(金額単位：千円)

区分	2013年度		2014年度		2015年度	
	金額	受入先	金額	受入先	金額	受入先
共同研究						
受託研究	6,500	宮城県地域文化遺産復興プロジェクト実行委員会	30,631	独立行政法人情報通信研究機構	56,221	国立研究開発法人情報通信研究機構
	5,967	金沢大学	6,264	独立行政法人森林総合研究所	34,500	国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構
	13,750	独立行政法人情報通信研究機構	1,000	独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構	6,264	国立研究開発法人森林総合研究所
	34,210	独立行政法人情報通信研究機構	243	蔵王町長	226	国立研究開発法人科学技術振興機構
	2,940	独立行政法人土木研究所	479	独立行政法人科学技術振興機構	2,300	国立大学法人北海道大学
					440	国立研究開発法人科学技術振興機構
受託事業	2,460	独立行政法人日本学術振興会	54	宮城県知事	2,232	独立行政法人日本学術振興会
	74	宮城県知事				
	920	独立行政法人日本学術振興会				
寄附金	28,000	公益財団法人上廣倫理財団	30,000	公益財団法人上廣倫理財団	31,000	公益財団法人上廣倫理財団
	11,440	公益財団法人東レ科学振興会	1,430	公益財団法人東レ科学振興会	800	公益財団法人山口育英奨学会
	100	財団法人東北開発記念財団	490	公益財団法人東京地学協会		
	270	公益財団法人トヨタ財団	1,500	公益財団法人JFE21世紀財団	300	公益財団法人日本科学協会
学術指導						

区分	2016年度		2017年度		2018年度	
	金額	受入先	金額	受入先	金額	受入先
共同研究	495	株式会社森山地質年代学研究所	275	株式会社安藤・間	3,000	株式会社安藤・間
					3,000	三菱マヒンドラ農機株式会社
受託研究	1,452	国立研究開発法人情報通信研究機構	24,629	国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構	657	国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構
	33,679	国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構	5,970	国立大学法人北海道大学	5,550	国立大学法人北海道大学
	250	栗原市	3,000	株式会社熊谷組	3,000	株式会社熊谷組
	4,200	国立大学法人北海道大学				
	6,264	国立研究開発法人森林総合研究所				
受託事業	7,500	大学共同利用機関法人人間文化研究機構	6,650	大学共同利用機関法人人間文化研究機構	6,795	大学共同利用機関法人人間文化研究機構
	1,984	独立行政法人日本学術振興会				
寄附金	30,000	公益財団法人上廣倫理財団	31,500	公益財団法人上廣倫理財団	31,500	公益財団法人上廣倫理財団
	150	一般財団法人東北開発記念財団	850	公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団	900	一般財団法人自然環境研究センター
	1,700	公益財団法人住友財団	2,500	公益財団法人山田科学振興財団	600	一般財団法人自然環境研究センター
			810	公益財団法人クリタ水・環境科学振興財団	290	一般財団法人東北開発記念財団
			100	一般社団法人日本森林技術協会		
			900	一般財団法人自然環境研究センター		
学術指導						

〈科研費以外の外部資金一覧（2018年度）〉

（金額単位：円）

名 称 ・ 題 目	研究者	相手方・委託者・寄附者	金 額
民間等との共同研究			
1	土木工事における GB-SAR を用いた動態観測の検討と適用	佐藤 源之 株式会社安藤・間	3,000,000
2	地中レーダ技術の農業への応用	佐藤 源之 三菱マヒンドラ農機株式会社	3,000,000
3	LA-ICPMS 局所 Sr-Pb-Li-B 同位体組成分析による海洋プレートが沈み込み変成作用を被る過程の元素挙動の総合研究	辻森 樹 国立研究開発法人 海洋研究開発機構	0
受託研究			
1	S I P（戦略的イノベーション創造プログラム）インフラ維持管理・更新・マネジメント技術／モニタリングシステムの現場実証／地上設置型合成開口レーダおよびアレイ型イメージングレーダを用いたモニタリング	佐藤 源之 国立研究開発法人 新エネルギー・産業 技術総合開発機構	656,842
2	「北極域研究推進プロジェクト 人文・社会科学分野」	高倉 浩樹 国立大学法人 北海道大学	5,550,000
3	設置型合成開口レーダ（GB-SAR）の斜面監視への適用性に関する研究	佐藤 源之 株式会社熊谷組	3,000,000
4	荒砥沢ダム崩落地安全対策モニタリング事業	佐藤 源之 栗原市	0
5			
受託事業			
1	北東アジア地域研究推進事業	高倉 浩樹 外 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構	6,795,000
2			
寄附金			
1	上廣歴史資料学研究部門（寄附講座）	平川 新 （兼務） 公益財団法人 上廣倫理財団	31,500,000
2	小笠原諸島産陸産貝類の保全研究推進に関する寄附金	千葉 聡 一般財団法人 自然環境研究センター	900,000
3	小笠原諸島に侵入した特定外来生物グリーンアノールの防除に関する寄附金	千葉 聡 一般財団法人 自然環境研究センター	600,000
4	一般財団法人東北開発記念財団平成30年度（後期）海外派遣援助	是恒さくら 一般財団法人 東北開発記念財団	290,000

〈補助金間接経費〉

(金額単位：百万円)

区 分		2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度
補助金間接 経 費	件 数	26	27	26	26	29
	金 額 (百万円)	6	6	4	5	6
受入該当 費 目		<ul style="list-style-type: none"> ・基盤研究 A、B、C ・挑戦的萌芽研究 ・若手研究 B ・研究活動スタート支援 ・特別研究員奨励費 	<ul style="list-style-type: none"> ・基盤研究 A、B、C ・挑戦的萌芽研究 ・若手研究 B ・研究活動スタート支援 ・特別研究員奨励費 	<ul style="list-style-type: none"> ・基盤研究 A、B、C ・挑戦的萌芽研究 ・若手研究 B ・研究活動スタート支援 ・特別研究員奨励費 	<ul style="list-style-type: none"> ・基盤研究 A、B、C ・挑戦的萌芽研究 ・若手研究 B ・研究活動スタート支援 ・特別研究員奨励費 	<ul style="list-style-type: none"> ・基盤研究 A、B、C ・若手研究 B ・若手研究 ・研究活動スタート支援 ・特別研究員奨励費

〈2018年度獲得科研費一覧〉

(金額単位：千円)

No.	研究 種目	代表者氏名 研究者番号	区 分	研究 期間	研究課題名(課題番号)	交付額	間接 経費
1	基盤 研究(A)	佐藤 源之 40178778	一 般	2014- 2018	圧縮センシングと最適空間サンプリングによる地雷検知用レーダ・イメージングの効率化	3,600	1,080
2	基盤 研究(B)	岡 洋樹 00223991	一 般	2015- 2018	東北アジア辺境地域多民族共生コミュニティ形成の論理：中露・蒙中辺境に着目して	3,000	900
3	基盤 研究(B)	辻森 樹 00436833	一 般	2018- 2020	プレート境界岩の未読情報総合解析：局所同位体比分析によるプロセスと経年変化の理解	6,600	1,980
4	基盤 研究(B)	千葉 聡 10236812	一 般	2018- 2020	過去はどこまで今を制約するのか：海洋島陸貝群集をモデルとして	5,000	1,500
5	基盤 研究(B)	柳田 賢二 90241562	海 外 学 術 調 査	2016- 2019	オーラルヒストリーによる旧ソ連ロシア語系住民の口頭言語と対ソ・対露認識の研究	3,400	1,020
6	基盤 研究(B)	寺山 恭輔 00284563	海 外 学 術 調 査	2017- 2019	スターリン統治下のソ連極東に関する基礎的研究	1,500	450
7	基盤 研究(B)	千葉 聡 10236812	海 外 学 術 調 査	2017- 2019	脅威が創出する多様性：ロシアとベトナムに見る進化爆発	4,500	1,350
11	基盤 研究(C)	明日香壽川 90291955	一 般	2016- 2018	パリ COP21の結果を踏まえた各国の温室効果ガス削減目標および政策の分析評価	1,100	330

No.	研究 種目	代表者氏名 研究者番号	区分	研究 期間	研究課題名(課題番号)	交付額	間接 経費
12	基盤 研究(C)	友田 昌宏 80721266	一般	2017- 2019	幕末維新期における情報ネットワークと 思想形成—東北諸藩士を素材として—	500	150
13	基盤 研究(C)	高倉 浩樹 00305400	一般	2017- 2019	津波被災地の地域農業・漁業復興にお ける在来知と災害リスク軽減研究	1,500	450
14	基盤 研究(C)	平野 直人 00451831	一般	2017- 2019	海底岩石から直接読み解く沈み込むプ レートの変動履歴	1,000	300
15	基盤 研究(C)	磯部 彰 90143841	一般	2018- 2020	戦国武家の家門形成に果たした漢籍の役 割研究-子部・集部の蒐集を中心に—	1,100	330
16	基盤 研究(C)	栗林 均 30153381	一般	2018- 2020	音声データベースに基づくモンゴル系 諸言語の史的变化の研究	1,200	360
17	基盤 研究(C)	瀬川 昌久 00187832	一般	2018- 2020	現代中国人の歴史意識に関する研究— 族譜編纂活動の分析から	100	30
18	基盤 研究(C)	李 善姫 30546627	一般	2018- 2020	加齢・高齢化する結婚移住女性たちの ケア環境とモビリティに関する研究	1,100	330
19	基盤 研究(C)	石井 敦 30391064	一般	2018- 2020	先見的ガバナンスとしての国際漁業資 源管理：その導入における学習の要因 分析	1,100	330
20	若手 研究(B)	田中 利和 50750626		2016- 2018	アフリカによる労働履物の創造に関す る実践的地域研究：新たな地下足袋文 化の探求	900	270
21	若手 研究(B)	井上 岳彦 60723202		2016- 2019	ロシア帝国内のチベット仏教徒と南・ 東南アジアの民族知識人に関する研究	1,000	300
22	若手 研究	福田 雄 50796307		2016- 2018	災害遺構の比較社会学—東日本大震災 とスマトラ島沖地震を事例として	1,100	330
23	研究活動 スタート支援	内藤 寛子 90801978		2017- 2018	歴史的制度論から見る中国共産党と人 民法院の領導関係の変容	1,000	300
24	研究成果 公開促進費 (データベース)	工藤 純一 40185408		2018- 2018	越境大気汚染衛生画像データベース	700	0
25	特別研究 員奨励費	齊藤 匠		2016- 2018	形態の変化が適応放散に至るまでの経 時的進化機構の解明	600	0
26	特別研究 員奨励費	大石 侑香		2016- 2018	漁撈—牧畜論の構築：シベリア北方少 数民族の生業複合論再考	1,300	390
27	特別研究 員奨励費	井上 岳彦		2016- 2018	ロシア帝国の仏教研究と対アジア政策 の関係について	500	150
28	特別研究 員奨励費	内田 翔太		2017- 2019	生物の侵入によって変化する種間相互 作用の解明	1,000	0
29	特別研究 員奨励費	泉 佑太		2018- 2020	多偏波干渉地上型合成開口レーダを用 いた植生下における高精度地表変動解 析手法の開発	800	0
30	特別研究 員奨励費	辻森 樹 30153381		2016- 2018	超海洋パンサラッサ—古テチス海イン タフェイスのテクトニクス復元	500	0
31	特別研究 員奨励費	高倉 浩樹 00305400		2017- 2018	グローバルな資源利用の動態による ローカルな持続性挑戦への影響：モン ゴルの事例	700	0
研究代表者分 小計						46,400	12,630

※年度途中で転出又は廃止となった課題は、転出又は廃止となった年度の当初に交付決定又は基金
支払を受けた額により計上している。

(金額単位：千円)

No.	研究 種目	分担者氏名 研究者番号	区 分	研究 期間	研究課題名(研究代表者)(課題番号)	交付額	間接 経費
1	基盤 研究(A)	佐藤 源之 40178778	一 般	分担金	複合的物理探査による農業用施設及び 地盤中の流体・物質移動の高速可視化 技術の開発(農業・食品産業技術総合 研究機構・黒田上級研究員)	500	150
2	基盤 研究(A)	平野 直人 00451831	一 般	分担金	海溝近傍での海洋プレート変形に伴う 水・熱の流動過程とその沈み込み帯へ の影響の解明(東京大学・山野教授)	3,650	1,095
3	基盤 研究(B)	石井 敦 30391064	一 般	分担金	グローバル化次代における海洋生物資 源法の再構築-国際・国内法政策の連 関の視点から(北海道大学・児矢野教 授)	150	45
4	基盤 研究(B)	荒武賢一朗 90581140	一 般	分担金	比較史からみる生活の存立構造1600- 2000:家政・市場・財政(東京大学・ 谷本教授)	350	105
5	基盤 研究(B)	井上 岳彦 60723202	海 外 学 術 調 査	分担金	牧畜社会におけるエスニシティとエコ ロジーの相関(熊本大学・シン ジル ト教授)	500	150
6	基盤 研究(B)	石井 敦 30391064	特 設 分 野	分担金	グローバル化の理念的・規範的評価に よるグローバル・イシューの解決策(早 稲田大学・太田教授)	500	150
研究分担者分 小計						5,650	1,695
合 計						52,050	14,325

研究活動

(1) プロジェクト研究ユニット

東北アジア研究センターは、平成19年度の組織改編以降新たに基礎研究部門とプロジェクト研究部門を設置した。プロジェクト研究部門は、センター専任・兼務教員によって構成されるプロジェクト・ベースの組織であり、これにより大規模研究プロジェクトを立ち上げるとともに、外部資金獲得の受け皿とすることを目的としたものである。

本年度は、以下の6研究ユニットが活動した。

(A) 2018年度センター・プロジェクト部門研究ユニット一覧（代表者）

- 東北アジアにおける大気環境管理スキームの構築研究ユニット（明日香 壽川）
- 東北アジアにおける地質連続性と「石」文化共通性に関する学際研究ユニット（辻森 樹）
- 東北アジア地域の環境・資源に関する研究連携ユニット（岡 洋樹）
- 東アジアにおける社会変化と文化的持続に関する人類学的研究ユニット（瀬川 昌久）
- 災害人文学研究ユニット（高倉 浩樹）
- 最新科学による遺跡調査ユニット（佐藤 源之）
- 20世紀ユーラシア史研究ユニット（上野 稔弘）

東北アジア研究センター・プロジェクトユニット成果報告書 2018

研究題目	東北アジアにおける大気環境管理スキームの構築研究ユニット			
研究期間	2014（平成26）年度 ～ 2019（平成31）年度（5年間）			
研究組織 （センター教員・兼務教員・教員研究支援者など）	氏 名	所属・職名		
	明日香壽川	東北大学・教授		
	石井 敦	東北大学・准教授		
	宮後 裕光	東北大学・教育研究支援者		
	金 丹	東北大学・助教		
外部評価者	氏 名	所属・職名		
	大原 利廣	国立環境研究所		
	鈴木 克典	金沢大学		
	増井 利彦	国立環境研究所		
	外部評価の実施／中間・最終 [年月日] 参加者：ユニット組織 [0] 名、モニター [0] 名			
研究経費	センター長裁量経費	300,000円		
	その他（共同研究に記載したもの以外）	円		
	合 計	300,000円		
ユニットが主催した共同研究	中国における新しい石炭政策が大気汚染および温暖化を緩和する可能性の把握			
ユニットが 研究集会・企画 （共同研究による主催を除く）	研究会：1回	国内会議： 回	国際会議：0回	その他： 回
	組織外参加者数 （都合）：10人 （推定）	組織外参加者数 （都合）：	組織外参加者数 （都合）：	組織外参加者数 （都合）：
ユニット組織設置目的と本年度の研究事業の成果ならびに重要性の概要 （600-800字の間で専門家以外にも理解できるようまとめてください。 Webなどで公開を予定しています。）	<p>周知のように中国はPM 2.5（微小粒子状物質）などによる大気汚染に悩まされており、風下にあたる日本への越境汚染も懸念されている。一方、中国でも日本でも温暖化対策としての温室効果ガス排出削減は喫緊の課題である。このような状況のもと、本研究は、東アジアにおける統合的な大気環境管理に向けた汚染物質排出削減戦略の合意に資する研究を、コベネフィット・アプローチ（温室効果を持つ大気汚染物質を削減することにより、温暖化と大気汚染の対策を同時並行で行うアプローチ）や制度構築における政府や科学者の役割などに着目して行う。</p> <p>本年度は、昨年度に引き続き大気汚染による被害や大気汚染対策に伴う温室効果ガス排出変化を含めた政策評価を進めるためのデータの収集、インタビュー調査、解析などを行った。具体的には、1) 中国における石炭消費ピークと温室効果ガス排出ピークとの関係、2) 越境酸性雨問題や温暖化問題における環境外交や国際レジーム構築における科学、科学者、そして行政の役割、などに関する研究を行い、日本国内と国外の両方で研究ネットワークを構築した。3月末には、中国・上海などで現地調査を行った。</p>			

<p>本年度のユニット運営を通じた実現した東北アジア研究センター組織への貢献についてアピール</p>	<p>中国におけるPM 2.5(微小粒子状物質)などによる大気汚染問題は、改善は見られるものの、一部の地域では依然深刻な問題となっている。本年度の石炭消費量も若干上昇し、排出量取引制度などの制度設計も省庁改変などもあってスピードは落ちている。このような状況は日本には十分には伝わっていない。本研究は、このように現在の地球環境問題およびエネルギー問題として最も注目される中国の大気汚染対策および温暖化政策に関して、最新の情報を日本の一般市民や政策担当者に伝える役割を担っている。同時に、温暖化問題および大気汚染問題に関する環境外交のあり方や日本の研究者の政策決定プロセスへの関わり方なども、歴史的な経緯の分析も踏まえて研究している。なお、今年、明日香が関わる人間文化研究機構北東アジア地域研究事業「北東アジアにおける地域構造の変容：越境から考察する共生への道」東北大学東北アジア研究センター「東北アジア地域の環境・資源に関する研究連携ユニット」および中国環境問題研究会の共催による研究会を行い、実質的に本共同研究プロジェクトも協力組織として活動を行った。</p>			
<p>共同研究での活動とは別にユニットとして行った研究事業企画について</p>				
<p>学際性の有無</p>	<p>[有]</p>	<p>参加した専門分野数：3</p>	<p>分野名称</p>	<p>大気汚染科学、環境エネルギー、国際政治</p>
<p>文理連携性の有無</p>	<p>[有]</p>	<p>特筆事項：温暖化や越境汚染などの地球レベルの大気科学分野と国際協力という国際政治分野との融合を目指している</p>		
<p>社会還元性の有無</p>	<p>[有]</p>	<p>[内容] 日本の環境分野における国際貢献に対する具体的な提言を行う</p>		
<p>国際連携</p>	<p>連携機関数：1</p>	<p>連携機関名：</p>	<p>特記事項：清華大学</p>	
<p>国内連携</p>	<p>連携機関数：1</p>	<p>連携機関名：</p>	<p>特記事項：地球環境研究戦略機関</p>	
<p>学内連携</p>	<p>連携機関数：</p>	<p>連携機関名：</p>	<p>特記事項：</p>	
<p>教育上の効果</p>	<p>参加学生・ポスドクの数：3</p>		<p>参加学生・ポスドクの所属：明日香研究室</p>	
<p>第三者による評価・受賞・報道など</p>	<p>温暖化問題および中国の大気汚染問題に関しては、代表者の明日香のコメントなどが新聞などの様々なメディアで取り上げられている。</p>			
<p>ユニット運営計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題</p>	<p>本年度は、現地調査などによるデータ収集を継続した。また、環境分野における国際協力の枠組み構築に関する歴史・政治的背景を明らかにするために内外の関係者へのインタビューを行った。特に、越境酸性雨に関する研究者である原宏農工大名誉教授には、昨年度に続いて、本年度も、日本政府の環境外交と研究者の役割に関して歴史的経緯を議論すると同時に、今後の日本の研究者の関わり方などについて詳細なインタビューを行った。さらに、中国の排出量取引制度の制度設計の詳細などを現地調査によって明らかにした。今後は、日本や中国における最新の政策(カーボンプライシングなど)およびそのための制度設計を反映した議論を行うと同時に、今後の環境分野での国際協力の枠組み構築や科学者の役割などに関して具体的な提言を行っていきたい。</p>			
<p>最終年度</p>	<p>該当 [有 無]</p>			

東北アジア研究センター・プロジェクトユニット成果報告書 2018

研究題目	東北アジアにおける地質連続性と「石」文化共通性に関する学際研究ユニット			
研究期間	2016（平成28）年度 ～ 2021（平成33）年度（5年間）			
研究組織 （センター教員・兼務教員・教員研究支援者など）	氏 名	所属・職名		
	辻森 樹	東北アジア研究センター		
	平野 直人	東北アジア研究センター		
	阿子島 香	文学研究科歴史科学専攻		
	高倉 浩樹	東北アジア研究センター		
	岡 洋樹	東北アジア研究センター		
外部評価者	氏 名	所属・職名		
	小山内康人	九州大学・教授		
	飯塚 義之	台湾中央研究院・研究技師		
	宮島 宏	フォッサマグナミュージアム・元館長		
外部評価の実施／中間・最終〔年月日〕 参加者：ユニット組織〔 〕名、モニター〔 〕名				
研究経費	センター長裁量経費		250,000円	
	その他（共同研究に記載したもの以外）		円	
	合 計		250,000円	
ユニットが主催した共同研究	<ul style="list-style-type: none"> ・東北アジアの地質的多様性に対する「石」文化の技術的適応 ・地質遺産の持続可能な保全のための学際研究：広域変成地域の伝承的信仰 ・根室半島～歯舞群島・色丹島の前弧マグマがもたらす地域環境システム 			
ユニットが研究集会・企画（共同研究による主催を除く）	研究会：1回	国内会議：0回	国際会議：0回	その他：2回
	組織外参加者数（都合）：20	組織外参加者数（都合）：	組織外参加者数（都合）：	組織外参加者数（都合）：80
ユニット組織設置目的と本年度の研究事業の成果ならびに重要性の概要 （600-800字の間で専門家以外にも理解できるようにまとめてください。 Webなどで公開を予定しています。）	<p>本研究ユニットは、アジア最古の現生人類から現代人に続く約8万年間に我々人類が特別な価値を見出してきた「石」（岩石や鉱物）についての個性を地質学・岩石学的に総括し、先史時代の「石」地域物流からグローバル化による近世・近代の広域物流までの人類の手による「石」の移動を総理解する。さらに文理連携・トランスディシプリンによるクロスオーバー型アウトリーチ活動のモデルの新提案を目指す。</p> <p>人類は「石」を道具として使う事を覚え、それを加工することを発明した。やがて特定の種類の「石」に特別な価値を見出し、それは現代社会まで引き継がれている。東アフリカの大地溝帯から現生人類が拡散し、その移動と進化の過程で多様な民族への分化が起こり、アジアにおいても異なった集団毎に固有の「石」文化が展開する。人類史において「石」文化は地質と密接に関係する。例えば、宝石としての価値がある「石」は 稀少性を兼ね揃えており、それらの形成場と形成条件には地質学的な因果関係がある。</p>			

	<p>本年度は本ユニットを基軸とした東北大学知のフォーラムに採択された『Continental Amalgamation and Stabilization of Northeast Asia: Stories before the Stone Age』のうちの4つの国際ワークショップの1つとして、『Continental Amalgamation and Stabilization of Northeast Asia: Stories before the Stone Age』を開催し、15名の研究者を8カ国から招聘した。国際共同大学院の単位認定があるなど教育的な効果があった。関連イベントとして開催した市民向け講演会は200人の参加者で満員となった。</p> <p>また、本年度は本ユニットから共同研究が3つ派生した。共同研究『東北アジアの地質的多様性に対する「石」文化の技術的適応』（洪ほか）は、ユニットに関連した研究活動として、考古学的・人文科学的な海外フィールドワークを実施した他、『先史時代の「石」文化への地質学・考古学的分析―「石」に対する破壊・非破壊分析―』のテーマで東北大学東北アジア研究センター公募型共同研究ワークショップを開催した。</p>			
本年度のユニット運営を通じた実現した東北アジア研究センター組織への貢献についてアピール	<p>本ユニットの研究活動が実戦・推進する文理連携・トランスディスプリンのアプローチに東北大学知のフォーラムが実施され、本ユニットが核となった、『Continental Amalgamation and Stabilization of Northeast Asia: Stories before the Stone Age』では、超学際領域を含む4つセッションで著名な研究者の講演と議論を行った。関連イベントとして開催した市民向け講演会『地球生命の起源と進化：ヒトの誕生と現在から近未来の課題まで』（講師：丸山茂徳）は200人の参加者で満員となった。</p> <p>文理連携及び地域理解を理念とする東北アジア研究センターにおいて本ユニットは超学際的な総合研究体制構築を促進させる機能を持ち、センター組織の特色を発展させるものである。</p>			
共同研究での活動とは別にユニットとして行った研究事業企画について				
学際性の有無	[有]	参加した専門分野数：4	分野名称	地質学、岩石学、鉱物学、考古学
文理連携性の有無	[有]	特記事項：本ユニットから文理連携の共同研究が3つ誕生した		
社会還元性の有無	[有]	特記事項：ユニット研究に関連した一般向けの講演を実施した		
国際連携	連携機関数：2	連携機関名：ソボレフ地質学鉱物学研究所、台湾中央科学院	特記事項：	
国内連携	連携機関数：5	連携機関名：地球年代学ネットワーク、北海道大学、など	特記事項：	
学内連携	連携機関数：2	連携機関名：理学研究科、文学研究科	特記事項：	
教育上の効果	参加学生・ポスドクの数：30	参加学生・ポスドクの所属：東北大学、千葉大学		
第三者による評価・受賞・報道など	講演会に関する新聞報道			
ユニット運営計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題	本ユニットの運営により、文理連携による超学際研究のネットワークが構築され、国内外に認知されてきた。次年度すぐに中間報告を行うとともに、引き続き新しい共同研究を主催し、成果を残すことができる文理連携の発展を試みる。			
最終年度	該当 [無]			

東北アジア研究センター・プロジェクトユニット成果報告書 2018

研究題目	日本語：東北アジア地域の環境・資源に関する研究連携ユニット 英語：Unit for the collaborative study on the environment and resources of Northeast Asia	
研究期間	2016（平成28）年度 ～ 2021（平成33）年度（6年間）	
研究組織 (センター教員・兼務教員・教育研究支援者、RA等〔退職した教育研究支援者等は雇用期間を記して記録すること])	氏名	所属・職名
	岡 洋樹	東北アジア研究センター・モンゴル中央アジア分野・教授
	高倉 浩樹	同上・ロシアシベリア研究分野・教授、センター長
	千葉 聡	同上・地域生態系研究分野・教授
	明日香壽川	同上・中国研究分野・教授
	石井 敦	同上・中国研究分野・准教授
	辻森 樹	同上・地球化学研究分野・教授
	平野 直人	同上・地球化学研究分野・准教授
	金 丹	同上・教育研究支援者
外部評価者	氏名	所属・職名
	尾崎 孝宏	鹿児島大学法文学部・教授
	長谷部勇一	横浜国立大学・教授・学長
	松野 周治	立命館大学・BKC 社系研究機構長
センター支援	センター長裁量経費	450,000円
	教育研究支援者 (RA)	有
	研究スペース	有
ユニット組織設置目的と本年度の研究事業の成果の概要 (600-800字の間で専門家以外にも理解できるようにまとめてください。Webなどで公開を予定しています。)	<p>本ユニットは、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究「北東アジア地域研究推進事業」(資料2.1.1.)を推進するために東北大学東北アジア研究センターに設置するものである(資料1.1.)。同事業では、拠点分担テーマである「環境・資源問題に関する社会文化と政策の総合化研究」を推進する母体として、機構総合地球環境学研究所と連携した活動するとともに、同事業の中心拠点である国立民族学博物館及び参画各拠点と連携して事業推進にあたる。そのため、以下の活動を行う。</p> <p>①「環境・資源問題に関する社会文化と政策の総合化研究」をテーマとする国際シンポジウムの企画・開催。</p> <p>②東北大学拠点を構成する環境政策グループ及び環境人類学グループでそれぞれ研究集会を開催する。</p> <p>③研究代表者が同事業推進会議に出席し、事業全体の運営及び拠点間の連絡調整を行う。</p>	

	<p>④本拠点の活動に関わる情報をホームページ等を通じて発信する。 ⑤その他、科研費基盤研究 (B) による共同研究の実施、拠点の運営及び事業推進に必要な活動を行う。</p> <p>【本年度の事業成果】 今年度も引き続き人間文化研究機構 (NIHU) 基幹プロジェクト「北東アジア地域研究推進事業」東北大学拠点における同事業 (分担テーマ「環境・資源問題に関する社会文化と政策の総合化研究」) の運用を担うとともに、関連研究プロジェクトの実施を行った。本事業は、共同研究班「北東アジアにおける地域資源管理関す研究」(高倉浩樹教授代表:環境人類学グループ)と共同研究班「北東アジアにおける大気環境管理関す研究」(明日香寿川教授代表:環境政策研究グループ)の二つの共同研究班によって構成される。本ユニットは、NIHUプロジェクトの実施を通じて、東北アジア地域研究の拠点間の研究協力ネットワーク形成を目指している。</p> <p>また本ユニットは、科研費基盤研究 (B) による共同研究「東北アジア辺境地域多民族共生コミュニティ形成の論理に関する研究」(岡洋樹教授代表)を実施し、NIHU 事業と連携したシンポジウム「北東アジアの鳴動」を開催している。</p> <p>NIHU 事業では、本年度は事業3年目に予定されていた全拠点による合同シンポジウムを実施したほか、国際シンポジウム1件を単独開催、4件を他の拠点と共催し、5回の共催講演会(研究会)を開催した。またモンゴルにおいて、日・蒙・中・露の研究機関と国際シンポジウム「History of Eurasian Nomads: state, society and culture」を共同開催した。</p> <p>また本年度は、関連した活動として、東北大学総長裁量経費による「知のフォーラム」の事業として、「Geologic Stabilization and Human Adaptations in Northeast Asia」と題して4件の国際ワークショップを開催した。 (http://www.tfc.tohoku.ac.jp/program/2152.html)</p> <p>本事業を含む東北アジア地域研究が、東北大学における「社会にインパクトのある研究」として採択され、全学的に発信されている。 (http://impact.bureau.tohoku.ac.jp/doc/D-2_gd171201.pdf)</p> <p>また広報・発信の強化のために、英文ホームページの作成作業を行った。</p>
<p>活動報告(研究集会や講演会などのプログラムを記してください。共同研究報告書に記載済みは除く)</p>	<p>1. NIHU 拠点合同シンポジウム 平成30年9月22-23日、国立民族学博物館にて人間文化研究機構北東アジア地域研究推進事業の合同シンポジウム「北東アジアにおける地域構造の越境から考察する共生への道」を開催した。</p> <p>2. 国際シンポジウム (1) 国際シンポジウム「History of Eurasian Nomads: state, society and culture」の開催。2018年9月6～7日、(於:ウランバートル、モンゴル科学アカデミー) (2) 国際シンポジウム「動物資源をめぐる文化のデザイン」2018年11月23日、(於:東北大学)(環境人類学グループ) (3) 国際シンポジウム「Roles of Non-state Actors in Transboundary Network」の開催(環境政策研究グループ)。平成30年12月20日、(於:アジア経済研究所) (4) シンポジウム「北東アジアの鳴動:朝鮮半島, 中露国境地域, 蒙中露辺境」を開催した。平成31年1月26-27日(於:富山大学)富山大学、北海道大学、東北大学各拠点と北東アジア学会の共催。 (5) 東北大学知のフォーラム「Geologic Stabilization and Human Adaptations in Northeast Asia」における国際ワークショップの開催(於:東北大学)主催部局:東北アジア研究センター、協力部局:文学研究科 Workshop 1: Natural Disaster and Religion/Mythology (June 5, 2018) Workshop 2: Variabilities in Prehistoric Human Cultural Adaptations in Northeast Asia: The Initial Upper Paleolithic, the Last Glacial Maximum, and the Post-Pleistocene Adaptations (August 4, 2018 – August 5, 2018) Workshop 3: Continental Amalgamation and Stabilization of Northeast Asia: Stories before the Stone Age (February 21, 2019 – February 22, 2019)</p>

	<p>Workshop 4: Northern Modes of Foraging and Domestication as an Interaction among Humans, Animals, and Geography (February 21, 2019 – February 22, 2019)</p> <p>3. 講演会(研究会)の開催 2018年5月17日(木)第15回共催講演会(於:東京、日本橋ライフサイエンスビル)(環境政策研究グループ) 「複雑化する東アジアの持続可能性課題への対応——エネルギー転換」講演者:磯崎典世(学習院大学教授)、崔順姫(中国浙江大学准教授)、明日香寿川(東北大学教授)</p> <p>2018年7月2日(月)第16回共催講演会(於:モンゴル科学アカデミー地理生態学研究所)(環境人類学グループ) 「Environment, Society and Sustainability」 Speakers • Hiroki Takakura, Director of the Center for Northeast Asian Studies (CNEAS), Tohoku University • Altanbagana Myagmarsuren, Head of Division for Social and Economic Geography, IGG • Dashtseren Avirmed, Head of Division for Permafrost Studies, IGG • Byambajav Dalaibuyan, JSPS Postdoctoral Researcher, CNEAS</p> <p>2018年7月13日(金)第17回共催講演会(於:アジア経済研究所)(環境政策研究グループ) Part 1. "Development of TEMM", by Dr. Xianbin Liu (IGES); "Results of TEMM 20 and future tasks", by JangMin Chu (Korea Environment Institute) Part 2. "International cooperation for tackling air pollution in East Asia: Overcoming fragmentation of the epistemic communities", by Dr. Masaru Yarime (City University of Hong Kong/University College London/University of Tokyo)</p> <p>2018年8月6日(月)第18回共催講演会(於:東京、日本橋ライフサイエンスビル)(環境政策研究グループ) テーマ:「河流のあるところに守り人を」、劉盛(環境NGO・グリーン湖南理事長)</p> <p>2018年9月21日(金)第19回共催講演会(於:東京、日本橋ライフサイエンスビル)(環境政策研究グループ) 顧阿倫(清華大学・教授)“Carbon market mechanism and economic impacts” 邹毅(北京環境取引所・研究発展部副主任)“Mechanism Design and Market Performance of Beijing ETS” コメンテーター:・林佳乔(磐之石環境とエネルギーセンター副主任)、明日香壽川(東北大学教授)</p>
<p>本年度のユニット運営を通じた実現した東北アジア研究センター組織への貢献についてアピール</p>	<p>本年度は、NIHU「北東アジア地域研究推進事業」が3年目に入り、シンポジウム等の共催などによる拠点間連携の実質化に努力した。この結果、昨年に引き続き、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター拠点や富山大学極東地域研究センター拠点とのシンポジウム共催という成果を得た。また9月22～23日に国立民族学博物館拠点で開催された合同シンポジウムでは一セッションを担当するとともに、全体の活動の様子を共有した。今年度も、NIHU事業による拠点間連携は着実に進展したと言える。モンゴルでは日・蒙・中・露の研究機関と国際シンポジウムを開催した。</p>

	<p>また本年度は本センターが採択された知のフォーラム「Geologic Stabilization and Human Adaptations in Northeast Asia」の実施年にあたり、文学研究科との協力により、4件の国際ワークショップを開催した。これにより、学内での連携に実績を上げた。</p> <p>またモンゴルでもモンゴル科学アカデミー歴史考古学研究所、中国内蒙古師範大学旅游学院、ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学・北方少数民族研究所と国際シンポジウムを開催することができ、国際的な研究連携も進展させた。</p> <p>さらに東北大学「社会にインパクトのある研究」で異文化理解に関わる事業の一つとして採択され、全学による広報の対象となった。</p> <p>総じて、本ユニットの活動を通じて、東北アジア研究センターの活動が全国的な広がりを見せるとともに、学内的な認知も高まったと考えられる。</p>		
外部資金 (名称・金額)	NIHU「北東アジア地域研究推進事業経費」東北大学 拠点配分分4,763,000円 総長裁量経費12,000,000円(知のフォーラム事業) 科学研究費補助金基盤研究(B):3,000,000円	総額 33,526,600円	
ユニットが 運営する共同研究	<p>「北東アジアにおける地域資源管理に関する研究」(環境人類学グループ、高倉浩樹教授代表)</p> <p>「北東アジアにおける大気環境管理に関する研究」(環境政策研究グループ、明日香寿川教授代表)</p> <p>「北東アジア辺境地域多民族共生コミュニティ形成の論理に関する研究」(2015～2018年度 岡洋樹教授代表)</p>		
ユニット主催の研究集会・ 企画(共同研究報告書に 記載していないもの)	研究会・国内会議・講演会など： シンポジウム1回 共催講演会(国内)3回	国際会議： 国際シンポジウム5回 共催講演会(国外)2回	
	研究組織外参加者(都合):133人		
学際性の有無	[有]	参加専門分野数:10	分野名称 文化人類学、社会人類学、 環境研究、政治学、歴史学、 経済学、地質学、生態学、 宗教学、考古学など
文理連携性の有無	[有]	特記事項:総長裁量経費による「知のフォーラム」事業の実施により、社会人類学、考古学、環境研究、地質学、生態学等の文理の連携によるワークショップを開催した。また文系内部でも、歴史学、経済学、政治学等の分野での学際的構成によるシンポジウム開催に成果を上げた。	
社会還元性の有無	[有]	内容:市民を対象として実施している東北アジア研究センター公開講演会を実施した。	
国際連携	連携機関数:4	連携機関名:モンゴル科学アカデミー歴史考古学研究所、同地理生態学研究所、中国中央民族大学、中国社会科学院人類学・民族学研究所、中国内蒙古師範大学、ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学・北方民族問題研究所	
国内連携	連携機関数:10	連携機関名:NIHU 拠点(国立民族学博物館、東北大学東北アジア研究センター、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、富山大学極東地域研究センター、島根県立大学北東アジア地域研究センター、早稲田大学現代中国研究所、国立歴史民俗博物館、国際日本文化研究センター、地球環境学研究所)、アジア経済研究所	
学内連携	連携機関数:2	連携機関名:東北大学知の創出センター、大学院文学研究科	

学内連携	連携機関数：2	連携機関名：東北大学知の創出センター、大学院文学研究科
教育上の効果	参加学生・ポストクの数：	参加学生・ポストクの所属：東北アジア研究センター、大学院環境科学研究科、文学研究科
第三者による評価・受賞・報道など	今年度は、ユニットの中間評価の年にあたり、三人の外部評価委員に評価を依頼した。	
ユニット運営計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題	<p>本年度は、NIHU 事業の三年目にあたり、ユニットとして中間評価を行う年に当たっている。</p> <p>これまでの NIHU 事業の運営により、参加拠点、とくに大学拠点との連携に着実な実績を積んでおり、拠点間の信頼関係の形成が深まっている。本年度は、NIHU 事業全拠点による合同シンポジウムでセッションを組んだ外、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター拠点、富山大学極東研究センター拠点との合同シンポジウムを開催した。NIHU 事業は着実に進展しており、残る3年間の活動をさらに充実させていきたい。</p> <p>また今年度は、総長裁量経費による「知のフォーラム」事業として、学内他部局との協力による国際ワークショップを4件実施した。これにより、東北アジア地域研究をめぐる学内の連携に実績を積んだ。これらを踏まえて、全学で推進する「社会にインパクトのある研究」の一つに採択され、全学的支援を得ることができた。</p> <p>本プロジェクト研究ユニットでは科学研究費補助金基盤研究(B)による共同研究「東北アジア辺境地域多民族共生コミュニティ形成の論理に関する研究」を実施しているが、今年度は NIHU 事業とも連携して、シンポジウム「北東アジアの鳴動：朝鮮半島、中露国境地域、蒙中露辺境」を北海道大学拠点、富山大学拠点と共催した。</p> <p>またモンゴル科学アカデミー歴史研究所、中国内蒙古師範大学旅游学院、ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学・北方民族問題研究所との共催で国際シンポジウムを開催した。このシンポジウムは2003年以来ほぼ隔年で実施してきたが、今回は本プロジェクトの一環として実施した。</p> <p>また NIHU 事業の一環として、中国問題研究会や中国中央民族大学、モンゴル科学アカデミー地理生態学研究所等との共催で講演会を実施し、成果を上げた。</p> <p>総じて今年度は、昨年度に引き続き NIHU 事業による大学間の研究連携を推進するとともに、学内での部局間協力を進め、全学的な認知を高めたことが成果であると言える。</p> <p>今後は、NIHU 事業後半の活動に注力するとともに、形成された学内連携をさらに強固なものとしていくことが望まれる。</p>	
最終年度	該当 [無]	

東北アジア研究センター・プロジェクトユニット成果報告書 2018

研究題目	日本語：東アジアにおける社会変化と文化的持続に関する人類学的研究ユニット 英語：Unit for Anthropological Studies on the Social Change and the Cultural Persistence in East Asia	
研究期間	2017 (平成29) 年度 ～ 2020 (平成32) 年度 (4年間)	
研究組織 (センター教員・兼務教員・教育研究支援者、RA等 [退職した教育研究支援者等は雇用期間を記して記録すること])	氏名	所属・職名
	瀬川 昌久	東北アジア研究センター・中国研究分野・教授
	川口 幸大	東北アジア研究センター・中国分野・兼務教員 (文学研究科・准教授)
	李 仁子	東北アジア研究センター・中国分野・兼務教員 (教育学研究科・准教授)
	李 善姫	東北アジア研究センター・プロジェクト研究部門・ 教育研究支援者
外部評価者	氏名	所属・職名
	西澤 治彦	武蔵大学・教授
	三尾 裕子	慶應義塾大学・教授
	曾士才	法政大学・教授
センター支援	センター長裁量経費	0円
	教育研究支援者 (RA)	有
	研究スペース	有
ユニット組織設置目的と本年度の研究事業の成果の概要 (600-800字の間で専門家以外にも理解できるようにまとめてください。 Webなどで公開を予定しています。)	<p>近年の中国、日本、韓国等東アジア諸社会においては、グローバル化、都市化、少子高齢化等の進展にともない、急激な社会変化が体験されつつある一方において、旧来からの社会慣行や文化的価値観の持続や再生現象もまた根強く観察される。それらには、歴史的表象をめぐる観光開発と保存の取り組みのように意図的で可視性の高いものから、出稼ぎ移住者家族内部に生じる家族倫理上の軋轢などのように可視化されにくいものもある。そうした「文化の持続」にかかわる諸現象は、行政や企業などの主体による伝統文化の客体化や商品化といった操作的・功利的レベルと、個人や地域社会によるアイデンティティ確立への希求といったより本源的レベルの、2層において同時に進行しているものと考えられる。本ユニットは、こうした2つの層の事象にそれぞれ目配りしつつ、家族・親族関係、移住、観光など多様な側面から社会変化と文化的持続の問題に取り組むいくつかの共同研究プロジェクトを遂行し、摩擦、衝突、妥協、変形、再定義等の過程を含む両者間のダイナミズムについて総合的に明らかにして行くことを目指す。本年度は、昨年度立ち上げた瀬川、川口がそれぞれ主催する共同研究「族譜編纂活動における現代中国人の歴史意識の研究」、「東アジアからの移民と文化的資源」の運営を支援するとともに、本ユニットのHPを作成した。</p>	
活動報告(研究集会や講演会などのプログラムを記してください。共同研究報告書に記載済みは除く)	<p>本ユニットは、ユニット独自の研究集会・講演会などを企画するものではない。全て、本ユニットの支援・運営を行っている共同研究を通じて実施する。</p>	

本年度のユニット運営を通じた実現した東北アジア研究センター組織への貢献についてアピール	<p>本年度は昨年に引き続き、支援下にある共同研究企画の運営に注力した。その結果、瀬川主催の共同研究「族譜編纂活動における現代中国人の歴史意識の研究」については、順調に資料調査と分析を積み重ね、2本目の学術的成果である学術論文の投稿までこぎ着けた。また、川口主催の共同研究「移動と流行：移民がもたらしたもの／持ち帰ったもの」に関しては、2回目の研究集会を開催し、移動者とホスト社会の間に服飾、食品、ギャンブル、信仰などの流行において双方向的な関係があることを確認するなど、今後の展開に向けた基礎的議論が実行された。これらの共同研究実施にあたっては、その研究連絡や研究のための事務手続き等を、本ユニット付きの教育研究支援者である李が全面的な支援を行った。これらにより、本センターの重点的な研究領域である「移民・物流・文化交流の動態」ならびに「紛争と共生をめぐる歴史と政治」に関して、新たな研究の突破口となる共同研究の実施を実現することができた。</p>			
外部資金 (名称・金額)		総額	0円	
ユニットが運営する共同研究	「族譜編纂活動における現代中国人の歴史意識の研究」(代表者・瀬川) 「移動と流行：移民がもたらしたもの／持ち帰ったもの」(代表者・川口)			
ユニット主催の研究集会・企画(共同研究報告書に記載していないもの)	研究会・国内会議・講演会など：0回	国際会議：0回		
	研究組織外参加者(都合)：0人	研究組織外参加者(都合)：0人		
学際性の有無	[無]	参加専門分野数：	分野名称	
文理連携性の有無	[無]	特記事項：		
社会還元性の有無	[無]	内容：		
国際連携	連携機関数：0	連携機関名：		
国内連携	連携機関数：0	連携機関名：		
学内連携	連携機関数：1	連携機関名：文学研究科		
教育上の効果	参加学生・ポスドクの数：0	参加学生・ポスドクの所属：		
第三者による評価・受賞・報道など	なし			
ユニット運営計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題	支援下にある共同研究企画の運営に注力した。次年度以降も、共同研究の組織/運営へのサポートを中心に活動する。また、本年度中に本ユニットの活動内容を紹介するHPを作成し、公開中である。			
最終年度	該当 [無]			

東北アジア研究センター・プロジェクトユニット成果報告書 2018

研究題目	日本語：災害人文学研究ユニット 英語：Disaster Humanities Unit	
研究期間	2017（平成29）年度 ～ 2022（平成35）年度（6年間）	
研究組織 （センター教員・兼務教員・教育研究支援者、RA等〔退職した教育研究支援者等は雇用期間を記して記録すること〕）	氏名	所属・職名
	高倉 浩樹	ロシア・シベリア研究分野・教授
	荒武賢一朗	上廣歴史資料学研究部門・准教授
	デレーニアリーン	日本・朝鮮半島 研究分野・准教授
	福田 雄	災害人文学ユニット・助教
	是恒さくら	災害人文学ユニット・学術研究員
	木村 敏明	文学研究科・教授 兼務教員
	Boret Sebastien	災害科学国際研究所・准教授 兼務教員
	小谷 竜介	東北歴史博物館学芸員・客員准教授
外部評価者	氏名	所属・職名
	岩崎奈緒子	京都大学総合博物館・館長・教授
	林 勲男	国立民族学博物館・教授
	黒崎 浩行	國學院大學・教授
センター支援	センター長裁量経費	0円
	学術研究員	1名
	研究スペース	有
ユニット組織設置目的と本年度の研究事業の成果の概要 （600-800字の間で専門家以外にも理解できるようにまとめてください。 Webなどで公開を予定しています。）	<p>本ユニットは、東日本大震災以降おこなわれてきた文化人類学・宗教学・歴史学による防災・災害復興に関わる実践的研究の成果を踏まえ、新たなる研究領域の開発をふまえて、さらなる発展と総合化を行うことを目的とする。地域博物館や文化財研究機関などとも連携し、災害に関わる文化人類学・宗教学・歴史学などの共同研究を運営するとともに、それらを総合化する研究実践と理論開発を行いたい。特に文化財のデジタル資料化に関わる方法論や映像資料の活用化を積極的に検討する。これらを通して、災害人文学という領域を立ち上げるとともに、その牽引的組織・拠点組織となることを目指す。</p> <p>このユニットは、東北大学災害科学研究拠点及び人間文化研究機構歴史文化資料保全ネットワーク事業の活動組織として設置される。センターの事業である2014-2016年度実施の「災害と地域文化遺産に関わる応用人文学研究ユニット」（代表：高倉浩樹）を部分的には継承するものであり、その目的をより拡大・発展させることを目的としている。</p> <p>本年度の成果は、以下の2点にまとめられる。第一は、新たな教員、学術研究員を加え、運営体制を強化した点にある。今年度より加わったデレーニ、福田、是恒は、それぞれ分野は異なるものの、いずれも国際的な議論への参加および研究成果の発信という点において貢献を果たした。第二は、様々な学術領域にまたがる研究実践を行ってきた点である。研究会では、環境科学や農学の専門家を招聘して「人文学」を超えた射程のなかで議論しただけでなく、ドキュメンタリー映像作家や市民にも開かれたディスカッションを行い、学術成果をより公共性のあるものとして展開してきた。来年度に向けて、これらの成果を様々な媒体を通じて公開していく素地が固まったといえる。</p>	

<p>活動報告（研究集会や講演会などのプログラムを記してください。共同研究報告書に記載済みは除く）</p>	<p>研究会</p> <ul style="list-style-type: none"> 第1回災害人文学研究会。Daniel P. Aldrich (Northeastern University) を招き、東日本大震災被災地のレジリエンスについてソーシャルキャピタルの観点から議論。 第2回災害人文学研究会。「災害被災者とは誰かー阪神地域の事例からリスク／ヴァルネラビリティを問い直す」と題する稲津秀樹氏（鳥取大学）による講演。 第3回災害人文学研究会。国指定重要無形民俗文化財「黒森神楽」についての映画上映および、映画制作者と小谷竜介氏（東北大学／東北歴史博物館）による意見交換。 第4回災害人文学研究会。「スマトラ島沖地震の記念行為／遺構にみられるアチュの『敬虔』の文脈について」と題し3名の研究者が報告、コメンテーターに西芳実氏（京都大学）を招き議論。 第5回災害人文学研究会。福島県で被災した牛に関わる畜産農家についての映画上映および、監督の松原保氏、小倉振一郎氏（東北大学）による意見交換。 第6回災害人文学研究会。岩手県大槌町の防潮堤建設案反対活動についての映画上映および、監督の小西晴子氏、坂口奈央氏（東北大学）による意見交換。 第7回災害人文学研究会。宮城県・南三陸町の災害ラジオ局についての映画上映および、映画プロデューサーの山国秀幸氏、山内明美氏（宮城教育大学）による意見交換。 第8回災害人文学研究会。東日本大震災後の再生可能エネルギーの実践についての映画上映および、監督の渡辺智史氏、土屋範芳氏（東北大学）による意見交換。 <p>詳細は http://www.cneas.tohoku.ac.jp/unit/disaster/?cat=2 を参照</p> <p>国際研究集会</p> <ul style="list-style-type: none"> Coastal Communities and Disaster: Perspectives from Asia（主催 東北アジア研究センター、共催 Copenhagen Center for Disaster Research (COPE)、於：コペンハーゲン大学、2018年9月17-18日） Asia-Pacific Regional Workshop on Intangible Cultural Heritage and Natural Disasters（主催 IRCI、共催 東北アジア研究センター、於：仙台国際センター、2018年7-9日） Born from Disasters: Dealing with Death and Remains in the Aftermath（主催 東北アジア研究センター災害人文学研究ユニット、於：災害科学国際研究所、2019年2月12-13日） 			
<p>本年度のユニット運営を通じた実現した東北アジア研究センター組織への貢献についてアピール</p>	<p>昨年度整えた運営体制（文学研究科宗教学研究室木村敏明教授、災害国際研究所ボレーセバスチャン助教）を踏まえ、今年度はデレーニアリーン、福田雄、是恒さくらといった研究メンバーを加え、センター内における連携を強化した。このことは東北アジア研究センターの組織内における災害研究進展に大きな役割を果たした。また東北歴史博物館とは MOU を締結し、同博物館の小谷竜介主任研究員を東北アジア研究センターの非常勤講師（客員准教授）とすることで、センターに兼務する形で活動に加わってもらう体制を構築した。</p> <p>昨年度、代表者の高倉が指定国立大学の災害拠点事業の副拠点長として任命されたほか人間文化研究機構歴史文化資料保全ネットワーク事業では東北大拠点における運営委員（高倉）、事業委員（高倉・荒武）というかたちで関わるようになった。これらの学内運営体制にもとづき、今年度も共同研究を推進することができた。</p> <p>コペンハーゲン大学災害研究センター、IRCI、国際ワークショップ「災害から生まれた物：遺体、慰霊、遺族、遺物」などの国際的議論の場で構築されたネットワークおよびそこで公刊された成果物を通じ、東北アジア研究センターが、災害人文学とりわけ民俗文化財をめぐる領域で、国際的な議論の牽引を担う機関として国際的に認知されるようになってきた。</p>			
<p>外部資金 （名称・金額）</p>	<table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 60%;"></td> <td style="width: 20%; text-align: center;">総額</td> <td style="width: 20%; text-align: right;">円</td> </tr> </table>		総額	円
	総額	円		

ユニットが運営する共同研究	東日本大震災後のコミュニティ再生・創生プロセスと持続可能性に関する実証的共同研究			
ユニット主催の研究集会・企画（共同研究報告書に記載していないもの）	研究会・国内会議・講演会など： 回	国際会議： 回		
	研究組織外参加者（都合）： 人	研究組織外参加者（都合）： 人		
学際性の有無	[有]	参加専門分野数： 5	分野名称	文化人類学、民俗学、宗教学、社会学、文化財研究
文理連携性の有無	[有]	特記事項：医学、看護学		
社会還元性の有無	[有]	内容：市民に開かれた映画上映 & ディスカッションの場として、「災害人文学研究会」を4回開催		
国際連携	連携機関数： 2		連携機関名：コペンハーゲン大学災害研究センター（デンマーク）、独立行政法人国立文化財機構 アジア太平洋無形文化遺産研究センター（IRCI、ユネスコ関連団体）	
国内連携	連携機関数： 6		連携機関名：東北歴史博物館、東京文化財研究所、尚絅学院大学、東京大学、山口大学	
学内連携	連携機関数： 4		連携機関名：文学研究科、災害科学国際研究所、農学研究科、環境科学研究科	
教育上の効果	参加学生・ポスドクの数： 3		参加学生・ポスドクの所属：東北アジア研・文学研究科	
第三者による評価・受賞・報道など				
ユニット運営計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題	ユニットの計画1年目と2年目の成果として、学内における運営体制の構築をあげることができる。この成果を踏まえた上で、すでに東北歴史博物館とはMoUを締結しているが、さらに東京文化財研究所をはじめとした外部機関とのネットワークを築き上げることを今後の課題として取り組みたい。			
最終年度	該当 [無]			

東北アジア研究センター・プロジェクトユニット成果報告書 2018

研究題目	和文)：最新科学による遺跡調査ユニット 英文)：Archaeological Survey by Advanced Science	
研究期間	2018 (平成30) 年度 ～ 2022 (平成34) 年度 (5年間)	
研究組織 (センター教員・兼務教員・教育研究支援者、RA等〔退職した教育研究支援者等は雇用期間を記して記録すること])	氏名	所属・職名
	佐藤 源之	東北大学東北アジア研究センター・教授
	菊田 和孝	東北大学東北アジア研究センター・助教
	藤沢 敦	東北大学 総合学術博物館・教授
外部評価者	氏名	所属・職名
	東 憲章	宮崎県教育委員会
	金田 明大	奈良文化財研究所
センター支援	センター長裁量経費	300,000円
	教育研究支援者 (RA)	有
	研究スペース	無
ユニット組織設置目的と本年度の研究事業の成果の概要 (600-800字の間で専門家以外にも理解できるようにまとめてください。 Webなどで公開を予定しています。)	<p>東日本大震災からの復興における住宅の高台移転に伴い、震災地域において遺跡調査を迅速に進めるために地中レーダー (GPR) による調査を地方自治体と進めてきた。GPRは非開削の探査技術であり、遺跡の発見だけでなく発掘に先立ち遺跡状況を把握することで、効率のよい調査が実現でき、また遺跡の破壊を防ぐなど遺跡の保存にもつながる。我々は、さきたま古墳、東大寺、瑞巖寺などで地方自治体と協力し先進的な遺跡調査技術を駆使した遺跡調査活動を行い、新たな発見や学術的に貴重な情報を提供してきた。</p> <p>本ユニットでは東北大学が開発した新しい地中レーダー計測手法 (アレイ型GPRと高精度調査3DGPR技術) を利用した遺跡調査技術を主軸に、それ以外の科学技術手法を含め地方自治体の遺跡探査へ実践的な技術協力・技術指導する事業を推進する。</p> <p>本年度は東日本国際大学との共同研究として、エジプトピラミッドならびに周辺での遺跡調査に係わる調査の準備を進めた。2019年から本格的な計測を行う予定である。</p>	
活動報告 (研究集会や講演会などのプログラムを記してください。共同研究報告書に記載済みは除く)	<p>2018年7月5日 「大ピラミッド探査プロジェクト」に関する調査報告会 (東日本国際大学)</p> <p>15:00～15:30 記者発表 16:00～17:40 エジプト考古学研究所公開研究発表会</p> <p>2018年11月25日 エジプトフォーラム (早稲田大学) 電波によるピラミッドの探査 (佐藤 源之)</p>	
本年度のユニット運営を通じた実現した東北アジア研究センター組織への貢献についてアピール	<p>東日本国際大学が主催する「大ピラミッド探査プロジェクト」(吉村作治代表) について、現地計測に関する協力を開始した。東北アジア研究センターの研究ユニットとしての協力を明示している。</p>	
外部資金 (名称・金額)	総額	円

ユニットが運営する共同研究	最新科学による遺跡調査			
ユニット主催の研究集会・企画（共同研究報告書に記載していないもの）	研究会・国内会議・講演会など：0回	国際会議：0回		
	研究組織外参加者（都合）： 人	研究組織外参加者（都合）： 人		
学際性の有無	[有]	参加専門分野数：	分野名称	考古学+電気工学
文理連携性の有無	[有]	特記事項：		
社会還元性の有無	[有]	内容：一般公開講演会を通じた一般市民へのアウトリーチ		
国際連携	連携機関数：		連携機関名：エジプト国立天文学地球物理学研究所 (NRIAG)	
国内連携	連携機関数：		連携機関名：東日本国際大学	
学内連携	連携機関数：		連携機関名：	
教育上の効果	参加学生・ポスドクの数：3		参加学生・ポスドクの所属：環境科学研究科	
第三者による評価・受賞・報道など	新聞報道（朝日、福島民報） 2018年7月 記者会見			
ユニット運営計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題	これまでの地歩自治体への協力に加え、最新科学技術を利用した新しい遺跡調査への道を拓くものと位置づけている。			
最終年度	該当 [無]			

(2) 共同研究

プロジェクト研究ユニットとともに従来型の共同研究も展開されている。本年度は以下に挙げるように17件の共同研究が行われた。

(A) 2018年度センター・共同研究継続課題一覧(代表者/研究期間)

- 族譜編纂活動における現代中国人の歴史意識の研究
(瀬川 昌久/2017-2020)
- 蔵王火山の活動の熱的・地球化学的モニタリング
(後藤 章夫/2017-2019)
- 東北アジア諸地域における清朝統治の歴史的意味に関する比較研究
(岡 洋樹/2017-2019)
- 移動と流行：移民がもたらしたもの/持ち帰ったもの
(川口 幸大/2017-2018)
- 地中レーダによる遺跡探査の推進
(佐藤 源之/2018-2022)
- オーラルヒストリーによる旧ソ連ロシア語系住民の口頭言語と対ソ・対露認識の研究
(柳田 賢二/2017-2019)
- 南三陸・仙台湾地域を対象とした次世代ジオツーリズムの構築
(宮本 毅/2017-2019)
- 中国における新しい石炭政策が大気汚染および温暖化を緩和する可能性の把握
(明日香寿川/2014-2019)
- 自然災害の発生による政治・社会構造の変容に関する比較研究
(内藤 寛子/2018-2018)
- 地質遺産の持続可能な保全のための学際研究：広域変成地域の伝承的信仰
(辻森 樹/2018-2018)
- 東北アジアを中心としたアジア地域における動物資源利用問題と「人間性」
- 生業、娯楽、奢侈の観点から -
(辻 貴志/2018-2019)
- 東北アジアの地質的多様性に対する「石」文化の技術的適応
(洪 惠媛/2018-2019)
- 規範と模範：東北アジア地域における近代化と社会共生
(高山 陽子/2018-2019)
- 根室半島～歯舞群島・色丹島の前弧マグマがもたらす地域環境システム
(平野 直人/2017-2018)
- 北東アジアにおける日本のソフトパワー
(石井 敦/2016-2018)
- 東日本大震災後のコミュニティ再生・創生プロセスと持続可能性に関する実証的共同研究
(高倉 浩樹/2016-2018)
- 東北アジア辺境地域多民族共生コミュニティ形成の論理に関する研究
(岡 洋樹/2015-2018)

東北アジア研究センター 共同研究 成果報告書 2018

研究題目	和文) 族譜編纂活動における現代中国人の歴史意識の研究 英文) Study on the Historical Consciousness of Chinese in the Compilation of Genealogies			
研究期間	2017 (平成29) 年度 ~ 2020 (平成32) 年度 (4年間)			
研究領域	(E) 紛争と共生をめぐる歴史と政治			
研究組織	氏名	所属・職名	専門分野	役割
	瀬川 昌久	本センター・教授	文化人類学	漢族、東南少数民族
	川口 幸大	文学研究科・准教授	文化人類学	広東省の漢族
	西澤 治彦	武蔵大学・教授	文化人類学	回族
研究経費	学内資金	センター長裁量経費 [金額] 無し		
	外部資金 (科研・民間等)	特になし	[小計] 0円	
	合計金額	0 円		
研究の目的と本年度の成果の概要 (600-800字の間で専門家以外にも理解できるようにまとめてください。)	<p>今日の中国においては、宗族の復活現象と並行して、族譜の編纂活動も活発である。族譜は単なる祖先の系譜の記録ではなく、祖先の業績を称揚し、自らの出自の正統性や優秀性を主張するなどの歴史叙述としての性格も兼ね備えている。それは遠く前近代の祖先からの系譜を主張するものでもあり、古代以来の中国の歴史の中に自分の家族や自分自身を位置づけることにもつながっており、自分と国家史とを結びつけたり、過去の時間的深さをイメージしたり、あるいは社会の持続性を実感したりすることが可能である場合があると考えられる。このように、今日なお根強い文化的構築物である族譜を、個人史・家族史レベルでの歴史叙述の1形式として捉え、その存在が中国人の歴史に対する感覚や意識にどのような影響を及ぼしているかについて、族譜の中の具体的な叙述の分析を通じて明らかにして行く。対象とする族譜は、東京大学東洋文化研究所をはじめとする日本国内の研究機関に所蔵されているものや、代表者である瀬川がこれまでの現地調査を通じて収集したものをを用いる。本年度は、昨年度に引き続き東洋文化研究所所蔵の沙田文献第1冊『沙田韋氏総族譜』のデータを中心に分析し、その成果は既に学術論文として公表した。</p>			
本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール	<p>本研究は比較的地味な研究課題ではあるが、東北アジア地域において現代社会の中でも根強い持続を見せている文化要素や価値意識について、これまで注目されてこなかった側面から光をあて、長期的なタイムスパンでそれを理解しようとする研究として意義深いものがある。話題性の大きい時事的な諸事象のみではなく、そうした潜在的で長期的な視点で人間社会の本質と向き合うことは、即時的な効用とは無縁であるが、地域研究の基礎中の基礎としてきわめて重要である。</p>			

研究集会・企画	研究会・国内会議・講演会など：0回		国際会議：0回	
	研究組織外参加者（都合）：0人		研究組織外参加者（都合）：0人	
研究成果	学会発表（0）本	論文数（0）本	図書（0）冊	
専門分野での意義	[専門分野名] 文化人類学	[内容] 歴史人類学的な視点から新たな族譜の研究方法を提起		
学際性の有無	[無]	参加した専門分野数：[1] 分野名称 [文化人類学]		
文理連携性の有無	[無]	特筆事項：		
社会還元性の有無	[無]	[内容]		
国際連携	連携機関数：0	連携機関名：		
国内連携	連携機関数：0	連携機関名：		
学内連携	連携機関数：0	連携機関名：		
教育上の効果	参加学生・ポスドクの数：0		参加学生・ポスドクの所属：	
第三者による評価・受賞・報道など	なし			
研究会計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題	<p>今年度は、本研究課題を実施するための外部資金として、科研費・基盤(C)「現代中国人の歴史意識に関する研究—族譜編纂活動の分析から」が採択された。今年度は、昨年度に引き続き東洋文化研究所所蔵の沙田文献第1冊『沙田W氏総族譜』のデータをPC上に入力し、詳細な分析を行う作業を実施した。その分析をもとに、「連続性への希求—香港新界沙田W氏族譜の内容分析を通してみる系譜意識」を『東北アジア研究』に投稿し、年後松までに刊行された。次年度は、今年度中の分析に基づく成果を学術論文として公表するとともに、同方法論を用いて、より多くのサンプルの分析を進める予定である。</p>			
最終年度	該当 [無]			

本共同研究に関わる業績（発表予定含む）

[学会発表]

[雑誌論文]

「連続性への希求—香港新界沙田W氏族譜の内容分析を通してみる系譜意識」、『東北アジア研究』23号、1—40頁。

他に投稿中の学術論文1件（投稿・査読中につき、論文タイトル等の公表は差し控える）

[図書]

[その他]

東北アジア研究センター 共同研究 成果報告書 2018

研究題目	和文) 蔵王火山の活動の熱的・地球化学的モニタリング 英文) Geothermal and geochemical monitoring on the activity of Zao Volcano			
研究期間	2017 (平成29) 年度 ~ 2019 (平成31) 年度 (3年間)			
研究領域	(A) 環境問題と自然災害			
研究組織	氏名	所属・職名	専門分野	役割
	後藤 章夫	東北アジア研究センター・助教	火山学	現地調査, データ解析, 総括
	土屋 範芳	東北大学環境科学研究科・教授	環境地質学	現地調査, 水試料分析
	平野 伸夫	東北大学環境科学研究科・助教	環境化学	現地調査, データ解析
	久利 美和	東北大学災害科学国際研究所・講師	火山防災	現地調査
	松中 哲也	金沢大学環日本海域環境研究センター・助教	地球化学	水試料分析
研究経費	学内資金	センター長裁量経費 [金額] 300,000円		
	外部資金 (科研・民間等)		[小計]	0円
	合計金額	300,000 円		
研究の目的と本年度の成果の概要 (600-800字の間で専門家以外にも理解できるようまとめてください。)	<p>巨大地震が火山噴火を誘発したと考えられる事例は多数報告されている。蔵王山では2013年1月に地下の流体が関与すると考えられる火山性微動が発生して以降、微動に伴う傾斜変動、火山性地震の増加、火口湖(御釜)の部分的な白濁など、活発化を示すと考えられる現象が次々と起こっている。地震や地殻変動に関しては、気象庁や東北大学大学院理学研究科附属地震・噴火予知研究観測センターの観測網で常時観測されているが、噴気温度や温泉水の組成変化などは、現地調査以外に得る方法がない。そのせいもあってか、1940年の最新の噴火や1966年の顕著な地熱活動のあとも、それらのデータは断片的にしか存在しない。我々は2012年より御釜とその北東約1.5kmにある丸山沢噴気地熱地帯で水試料の採取・分析と噴気温度測定を行ってきたが、本研究ではそれを継続・発展させる。</p> <p>2018年度は御釜に5回、丸山沢噴気地熱地帯に5回足を運び、採水や温度測定などの調査を行った。2018年1月に大きな火山性微動と継続的な傾斜変動が観測され、2015年以来となる二度目の火口周辺警報が出されたこともあり、活動度の変化が目立った。丸山沢噴気地熱地帯の噴気温度には上昇が見られ、7月には2012年の調査開始以来最高となる104.2℃が記録された。2015年の火口周辺警報が出た活発化のあとも噴気温度の上昇が見られ、地下での活動度の上昇が地表にまで及んでいることが示唆された。</p> <p>御釜には7月に、前年に続き2本目となる温度計を設置した。前年に設置した温度計には、2017年の9月末から10月初めに一週間ほどかけて3℃ほどの温度上昇が記録されていたが、同様の変化が2018年の同時期に起こっていることが11月に回収したデータで明らかになった。二本の温度計で測定されたことからこの変化は間違いなく起こっていると確認されたが、前年との類似性から、火山活動ではなく季節変動による温度変化と考えられる。現状で、御釜には熱活動はないと判断された。</p>			

本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール	火山にはそれぞれ個性があり、同じ活動を繰り返す傾向がある。そのため、過去の活動の特徴を把握しておくことは、将来の活動推移を予測する上で重要である。これまでは調査が断片的でわからなかった蔵王山の表面活動の実態が、くり返しの現地調査により明らかになってきた意義は大きい。			
研究集会・企画	研究会・国内会議・講演会など：1回		国際会議： 回	
	研究組織外参加者（都合）：1人		研究組織外参加者（都合）： 人	
研究成果	学会発表（0）本	論文数（0）本	図書（0）冊	
専門分野での意義	[専門分野名] 火山学	[内容] 地球物理的観測網では得られないデータを現地調査で得ることにより、多面的な火山活動度評価を可能にしている。		
学際性の有無	[無]	参加した専門分野数：[] 分野名称 []		
文理連携性の有無	[無]	特筆事項：		
社会還元性の有無	[有]	[内容] 調査結果はその都度、仙台管区气象台、宮城県総務部危機対策課などの関係機関に報告され、火山活動度評価の他、防災にも役立てられる。		
国際連携	連携機関数：	連携機関名：		
国内連携	連携機関数：4	連携機関名：金沢大学、福島高専、JAMSTEC、京都大学		
学内連携	連携機関数：2	連携機関名：環境科学研究科、災害科学国際研究所		
教育上の効果	参加学生・ポスドクの数：		参加学生・ポスドクの所属：	
第三者による評価・受賞・報道など				
研究会計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題	丸山沢噴気地熱地帯の噴気温度変化についてデータの蓄積が進んだ。御釜の温度計を増設して二本にしたことは、データの信頼性を向上させることになり、熱異常の有無を正確に判断できることから、地域防災にも大きく貢献する。 京都大学と山形大学の共同調査により、御釜の湖底に小さな丘状の地形が発見された。我々の過去の調査データを見直したところ、同じ地形が確認されるとともに、それが柔らかい物質でできていることが推定された。周囲から転がり込んだ岩ではないと考えられることから、熱水噴出などでできた堆積地形の可能性がある。現在の御釜では熱活動はないと思われるので、この地形の成因を明らかにするのは重要である。水中ドローンを用いた湖底の調査を行いたい。			
最終年度	該当 [無]			

本共同研究に関わる業績（発表予定含む）

[学会発表]

後藤章夫, 土屋範芳, 平野伸夫, 久利美和, 松中哲也, 澤山兼吾, Field survey report on Zao Volcano (2012–2018). 日本地球惑星科学連合2019年大会

佐藤佳子, 伴雅雄, 岩田尚能, 後藤章夫, 熊谷英憲, 蔵王周辺の温泉、湧水の希ガス同位体比からの火山活動の変化. 第17回同位体科学研究会

[雑誌論文]

[図書]

[その他]

東北アジア研究センター 共同研究 成果報告書 2018

研究題目	和文) 東北アジア諸地域における清朝統治の歴史的意味に関する比較研究 英文) Comparative study on the historical context of the imperial rule of the Qing in the regions of the Northeast Asia			
研究期間	2017 (平成29) 年度 ～ 2019 (平成31) 年度 (3年間)			
研究領域	(E) 紛争と共生をめぐる歴史と政治			
研究組織	氏名	所属・職名	専門分野	役割
	岡 洋樹	東北大学東北アジア研究センター・教授	歴史学	研究の総括、モンゴル史における清朝
	大野 晃嗣	東北大学大学院文学研究科・准教授	歴史学	中国史における清朝
	杉山 清彦	東京大学大学院総合文化研究科・准教授	歴史学	マンジュ史における清朝
	石濱裕美子	早稲田大学教育・総合科学学術院・教授	歴史学	チベット史における清朝
	小沼 孝博	東北学院大学文学部・教授	歴史学	中央アジア史における清朝
	中村 篤志	山形大学文学部・准教授	歴史学	モンゴル史における清朝
研究経費	学内資金	センター長裁量経費 [金額] 300,000円	運営費交付金(個人研究費) [金額]	総長裁量経費 [金額]
	外部資金	科研費他政府資金 [金額]	民間の研究助成 [金額]	
	合計	300,000 円		
研究会等の内容	研究会： 回	国内会議： 回	国際会議： 回	その他： 回
	組織外参加者数(都合)：	組織外参加者数(都合)：	組織外参加者数(都合)：	組織外参加者数(都合)：
プログラム	今年度は、昨年度の会議により決定した内容により、各研究者が論文作成作業を行った。			

<p>研究の目的と本年度の成果の概要 (600-800字の間で専門家以外にも理解できるようにまとめてください。)</p>	<p>中国東北部に住むジュシェン諸集団から勃興したマンジュが建国した清の帝国統治は、遼東を支配する中国＝明と、西隣のモンゴル諸集団との関係の積み重ねを基盤として形成されたものである。清は拡大の過程でモンゴル・チベット・トルキスタンなど、内陸アジアの諸社会を取り込んでいった。それゆえマンジュの支配は、これらの地域それぞれの歴史的文脈を持ちながら、それぞれの地域において一時代を画することになった。</p> <p>マンジュ国家の性格については、中国的な歴史世界（中華世界）の文脈において捉える見方と、中央ユーラシア的文脈において捉える見方が存在するが、後者については、個別地域に関する研究の進展にも拘わらず、総体としてこの時代をどのように理解するのかについての議論はいまだ充分にはなされていない。また一口に中央ユーラシアとは言っても、その内実は多様であり、遊牧民の世界やチベット仏教世界、イスラーム世界など、複数の歴史世界が含まれている。</p> <p>そこで本研究では、ユーラシア東部におけるマンジュ、中国、モンゴル、チベット、トルキスタン史それぞれの文脈上に清の時代を位置けるとともに、マンジュ自身についてもユーラシア的視野の中で歴史的 position を考察することを通じて、ユーラシアにおける清朝の統治の意義を明らかにしたい。</p> <p>本年度は、昨年度の活動を継続し、最終原稿執筆を行うことにした。このため研究会は開催しなかった。岡は、モンゴルを対象として、統治構造の北元期から清代への継続性や、清代モンゴルの歴史認識、封禁等の対モンゴル政策について論じ、石濱はチベットを頂点とする仏教世界の観点から清代を論じた。また小沼は清朝統治下の東トルキスタンを題材として、ベク官人制や王公制度による行政、ムスリム有力者の地位等について論じた。残る杉山・大野両研究分担者の原稿提出をまって、岡が総括文の執筆を行うこととしている。</p>			
<p>本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール</p>	<p>清朝は、中国本土だけでなく、モンゴル、チベット、新疆それぞれに異なる歴史的背景をもつ地域を有している。また清朝の支配者もマンジュと呼ばれる人々であり、支配エリートとして自らも複合的な文化を有していた。本研究は、このような清朝の多文化性に着目しながら、各地域の歴史的文脈において、清の時代を位置づける試みである。清朝は、ロシアとともに、今日の東北アジアの基盤を作った国家であり、今日の東北アジアの様々な状況が清の時代に関わっている。本研究は、東北アジアの歴史的形形成史解明への貢献をなすものと考えている。</p>			
<p>東北アジア研究センターの活用状況 (公募共同研究のみ記載)</p> <p>※東北アジア研究センターの設備・資料などの活用、研究者との共同関係について、具体的に記入してください。</p>				
<p>研究成果</p>	<p>学会発表 () 本</p>	<p>論文数 () 本</p>	<p>図書 () 冊</p>	
<p>専門分野での意義</p>	<p>[専門分野名] 歴史学</p>	<p>[内容] マンジュが建国した大清国の時代を、近年それぞれ研究が進展している八旗、中国本土、モンゴル、チベット、新疆のそれぞれの視点から考察することにより、大清国の帝国統治の多文化的な様相をより深く理解することができると考えられる点に意義がある。</p>		

学際性の有無	[無]	参加した専門分野数：[1] 分野名称 [歴史学]	
文理連携性の有無	[無]	特筆事項：	
社会還元性の有無	[有]	[内容] 本研究の成果は、東北アジア研究センターより「東北アジアの社会と環境」の一冊として、一般読者を対象に刊行の予定である。	
国際連携	連携機関数：	連携機関名：	特記事項：
国内連携	連携機関数： 5	連携機関名：東北大学東北アジア研究センター、同大学院文学研究科、東京大学大学院総合文化研究科、東北学院大学文学部、早稲田大学教育・総合科学学術院、山形大学人文社会科学部	特記事項：
学内連携	連携機関数： 2	連携機関名：東北アジア研究センター、大学院文学研究科	特記事項：
教育上の効果	参加学生・ポスドクの数：	参加学生・ポスドクの所属：	
第三者による評価・受賞・報道など			
研究会計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題	<p>本年度は、本共同研究最終年度にあたり、論文集刊行のための原稿完成をめざす。</p> <p>予定されている5件の論文のうち3件が提出済みであり、平成31年度中には論文完成をめざしたい。</p>		
最終年度	該当 [無]		

本共同研究に関わる業績（発表予定含む）

[学会発表]

[雑誌論文]

[図書]

[その他]

東北アジア研究センター 共同研究 成果報告書 2018

研究題目	和文) 移動と流行：移民がもたらしたもの／持ち帰ったもの 英文) Migration and Boom: What did immigrants bring in and bring buck			
研究期間	2017 (平成29) 年度 ～ 2018 (平成31) 年度 (3年間)			
研究領域	(C) 移民・物流・文化交流の動態			
研究組織	氏名	所属・職名	専門分野	役割
	川口 幸大	東北大学・准教授	文化人類学	広東への出稼ぎ者
	瀬川 昌久	東北大学・教授	文化人類学	統括・コメント
	稲澤 努	尚絅学院大学・准教授	文化人類学	移住者の出身村
	奈良 雅史	北海道大学・准教授	文化人類学	回族の移動と信仰
	堀江 未央	名古屋大学・特任助教	文化人類学	婚姻と移動の経験
	宮脇 千絵	南山大学・准教授	文化人類学	移動と服飾ブーム
研究経費	学内資金	センター長裁量経費 [金額] 300,000円		
	外部資金 (科研・民間等)		[小計]	
	合計金額	300,000 円		
研究の目的と本年度の成果の概要 (600-800字の間で 専門家以外にも理解 できるようまとめて ください。)	<p>本共同研究は、人々の移動を流行という視点で捉え、主に中国を対象に「移民がもたらしたもの／持ち帰ったもの」という切り口から検討することを目的として推進されている。</p> <p>助成2年目となる今年度は、移動という現象をよりメタレベルで考察すべく、人々が動くに至る歴史的な経緯や、移動することをめぐる社会化あるいは身体化された価値意識を射程に入れて、移動のハビトゥスというキーワードで研究を展開した。具体的には、6月24日に東京の東北大学オフィス、8月1日に名古屋大学での研究会を重ね、2月16-17日にかけて中国深圳の南方科技大学での国際ワークショップでの活発な議論に結実した。</p> <p>その結果、明らかになったことは以下の諸点である。まず、一見したところ今日の現象に見える移動であっても、過去の戦乱や、社会不安、政策的な入植など、歴史的な経緯があり、それらがいわば水脈のごとく地域社会とそこで生きる人々の間に流れている。次いで、特に西方の周辺地域にあっては、都市に出るといった経験が一種の通過儀礼のごとく位置づけられており、あたかも、一度は出稼ぎに行っておそ一人前という価値観が定着している。より広い世界を知り広範な知見を得たという評価がその後のライフコースで肯定的に働くことも少なくない。しかしながらこれとは対照的に、ホスト社会の側では、移動してきた者たちに対してこうした脈絡が省みられることはほぼなく、貧しい地域からの出稼ぎという否定的なまなざしを一律に向けている。言い換えると、進取の気性に富んだパイオニアといった出身地での評価とは食い違うわけである。</p> <p>このように、人々の移動をよりメタレベルで捉えることによって、単なる経済的な要因等にとどまらない、人を動かすハビトゥスの詳細が明らかになるのである。</p>			

本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール	<p>上記のように、移動を単なる現象として分析するのではなく、移動に至る脈絡と、それを取り巻く価値観および慣習的な面から検討できたことは大きな成果である。</p> <p>さらに、国内にとどまらず、国際ワークショップを行うことによって、本研究はなお一層、多角的に展開しつつあるし、東北アジアの研究成果を国際的に発信できたことは大いに意義がある。</p>		
研究集会・企画	研究会・国内会議・講演会など：2回	国際会議：1回	
	研究組織外参加者（都合）：3人	研究組織外参加者（都合）：20人	
研究成果	学会発表（10）本	論文数（4）本	図書（0）冊
専門分野での意義	[専門分野名] 文化人類学	[内容] 中国国内移動に見るハビトゥス	
学際性の有無	[有]	参加した専門分野数：[4] 分野名称 [社会学、地理学、歴史学]	
文理連携性の有無	[無]	特筆事項：	
社会還元性の有無	[有]	[内容] 中国社会の現実的・多角的な理解への貢献	
国際連携	連携機関数：2	連携機関名：南方科技大学、四川大学	
国内連携	連携機関数：2	連携機関名：名古屋大学、北海道大学	
学内連携	連携機関数：1	連携機関名：文学研究科	
教育上の効果	参加学生・ポスドクの数：3	参加学生・ポスドクの所属：東北大学、首都大学東京、京都大学	
第三者による評価・受賞・報道など			
研究会計画全体の中での当該年度成果の位置づけと今後の課題	<p>2年目である今年度は、初年度の成果と課題を受けて、研究の深化とさらなる進展を実現した。</p> <p>具体的には、初年度は主に共時的な側面に目を向けて、「コンタクト・ゾーン」という視点から、移動によって生じる諸現象を対象に分析を行ってきたが、今年度はそこに至った背景や脈絡に主眼を置いて研究を展開し、上記の通りの知見を得ることができた。</p> <p>3年目においては、これまでの成果をより相対化しつつ、議論を深めるために、次の諸点を課題として挙げている。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 海外との連携の強化：これまでの事例では内陸部→沿岸部というパターンに偏っていたが、例えば内陸部間の移動や、逆に沿岸部から内陸部への還流等も射程に入れて分析を行うため、さらに多様な地域の大学・研究期間との連携を進める。 2. その実現のために、2019年度の科研費に関連する課題として2課題を申請し、より円滑で効果的な研究の促進を目指す。 3. 後半には、成果の出版に向けての検討会を開催し、助成終了後の成果出版に向けた行動を開始する。 		
最終年度	該当 [無]		

本共同研究に関わる業績（発表予定含む）

[学会発表]

川口幸大 「21世紀の僑郷—何が変わり、何が変わっていないのか」日本華僑華人学会2018年度大会『開催校企画シンポジウム—変貌を遂げる21世紀の華僑社会』、2018年11月17日、東洋大学。

堀江未央「中緬国境域におけるラフの移動と“宗教”の空間配置」東南アジア学会 北海道・東北地区 特別例会「シンポジウム 境界からみるアジア：宗教の中心と周縁」2018年10月6日-7日、北海道大学。

宮脇千絵 「伝統的な装いの商品化による「晴れ着」の創出—中国雲南省モンの事例から」日本文化人類学会第52回研究大会、2018年6月2日、弘前大学。

奈良雅史 「「公益」の生成—中国雲南省昆明市回族社会における公益活動の事例から」日本文化人類学会第52回研究大会・分科会「宗教と開発の人類学—グローバル化するポスト世俗主義と開発言説」、2018年6月3日、弘前大学。

奈良雅史「トランスナショナルなムスリムの共在：中国浙江省義烏市の事例から」東南アジア学会・北海道・東北地区特別例会シンポジウム、2018年10月6日、東北大学。

[雑誌論文]

宮脇千絵 「民族表象と経営—中国ミャオ族／モンの「文化伝承保護館」の取り組みから—」『人類学研究所研究論集』第6号、(印刷中)。

[図書]

川口幸大「「中華聖地」と「我々の聖地」に見る現代中国の政治、宗教、親族—炎帝黄帝陵から祖先墓まで」杉本良男・松尾瑞穂(編)『聖地のポリティクス—ユーラシア大陸の比較から』東京：風響社、印刷中。

奈良雅史2019「イスラーム教育におけるテキストの変容：回族の民族性・宗教性の変化との関係から」山田敦士(編)『中国雲南の書承文化：記録・保存・継承』、119-133、東京：勉誠出版。

[その他]

シンポジウムの主催

「第2届“現代中国的人口流動与社会変遷”国際學術ワークショップ“移動的慣習：人口流動及其地域性”」2019年2月16-17日、南方科技大学。

名古屋大学人文学研究科共同研究「移動と共生のグローバルスタディーズ」シンポジウム「移動と共生～先史時代から近未来宇宙まで～」2019年3月18日、名古屋大学。

東北アジア研究センター 共同研究 成果報告書 2018

研究題目	和文) 地中レーダによる遺跡探査の推進 英文)			
研究期間	2018 (平成30) 年度 ~ 2022 (平成34) 年度 (5年間)			
研究領域	(D) 自然・文化遺産の保全と継承			
研究組織	氏名	所属・職名	専門分野	役割
	佐藤 源之	東北大学東北アジア研究センター・教授	電波応用工学	総括
	菊田 和孝	東北大学東北アジア研究センター・助教	電波工学	計測、解析
	藤沢 敦	東北大学 総合学術博物館・教授	考古学	情報提供
研究経費	学内資金	センター長裁量経費 [金額] 300,000円		
	外部資金 (科研・民間等)	共同プロジェクト「大ピラミッド探査プロジェクト」30,000円	[小計]	30,000円
	合計金額	330,000 円		
研究の目的と本年度の成果の概要 (600-800字の間で 専門家以外にも理解 できるようまとめて ください。)	<p>本研究室で開発した高度な地中レーダ技術を利用し、遺跡調査への科学技術の利用を推進する。本年度は東日本国際大学エジプト考古学研究所(代表 吉村作治)との共同プロジェクト「大ピラミッド探査プロジェクト」として、エジプトギザの大ピラミッドの内部構造計測を地中レーダなどの電波計測手法を利用して行う計画を推進した。これに関して東日本国際大学 エジプト考古学研究所「大ピラミッド探査プロジェクト」に関する覚書を佐藤 源之が締結した。</p> <p>本プロジェクトはエジプト考古学、放射線科学、惑星探査学など広い分野の研究者が参画するプロジェクトであり、学際性が高い。</p> <p>このために、本研究室出身のエジプト人研究者、また本研究室に在学中のエジプト人学生らと、ピラミッドの石組み構造中における電波伝搬の数値シミュレーションを行った。この結果、10MHz程度の地中レーダとしては非常に低い周波数を利用することで、ピラミッド内部の計測が可能であることを見いだした。現在、具体的な計測手法の検討を進めている。</p> <p>一方、宮崎県西都原考古博物館が主催した地中レーダを利用した遺跡調査に関するポスター展で成果を報告、冊子としてまとめられた。またホームページの改訂作業を進めた。</p>			

本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール	本年度直接遺跡に関わる計測は行っていないが、宮城県亘理町吉田浜における津波遺構の地中レーダ計測は亘理町文化財課と連絡を取りながら行っており、広い意味での文化財保護につながる成果である。			
研究集会・企画	研究会・国内会議・講演会など：0回	国際会議：0回		
	研究組織外参加者（都合）：0人	研究組織外参加者（都合）：0人		
研究成果	学会発表（5）本	論文数（ ）本	図書（ ）冊	
専門分野での意義	[専門分野名] 電磁波応用工学	[内容] 高度な地下計測技術の応用		
学際性の有無	[有]	参加した専門分野数：[2] 分野名称 [エジプト考古学、惑星探査学]		
文理連携性の有無	[有]	エジプト考古学者との連携		
社会還元性の有無	[有]	[内容] 地方自治体文化財課への協力		
国際連携	連携機関数：1	連携機関名：エジプト国立天文学・地球物理学研究所		
国内連携	連携機関数：1	連携機関名：東日本国際大学		
学内連携	連携機関数：	連携機関名：		
教育上の効果	参加学生・ポスドクの数：5	参加学生・ポスドクの所属：環境科学研究科		
第三者による評価・受賞・報道など	エジプト「大ピラミッド探査プロジェクト」報道（2018年7月 福島民報、朝日新聞など）			
研究会計画全体の中での当該年度成果の位置づけと今後の課題	古墳、ピラミッドなど多様な遺跡の形態に対応できる技術発展をめざす。			
最終年度	該当 [無]			

本共同研究に関わる業績（発表予定含む）

[学会発表]

- [1] Kazuki FUJISAWA, Kazutaka KIKUTA, Motoyuki SATO, "Survey of Beach Ridge Structure by GPR: Case Study at Coastal area of Watari, Miyagi, Japan," 13th SEG-J International Symposium, Tokyo, 2018.
- [2] 佐藤 源之、電波によるピラミッドの探査、エジプトフィラム（218年11月25日 早稲田大学）
- [3] 佐藤 源之 西都原地下式横穴墓の精密計測 GPR パネル展 in 西都原考古博物館 2019年2月
- [4] 佐藤 源之 埼玉古墳群の精密計測 GPR パネル展 in 西都原考古博物館 2019年2月
- [5] 佐藤 源之 GPR による遺跡探査技術 GPR パネル展 in 西都原考古博物館 2019年2月

[雑誌論文]

[図書]

[その他]

東北アジア研究センター 共同研究 成果報告書 2018

研究題目	(和文) オーラルヒストリーによる旧ソ連ロシア語系住民の口頭言語と対ソ・対露認識の研究 (英文) A Study of Russians-speaking People outside of Russia through Their Oral Histories: Their Oral Languages and Cultural Shifts			
研究期間	2017 (平成29) 年度 ~ 2019 (平成31) 年度 (3年間)			
研究領域	(C) 移民・物流・文化交流の動態			
研究組織	氏名	所属・職名	専門分野	役割
	柳田 賢二	東北大学・准教授	ロシア語学	研究の総括およびウズベキスタン調査、モスクワ調査
	中村 唯史	京都大学・教授	ロシア・ソビエト文学	アルメニア、ジョージア調査
	楯岡 求美	東京大学・准教授	ロシア文化・ロシア演劇	クラスノダール調査、ジョージア調査
	堀口 大樹	岩手大学・准教授	スラヴ・バルト語学	バルト3国調査
	毛利 公美	東京大学・非常勤講師	ロシア文学	旧ソ連文化に関する文献解析
	帯谷 知可	京都大学・准教授	中央アジア地域研究	ウズベキスタンに関する図書の編集および分担執筆
研究経費	学内資金	センター長裁量経費 [金額] 300,000円		
	外部資金 (科研・民間等)	同名の科研費補助金(基盤研究(B)(海外)) 16H05657 3,400,000円	[小計]	3,400,000円
	合計金額	3,700,000 円		

<p>研究の目的と本年度の成果の概要 (600-800字の間で専門家以外にも理解できるようにまとめてください。)</p>	<p>本共同研究のタイトルに「ロシア語系」という語を用いたのは、1年早い2016年春に開始した科研費研究(基盤研究(B)(海外))の名を引き継いだからである。そして、代表者の柳田が2013～2014年にその科研費研究を構想する段階でこの語を用いたのは、自身が毎年訪れているウズベキスタンでロシア人を含む欧州系住民(注:出自を問わず現在ではロシア語が母語となっている)を指す語として「русскоязычный」(英語に直訳すれば“Russian-linguaged”)が用いられているので、これを直訳したに過ぎない。</p> <p>しかし、2014年春のロシアによるクリミア併合の口実の一つに「ロシア語系住民を守る」ことが挙げられていたことに端的に表れているように、この語は全く予想外に政治的にホットとなってしまった。ロシアとウクライナは連日「荒唐無稽」と形容するほかない反ウクライナと反ロシアのプロパガンダを執拗に国民に見せて自国民を半ば呆れさせながらも着実に敵愾心を煽っている。またソ連時代を「占領による暗黒時代」と規定して否定し、EUに加盟して人権尊重の自由主義国となったはずのバルト3国では国家語として定めた民族語(エストニア語、ラトビア語、リトアニア語)の検定試験に合格していない「ロシア語系住民」に対しては就職すら制限し、市民に「通報」を奨励しつつ「言語警察」的行政機関を使ってロシア語使用を抑圧している。これに加えエストニアとラトビアは国家語の検定試験に合格していないロシア語系住民には参政権すら与えない。さらに、この両国はNHKの取材があるたびに「ソ連時代にはエストニア語/ラトビア語の使用が禁じられていた」という大嘘をさりげなく挟み込む。</p> <p>2018年度の本共同研究の結果、研究チームでは「ソ連は崩壊したが消滅したわけではなく、『プロパガンダ国家』、『密告社会』、『全体主義的国家観』というソ連の負の遺伝子の変異しつつどの国においても受け継がれていると言えるのではないか」との感想を共有するに至った。</p>
<p>本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール</p>	<p>上述のように、ロシアとウクライナだけでなく、ロシアとバルト3国のほか2008年の南オセチア紛争により強硬な反露路線に転じたジョージアとの間も非常に緊張状態にある。我が国ではあまり報道されていないが、ここ数年間のロシアは2014年のクリミア併合への日本を含む西側諸国による経済制裁に同年秋の原油価格急落が追い打ちをかけて激しい景気低迷に陥り失業が増したことや、ロシアから西側への対抗制裁によってそれまで簡単に買っていた商品が店頭から消えて粗悪類似品がそれに取って替わったことなどで一般庶民の生活全般が苦しくなり、それが我が国を含む「西側」一般に対する強い反感となって人々の心理面に表出している。現に2017年には代表者柳田自身がモスクワのロシア人から「日本もNATOの加盟国なのだろう?」という想像を絶する質問を受けて言葉を失った経験がある。柳田は平和憲法を根拠にこれを否定したが、この質問をしたロシア人からは「日本は米国との間に軍事同盟があり、しかも対露経済制裁に参加しているからそう思った」との説明があり、確かにモスクワの一般人の視点から見ればそのように見えて当然なのである。</p> <p>また他方、バルト3国は現にNATOに加盟しており、強権独裁制の親露国ベラルーシとロシアの飛び地であるカーリーニングラード(ケーニヒスベルグ)州に挟まれたリトアニアでは徴兵制を導入するのみならず志願者に軍事訓練を施し、また学校でも軍事教練を開始する一方、エストニアにはドイツ軍を含むNATO空軍が駐留するのみならず、国家公認の「エストニア防衛連盟」なる民兵組織までもが出現している。そこで「仮想敵」とされているのはもちろんロシアである。しかも、ロシアとも、また露骨な民族主義政策を採る東欧各国とも相容れないシリア難民が多数EU圏内に流入するという事態が連日続いている。このように現在の東欧は米ソ冷戦時代以上に緊張しており、もはや「一触即発」との形容が最もふさわしい状態に至っているのだが、これを「遠いヨーロッパの辺境のこと」と考えることは我が国にとって最も危険な選択肢である。なぜならば、ロシアは我が国の隣国でもあるからである。東欧の危機とは我が国が誤った外交政策を採った場合に即座に東北アジアの危機に転じ得るものであるということは我が国の位置と日米軍事同盟の存在を考えれば自明のことだが、我が国の大学はあまりに東欧に無関心であると言わざるを得ない。こうした意味で本研究は十分に意義を有する。</p>

研究集会・企画	研究会・国内会議・講演会など：0回		国際会議：1回	
	研究組織外参加者（都合）：7人		研究組織外参加者（都合）：0人	
研究成果	学会発表（7）本	論文数（3）本	図書（2）冊	
専門分野での意義	[専門分野名] ロシア語学	[内容] オーラルヒストリーの録音ファイルがそのまま各地域および各世代のロシア語の音声言語サンプルとしての価値を持ち、しかも容易に保存できる。		
学際性の有無	[有]	参加した専門分野数：[4] 分野名称 [ロシア語学、地域研究、ロシア・ソビエト文学、演劇学、バルト語学]		
文理連携性の有無	[無]	特筆事項：なし		
社会還元性の有無	[無]	[内容]（注：最終年度を終えてから研究成果を市販本として出版することを目指す。）		
国際連携	連携機関数：0	連携機関名：		
国内連携	連携機関数：5	連携機関名：岩手大学、東京大学、京都大学、北海道大学、名古屋大学		
学内連携	連携機関数：0	連携機関名：		
教育上の効果	参加学生・ポスドクの数：2		参加学生・ポスドクの所属：東北大学大学院環境科学研究科、名古屋大学大学院国際言語文化研究科	
第三者による評価・受賞・報道など	なし			
研究会計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題	<p>2018年12月22日（土）に滞日中のカザフ人教授とアルメニア人博士後期課程学生を招いて仙台で公開シンポジウムを行い、上述のバルト3国およびモスクワの状況のほかカフカースのアルメニアとジョージア、中央アジアのカザフスタンとウズベキスタン、さらにはジョージアからロシアのクラスノダール州に再移住し、極めて特異なキリスト教を信仰するロシア語系住民たちに関する報告がなされた。この研究集会での報告を互いに聞き合っているうちに、ソ連時代のこれら各国には気候風土、民族集団、母語、宗教、生業、生活様式といったあらゆる面に非常な多様性があるにもかかわらずそれらの違いを横断する「ソビエト文化」と呼ぶべきものが形成されており、それがいずれの国においても現在に至るまで拭い難く残っているということに気付かされた。上では「プロパガンダ国家」、「密告社会」、「全体主義的国家観」という負の側面に言及したが、もちろん「ソビエト文化」は否定的な側面だけで成り立っていたわけではない。肯定的な側面も大いにあったのである。それゆえ、ソ連時代を占領期として否定するバルト3国の人々ですらソ連時代を「懐かしいけれども帰りたくない」と表現する。フルシチョフ期以前に学校教育を受け、勤労年代の全てをソ連国民として過ごした高齢のロシア人は戦勝国ソ連の極盛期を成人として過ごした人々であり、こうした人々がソ連を懐かしんで「もし帰れるものならもちろん帰りたい」と考えるのは当然のことである。代表者の柳田はこれまでの3年間にわたるモスクワ郊外とウズベキスタンでのオーラルヒストリー聞き取りによりロシア人のこうした内面の一端を見ることができたが、こうした事実認識に立てばロシアの民族主義者たちのデモでロシア正教のイコンとソ連時代の国旗と軍旗やスターリンの肖像が共存していることに何の不思議もないことが容易に理解できる。それらはいずれも独ソ戦を勝ち抜きベルリンを陥落させたロシアの最も誇るべき瞬間を象徴するものだからである。このことに気付いたことも今年度の重要な成果であり、最終年度のオーラルヒストリー聞き取りはロシア人のこうした心理を前提に行う必要がある。</p>			
最終年度	該当 [無]			

本共同研究に関わる業績（発表予定含む）

[学会発表]

柳田賢二 「ロシア語との対照における日本語子音体系の特徴」、第5回日露人文社会フォーラム、東北大学片平キャンパス北門会館、2018年5月21日

柳田賢二 「ロシア人にとってパラドクシカルな日本語なまりー日本語のモーラ言語性と母音無声化および前舌子音音素の少なさの干渉について」、日本ロシア文学会東北支部2018年度研究発表会、於秋田大学教育文化学部、2018年7月14日

Daiki Horiguchi The Russian-speaking population's attitudes toward the designation of "Russian-speakers" in the Baltic states *Language, Identity and Education in Multilingual Contexts*, Mercure York Fairfield Manor Hotel, 2019年2月14日-15日

Daiki Horiguchi The linguistic identity of Russian-speakers in the Baltic states: A survey of their attitudes towards the state language, *Forging Linguistic Identities*, Towson University, 2019年3月14日-16日

Tadashi Nakamura О переводе "Журавлей" Расула Гамзатова с аварского на русский язык. *International Scientific Conference "Cross-Cultural Studies: Emic-Etic Correlation in Research and Teaching"*. Tbilisi State University (Georgia Republic), 2018年9月9日

Kumi Tateoka Образ персонажа из отдаленной по духу культуры в пьесе Евгения Гришковца "Как я съел собаку" (2002) (エヴゲニー・グリシュコヴェツの戯曲『私はどうして犬を食べたか』(2002)における文化的異質性と登場人物の造形), *Caucasus: Cross-Cultural Cross-Roads*, Russia-Armenia University, 2018年9月4-5日

Kumi Tateoka, Tadashi Nakamura Round-table discussion: *Multiculturalism and the Soviet Regime, Cultural Studies: Emic-Etic Correlation in Research and Teaching*, Tbilisi State University, 2018年9月9-10日

[雑誌論文]

【和文】

(単著) 堀口大樹「ラトヴィアにおける多言語性」、『スラヴ学論集』21号、日本スラヴ学研究会、31-38頁、2018年8月（査読有）

(単著) 堀口大樹「インタビュー調査に基づいたバルト3国のロシア語系住民の言語状況の考察」、『スラヴ文化研究』16号、東京外国語大学ロシア東欧課程ロシア語研究室、1-21頁、2019年3月（査読有）

(単著) 樋岡求美「歴史パノラマとしてのマヤコフスキー《ミステリヤ・ブッフ》」東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学教室論集『SLAVISTIKA XXXIII/XXXIV』2017/2018, 19-34頁, 2018年3月, (査読無)

[図書]

(共著) 帯谷知可編『ウズベキスタンを知るための60章』、帯谷知可執筆担当「コラム8 ウズベキスタンのロシア語—その担い手の多様性と不確かな将来」(223-226頁)、明石書店、2018年5月

(共著) 服部倫卓・原田義也編『ウクライナを知るための65章』、中村唯史執筆担当：第11章「オデッサ— "黒海の真珠" の光と影」(70-74頁)、第36章「ロシア文学とウクライナー言語、民族、トポスの錯綜」(206-211頁)、明石書店、2018年10月

[その他]

【本共同研究に関する紹介記事】(単著) 柳田賢二「公開シンポジウム 2017～2019年度センター共同研究“オーラルヒストリーによる旧ソ連ロシア語系住民の口頭言語と対ソ・対露認識の研究”(2018年12月22日)」、『東北大学東北アジア研究センターニューズレター』、第80号、第3頁、東北大学東北アジア研究センター、2019年3月26日発行

東北アジア研究センター 共同研究 成果報告書 2018

研究題目	和文) 南三陸・仙台湾地域を対象とした次世代ジオツーリズムの構築 英文) The construction of next step Geo-tourism for forming Minami-Sanriku Sendai-wan Geopark.			
研究期間	2017 (平成29) 年度 ~ 2019 (平成31) 年度 (3年間)			
研究領域	(D) 自然・文化遺産の保全と継承			
研究組織	氏名	所属・職名	専門分野	役割
	宮本 毅	東北アジア研究センター・助教	地質学・岩石学	総括・情報発信方法の発案
	長瀬 敏郎	学術資源研究公開センター・准教授	鉱物学	情報発信方法の発案
	菅野 均志	農学研究科・准教授	土壌学	情報発信方法の発案
	宮原 育子	宮城学院女子大学・教授	地理学	情報発信方法の発案・ジオツアー案作成
	相原 淳一	東北歴史博物館	考古学	ジオツアー案作成
	谷口 宏充	東北大学・名誉教授	火山学	ジオツアー案作成
	永広 昌之	東北大学・名誉教授	地質学・古生物学	ジオツアー案作成
	植木 貞人	理学研究科・客員研究者	火山物理学	ジオツアー案作成
	田代 侃	東北工業大学・名誉教授	建築学	ジオツアー案作成
研究経費	学内資金	センター長裁量経費 [金額]	運営交付金 (個人研究費) 60,000円	
	外部資金 (科研・民間等)		[小計] 60,000円	
	合計金額	60,000 円		

<p>研究の目的と本年度の成果の概要 (600-800字の間で専門家以外にも理解できるようにまとめてください。)</p>	<p>平成28年度に終了した科学コミュニケータ育成を通じて南三陸・仙台湾地域のジオパーク化を目指した科研費(基盤B代表:谷口宏充)の成果として同地域の地質・地形・歴史遺構・震災遺構等のジオサイト243点を調査・収集したガイドブックが作成された。本共同研究ではそこに集約された情報を活用し、単なる観光ではなく、学術的な背景(テーマ)をもって企画されるジオツアー案の提案によるジオツーリズムの形成が本研究の柱の1つである。加えて、ツアーを継続的かつ発展的に運営する方法の構築も重要で、研究者に代わる伝達役としてジオガイドがその役割を果たすが、的確な人材を育成することは容易ではないため、これを補完する手段として、訪問者がガイド無しでもその学術的背景を理解しつつツアーを実施できる方法を検討する。現地での効果的な情報発信の方法、そこで提供すべき情報量と内容の検討を行うなど、新たな形でのジオツーリズムの構築を目指す。</p> <p>今年度はこれまでに収集した個々のサイトにおける情報では不十分であると判断したことから、既存サイトの情報の深化を目指しての再収集作業に特化した。しかしながら、これまで震災遺構を主として記載してきたこともあり、その多くがすでに撤去されてしまうなどしたため、震災遺構の他に、地質関係のジオポイントが多く存在した松島湾周辺地域、及び歴史遺構の多い多賀城地域を主体として、サイト情報の再収集を行った。また、ジオサイトを活用したジオツアーのプラン作成のためのシナリオ検討を並行して行い、個々のサイト・地域を有機的に結びつけるシナリオを大地の成り立ちについての地質調査を行った。その結果のひとつとして、松島湾全体がひとつのカルデラ火山である可能性を指摘することができ、松島・東松島・七ヶ浜といった地域を包括したジオツアー案作成に至ったが、テストツアーの実施には至らず、次年度への課題として残された。</p>			
<p>本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール</p>	<p>宮城県沿岸地域のジオ情報を集約し、かつそれをデータベース化することでこの地域の特色を明らかにし、それをもとに大地と人との関わりを理解する素材を提供することが可能となると考えられる。</p>			
<p>研究会・企画</p>	<p>研究会・国内会議・講演会など：0回</p>	<p>国際会議：0回</p>		
<p>研究成果</p>	<p>学会発表(2)本</p>	<p>論文数(3)本</p>	<p>図書(0)冊</p>	
<p>専門分野での意義</p>	<p>[専門分野名] 地質学</p>	<p>[内容] 宮城県沿岸地域における地質(ジオ)遺産の情報集約</p>		
<p>学際性の有無</p>	<p>[有]</p>	<p>参加した専門分野数:[5] 分野名称[地学・農学・地理学・考古学・建築学]</p>		
<p>文理連携性の有無</p>	<p>[有]</p>	<p>特筆事項:</p>		
<p>社会還元性の有無</p>	<p>[有]</p>	<p>[内容] 教育・観光資源としてのジオ遺産の紹介</p>		
<p>国際連携</p>	<p>連携機関数:</p>	<p>連携機関名:</p>		
<p>国内連携</p>	<p>連携機関数: 3</p>	<p>連携機関名: 宮城学院女子大学・東北工業大学・東北歴史博物館</p>		
<p>学内連携</p>	<p>連携機関数: 3</p>	<p>連携機関名: 学術資源研究公開センター・農学研究科・理学研究科</p>		
<p>教育上の効果</p>	<p>参加学生・ポスドクの数:</p>	<p>参加学生・ポスドクの所属:</p>		
<p>第三者による評価・受賞・報道など</p>				

研究会計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題	本年度は初年度に問題とした、個々のサイト情報が不十分であるという点について情報の再収集を主に行ったということは方針通りであったが、ジオツアー案を早期に作成し、サイト情報の実際の活用方法を模索するためのテストツアーを行う予定であったが、本年内での開催を行うことはできなかった。これは次年度への課題であるが、現段階で新年度9月にテストツアーを兼ねたジオツアーを実施することが決定しており、これを含めた複数回のテストツアーの実施を行うべきであると考えている。
最終年度	該当 [無]

本共同研究に関わる業績（発表予定含む）

[学会発表]

宮本 毅・井澤慶俊・広井良美（2018）十和田火山・中湖カルデラ形成期の活動推移．日本火山学会秋季大会．秋田大学手形キャンパス（2018. 9.26 ～ 28）

生駒徳和・宮本毅・菅野均志・高橋正（2018）太白山東麓（仙台市）の黒ボク土類縁土壌における火山ガラスの量および起源．日本土壌肥料学会2018年度神奈川大会．日本大学生物資源科学部（2018. 8.29 ～ 31）

[雑誌論文]

相原淳一（2018）多賀城と貞観津波．考古学雑誌，101，1-53.

相原淳一・野口真利江・谷口宏充・千葉達朗（2019）貞観津波堆積層の構造と珪藻分析－宮城県多賀城市山王遺跡東西大路南側溝・山元町熊の作遺跡からの検討．東北歴史博物館研究紀要，20，17-44.

相原淳一・谷口宏充・千葉達朗（2019）赤色立体地図・空撮写真からみた城柵官衙遺跡－宮城県石巻市桃生城跡・涌谷町日向館跡とその周辺－．東北歴史博物館研究紀要，20，45-58.

[図書]

[その他]

東北アジア研究センター 共同研究 成果報告書 2018

研究題目	和文) 中国における新しい石炭政策が大気汚染および温暖化を緩和する可能性の把握 英文) Potential of the new coal policy in China on mitigation of both air pollution and climate change			
研究期間	2014 (平成26) 年度 ～ 2019 (平成) 年度 (5年間)			
研究領域	(B) 資源・エネルギーと国際関係			
研究組織	氏名	所属・職名	専門分野	役割
	明日香壽川	東北大学・教授	エネルギー問題	総括
	石井 敦	東北大学・准教授	エネルギー問題	研究分担
	宮後 裕充	東北大学・教育研究支援者	科学社会論	研究分担
	金 丹	東北大学・助教	エネルギー問題	研究分担
研究経費	学内資金	センター長裁量経費 [金額] 300,000円	運営費交付金(個人研究費) [金額]	総長裁量経費 [金額]
	外部資金	科研費他政府資金 [金額]	民間の研究助成 [金額]	
	合計	300,000 円		
研究会等の内容	研究会：2回	国内会議： 回	国際会議： 回	その他： 回
	組織外参加者数 (都合)：30	組織外参加者数 (都合)：	組織外参加者数 (都合)：	組織外参加者数 (都合)：
プログラム				

<p>研究の目的と本年度の成果の概要 (600-800字の間で専門家以外にも理解できるようにまとめてください。)</p>	<p>本研究では、中国における石炭政策、大気汚染対策、温暖化対策の具体的な現状と課題を明らかにすると同時に、中国において石炭を代替するエネルギーが持つ個別の課題を調査する。そして、このような政策が気候変動枠組条約の下での国際交渉を進展させる可能性について検討し、米国と中国、日本と中国、EU（欧州連合）と中国、中国と韓国といった2国間での協力の現状および将来についても展望する。さらに、アジア地域の国際協力の枠組み作りについても、既存の仕組みの有効性を検証しながら将来的あるべき姿について検討する。</p> <p>本年度は、主に以下の研究を実施した。第1に、昨年度に続いて中国におけるPM2.5による健康被害、濃度変化、対策などに関する論文レビューを行った。また、PM2.5は、中国起源だけではなく、日本の排出源も日本において多大な健康被害をもたらしている。したがって、日本での被害状況などについて、フィンランドの研究者に研究を委託して、日本の石炭火力発電所による早期死亡者数などを定量的に明らかにした。第2に、中国での炭素価格付けとして実施されている排出量取引制度の制度設計の状況を把握した。第3に、最近の政治的に大きな争点となっている韓国と中国との間での越境汚染問題について文献レビューを行った。第4に、最近の中国での大気汚染対策の進展が日本への越境汚染問題に与える影響などについて関係者にインタビューしたり、文献調査を行ったりした。</p> <p>これらの研究により、1) 国の石炭消費量、温室効果ガス排出量、中国の鉄鋼消費量などは2030年前にピークする可能性は高い、2) しかし、景気対策の影響などで一時的に、石炭消費量やCO2排出量が微増することありうる、3) 中国における排出量取引制度導入はかなり整備されており、将来的に日本が導入する場合に参考にするべき点は多い、4) 大気汚染物質濃度の低下は多くの地域でみられ、越境汚染問題は緩和されると予想される、5) ただし、国家間の政治的な争点としてはしばらく「利用」される、などが明らかになった。</p>			
<p>本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール</p>	<p>周知のように中国はPM 2.5（微小粒子状物質）などによる大気汚染に悩まされており、偏西風に乗っての日本や韓国への越境汚染も懸念されている。一方、中国でも日本でも温室効果ガスの排出削減対策は喫緊の課題である。しかし、被害が深刻であるからこそ、中国での石炭消費削減は想定外のスピードで起きており、それに伴って温室効果ガス排出削減も進んでいる（昨年は微増した）。本研究は、このようにダイナミックに変化している中国のエネルギー・温暖化・大気汚染問題に関する状況をタイミング良く、かつ定性的な側面と定量的な側面の両方両から検討した点で注目される。また、中国および韓国において導入されつつある排出量取引制度にも注目して、中国での排出量取引制度の導入状況や課題について現地調査などによって明らかにした。</p>			
<p>東北アジア研究センターの活用状況 (公募共同研究のみ記載) ※東北アジア研究センターの設備・資料などの活用、研究者との共同関係について、具体的に記入してください。</p>	<p>今年は、明日香が関わる人間文化研究機構北東アジア地域研究事業「北東アジアにおける地域構造の変容：越境から考察する共生への道」東北大学東北アジア研究センター「東北アジア地域の環境・資源に関する研究連携ユニット」および中国環境問題研究会、さらにアジア経済研究所、環境エネルギー政策研究所との共催による国内の研究会および国際会議などを2回開催し、実質的に本共同研究プロジェクトも協力組織として活動を行った。また、一昨年以來、人間文化研究機構北東アジア地域研究事業「北東アジアにおける地域構造の変容：越境から考察する共生への道」に関わる金丹研究員にも実質的な共同研究のメンバーとして加わってもらい、研究調査活動などにも参加してもらった。</p>			
<p>研究成果</p>	<p>学会発表（1）本</p>	<p>論文数（1）本</p>	<p>図書（1）冊</p>	

専門分野での意義	[専門分野名] エネルギー・環境政策	[内容] 環境問題およびエネルギー問題を検討する際に、石炭政策は最も重要な論点の一つである。本研究は、中国の石炭政策が中国および世界の温暖化政策などに与える影響を定性的・定量的に明らかにした。また、国際協力枠組みのあり方や排出量取引制度の設計に関しても検討した。	
学際性の有無	[有]	参加した専門分野数:[3] 分野名称[環境経済・政策 大気環境科学 国際政治]	
文理連携性の有無	[有]	特筆事項:	
社会還元性の有無	[有]	[内容] 日本や中国などの温室効果ガス排出削減や大気汚染物質排出削減の政策の策定プロセス、具体的な被害の定量的評価、政策実施のための排出量取引制度などの制度設計、などに関する定性的・定量的な研究を行うことによって、日本のエネルギー政策、数値目標策定プロセス、制度設計、国際交渉などへのインプットを行う。	
国際連携	連携機関数: 1	連携機関名: 清華大学エネルギー環境経済研究所	特記事項:
国内連携	連携機関数: 1	連携機関名: 地球環境研究戦略機関	特記事項:
学内連携	連携機関数:	連携機関名:	特記事項:
教育上の効果	参加学生・ポストクの数: 2	参加学生・ポストクの所属: 明日香研究室	
第三者による評価・受賞・報道など	エネルギー問題、温暖化問題、石炭問題、中国の大気汚染問題などに関しては、代表者の明日香のコメントなどが新聞などの様々なメディアで取り上げられている。		
研究会計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題	今年度は、主に中国と日本におけるエネルギー・環境政策の分析や制度設計の現状と課題を把握することに努めた。今後は、韓国と中国との越境汚染問題に関する政治的な対立や中国の温室効果ガス排出削減数値目標達成のための排出量取引制度などの制度設計や日本への影響に注目する。これらをもとに、東アジア地域における有効な地域間協力の枠組みのあり方についても具体的に提言していくことをめざす。		
最終年度	該当 [無]		

本共同研究に関わる業績（発表予定含む）

[単行本]

1. 壽福眞美、槌屋治紀、明日香壽川、吉田文和、飯田哲也、荻本和彦、藤野純一（2018）「エネルギー計画2050構想：脱原子力・脱炭素社会にむけて」、法政大学出版局、176ページ
2. 金丹（2019）「东亚的经济发展与环境影响」『东亚经济的竞合发展与市场营销新趋势』2019年2月、经济科学出版社.

[雑誌論文]

1. 明日香壽川, 大塚直, 島村健, 桃井貴子, 宮本憲一, 山下英俊, 長谷川公一（2018）「石炭火力発電所建設問題と日本気候変動政策：地域の足元から地球規模で考える」環境と公害、p.56-63.
2. 石井敦（2018）「統合知を創出するための境界オブジェクトとしての人類世」学術の動向, 23 (4), p.82-84.

[学会発表]

1. 明日香壽川（2018）「一带一路：エネルギー、環境、物流及び金融」NEASE-Net 第13回フォーラム & 国際シンポジウム（北東アジア秩序の再構築「対立」から「協同」へ）、2018年11月11日、東京.
2. 明日香壽川（2018）“Policy update from Japan”, Japan-China Policy Research Dialogue, 中国能源研究所、2018年10月17日、中国・北京.
3. 明日香壽川（2018）“Synthesis of the Reports and Their Future Application” 第6回東アジア気候フォーラム及び中国民間気候行動ネットワーク（CCAN）総会, 2018年7月16日～18日、中国・西安.
4. 金丹（2018）「日中韓の貿易を通じた二酸化炭素排出構造の変化」北部湾地域経済国際シンポジウム、2018年3月、中国広東海洋大学寸金学院.

東北アジア研究センター 共同研究 成果報告書 2018

研究題目	和文) 自然災害の発生による政治・社会構造の変容に関する比較研究 英文) Comparative Studies on the Transformation of Socio-Politics Structure due to the Occurrence of Natural Disasters			
研究期間	2018 (平成30) 年度 ~ 2018 (平成30) 年度 (1年間)			
研究領域	(E) 紛争と共生をめぐる歴史と政治			
研究組織	氏名	所属・職名	専門分野	役割
	内藤 寛子	東北アジア研究センター・助教	比較政治、地域研究 (現代中国政治)	研究代表者 (中国の事例、計量分析)
	菊地 映輝	国際大学 グローバル・コミュニケーション・センター・客員研究員	文化社会学	研究分担者 (日本の事例、質的調査)
	松谷 昇蔵	中南財經政法大学・講師	日本近現代史	研究分担者 (日本の事例、質的調査)
	三谷宗一郎	医療経済研究機構・研究員	医療政策・公共政策学	研究分担者 (日本の事例、計量分析)
	小野田 亮	法政大学・後期博士課程	文化社会学	
研究経費	学内資金	センター長裁量経費 [金額]		
	外部資金 (科研・民間等)	特になし。		[小計]
	合計金額	30万円		

<p>研究の目的と本年度の成果の概要 (600-800字の間で専門家以外にも理解できるようにまとめてください。)</p>	<p>自然災害の発生は、社会の意識や構造、政治論理を大きく変容させる。既存研究の多くは、自然災害が発生した当時の状況を「平時とは異なる危機的状況」と見做し、その特殊な状況下での政治運営のメカニズムや社会の行動原理を明らかにした。</p> <p>それでは、自然災害の発生は「平時とは異なる」ことから、その後の政治・社会構造と断絶しているのであろうか。平時には相互の利益調整が必要とされる政策決定過程が、自然災害の発生時には、それに対する措置として、政府が強制力をもって政策を選択することができる。そういった政府の行為は、平時との非連続性を抽出することができるが、歴史的制度論の見地を援用すれば、その後の復興期へと移行するにつれ、危機時に選択された政策は平時の政治・社会構造に埋め込まれ、再度大幅な変更を加えることが難しくなる。</p> <p>本共同研究は、自然災害の発生をその後の政治・社会構造を形成する決定的契機であったと捉えなおし、社会的危機下の状況とその後の平時の状況との連続性を検証する。そして、本共同研究は、このような分析視角に基づき、時間軸においても空間軸においても幅広く事例を採取し、量的・質的な分析を駆使した比較研究を遂行することで、自然災害に直面した国家の政治・社会構造の変容に関する普遍的な法則を導出することを目指す。</p> <p>以上のような研究目的に即し、本年度は、第一に互いの専門分野をどのように特定の事例に収斂させていくのかという点について研究会を複数回開催し、検討した。その中で、質的分析グループと計量分析グループで研究を進めていくことに決定した。第二に、具体的な研究内容として、石巻市の復興観光拠点に関する政策決定過程を質的分析チームが、市町村別のBCP(事業継続計画)策定状況のパネルデータ分析を計量分析チームが担当した。総長裁量経費として本共同研究を実施する期限は2018年度内となっているが、それぞれの研究がデータの整理・分析途中であることから、今後も共同研究は継続する予定としている。</p>		
<p>本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール</p>	<p>東北アジア地域研究において、文系の共同研究の多くは、「共同」というよりも個人の研究を集めるというケースが多い。一方で、一つのケースを様々な学問的バックグラウンドを持つ研究者が共同で進めるということは少ない。今年度の共同研究活動は、それぞれの専門性をすり合わせ、お互いの研究手法を学びあうことで進めることができた。新しい共同研究の方法論という観点から意義があったといえる。</p>		
<p>研究会・企画</p>	<p>研究会・国内会議・講演会など：5回</p>	<p>国際会議： 回</p>	
<p>研究成果</p>	<p>学会発表(研究発表も含む)(4)本</p>	<p>論文数(1)本</p>	<p>図書()冊</p>
<p>専門分野での意義</p>	<p>[専門分野名]</p>	<p>[内容]</p>	
<p>学際性の有無</p>	<p>[有]</p>	<p>参加した専門分野数:[4] 分野名称[比較政治学、文化社会学、歴史学、公共政策学]</p>	
<p>文理連携性の有無</p>	<p>[無]</p>	<p>特筆事項:</p>	
<p>社会還元性の有無</p>	<p>[無]</p>	<p>[内容]</p>	
<p>国際連携</p>	<p>連携機関数: 1</p>	<p>連携機関名: 中南財經政法大学</p>	
<p>国内連携</p>	<p>連携機関数: 3</p>	<p>連携機関名: 国立ハンセン病資料館、医療経済研究機構、国際大学</p>	
<p>学内連携</p>	<p>連携機関数: 0</p>	<p>連携機関名:</p>	

教育上の効果	参加学生・ポストクの数：1	参加学生・ポストクの所属：法政大学
第三者による評価・ 受賞・報道など		
研究会計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題	今年度は、事例の策定と、データ収集を中心に進めた。今後は、データの解析および分析を進めていく予定にしている。	
最終年度	該当 [有]	

本共同研究に関わる業績（発表予定含む）

[学会発表（研究発表を含む）]

三谷宗一郎「へき地医療の縮小・撤退政策をめぐる組織管理」、2018年度日本政治学会研究大会（2018年10月14日、於：関西大学千里山キャンパス）

菊地映輝「サブカルチャー都市東京——新文化政策に向けて」、国際公共経済学会次世代研究部会第6回サマースクール、2018年9月1日

菊地映輝「情報社会のメトロポリス」、トークイベント「起源探訪のインターレスト～秋葉原の文化・地理・思想～」、2018年8月21日

内藤寛子「歴史的制度論から見る中国の中央・地方関係—四川大地震を事例として—」、第四回東北大学若手研究者アンサンブルワークショップ、2018年7月4日

[雑誌論文]

三谷宗一郎「時限法の実証分析：離散時間ロジットモデルによる存続要因の導出」『年報政治学』、2019-II号、公刊予定

[図書]

[その他]

<最終年度報告>

研究題目	自然災害の発生による政治・社会構造の変容に関する比較研究
代表者	内藤 寛子
<p>共同研究の最終年度には全体を通して何が明らかになったのか、当初の目的も含めてその成果を800字程度でまとめてください。図版がある場合、別途JEPGで送ってください(2枚まで)。Webで公開します。</p>	<p>昨年度の共同研究課題として同メンバーで「複眼的方法論からみる中国における権威主義体制の強靱性」を企画した。この課題の目的は、研究代表者の研究課題である現代中国政治を多様な研究手法によって検討することであった。今年度の共同研究は、昨年度の課題の延長線上に位置づけており、研究代表者及び研究担当者が一つの課題を共同して進めることを目指した。</p> <p>具体的なテーマとしては、当初、「ポスト復興」を考えていた。自然災害などの「危機」が発生した際、政府内の権力構造は劇的に変化するが、被災地復興のために変化した政府内の利益構造は、災害から5年、10年と経たのちに、定着するのだろうか、それともある期限を境に被災以前の状況に戻るのだろうか、というのが主要な問題関心であった。今年度の共同研究の成果の一つは、それぞれの専門性を理解し、議論を重ねた結果、平時との連続性の中に震災を位置づけるという研究目的がより明確化したということである。また、質的/量的な分析手法が一つの課題に対してどのようにすみ分けが可能なのか、またそれぞれの結果をどのように融合でき得るかという点について多くの時間を割いて議論をした。</p> <p>最終的には、当初の大きな問題関心を①石巻市の震災復興観光がどのように作成されていったのかという政策決定過程を取り扱うグループと、②市町村別のBCP(事業継続計画)策定状況のパネルデータ分析をおこなうグループに分けることで意見がまとまった。すでに、石巻市への現地調査は実施している。今後も何らかの研究資金を調達し、現地での参与観察は引き続き継続する予定である。また、計量分析に関しても、内閣府に市町村別のデータの開示請求をした。現在は、関連するデータ(例えば、市町村別財政状況や人口統計、また首長の経歴や支持政党など)を収集し整理している段階にあり、今後は集めたデータの分析及び考察を進める予定としている。</p> <p>さらに、本共同研究の活動の一環として、政治的あるいは感情的に敏感な事例をどのように研究対象として扱えるのか、という点について、国立ハンセン病資料館を訪問し、民俗学の観点からハンセン病研究を続けてこられた研究者にお話を伺った。ハンセン病患者の方々が感じる被害や、政府側の至らなかつた対応の多くは事実である中で、それぞれの関係性を、例えば被害者と加害者といったように単純化させてしまうことの危うさなどを知ることができた。自然災害に関しては、明確な加害者がいるとは一概には言えないが、敏感な事例を研究する際の考え方という点に関して言えば、震災を事例とした本共同研究にも共通しうる課題であると感じた。</p>
<p>成果公開状況、計画(研究者又は所属研究分野が作成した研究内容又は研究成果に関するWebも含む)</p>	<p>2017年度に実施した本共同研究に関わる研究会に関して、実施日、実施内容などの情報は、複眼的方法論研究会のホームページに掲載した(URL: http://triangulation.works/free/about)。</p>

東北アジア研究センター 公募共同研究 成果報告書 2018

研究課題名	(和文) 地質遺産の持続可能な保全のための学際研究：広域変成地域の伝承的信仰 (英文) A multidisciplinary study of sustainable maintenance of geo-heritage: Folk religion of regional metamorphic rocks		
	(D) 自然・文化遺産の保全と継承		
	関連するユニット (該当する場合のみ)	東北アジアにおける地質連続性と「石」文化共通性に関する学際研究ユニット	
配分額	300 (千円)	研究期間	平成30年7月～平成31年2月
代表者	氏名	所属機関・職・研究者番号	
	(フリガナ) ツジモリ タツキ 辻森 樹	東北大学東北アジア研究センター・教授・ 30634068	
研究構成員			
氏名	所属機関・職	専門分野	役割分担
辻森 樹	東北大学東北アジア研究センター・教授	鉱物学	研究総括、現地調査
宮下 敦	成蹊大学理工学部・教授	教育学・地質学	民俗学的資料収集
鹿山 雅裕	東北大学学際科学フロンティア研究所・助教	鉱物学	鉱物学的評価
進士優朱輝	東北大学理学研究科・前期博士課程1年	岩石学	現地調査、インタビュー
青木 一勝	岡山理科大学基礎理学部・准教授	地質年代学	放射年代測定
板谷 徹丸	NPO 地球年代学ネットワーク・理事長	地質学	啓蒙活動に関する研究

研究成果の概要

本研究は地質遺産の保全と継承に関する学際研究を理系分野の研究者が中心となり、文系分野の手法を取り入れながら、新しい学際研究の可能性を実践的に模索した。近年、地学的（地質学的）に重要で、学術性の高い場所を自然遺産として整備し、専門的な研究だけでなく、地域の自然史の理解、それを通じた科学教育、さらには観光資源の開発など多角的な事業が国内外で展開されている（例えば、ユネスコ世界ジオパークなど）。国内でも体制整備の他、さまざまな規模の組織で自然遺産としての価値の評価や推薦、認定などが行われている。それら一連のムーブメントによって、「自然・文化遺産の保全と継承」は社会からの期待が寄せられている学際研究領域となった。本研究は「東北アジアにおける地質連続性と「石」文化共通性に関する学際研究ユニット（代表：辻森）」に関連し、結晶片岩（広域変成岩の一種。地下深部で剪断応力を受けながら再結晶することで片理と呼ばれる面状の構造が発達する。「三波石（群馬）」、「秩父青石」（埼玉）、「伊予青石」（愛媛）など庭石の材料としても日本文化に根付いている）が分布する地域の伝承的信仰に着目する。日本列島のような海洋プレートが沈み込むプレート収束境界には、過去のプレート沈み込みで形成した結晶片岩が分布する。結晶片岩が分布する地域は比較的急峻な山地が多く、景勝地になるような渓谷の他、地域的な言い伝えや伝承的信仰の対象になるような露頭や伝承的信仰に関係した習慣・風習が残っていることが多い。本研究では徳島県の黒瀬川帯の蛇紋岩メランジュの地質が分布する木頭名地域の結晶片岩に民俗学的アプローチを行う、「岐神信仰」について調査を行った。また、その露頭に産する結晶片岩の特殊性についての物質科学的な解析を行い、地域の自然史に関して新知見を得て、現代社会が要求する天然オブジェクトの遺産化の本質を評価した。

研究会活動

研究会等の内容	研究会：1回	国内会議：0回	国際会議：0回	その他：0回
プログラム				

本共同研究による東北アジア地域研究に対する貢献

本研究は、自然遺産に相当する価値の天然物（地質・鉱物）の持続可能な保全に関して、結晶片岩（広域変成岩の一種。地下深部で剪断応力を受けながら再結晶することで片理と呼ばれる面状の構造が発達する。「三波石（群馬）」、「秩父青石」（埼玉）、「伊予青石」（愛媛）など庭石の材料としても日本文化に根付いている）が分布する地域の伝承的信仰に着目した。地域の自然史研究と民俗学を総合して、現代社会が要求する天然オブジェクトの遺産化の本質を評価した。これまでに文理融合型で同様のアプローチを展開した研究は無かった。本研究も含め関連する親ユニットから派生した複数の研究を通し、東北アジアの地域研究のための文理融合の研究連携が構築されつつある。本研究及び、その展開は、文理融合の超学際的視点で、自然遺産化、文化財化、シンボリック化などの「自然遺産の持続可能な保全」に対する新しい地域理解に貢献できる。

東北アジア研究センターの活用状況

本研究は「東北アジアにおける地質連続性と「石」文化共通性に関する学際研究ユニット（代表：辻森）」と深く関連し、相補的に研究を遂行した。本研究はその着眼点の他、教育学に実戦のある研究者と社会

啓蒙活動を実践している研究者を取り込んだことが独創的であり、文理連携・トランスディシプリンの超学際的な総合研究体制構築を促進させる。

研究成果	学会発表(2)本	論文(2)本	図書(0)冊
学際性	参加した専門分野数(3)	分野名称：地質学、鉱物学、社会人文学	
文理連携の有無	有	アピール点 文系的な手法であるインタビューを海外で行った。聞き取りだけでなく、インタビューを動画記録としてまとめた(公開予定)。	
社会還元の有無	有	アピール点 インタビューを動画記録としてまとめ、公開予定である。また、海外渡航には国立科学博物館のプログラムとのマッチングファンドを利用した。採取した岩石の一部は、同博物館の標本として収められる。	
国際連携	連携数(1)	機関名 スタンフォード大学	
国内連携	連携数(2)	機関名 成蹊大学・国立科学博物館	

(金額単位：千円)

旅費等の明細				
年度	国内旅費	金額	海外旅費	金額
	岡山理科大学(研究打ち合わせ・年代測定)4名	21万		
	岡山理科大学(研究打ち合わせ)1名	8万		
	計	29万	計	
その他の支出の明細				
年度		金額		金額
	書類ファイルなど消耗品	1万		
	計			

本共同研究に関わる業績(発表予定含む)

[学会発表]

松永翔太・辻森樹、日本列島造山帯の初期沈み込み記録：木頭名結晶片岩の年代学再訪。テニユアトラック教員主催セミナー，千葉，2017年3月。

[学会発表(予定)]

松永翔太・辻森樹、Early Paleozoic subduction-zone metamorphism in Japan: A geochronological reappraisal of the Kitomyo Schists. 日本地球惑星科学連合2019年大会，千葉，2019年5月

東北アジア研究センター 公募共同研究 成果報告書 2018

研究課題名	(和文) 東北アジアを中心としたアジア地域における動物資源利用問題と「人間性」- 生業、娯楽、奢侈の観点から - (英文) "Humanity" and the Problems of Use of Animal Resources in Asia, Particularly Northeast Asia : From the Perspective of Subsistence, Entertainment, and Luxury		
	(D) 自然・文化遺産の保全と継承		
	関連するユニット (該当する場合のみ)		
配分額	300 (千円)	研究期間	平成30年7月～平成31年2月
代表者	氏 名	所属機関・職・研究者番号	
	(フリガナ) ツジ タカシ 辻 貴志	佐賀大学大学院農学研究科・ 特定研究員・30507108	
研究構成員			
氏 名	所属機関・職	専門分野	役割分担
辻 貴志	佐賀大学大学院農学研究科・ 特定研究員	人類学	研究総括(代表者)
高倉 浩樹	東北大学東北アジア研究センター・ 教授	社会人類学	研究連携担当者
大石 侑香	人間文化研究機構・特任助教	文化人類学	研究協力者
風戸 真理	北星学園大学短期大学部・専任講師	生態人類学	研究協力者
野地 恒有	愛知教育大学教育学部・教授	日本民俗学	研究協力者
広田 勲	岐阜大学応用生物科学部・助教	農学	研究協力者
相馬 拓也	早稲田大学高等研究所・講師	人文地理学	研究協力者
蛭原 一平	国立民族学博物館・外来研究員	生態人類学	研究協力者

研究成果の概要

人間の歴史を遡ると、様々な動物が生業や娯楽、奢侈の対象となり、人間の欲望によって動物が蹂躪されてきた事実が東北アジア地域を始め世界各国で確認できる。これらの事案は現代でも同様に発生しており、人類学的研究や動物愛護研究の関心事となってきた。例えば、東北アジア地域における毛皮動物資源の乱獲や動物福祉に関する従来の研究は問題視される現象の記述や理解に努めてきたものの、動物に対する人間側の見方や扱い方、考え方などの「人間性」については等閑視されてきた。

そこで、動物資源利用問題と「人間性」が密接に関わっているという経験的事実を、人間が動物資源利用に至る動機や価値観といった側面から議論し、人間の深淵を客観的に評価あるいは対象とする研究の契機にする目的でシンポジウムを開催した。シンポジウムでは、動物資源利用問題と「人間性」の関係を議論する際に人間の営みとして切っても切り離せない「生業」・「娯楽」・「奢侈」をキーワードとし、人類学、文化人類学、社会人類学、生態人類学、人文地理学、日本民俗学、農学の視座から解明を試みた。加えて、東北アジア地域（モンゴル、カザフ、シベリア、日本）にとどまらず、東南アジア地域（フィリピン、ラオス）の事例を交え、より幅広い枠組みからアジア地域の動物資源利用問題と「人間性」についても議論した。

このシンポジウムでは、多面的な視座から動物資源利用問題と「人間性」との関係を共有した結果、動物資源利用には欲望など人間の性質に由来する直接的要因と、人間の性質を反映した社会経済制度などの周辺環境に由来する間接的要因が影響しているという見解が示された。そして、動物資源利用問題への対応として「人間性」を解放するのではなく、動物と共存できるレベルで管理する必要性が述べられ、動物資源利用問題と深く関わる「人間性」のコントロールが検討課題であるとの結論に至った。

研究会活動

研究会等の内容	研究会：0回	国内会議：0回	国際会議：0回	その他：1回
プログラム	<p>シンポジウム：東北アジアを中心としたアジア地域における動物資源利用問題と「人間性」- 生業、娯楽、奢侈の観点から - 趣旨説明 辻 貴志</p> <p>①大石侑香「シベリアの毛皮動物の狩猟と世界システム—女性の欲望に着目して」 ②辻 貴志「フィリピンの鳥の罾猟と「人間性」—なぜヒトは小さきものを狩るのか？」 ③相馬拓也「カザフ・イーグルハンターと騎馬鷹狩文化にみるエコロジーとヒューマニティ」 ④広田 勲・横山 智・INGXAY, Phanxay「ラオス北部の闘牛／肉牛飼育と焼畑システム」 ⑤風戸真理「動物飼育の標準化と個別性 - 北海道のロボット酪農とモンゴル動物文化の多様化」 ⑥野地恒有「〈奢侈＝愉悦のかたち〉としての改造技術 - 日本の金魚（ジキン・トサキン）」</p> <p>コメント①：高倉浩樹 コメント②：蛭原一平 総合討論</p>			

本共同研究による東北アジア地域研究に対する貢献

本研究の研究代表者は、自然利用に関する生業や動物資源利用問題について「人間性」の観点を交えた研究に従事してきたが、東北アジア地域に対して持ち合わせる知見は極めて限られている。そこで、本共同研究を企画し、ユニバーサルな人間行動の中でも、動物資源利用問題と深く結びつきがある「生業」、「娯楽」、「奢侈」をテーマとして掲げ、同じアジア地域の中でも研究代表者が主に研究を行ってきた東南アジアを東北アジアと架橋することで、これらの地域における動物資源利用問題と「人間性」の類似性と相違について比較検討し、動物資源利用の本質を明らかにすることを目指した。

本研究の結果、東北アジア及び東南アジア地域では、動物資源利用は、生業として中露文明圏の娯楽や奢侈を満たす歴史生態的ネットワーク、各地域における人々の文化生態的な資源、人々の生活を精神的にも支える基盤となってきたことが明らかとなった。つまり、動物資源利用は、生業、娯楽、奢侈に依存しなくては生きられない人間の種としての活動であり、動物資源利用問題を語る上で「人間性」のコントロールが必要不可欠な要素であることが示された。

また、特に動物資源利用が世界でも際立って行われてきた地域のひとつである東北アジアについては、生業、娯楽、奢侈において極めて豊かに文化として現れてきたことが明らかとなった。従来は動物資源利用問題と「人間性」を単独で扱う研究はこれまで数多く行われてきたが、両者を結び付けた研究は確認できない。とりわけ、動物資源利用から人間性を検証しようとした研究は、本研究のほか類を見ないことから、東北アジアにおける動物資源利用問題においても「人間性」という人類の根本的な習性から理解・解明しようとする新たな研究として、東北アジア地域研究に大きく貢献しうる。

さらに、動物資源利用問題が動物の福祉と表裏一体であることも浮き彫りになった。動物資源利用並びに「人間性」に対する問いは、動物の福祉について考えず、生業、娯楽、奢侈といった動物を酷使する方面に向けられてきたことは、東北アジアにおいても共通する課題であると思われる。本研究はまた、東北アジアの動物資源利用問題と「人間性」を検討するにあたり、動物の福祉の観点も併せて研究することの必要性を提言するものである。

東北アジアは広大である。しかし、東南アジア地域を始め世界各地との比較を通して、東北アジアの特性がより明確になることに疑いの余地はない。本研究は、動物資源利用問題と「人間性」の観点から、以上のとおり東北アジア地域研究に資する課題を浮かび上がらせることに成功した。

東北アジア研究センターの活用状況

残念ながら、センターとの地理的距離が遠いことなどから東北アジア研究センターの設備や資料を満身に活用することはできなかった。しかし、センターのホームページから積極的に情報収集を行うことによるセンターが蓄積している学知の利用、高倉浩樹教授からいただいたセンターの刊行物など、地理的問題が関係しない手法で入手できる資料の活用は十分にできた次第である。

一方で、本研究の成果のひとつであるシンポジウム開催において、センターの人的資源を大いに活用させていただいた。とりわけ、高倉浩樹教授には研究連携担当者として、シンポジウムのコメンテーターを担当していただいたほか、様々な面で本研究に対して便宜を図っていただいた。大石侑香研究員（申請時）には研究協力者として、シンポジウムでの発表を担当していただき、数々の雑務に骨を折ってくださった。センター事務室の前川順子氏には、各メンバーの煩雑な出張手続きに多くの労を取ってくださった。

そして、本研究の成果発信となるセンターのニューズレターへの活動報告の寄稿については、荒武賢

一郎准教授やコラボレーションオフィスの畠山瑞氏など、複数の方の尽力によるものである。また、全体的な監督を瀬川昌久教授が担当することで一連の成果につながったと認識している。

以上、色々ご面倒をおかけしたが、センターの人的資源については十分に活用させていただいた。また、機会が与えられれば、設備・資料の利用も鋭意行ってまいりたい。

研究成果	学会発表(2)本	論文(4)本	図書(1)冊
学際性	参加した専門分野数(7)	分野名称：人類学、生態人類学、社会人類学、文化人類学、人文地理学、日本民俗学、農学	
文理連携の有無	有	アピール点 本研究は、一見、人類学とその周辺領域の学問に偏っているが、共同研究者の中には理系をバックグラウンドにしたメンバーも含まれ、動物資源利用問題や「人間性」といったしばしば一方向的な感情論や抽象論に陥りやすい課題を論理的かつ具体的にエビデンスからひも解くことを可能にした。また、それぞれの共同研究者が世界を駆けるフィールド・サイエンティストであり、思弁的ではなく、実際に足で稼いだ最新の生のデータを持ち寄ったことで科学的な議論に寄与した点が、本研究における文理連携である。	
社会還元の有無	有	アピール点 本研究の最大の成果は、オープンな形式のシンポジウムを開催して得られた知見である。シンポジウムには、申し込みの上参加を希望された諸氏だけでなく、家畜福祉の専門家なども参加され、各方面に有意義な話題を提供することができた。また、積極的な意見交換も行うことができ、本研究が学術的だけでなく社会的にも有益な知を発信し、参加者を啓発することに貢献した。一方で、参加者からも本研究に対する有意義な意見を得ることができ、主催者側と参加者側で双方向的な知の構築を達成することができた。シンポジウムの成果は、『ヒトと動物の関係学会誌』の特集記事として公表する計画を進めており、より幅広い層の人々に本研究の意義を共有するための社会還元策を練っている他、論集の作成も視野に入れている。論集は英文版の刊行も模索しており、国内だけでなく国外に向けても本研究の成果を発信し、グローバルな視点からも社会還元役に役立てていく計画である。	
国際連携	連携数(1)	機関名 National Agriculture and Forestry Research Institute (Laos)	
国内連携	連携数(9)	機関名 人間文化研究機構、国立民族学博物館、東北大学、佐賀大学、岐阜大学、名古屋大学、愛知教育大学、早稲田大学、北星学園大学	

(金額単位：千円)

旅費等の明細				
年度	国内旅費	金額	海外旅費	金額
30	・辻 貴志 ・大石侑香 ・広田 勲 ・相馬拓也 ・野地恒有 ・蛭原一平 ・風戸真理 (代理：バイスチントヤ)	32 42 59 36 54 20 57		
	計	300	計	0

本共同研究に関わる業績(発表予定含む)

[学会発表]

(辻貴志)

- 1) 2014年8月2日－3日 「フィリピン・パラワン島南部における焼畑農耕民パラワンの鳥の狩猟」生き物文化誌学会第12回学術大会・東京大会、東京大学弥生講堂(ポスター発表)。
- 2) 2017年5月28日－29日 「狩猟を介した鳥と人の関係性－フィリピン・パラワン島パラワンの事例」日本文化人類学会第51回研究大会、神戸大学・鶴甲第一キャンパス(ポスター発表)。
- 3) 2019年3月26日 「フィリピン・パラワン島における鳥罠に関する生態・物質文化的研究」日本オセアニア学会第36回年次大会、首都大学東京。
- 4) 2019年6月24日 Bird Traps and their Impact on Palawan Island in Philippines. The 14th International Conference on Environmental Enrichment, Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, Kyoto, Japan (ポスター発表)。

(広田勲)

- 1) 2018年6月10日 横山智、広田勲、Ingxay PHANXAY「ラオス・シェンクワン県における闘牛の存続要因」第28回日本熱帯生態学会年次大会(静岡大学)
- 2) 2018年6月9日 広田勲、横山智、Phanxay INGXY「ラオス北部の生業システムにおける大型家畜飼育 - 肉牛と闘牛に着目して」第28回日本熱帯生態学会年次大会(静岡大学)

[雑誌論文]

(辻貴志)

- 1) 2019年 An Eco-Material Culture Study on Bird Traps among the Palawan of the Philippines. *Natditira Widya* 13 (1) (印刷中)
- 2) 「フィリピン・パラワン島パラワンの鳥罠に関する生態・物質文化的研究」『物質文化』(投稿予定)

(広田勲)

- 1) 2016年 「ラオスの焼畑と大型家畜の関係」『ビオストーリー』25：78-79。

[図書]

(辻貴志)

- 1) 2016年10月31日 「フィリピン・パラワン島南部の焼畑漁撈民パラワンの鳥の狩猟罨」野田研一・奥野克巳編『鳥と人間をめぐる思考—環境文学と人類学の対話—』勉誠出版、319—342頁。

(風戸真理)

- 1) 「モンゴル国—人口318万人の Facebook 大国」田中樹・宮寄英寿・石本雄大編『フィールドで出会う風と人と土と 4』総合地球環境学研究所 (印刷中)

[その他]

(辻貴志)

- 1) 2018年7月 「シンポジウム「東北アジアを中心としたアジア地域における動物資源利用問題と「人間性」- 生業、娯楽、奢侈の観点から -」のご案内」『ヒトと動物の関係学会誌』第50号、52頁。
- 2) 2019年4月 「シンポジウム「東北アジアを中心としたアジア地域における動物資源利用問題と『人間性』- 生業、娯楽、奢侈の観点から」の開催報告」『東北大学東北アジア研究センターニューズレター』第80号、4頁。

東北アジア研究センター 公募共同研究 成果報告書 2018

研究課題名	(和文) 東北アジアの地質的多様性に対する「石」文化の技術的適応 (英文) Technological adaptation of "Rock"-using Culture to the geological variability in Northeast Asia.		
	(C) 移民・物流・文化交流の動態		
	関連するユニット (該当する場合のみ)	東北アジアにおける地質連続性と「石」文化共通性に関する学際研究ユニット	
配分額	300 (千円)	研究期間	平成30年7月～平成31年2月
代表者	氏名	所属機関・職・研究者番号	
	(フリガナ) ホン ヘウオン 洪 惠媛	東北大学大学院文学研究科・助教・70827964	
研究構成員			
氏名	所属機関・職	専門分野	役割分担
洪 惠媛	東北大学大学院文学研究科・助教	考古学	研究総括(代表者)
青木 要祐	東北大学大学院文学研究科 考古学研究室・博士課程後期	考古学	石器製作技術の分析 石器形態の分析 石材物性の分析
熊谷 亮介	東北大学大学院文学研究科 考古学研究室・博士課程後期	考古学	石器の機能分析 石材物性の分析
田村 光平	東北大学学際科学フロンティア 研究所・助教	人類学	石器形態の統計解析
阿子島 香	東北大学大学院文学研究科 考古学研究室・教授	考古学	東北アジア研究センター 兼務教員
辻森 樹	東北大学 東北アジア研究センター・教授	地質学	研究連携担当者

研究成果の概要

【目的】東北アジアの先史「石」文化は、多様な地質学的環境（「石材環境」）を背景とし、異なる「石」文化の接触によって形成されてきた。こうした文化形成プロセスの理解を目指し、東北アジア研究センター公募型共同研究の支援を受けた2016・17年度は旧石器時代の韓半島および日本列島で用いられた着柄用の抉りを持つ基部加工石器の形態分析と石材調査を行った。その結果、韓半島から日本列島へと石器形態のコンセプトが伝播する過程において石器のサイズと利用形態の変化が認められ、それらは両地域の石材環境の差異や既存の石器製作伝統への適応として説明可能と考えられた。

今年度は前年度までに示唆されたような石器を通じた「石」文化の適応的反応が普遍的に観察されるかどうかを検討するため、基部加工石器の後に両地域で使用された極めて規格的な製作技術・形態をもつ石器（細石刃石器群）に着目した。具体的には、細石刃石器群の製作において地域固有の石材環境がどのような影響あるいは制約を持つのかについての知見を得ることを目的とした。

【方法】後期旧石器時代（約4万～1.5万年前）の細石刃石器群、とりわけ広郷型と呼ばれる製作技術によるものを抽出して対象とした。これらはシベリアで発生した後、南下して韓半島に至った一群と、東進して北海道に至った一群があり、後者はさらに本州まで南下した可能性も検討されている。今年度は、韓半島及び北海道から出土した石器を異なる過程を経て伝播し、異なる環境において製作された資料群と想定してそれぞれ抽出し、一部補助的な調査を本州東北地方出土の石器でも行った。

具体的な方法としては、細石刃の形態・製作技術・機能・利用石材の比較分析を実施した。

【得られた成果】対象遺跡出土の細石刃石器群はそれぞれ異なる岩種あるいは産地の異なる石材を利用していることが判明している。これを踏まえて石器のサイズを分析した結果、石材原産地に近接する北海道の遺跡（旧白滝3遺跡）では細石刃のサイズが大きく、遠隔地の石材を利用している韓半島（上舞龍里遺跡）と北海道の遺跡（アンカリトー7遺跡）では細石刃のサイズが小さいという傾向がみられた。ただし、ねじれや湾曲といった形態的特徴や製作技術の諸要素では各遺跡の細石刃に大きな違いはみられなかった。また、観察した細石刃には着柄して刺突具に用いられたと考えられる痕跡が各遺跡で認められ、共通した機能を有していたと考えられる。

これらを総合すると、調査対象の細石刃の製作技術や機能に大きな違いはなく、韓半島と北海道という地域の違いよりも各遺跡における石材原産地からの距離、すなわち石材環境の違いによって細石刃のサイズが異なっていることが示唆される。このことから、複数のルートを持つ広郷型細石刃石器群の伝播の過程では、それぞれ石器の製作と機能におけるコンセプトは維持されるが、入手可能な石材が限られる環境に対応して細石刃のサイズを変化させるという技術的適応が想定される。一方では利用石材の物性（割れやすさなど）による影響も想定されるため、現在、それぞれの石材試料調達を進めており、薄片を作成しての結晶構造の観察などによって今回の成果と解釈を補完できると考える。

研究会活動

研究会等の内容	研究会：1回	国内会議：回	国際会議：回	その他：回
プログラム	東北アジア研究センター公募型共同研究ワークショップ2019 『先史時代の「石」文化への地質学・考古学的分析—「石」に対する破壊・非破壊分析—』 日時：2月19日13：00～17：00 場所：東北大学川内北キャンパス 川北合同研究棟1階 CAHE ラウンジ 13：00 開会の挨拶（阿子島香） 13：15 趣旨説明（青木要祐） 講演 13：30 飯塚義之「考古石製遺物の非破壊化学分析」 研究発表 14：20 青木要祐ほか「EPMAによる黒曜石製石器の原産地分析」 14：40 洪恵媛 「韓半島における旧石器時代の石材利用」 15：00 熊谷亮介 「複製石器の3D形態計測と刺突による破壊実験」 資料分析実演 15：30 花田杜綺 「分析資料の概要」 15：40 ポータブルXRFによる分析実演（飯塚義之） 16：10 総合討論・資料検討会			

本共同研究による東北アジア地域研究に対する貢献

本共同研究は、東北アジアの旧石器時代における「石」文化の復元を目的としたものであり、その成果は当該地域における人類活動および文化交流の初源的な在り方を示すものである。

本年度の研究成果からは、後期旧石器時代の遺跡出土石器の分析を通して、韓半島・日本列島における「石」文化の共通性及び相違性が確認された。そして、この現象の背景には、東北アジア地域における地質連続性及び多様性が、石器石材環境という形で当時の「石」文化に大きく影響していることが示唆された。

そのため、今後の当該地域における「石」文化の研究にとって、地質学と考古学の連携が不可欠であることが強く認識された。そのほか、人類学的な視点からは、旧石器時代における文化交流の実態と言える人類の移動あるいは情報（道具のコンセプト、製作技術など）の伝達・伝播に関して、考古学的事象と地質学的データの両面から検討した。

東北アジア地域における長期間の人間活動を地質学・人類学・考古学からの多角的視点から分析し、地質学的環境に対する人間集団の技術的適応の一側面を明らかにした点で、東北アジア地域史の解明に寄与する点があると考えている。

東北アジア研究センターの活用状況

後期旧石器時代に石器として利用されていた石材の物理的性質及び分析方法に関して、地質学の辻森樹教授及び東北アジア研究センターに客員研究員として在籍する台湾・中央研究院の飯塚義之氏と共同で検討を行った。その内容は主に(1)石器石材の破壊・非破壊分析方法、(2)岩石の物性の測定方法の2つである。

(1) 石器石材の破壊・非破壊分析方法：

岩石に関して、その物性を明らかにする場合や岩種を分類・同定する場合には、破壊分析が多く行われる。本研究の対象である石器は、地質学から見れば岩石試料だが、考古学の側から見れば文化財でもあり、非破壊による分析が望ましい。

そこで、破壊分析を行えば何をどこまで明らかにできるのか、非破壊分析ではどのような制限があるのかの2点を中心に議論し、実際に先史時代石製遺物の非破壊による元素分析を試行した。

(2) 岩石の物性の測定方法

過去の人類は岩石の物性を理解し、それぞれに適した石材や技術を選択して石器を製作・使用したと考えられている。これを客観的に検証するため、石器石材の結晶構造の観察を検討している。現在は石材の試料が入手できていないが、試料を入手出来次第東北アジア研究センター地球科学研究分野の設備を使用し、薄片の製作・観察を実施する計画である。

以上のまとめのため、本共同研究の公開型研究会として東北アジア研究センター施設内でワークショップを開催した。ここでは地質学と考古学における「石」文化資料に対する認識・分析方法の違いを明確にする目的で討論を行った。

研究成果	学会発表(2)本	論文(1)本	図書()冊
学際性	参加した専門分野数(3)	分野名称：考古学・地質学・人類学	
文理連携の有無	有	アピール点 石器石材に対する地質学的検討	
社会還元の有無	無	アピール点	
国際連携	連携数(3)	機関名 韓国・国立中央博物館、国立春川博物館、楊口先史博物館	
国内連携	連携数(1)	機関名 山形県中山町教育委員会	

(金額単位：千円)

旅費等の明細				
年度	国内旅費	金額	海外旅費	金額
H30	山形出張旅費(仙台～山形) 1月28～29日	8.2千円	韓国出張旅費(仙台～ソウル)10月27日～11月4日×2人分(外国分)	289.2千円
	※打ち切り支給		韓国出張旅費(仙台～ソウル)10月27日～11月4日)×2人分(内国分)	2.6千円
	計	8.2千円	計	291.8千円

本共同研究に関わる業績（発表予定含む）

[学会発表]

- Kohei Tamura. Tracking Human Migration and Information Flow in the Prehistoric Japanese Archipelago Using Geometric Morphometrics of Archaeological Artifacts. TRANSBOUNDARY COMPARATIVE STUDY ON MOBILITY, FLUIDITY AND INFRASTRUCTURE. 2018.9.17 SOAS University of London
- Hyewon Hong. Upper Paleolithic blade industries in Korean Peninsula and Northeastern part of Japanese Archipelago. Tohoku Forum for Creativity Thematic Program 2018 Geologic Stabilization and Human Adaptations in Northeast Asia. The Workshop for Variabilities in Prehistoric Human Cultural Adaptations in Northeast Asia: The Initial Upper Paleolithic, the Last Glacial Maximum, and the Post Pleistocene Adaptations, Part2. 2019.2.13 Tohoku University

[雑誌論文]

- Hong, H. 2018 Rethinking the Early Upper Paleolithic Industries in the Northeastern part of the Japanese Archipelago; Base retouched tools and Transformation in Flaking Concept. *Journal of the Korean Palaeolithic Society* 38, pp.43-68. (in Korean)

[その他]

- 飯塚義之「考古石製遺物の非破壊化学分析」先史時代の「石」文化への地質学・考古学的分析—「石」に対する破壊・非破壊分析— 2019. 2.19 東北大学
- 青木要祐・佐野恭平・和田恵治「EPMAによる黒曜石製石器の原産地分析」先史時代の「石」文化への地質学・考古学的分析—「石」に対する破壊・非破壊分析— 2019. 2.19 東北大学
- 洪 惠媛「韓半島における旧石器時代の石材利用」先史時代の「石」文化への地質学・考古学的分析—「石」に対する破壊・非破壊分析— 2019. 2.19 東北大学
- 熊谷亮介「複製石器の3D形態計測と刺突による破壊実験」先史時代の「石」文化への地質学・考古学的分析—「石」に対する破壊・非破壊分析— 2019. 2.19 東北大学
- 花田杜綺「分析資料の概要」先史時代の「石」文化への地質学・考古学的分析—「石」に対する破壊・非破壊分析— 2019. 2.19 東北大学

東北アジア研究センター 公募共同研究 成果報告書 2018

研究課題名	(和文) 規範と模範：東北アジア地域における近代化と社会共生 (英文) Rules and Models: Modernization and Coexistence in Northeast Asia		
	(C) 移民・物流・文化交流の動態		
	関連するユニット (該当する場合のみ)		
申請額	298 (千円)	研究期間	平成30年7月～平成31年2月
申請者	氏名	所属機関・職・研究者番号	
	(フリガナ) タカヤマ ヨウコ 高山 陽子	亜細亜大学国際関係学部・教授・20447147	
研究構成員			
氏名	所属機関・職	専門分野	役割分担
高山 陽子	亜細亜大学国際関係学部・教授	観光研究	研究総括(申請者)
瀬川 昌久	東北大学東北アジア研究センター・教授	社会人類学	研究連携担当者
李 善姫	東北大学東北アジア研究センター・教育研究支援者	韓国研究	韓国事例分析
山口(加藤) 睦	山口大学人文学・准教授	民俗学	日本事例分析
稲澤 努	尚綱学院大学総合人間科学部・准教授	中国研究	中国事例分析
孫 潔	佛教大学・講師	中国観光研究	中国事例分析
中村 知子	茨城キリスト教大学・日本大学・兼任講師	生態人類学	モンゴル事例分析
兼城 糸絵	鹿児島大学法文学部・准教授	文化人類学	中国事例分析

研究成果の概要

本研究の目的は規範と模範という概念から東北アジアの近代化と現代化について文化人類学的な側面から考察することである。規範と模範はともに人々の行動を規定するものであるが、規範は視覚化されていない、模範は視覚化されているという違いがある。ただし、両者は相容れないものではなく、規範が模範を作り出す場合も、模範が規範を作り出す場合もある。

東北アジア諸国では、近代国家の諸制度に寄与するような新たな規範と模範が求められた。日本では貧農救済に努めた二宮尊徳の報徳思想が明治初頭から用いられた。金次郎（尊徳）は模範人物として国定修身教科書に繰り返し登場し、「負薪読書」の金次郎像が全国の小学校に設置された。こうした金次郎の姿は人々に勤勉こそが美德であるという規範を植え付けた。中国では中国共産党がソ連の労働英雄の叙勲制度を導入し、土地改革や開墾の結果、貧農から富農になった農民に労働模範の称号を授けた。新中国成立後、「工業は大慶に学べ」で知られる大慶油田では王進喜が労働模範となり、その後、最も名高い模範とされる雷鋒が登場する。1962年、作業中に撫順で殉職した雷鋒は、「雷鋒に学べ」という毛沢東の言葉とともに多くのポスターや絵本、漫画などに登場し、子供たちの模範となった。

日本では戦後、模範人物としての金次郎の評価は急速に低下し、中国では文革終結後、王進喜や雷鋒などの労働模範も同様に意味を失う。社会主義国では生産性向上政策として用いられた労働英雄・労働模範叙勲制度は結果的には多くの不正を生み出し、それが1980年代以降に各地で暴露されることとなった。

近年、金次郎や雷鋒は模範というよりも善行という規範のシンボルとして再登場した。金次郎は2018年に始まる道徳の教科書で取り上げられ、雷鋒は2010年代、ボランティア活動のアイコンとなっている。本研究では、体制転換を境に形骸化した模範は急速に廃れるが、規範は根強く残り続けるという特徴を持つことを明らかにした。

研究会活動

研究会等の内容	研究会：1回	国内会議：0回	国際会議：0回	その他：0回
プログラム	2019年1月26日 規範と模範から見る東北アジアの近代化とグローバル化 場所：亜細亜大学1号館14階第7会議室 13：30～13：50 趣旨説明 高山陽子（亜細亜大学） 13：50～14：30 高山陽子 社会主義プロパガンダ芸術における模範と再模範：毛沢東様式の事例から 14：30～15：10 兼城糸絵（鹿児島大学） 移民が生み出す新たな規範：福建省福州市の事例から 15：30～16：10 山口睦（山口大学） 資本主義的イベントが作り出す贈答規範：日本のバレンタインデーを事例として 16：20～16：50 コメント 瀬川正久 16：50～17：50 総合討論			

本共同研究による東北アジア地域研究に対する貢献

これまで東北アジアの近代に関する地域研究としては、小長谷有紀他編『中国における社会主義的近代化：宗教・消費・エスニシティ』（勉誠出版、2010年）や小長谷有紀他編『社会主義的近代化の経験：幸せの実現と疎外』（明石書店、2011年）などがある。これらの研究は体制転換前（改革開放前）の社会主義の近代化に事例に焦点を当てたものである。本研究は特にグローバル化が進む2000年代以降の事例を比較検討した点に独自性がある。

規範の揺り戻しは、グローバル化の中で格差拡大が社会問題となっている東北アジア諸国における顕著な社会現象である。近代化の過程で否定された従来の伝統儀礼の復活はその一例（兼城報告）であり、東日本大震災や四川大地震の後に盛んになったボランティア活動（山口報告）はもう一つの例である。これに対して近代化の中で使われた模範はイデオロギー性が強いため、多様な人々が住む現代の共生社会では再び創出するのが難しくなっている。それを逆手にとって社会主義期のプロパガンダアートを嘲笑うかのようなパロディ商品が中国の観光地にあふれている（高山報告）。こうした具体的な事例から、本研究は、規範と模範という概念が東北アジア地域研究において近代化と現代化を理解する上で重要な意味を持つことを示した。

東北アジア研究センターの活用状況

瀬川昌久教授と李善姫学術研究員は1月26日の研究会の総合討論に際して、東北アジアの近代化と現代化を議論する上で規範と模範をどのように考えるべきかという視点を提供した。2019年度には本研究の継続として研究会「規範と模範」を東北大学東北アジア研究センターで行う予定である。また、本研究では最終的には論集『東アジアにおける規範と模範』（仮）として刊行する予定である。

研究成果	学会発表（0）本	論文（0）本	図書（0）冊
学際性	参加した専門分野数（8）	分野名称：観光研究、社会人類学、韓国研究民俗学、中国研究、中国観光研究、生態人類学、文化人類学	
文理連携の有無	無	アピール点	
社会還元の有無	無	アピール点	
国際連携	連携数（0）	機関名	
国内連携	連携数（0）	機関名	

(金額単位：千円)

旅費等の明細				
年度	国内旅費	金額	海外旅費	金額
	東京－仙台	28,240		
	東京－仙台	25,640		
	東京－仙台	25,640		
	東京－鹿児島	47,720		
	東京－京都	42,940		
	東京－山口	45,720		
	計	215,500	計	

本共同研究に関わる業績（発表予定含む）

[雑誌論文]

高山陽子「中国における労働模範」（仮）亜細亜大学国際関係学部紀要『国際関係紀要』第28巻、2020年3月刊行予定

山口睦「資本主義イベントが作りだす贈答規範」山口大学人文学部異文化交流研究施設紀要『異文化研究』14号、2020年刊行予定

[図書]

論集『東アジアにおける規範と模範』（仮）2022年刊行予定

執筆者：研究構成員全員

[その他]

研究会「規範と模範」5月31日（於）東北大学

高山陽子 エッセイ「模範人物の銅像」亜細亜大学『樞：国際関係・多文化フォトジャーナル』7号、2020年3月刊行予定

東北アジア研究センター 共同研究 成果報告書 2018

研究題目	和文) 根室半島～歯舞群島・色丹島の前弧マグマがもたらす地域環境システム 英文) Social environment originated from forearc magmas at the Nemuro Peninsula to Habomai Islands			
研究期間	2017 (平成29) 年度 ～ 2018 (平成30) 年度 (2年間)			
研究領域	(D) 自然・文化遺産の保全と継承			
研究組織	氏名	所属・職名	専門分野	役割
	平野 直人	本センター・准教授	火山学	全般総括
	山本 順司	北海道大学総合博物館・准教授	博物学	地質・考古情報収集
	成瀬 元	京都大学・准教授	堆積学	地形解析
	Daniel Pastor Galan	本センター・JSPS 研究員	古地磁気学	古地理解析
	辻森 樹	本センター・教授	岩石学	岩石の解析
研究経費	学内資金	センター長裁量経費 [金額] 300,000円		
	外部資金 (科研・民間等)	公益財団法人山田科学振興財団 研究援助	[小計]	860,316円
	合計金額	1,160,696 円		
研究の目的と本年度の成果の概要 (600-800字の間で専門家以外にも理解できるようまとめてください。)	<p>北海道東部では、千島列島から知床～大雪山にかけて太平洋プレート沈み込みに伴う火山弧が発達する。プレート沈み込み帯の海溝での巨大地震や火山弧の形成は、日本列島の発達過程における典型例として位置づけられるが、その火山弧と海溝の間の冷たい領域「前弧」である根室半島・浜中町から北方領土の歯舞群島・色丹島にかけて、なぜかマグマ活動が確認される。火山弧と海溝の間の冷たい領域にはマグマが存在し得ない場所と考えられ、このような事例は世界に類を見ない。また、この地質が原因で本地域は極めて希有な自然環境と生態を持ち合わせた独特のシステムが存在する。本プロジェクトではこの希有な自然環境や社会環境のつながりを定量的に評価し、地域へ情報提供を行う。</p> <p>昨年度得られた岩石試料や地質情報を元に、化学分析を行い、現地露頭情報を元に地質図を作成した。これらデータは現在準備中の投稿論文に掲載予定である。岩石の解析によると、本地域の地質基盤が形成された原因として、現在のように古いプレートが沈み込む状況とは異なり、より温度が高い、火山活動を伴ったプレートが沈み込む特別な状況のなかで形成された可能性が高いことを発見した。本研究に関する学会発表は3回、講演2回行い、現在国際学術誌の論文2本の準備を進めている。そのうち、Sakai, Hirano et al. の論文は、本地域を支える下部の地質(常呂帯)中の玄武岩の起源に関するものであり、Geological Magazine に投稿済みで、現在査読過程の最中である。もう一方の Yutani, Hirano et al. の論文については、現在準備を進めており、新年度早々に投稿予定としている。</p>			

本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール	過去の海底火山活動の岩石が露出する根室～歯舞群島地域は、その硬い岩質が原因で通常は海底に没するはずの前弧が陸化している。各所で岬を形成し、内陸部は山岳地帯が無い緩やかな台地が広がる。この地形特徴は、冬期の季節風の吹き抜けや、夏期に特徴的な内陸部への濃霧の浸透など独特の気候風土を発生させていることが分かってきた。特異な地質を基盤とする気候と産業や文化は、北方領土を含めた本地域の特異現象を位置づける。			
研究集会・企画	研究会・国内会議・講演会など：2回		国際会議：0回	
	研究組織外参加者（都合）：40人		研究組織外参加者（都合）：一人	
研究成果	学会発表（2）本	論文数（0）本	図書（0）冊	※準備中・投稿中
専門分野での意義	[専門分野名] 地球科学	[内容] 本地域のマグマ活動は世界に類を見ない特異な活動である。		
学際性の有無	[有]	参加した専門分野数：[2] 分野名称 [考古・気象]		
文理連携性の有無	[有]	特筆事項：アイヌ・オホーツク各文化や現代地方産業との関連		
社会還元性の有無	[有]	[内容] 地域の文化継承や観光振興		
国際連携	連携機関数：0	連携機関名：		
国内連携	連携機関数：2	連携機関名：北海道大学、京都大学		
学内連携	連携機関数：0	連携機関名：		
教育上の効果	参加学生・ポスドクの数：2		参加学生・ポスドクの所属：東北大学	
第三者による評価・受賞・報道など	該当なし			
研究会計画全体の中での当該年度成果の位置づけと今後の課題	<p>本年度は、北海道大学の研究者との共同調査を行い、現地において厚岸町沿岸の環境調査航海に参加し、根室市のアイヌのチャシ群の調査では、遺構の測量および岩相分布との関連性についてデータを採取した。既に述べた本地域の基盤形成における、火山活動を伴ったプレートの沈み込みという特別な状況基盤形成要因の発見は、沈み込み帯の海溝側でなぜか隆起し陸化している本地域そのものの原因が解明された結果となり、大きな成果となった。</p> <p>また、このような成果に基づき、次年度から2年の計画で鹿島学術振興財団2018年度 研究助成「根室・歯舞群島における異質な火成活動・地形・気候・文化・農産物システム」の施行が決定した(2019年度155万円)。今後は、高層湿原の原因としての気候区分の数値化や、地質情報の詳細地図作成、海産物の化学分析、マグマ貫入岩と漁港およびチャシ跡の各分布の関連性等に関して、データ収集を進めていく。また、これらデータを現地博物館や、観光型自然体験幹旋団体に提供し、地域の活性化のための協力を行っていく計画である。オホーツク文化・アイヌ文化の遺跡から判明しているチャシ跡の濠や城砦の推定位置、過去および現在の農畜海産物生産拠点の分布、地層の走向傾斜、マグマ貫入・噴出位置の分布、現在の地形傾斜角など、各データを基に情報地図を作成する。オホーツク文化遺跡の分布や、アイヌ民族による各チャシ跡など各データについては、北海道立北方民族博物館や共同研究者の協力を仰ぎ行う。また、現地の博物館や観光協会、自然体験「根室フットパス」を運営する「酪農家集団 AB-MOBIT」へ赴き、本研究内容と成果を取り入れるよう啓蒙活動として提案する。根室フットパスは、昭和期の遺構や野鳥や野草の観察のみ取り上げられている(http://www.nemuro-footpath.com/)ため、これに既述の世界で希少なマグマ活動を取り入れ、理解と啓蒙に利用する。</p> <p>本研究対象の地質は、その範囲が100km 近くあるため、より詳細な分布を調べるため、本研究では引き続き、岩石に関する分析や年代測定を採取地を広げて継続させる。</p>			
最終年度	該当 [有]			

本共同研究に関わる業績（発表予定含む）

[学会発表]

Sakai, S., N. Hirano, S. Machida (2018) Tectonic reconstructions and origin of Cretaceous greenstones, Tokoro Belt, NE-most of Japan. *JpGU 2018*, SMP34-P11. (May 20, 2018, Makuhari Messe, Chiba, Japan)

油谷拓・平野直人・町田嗣樹・山本順司 (2018) 根室層群に貫入したアルカリマグマの分布と噴出場. 日本地質学会第125年学術大会, R15-O-2 (北海道大学, 札幌市. 2018年9月6日) ※北海道胆振東部地震のため中止

Sakai, S., N. Hirano, Y. Dilek, S. Machida, K. Yasukawa, Y. Kato (2018) A broad distribution of accreted intraplate volcanic edifice in the Late Cretaceous Tokoro greenstone belt, NE-most of Japan. *AGU Fall Meeting 2018*, T31D-1883. (December 12, 2018, Washington Convention Center, Washington D.C., USA)

[雑誌論文]

Sakai, S., N. Hirano, D. Yildirim, S. Machida, K. Yasukawa & Y. Kato (submitted) Tokoro Belt (NE Hokkaido) : a large seamount in the Late Cretaceous accretionary prism of Japan. *Geological Magazine*, under review.

[図書]

平野直人 (投稿中) 千葉聡編：シリーズ「東北アジアの社会と環境」1, 古今書院.

[その他]

平野直人 (2018) 深海底へのサンプルリターン —現在と過去の太平洋深海底へ—. 伊達市噴火湾文化研究所東北大学東北アジア研究センター第9回学術連携交流講演会 (だて歴史の杜カルチャーセンター視聴覚室, 伊達市, 2018年10月26日)

平野直人 (2019) 太平洋プレートの組成進化～白亜紀海山・若い海山・プチスポット・緑色岩. 千葉大学テニュアトラック教員主催セミナー (千葉大学理学部, 千葉市, 2019年3月8日)

東北アジア研究センター 共同研究 成果報告書 2018

研究題目	和文) 北東アジアにおける日本のソフトパワー 英文) Japanese soft-power in Northeast Asia			
研究期間	2016 (平成28) 年度 ~ 2018 (平成30) 年度 (3年間)			
研究領域	(C) 移民・物流・文化交流の動態			
研究組織	氏名	所属・職名	専門分野	役割
	石井 敦	東北アジア研究センター・准教授	環境学、科学技術論	全体の統括
	勝間田 弘	国際文化研究科・准教授	国際政治学	理論の整理
	宮後 博充	東北アジア研究センター・教育研究支援者	ネットワーク分析	データ調査
研究経費	学内資金	センター長裁量経費 [金額] 300,000円		
	外部資金 (科研・民間等)	なし	[小計]	300,000円
	合計金額	300,000 円		
研究の目的と本年度の成果の概要 (600-800字の間で専門家以外にも理解できるようにまとめてください。)	<p>この研究の目的は「ソフトパワー」という観点から、日本が持つポテンシャルを明らかにすることである。ソフトパワーとは、文化的な魅力で外国の人々を惹き付け、自国の国益を高めていく力である。これは国際政治学における新しい視点だといえる。以前の国際政治学は、軍事的な強制力である「ハードパワー」に関心を向けていた。だが、とくに日本のように海外でハードパワーを行使できない国の外交を検討するにあたっては、ソフトパワーにも関心を向けることが不可欠だといえよう。日本は、文化的な魅力で外国の人々を惹き付け、国益を高めていくパワーを、どの程度もっているのだろうか。</p> <p>研究メンバーから岡本哲明氏、芝井清久氏が抜けた関係で、今年度は、認識共同体の同定方法の開発に注力した。環境の国際枠組み形成の基礎となる科学的知見の国際的共有とその後の対策の推進には、科学的な因果関係の認識と、問題への対処方針を共有した専門家からなる「認識共同体」が重要な働きをする (Haas 1989)。認識共同体という概念は、現在、国際政治学で広く用いられているが、その実際の様態 (構成員やその構成要因など) は、その実証の真否も含めて、十分には検証されていない。本年度は、認識共同体の共著ネットワークと、共著対象論文の言説分析を組み合わせるといふイノベーションを含んだ方法論の開発を行い、まだ開発の途中段階であるが、ある程度の目処はつけられたのではないと思われる。具体的には、認識共同体が共有する4つの要素である、1. 問題解決に取り組む意義・価値観の共有、2. 科学的知見の妥当性基準、3. 問題の因果関係、4. 政策構想、を言説分析によって論文で同定し、同定された論文がどのように引用されていくのかをトレースし、それらが4つ揃った時点で認識共同体が構築された、とする方法論である。</p>			

本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール	東北アジア地域は、国際政治的な日本外交の観点からみると、特にソフトパワーが非常に重要な役割を果たす可能性のある地域である。その理由として、日本が軍事的行動に出ることができない制約はもちろんのこと、軍事以外で頼るべき国際法も、東北アジア地域ではそれほど発達してきていないからである。本研究のように、日本外交にソフトパワーの視角を取り入れることによって、さまざまな研究分野が協働できる可能性を探ることも可能となる。特に、本研究では、科学技術社会学と国際政治との協働を実践した。		
研究集会・企画	研究会・国内会議・講演会など：0回	国際会議：0回	
	研究組織外参加者（都合）：0人	研究組織外参加者（都合）：0人	
研究成果	学会発表（1）本	論文数（1）本	図書（ ）冊
専門分野での意義	[専門分野名] 国際政治学	[内容] ソフトパワー概念の具体化と、認識共同体理論の発展に貢献しうる基礎的方法論の開発	
学際性の有無	[有]	参加した専門分野数：[2] 分野名称 [国際政治学、科学技術社会学]	
文理連携性の有無	[無]	特筆事項：	
社会還元性の有無	[有]	[内容] 日本が科学的知見を用いて外交を展開できるようにするための専門家コミュニティの構築の方法を提言するための基礎研究となっている。	
国際連携	連携機関数：0	連携機関名：	
国内連携	連携機関数：0	連携機関名：	
学内連携	連携機関数：0	連携機関名：	
教育上の効果	参加学生・ポスドクの数：0	参加学生・ポスドクの所属：	
第三者による評価・受賞・報道など	該当なし		
研究会計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題	認識共同体の構築は、ソフトパワーの一種である科学的知見を東北アジアにおける外交に用いるために必要であり、本年度の研究成果はそのための基礎的方法論を提供するものである。今後の課題としては、その方法論の精緻化である。具体的には、認識共同体が共有する4つの要素である、1. 問題解決に取り組む意義・価値観の共有、2. 科学的知見の妥当性基準、3. 問題の因果関係、4. 政策構想、を言説分析によって論文で同定するための分析手続きの定式化である。		
最終年度	該当 [有]		

本共同研究に関わる業績（発表予定含む）

[学会発表]

Hiro Katsumata and Shingo Nagata, "ASEAN and the BRI," paper presented at the International Studies Association (ISA) Annual Convention, Toronto, 30 March 2019.

[雑誌論文]

勝間田弘・永田伸吾「ASEAN と一帯一路 ——小国の連合による『バランス外交』の展開」『運輸と経済』第78巻，12号，2018年12月，121-127頁.

<最終年度報告>

研究題目	北東アジアにおける日本のソフトパワー
代表者	石井 敦
<p>共同研究の最終年度には全体を通して何が明らかになったのか、当初の目的も含めてその成果を800字程度でまとめてください。図版がある場合、別途JEPGで送ってください(2枚まで)。Webで公開します。</p>	<p>この研究の目的は「ソフトパワー」という観点から、日本が持つポテンシャルを明らかにすることである。ソフトパワーとは、文化的な魅力で外国の人々を惹き付け、自国の国益を高めていく力である。これは国際政治学における新しい視点だといえる。</p> <p>本研究の成果の一つとしては、理論および実証研究の整理である。研究のガイドとしたのは「文化交流」「政治交流」「知的交流」という三つのコンセプトである。もしソフトパワーというものが存在するのであれば、さらには、もし日本がこれを持っているのであれば、上記の三領域における国際的な交流への注目が有意義になるといえる。</p> <p>まず「文化交流」とは、ポップカルチャーや伝統文化の伝達により促進される。これらの伝達は、外国の人々に親日感情を抱かせる効果があるといわれている。では、一体どのような文化交流が有効なのだろうか。今年度の研究では、社会心理学の理論を援用しながら、さまざまな仮説を構築した。</p> <p>次に「政治交流」とは、社会で共有される規範や理念、イデオロギーの伝播により促進される。先行研究は、民主主義、市場経済、市民の権利、環境保全といった分野における新しい規範や理念は、それを提唱する国家に強大なソフトパワーを与えると論じている。もしこの命題が正しいのであれば、この観点から日本外交を理解する試みも有益だといえる。</p> <p>最後の「知的交流」について、本研究では認識共同体の同定方法の開発に注力した。環境の国際枠組み形成の基礎となる科学的知見の国際的共有とその後の対策の推進には、科学的な因果関係の認識と、問題への対処方針を共有した専門家からなる「認識共同体」が重要な働きをする(Haas 1989)。認識共同体という概念は、現在、国際政治学で広く用いられているが、その実際の様態(構成員やその構成要因など)は、その実証の真否も含めて、十分には検証されていない。本年度は、認識共同体の共著ネットワークと、共著対象論文の言説分析を組み合わせるといったイノベーションを含んだ方法論の開発を行い、まだ開発の途中段階であるが、ある程度の目処はつけられたのではないと思われる。具体的には、認識共同体が共有する4つの要素である、1. 問題解決に取り組む意義・価値観の共有、2. 科学的知見の妥当性基準、3. 問題の因果関係、4. 政策構想、を言説分析によって論文で同定し、同定された論文がどのように引用されていくのかをトレースし、それらが4つ揃った時点で認識共同体が構築された、とする方法論である。</p>
<p>成果公開状況、計画(研究者又は所属研究分野が作成した研究内容又は研究成果に関するWebも含む)</p>	<p>今後、認識共同体の同定方法を国際政治学の最高峰の雑誌の一つ、International Studies Quarterly に投稿する予定である。</p>

東北アジア研究センター 共同研究 成果報告書 2018

研究題目	和文) 東日本大震災後のコミュニティ再生・創生プロセスと持続可能性に関する実証的共同研究 英文) The ethnography of community reconstruction process and sustainability of Great East Japan Earthquake			
研究期間	2016 (平成28) 年度 ~ 2018 (平成30) 年度 (3年間)			
研究領域	(A) 環境問題と自然災害			
研究組織	氏名	所属・職名	専門分野	役割
	高倉 浩樹	東北アジア・教授	社会人類学	総括
	ボレーセバスチャン	災害科学国際研究所・准教授	社会人類学	記憶と記録
	山口 睦	山口大学・准教授	文化人類学	復興とビジネス
	呉屋 淳子	沖縄県立芸術大学・准教授	民俗芸能学	民俗芸能
	稲澤 努	尚絅学院大学・准教授	文化人類学	祭礼
	福田 雄	東北アジア・助教	社会学	慰霊と災害遺構
	久保田裕道	東京文化財研究所・無形民俗文化財研究室長	儀礼文化	民俗芸能
	関谷 雄一	東京大学総合文化研究科・准教授	文化人類学	震災と復興
	小谷 竜介	東北歴史博物館・学芸員	民俗学	震災と民俗
研究経費	学内資金	センター長裁量経費 [金額] 20万円		
	外部資金 (科研・民間等)	科研費 (基盤 C) 150万円		
	合計金額	170 万円		

<p>研究の目的と本年度の成果の概要 (600-800字の間で専門家以外にも理解できるようにまとめてください。)</p>	<p>本共同研究は、5年の集中復興期間を終え、復興・創生期間に入ろうとしている東日本大震災後の地域社会において、生業システム、復興ビジネス、文化遺産ガバナンス、記念施設と防災教育、地域コミュニティと民俗芸能、慰霊の国際比較といった視点に注目し、各調査地におけるコミュニティ再生・創生のプロセスを明らかにし、その持続性について多角的に検討する。とりわけ、コミュニティ再生・創生のプロセスが震災前の地域社会における各種資本とどのように関連し、持続性を担保しているのかを明らかにする。そして、その成果を、外部の研究者を交えた学術交流会において発表し、国内外における他の災害からの復興過程と比較を行い、東日本大震災の特徴や今後起こりうる問題の把握、コミュニティ創生への提言などを検討するものである。</p> <p>昨年度出版された『震災後の地域文化と被災者の民俗誌—フィールド災害人文学の構築』を踏まえたうえで、さらなる進展を見据え、今年度は国際ワークショップを主催したほか、台湾やデンマークでの国際会議、ユネスコ関連ワークショップ(アジア太平洋無形文化遺産研究センター主催)への参加と議論を通じて、これまでの研究成果を国際的な枠組みのなかで発信、深化することを試みた。これらの成果は、国際共著を含む学術図書(4冊)のほか国際学術誌の査読付き論文などの形で公開されている。また今年度は、東日本大震災やスマトラ島沖地震にかかわる災害人文学研究会を8回開催し、国内外から講師を招聘し議論した。このうち4回は震災にかかわるドキュメンタリー作品を上映し、映画監督や研究者とともに震災と映像表現にかんするディスカッションを行った。なお本共同研究は、当初センターの共同研究としてはじまったが、昨年度より代表者の高倉が本学の指定国立大学災害科学拠点プロジェクトの副拠点長に任命されることになった。これによって全学的な災害研究のなかで本共同研究が展開されることとなった。</p>			
<p>本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール</p>	<p>本研究は日本を対象とした災害研究であり、直接的には本センターの日本朝鮮半島分野の研究活動に資するものである。特に、この文化人類学・宗教学が中心となり、災害復興過程の社会文化的過程の解明と政策的な提言をも射程にいられた実践的知の解明を目指している点に意義がある。同時に本共同研究は地域比較の方法でも、新たな東北アジア地域研究に示唆を与えるものになっている。というのも、ロシア・モンゴルにおいて地球温暖化にもとづく地域社会への影響は洪水や雪害などの現象となって現れており、この点において災害復興における文化の役割の解明は、日本の知見だけにとどまらないからである。同時に、防災や災害の記録化という観点では、2004年のスマトラ沖地震津波などインドネシアなどの災害研究とも連携し、この点で比較アジア研究としての東北アジア研究センターの位置づけを強化する事にもつながっている。</p>			
<p>研究集会・企画</p>	<p>研究会・国内会議・講演会など：9回</p>	<p>国際会議：2回</p>		
<p>研究成果</p>	<p>学会発表(11)本</p>	<p>論文数(5)本</p>	<p>図書(4)冊</p>	
<p>専門分野での意義</p>	<p>[専門分野名] 文化人類学</p>	<p>[内容] 民族誌的な災害研究を進めるだけでなく、その知見を宗教学や民俗学を含めてフィールド災害人文学として提起した点。</p>		
<p>学際性の有無</p>	<p>[有]</p>	<p>参加した専門分野数:[5] 分野名称[文化人類学、民俗学、宗教学、社会学、文化財研究]</p>		
<p>文理連携性の有無</p>	<p>[有]</p>	<p>特筆事項：医学、看護学</p>		
<p>社会還元性の有無</p>	<p>[有]</p>	<p>[内容] 市民に開かれた映画上映&ディスカッションの場として、「災害人文学研究会」を4回開催</p>		

国際連携	連携機関数：2	連携機関名：コペンハーゲン大学災害研究センター（デンマーク）、独立行政法人国立文化財機構 アジア太平洋無形文化遺産研究センター（IRCI、ユネスコ関連団体）
国内連携	連携機関数：5	連携機関名：東北歴史博物館、東京文化財研究所、尚絅学院大学、東京大学
学内連携	連携機関数：2	連携機関名：文学研究科、災害科学国際研究所、農学研究科、環境科学研究科
教育上の効果	参加学生・ポストクの数：3	参加学生・ポストクの所属：東北アジア研・文学研究科
第三者による評価・受賞・報道など	東北放送「サタデーウォッチン」2018.10.13、「OH! バンデス」2019.1.28、NHK「てれまさむね」2019.2.7、J-com「デイリーニュース仙台」2019.2.2など	
研究会計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題	<p>本共同研究は、「東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用」（2013年度～2015年度）を発展させたものであり、東日本大震災後5年が経過した被災地において継続的な調査研究を行う研究者の新たなネットワーク構築を目指すものである。</p> <p>昨年度の学術図書出版とその成果報告会を踏まえた上で、震災の映像表現にかかわる問題について議論しその理解を深めた。震災映画の上映および映画監督や関連する研究者とのディスカッションの過程では、撮影時点からの被災地の変容や、震災との向き合い方の変遷といった主題が問われ続けることが明らかになった。400本以上ともいわれる震災映画をいかにアーカイブし、アクセス可能なものとするのかという課題が導き出された。</p>	
最終年度	<p>最終年度は、各自の共同研究を継続していくとともに、映像記録を主題とする研究会を実施し、映像をつかった災害民族誌研究を蓄積した。そうした結果、東北大から発信する独自の災害人類学研究を発展させ、それを東北大学災害科学拠点事業との連携させることができた。このことで災害人類学研究をより広い意味での学際的文脈に位置づけることができた。</p>	

本共同研究に関わる業績（発表予定含む）

[学会発表]

Takakura, Hiroki, “The Role of Intangible Cultural Heritage in the Disaster Recovery in Fukushima”
Asia-Pacific Regional Workshop on Intangible Cultural Heritage and Natural Disasters, Sendai
International Center, December 7, 2018

高倉浩樹「仕事場としての深いトンネル坑道：釜石鉱山の持続可能性、鉄鉱石から水へ」『第41回日本
映像民俗学の会』（沙流川歴史館レクチャーホール）2018年10月21日

Takakura, Hiroki, “The role of collective action for the post-quake fishing recovery in coastal Pacific
Tohoku and the consequences”, Disaster Workshop Coastal Communities and Disaster:
Perspectives from Asia , University of Copenhagen, September 9, 2018

Boret, Sébastien P., “Disaster Archives and Sustainable Development: The Case of the Great East Japan
Earthquake”, 1st Aceh Global Conference, Syiah Kuala University, October 10, 2018

福田雄「悲しみと向き合うための技法—インドネシア・アチェの津波記念行事を事例として—」『アジア・
アフリカにおける諸宗教の関心の歴史と現状』（上智大学）2019年2月9日

福田雄「無形文化財の復興に資する三次元計測に向けて」『第3回文化財方法論研究会』（奈良文化財研
究所）2018年11月23日

Fukuda, Yu and Hiroki Takakura, and Ryuusuke Kodani, “Toward the Interdisciplinary Studies of
Disaster Humanities: Preserving Tangible and Intangible Folk Cultural Properties by Three-
Dimensional Data”, Global Conference on the International Network of Disaster Studies in Iwate,
July 17, 2018

Fukuda, Yu and Boret, Sébastien P., “Theodicy of Tsunami: A Study of Collective Commemorations in
Aceh”, 東南亞宗教文化多元研討會, 国立成功大学 (台湾), June 9, 2018.

小谷竜介「被災物と災害前の地域文化」『災害から生まれた物：遺体、慰霊、遺族、遺物』（東北大学災
害科学国際研究所）2019年2月12日

Kodani, Ryuusuke, “Significance of Rescuing Intangible Cultural Heritage”, Asia-Pacific Regional
Workshop on Intangible Cultural Heritage and Natural Disasters, Sendai International Center,
December 9, 2018

Kodani, Ryuusuke, “Regional Culture to Covert into Cultural Property, Local Culture not to Covert
into Cultural Property”, Disaster Perceptions and Response in Times of Global Upheaval, (成都)
October 12, 2018

[雑誌論文]

Takakura, Hiroki, “Local Agricultural Knowledge as Time Manipulation: Paddy Field Farmers after the
Great East Japan Earthquake of 2011.” *Asian Ethnology* 77 (1/2) 257-284.

Boret, Sébastien P. and Akihiro Shibayama, 2018, The Roles of Monuments for the Dead during the
Aftermath of the Great East Japan Earthquake, *International Journal of Disaster Risk Reduction*,
29:55-62.

柴山明寛, 北村美和子, ボレーセバスチャン, 今村文彦, 「東日本大震災の事例から見えてくる震災アー
カイブの現状と課題」『デジタルアーカイブ学会誌』2 (3) : 282-286.

福田雄, 「苦難の神義論と災禍をめぐる記念式典—アチエの津波にかんする集団と個人の宗教的意味づけ」『宗教と社会』24 : 65-80.

[図書]

Takakura, Hiroki, "The role of intangible cultural heritage in the disaster recovery in Fukushima,"
Proceedings of the Asia-Pacific Regional Workshop on Intangible Cultural Heritage and Natural Disasters 81-89 2019年3月

関谷雄一・高倉浩樹 編著『震災復興の公共人類学』東京大学出版会、2019年1月

Takakura, Hiroki, "The Anthropologist as Both Disaster Victim and Disaster Researcher: Reflections and Advocacy", *Crisis and Disaster in Japan and New Zealand* (Susan Bouterey Lawrence E. Marceau, eds., Singapore: Palgrave Macmillan) 79-103 2019年1月

<最終年度報告>

研究題目	東日本大震災後のコミュニティ再生・創生プロセスと持続可能性に関する実証的共同研究
代表者	高倉 浩樹
共同研究の最終年度には全体を通して何が明らかになったのか、当初の目的も含めてその成果を800字程度でまとめてください。図版がある場合、別途JEPGで送ってください(2枚まで)。Webで公開します。	<p>本共同研究は、5年の集中復興期間を終え、復興・創生期間に入ろうとしている東日本大震災後の地域社会の復興過程の実態を人類学的観点から明らかにしようとするものである。最終年度においては、代表者やメンバーの多くが東北大学の災害科学世界トップレベル拠点事業に係わることになったため、より包括的な取組をすることとなった。具体的には、生業システム、復興ビジネス、文化遺産ガバナンス、記念施設と防災教育、地域コミュニティと民俗芸能、慰霊の国際比較といった視点に注目し、各調査地におけるコミュニティ再生・創生のプロセスを明らかにし、その持続性について多角的に検討することを目的として設定した。</p> <p>上記の目的に対し、本共同研究では①「震災映像のアーカイブ化と防災教育への活用」、②「民俗と健康」、③「三次元の民俗学」、④「災害の歴史研究」の四班の研究調査活動を行った。</p> <p>①「震災映像のアーカイブ化と防災教育への活用」では、学生・一般にひろく参加を呼びかける公開研究会として東日本大震災に関する映画の上映および、映画の製作者・映画の主題や撮影対象となった地域を専門とする研究者との意見交換を5回実施し、学際的ネットワークの形成を図った。②「民俗と健康」では、無形文化遺産の国際WSの主催と参加(IRCI、東北大学、CPH 災害研究センター)、国際共著学術図書3冊の刊行を行った。③「三次元の民俗学」では、宮城の獅子頭および南海トラフ被災予想地域の文化財の三次元計測を行った。④「災害の歴史研究」では、他分野との共同調査による学術論文の執筆および学際シンポジウムの開催を行った。また、本共同研究で本年度は8回の「災害人文学研究会」を開催した。うち5回が映画上映を伴う公開研究会であり、学生・一般を含め各回50名程度が参加した。</p> <p>これらの共同研究の成果は、震災をめぐる映像文化、民俗、文化財が被災コミュニティの再生や事前防災にきわめて重要な役割を果たしていることを示唆している。今後はこれらの知見が、東日本大震災ばかりでなく、ほかの災害や国外の災害の事例といかなる接続が可能なのか、理論的にも経験的にも検討することが重要な課題となる。</p>
成果公開状況、計画(研究者又は所属研究分野が作成した研究内容又は研究成果に関するWebも含む)	<p>研究成果の一部はすでに『震災後の地域文化と被災者の民俗誌—フィールド災害人文学の構築』(高倉浩樹・山口睦編、新泉社、2018年1月)、『震災復興の公共人類学』(『関谷雄一・高倉浩樹編、東京大学出版会、2019年1月』にて公開されている。またIRCIのワークショップの報告については、<i>Proceedings of the Asia-Pacific Regional Workshop on Intangible Cultural Heritage and Natural Disasters</i> として2019年3月に公開される。そのほか2019年2月に開催された国際ワークショップ『災害から生まれた物：遺体、慰霊、遺族、遺物』は、2019年5月にその報告書がオンライン上で公開される予定である。また震災ドキュメンタリー作品の監督、プロデューサーなどへのインタビュー集(映画製作の実現までのプロセス、被写体個人やコミュニティとの関係の形成手法、震災記録としての意図、震災に関する映画を社会に流通させていくための取組、ドキュメンタリー映画の持つ防災や減災に向けた映像の可能性、研究者との協力の可能性について、これまでの活動および現在の取組の話をつづけている)については、2019年度に出版物としてまとめる計画である。</p>

東北アジア研究センター 共同研究 成果報告書 2018

研究題目	和文) 東北アジア辺境地域多民族共生コミュニティ形成の論理に関する研究 英文) Study on the Community Formation in the Multi-Ethnic Northeast Asian Border Areas			
研究期間	2015 (平成27) 年度 ~ 2018 (平成30) 年度 (4年間)			
研究領域	(C) 移民・物流・文化交流の動態 (E) 紛争と共生をめぐる歴史と政治			
研究組織	氏名	所属・職名	専門分野	役割
	岡 洋樹	東北アジア研究センター・教授	歴史学	研究の総括、中蒙辺境における社会共生の研究
	堀江 典生	富山大学極東地域研究センター・教授	経済学	露中辺境における社会共生の研究
	藤原 克美	大阪大学大学院言語文化研究科・教授	経済学	露中辺境における社会共生の研究
	サヴェリエフ・イゴリ	名古屋大学大学院国際開発研究科・准教授	経済学	露中辺境における社会共生の研究
	広川 佐保	新潟大学人文学部・准教授	歴史学	中蒙辺境における社会共生の研究
	橘 誠	下関市立大学経済学部・准教授	歴史学	中蒙辺境における社会共生の研究
研究経費	学内資金	センター長裁量経費 [金額]	運営費交付金(個人研究費) [金額]	総長裁量経費 [金額]
	外部資金	科研費他政府資金 [金額] 3,000,000円	民間の研究助成 [金額]	
	合計	3,000,000 円		
研究会等の内容	研究会： 回	国内会議： 1 回	国際会議： 回	その他： 回
	組織外参加者数(都合)：	組織外参加者数(都合)：24名(発表者・討論者・司会)	組織外参加者数(都合)： 名	組織外参加者数(都合)：

<p>プログラム</p>	<p>シンポジウム 「北東アジアの鳴動：朝鮮半島、中露国境地域、蒙中露辺境」 主催：人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究」富山大学・北海道大学・東北大学拠点 共催：北東アジア学会</p> <p>日時：2019年1月26日(土) 14:00-18:30、1月27日(日) 10:00-15:00 場所：富山大学経済学部7階大会議室</p> <p>2019年1月26日(土) 14:00～14:15 開会の辞 遠藤 俊郎(富山大学長) 松野 周治(北東アジア学会長) 堀江 典生(富山大学研究推進機構極東地域研究センター長)</p> <p>14:15～16:15 セッション1 ロシアと朝鮮半島問題(学会連携企画) 三村 光弘(公益財団法人環日本海経済研究所)：朝鮮半島問題と周辺国の関与 加藤 美保子(北海道大学)：プーチン時代の対北朝鮮政策：軌跡と展望 堀江 典生(富山大学)：ロシアの東方政策と朝鮮半島問題 座長：新井 洋史(公益財団法人環日本海経済研究所) 討論：福原 裕二(島根県立大学)、堀内 賢志(静岡県立大学)、松野 周治(立命館大学)</p> <p>16:30～18:30 セッション2 朝鮮半島問題に対する多層的視座(北大・富山大拠点企画) 福原 裕二(島根県立大学)：北朝鮮の『安全の保障』から見た非核化問題 池 直美(北海道大学)：『故郷は遠きにありて思うもの』 ：脱北者を取り巻く現状と課題 柳 学洙(東京大学)：北朝鮮経済の『市場化』：現状と今後の展望 座長：馬 駿(富山大学) 討論：三村 光弘(公益財団法人環日本海経済研究所)、天野 尚樹(山形大学)、 金 奉吉(富山大学)</p> <p>2019年1月27日(日) 10:00～12:00 セッション3 中露国境地域の新たな可能性(北大拠点企画) 岩下 明裕(北海道大学)：ボーダースタディーズにおける中露国境地域の意味 中村 正人(『地球の歩き方』編集者)：ボーダーツーリズム ：中国東北地方21の国境物語 朱永 浩(福島大学)：中露国境貿易の過去と現在 座長：田畑 伸一郎(北海道大学) 討論：堀江 典生(富山大学)、松野 周治(立命館大学)、高屋 和子(立命館大学)</p> <p>13:00～15:00 セッション4 蒙中露辺境における多民族共生(東北大拠点企画) 広川 佐保(新潟大学)：近代モンゴルに暮らした漢人の歴史 ：「旅蒙商」から「労働者」そして「蒙古帰僑」へ サヴェリエフ イゴル(名古屋大学)：第一次世界大戦期の在露中国人の越境的空間 藤原 克美(大阪大学)：満洲国における百貨店の役割 橘 誠(下関市立大学)：モンゴル国における関税をめぐる露中の「交渉」 ：20世紀初頭の外交と多民族共生 座長：堀江 典生(富山大学) 討論者：岡 洋樹(東北大学)</p> <p>15:00 閉会の辞</p>
--------------	---

<p>研究の目的と本年度の成果の概要 (600-800字の間で 専門家以外にも理解 できるようまとめて ください。)</p>	<p>清代から近代にかけての東北アジア辺境地域では、活発な人と物の移動が見られた。この移動は、辺境部にマルチ・エスニックな社会を出現させた。辺境社会に関する従来の研究においては、民族間の相克・対立や、文化的同化やネーション・ステートの形成といった問題に関心が集まってきた。しかし辺境部に形成された複合的な社会においては、決して単に対立構造のみが形成されたわけではなく、現実的な問題を解決する中で多民族の共生構造も生み出された。統治を担う国家の政策も、このような共生構造に規定されながら定立されたのであって、一方的な対立構造のみで捉えることはできない。本研究では、清代において長城線・劉条辺牆線を挟んで区分されていた中国本土とモンゴル地域、国境を挟んだロシアと中国の間の人と物の移動が生み出す民族的共生構造の解明を目的とする。前者に関しては、漢人の移住によって定着化したモンゴル人と漢人移住者の社会関係とこれに対する国家統治の在り方が問題となり、後者においては主に清末から民国期・満洲国期におけるロシア人と中国の関係の様態が問題となる。この研究を通じて、共生構造の複合的性格を、当事者たる一方の民族・国家の立場からではなく、双方向的・相補的な観点から解明することを目指す。また本研究を通じて、歴史上の問題としてばかりでなく、現在における東北アジアの多民族的構造の理解にも示唆を得ることが期待される。</p> <p>本年度は、本プロジェクト最終年度にあたり、各研究分担者は成果のまとめを行い、2019年1月に開催された上記会議において、成果を報告した。この会議は、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクトに参画する北大拠点、東北大拠点、富山大拠点が北東アジア学会とともに企画開催したもので、本共同研究は、セッション4「蒙中露辺境における多民族共生」を企画・実施した。セッションでは本研究代表岡洋樹が科研費プロジェクトの趣旨と実施状況を説明した後、研究分担者広川佐保氏が中蘇蜜月時代に支援労働力としてモンゴルに入った中国人労働者の役割と、1983年にモンゴルから帰還するまでの経緯を論じ、サヴェリエフ・イゴル氏は第一次大戦期にロシアに滞在していた中国人労働者の動向を論じ、藤原克美氏は日本の傀儡国家である満洲国において、時代状況を反映した百貨店の役割を論じた。また橘誠氏は、清朝から独立を宣言したボグド・ハーン政治時代のモンゴルにおける、関税をめぐるロシア、モンゴル、中国の交渉と、現地に暮らした各国民の動きを論じた。岡は司会を行うとともに、科研費プロジェクトで実施した清代モンゴル人の越境移住活動についての研究内容を紹介した。堀江典生は、セッション1「ロシアと朝鮮半島問題」において、「ロシアの東方政策と朝鮮半島問題」と題する報告を行った。各研究分担者の成果は、論文集として2019年度に刊行することとして準備を進めている。</p>
<p>本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール</p>	<p>本研究により、東北アジア諸国、とくにロシア、中国、モンゴルにおける国境を越えた事象としての人の移動と移動先での社会的共生の様態解明は、東北アジアの国境を越えた研究を不可避とするものである。また人の移動の問題を捉えるためには歴史的な視座が必要となることから、経済学などの現代研究と歴史学による過去の事象研究を結びつける学際的研究の成果としての意義があると考えられる。また東北アジアにおける活発な人の移動の解明は、同地域の地域的一体性を示す事例であり、地域研究枠組みとしての東北アジアの有効性を示すものといえる。</p>
<p>東北アジア研究センターの活用状況 (公募共同研究のみ記載)</p> <p>※東北アジア研究センターの設備・資料などの活用、研究者との共同関係について、具体的に記入してください。</p>	<p>該当なし</p>

研究成果	学会発表(13)本	論文数(11)本	図書()冊	
専門分野での意義	[専門分野名] 歴史学・経済学	[内容] 移民の研究は、長期にわたる持続的な現象であり、かつ労働移民の場合がそうであるように、地域経済に大きな影響をもつ現象でもある。それゆえ、移民の研究は経済学的な事例研究を歴史学的方法による過去の事例研究との接続を必要とする。本研究は、事例を扱う経済学分野と歴史学分野の研究者が協力するとともに、現地研究者との協力を得ることにより、現地主義的な視点をも確保している点に意義がある。		
学際性の有無	[有]	参加した専門分野数:[2] 分野名称[経済学・歴史学]		
文理連携性の有無	[無]	特筆事項:		
社会還元性の有無	[有]	[内容] 移民の存在は、経済的な意義のみならず、異文化接触による民族問題などの政治的な意味も有する。本研究の成果は、現地社会における異文化共生に関する基盤的知識を提供するものであり、社会還元性を有する。		
国際連携	連携機関数:	連携機関名:	特記事項:	
国内連携	連携機関数: 9	連携機関名: 東北大学東北アジア研究センター、富山大学極東地域研究センター、名古屋大学大学院国際開発研究科、大阪大学大学院言語文化研究科、新潟大学人文学部、下関市立大学経済学部、北海道大学スラブ・ユーラシア研究所、人間文化研究機構、北東アジア学会		特記事項: 人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究推進事業」による企画としてシンポジウムを実施し、本共同研究メンバーでセッションを担当した。
学内連携	連携機関数:	連携機関名:	特記事項:	
教育上の効果	参加学生・ポスドクの数:		参加学生・ポスドクの所属:	
第三者による評価・受賞・報道など	本共同研究を運用するプロジェクト研究ユニットの外部中間評価の中で、本共同研究についての評価を受けている。			
研究会計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題	本年度は、科研費基盤研究(B)により運営してきた本共同研究プロジェクトの最終年度にあたり、これまでの成果をまとめて成果報告を行った。それぞれの研究には、2015～16年度の「文献研究期」の成果と、2017年度の「対話研究期」に行ったロシア・中国・モンゴルの研究者との意見交換を反映して、研究のまとめを行った。最終の成果発表の場として、人間文化研究機構のプロジェクトであるシンポジウムの中で研究報告を行い、広く北東アジア研究者に周知した。今後は成果を論文化し、2019年度内に刊行の予定である。			
最終年度	該当 [有]			

本共同研究に関わる業績（発表予定含む）

[学会発表]

Hiroki Oka, "Sharing life at the bottom: "Slaves" in the Qing era Mongolia", 第四届清朝与内亚国际学术研讨会, 东北师范大学历史文化学院, 長春, 30 June -1 July, 2018.

Ока Хироки, "Манжийн хууль эс хэрэгжээний учир", ЕВРАЗИЙН НҮҮДЭЛЧДИЙН ТҮҮХЭН ЗАМНАЛ: ТӨР, НИЙГЭМ, СОЁЛ. (History of Eurasian Nomads: state, society and culture), Ulaanbaatar, Mongolian Academy of Sciences. 6-8 September, 2018.

Hiroki Oka "Imperial Rule and Migrants: The Qing's governance on the cross-boundary activities of migrant people in Mongolia", The 16th Annual Meeting of the Northeast Asia Academic Network (NAAN), jointly organized by Central South University of Forestry and Technology (CSUFT), Kangwon National University (KNU), and University of Toyama November 9-11, 2018

堀江典生, Labour productivity and migration, The 3rd Labour Forum, Expoforum (ロシア, サнкт・ペテルブルク市)

堀江典生, Community Maintenance by Migrant Workers in Rural Tajikistan, 国際コンファレンス "Migration Processes: Migrants Adjustment and Integration Issues", 2018年10月2日, 北カフカス連邦大学 (ロシア, スタヴロポリ市)

堀江典生, GATS Mode 4 in Russia's Migration, 国際コンファレンス "Evolution of International Trading System: Prospects and Challenges", 2018年10月25日, サнкт・ペテルブルク国立大学(ロシア, サнкт・ペテルブルク市)

Igor Saveliev. "The Recruitment of Chinese Contract Workers by the Murmansk Railroad in Northeast China during WWI", International symposium "Interaction models in East Asia in the XX-XXI centuries: sociocultural and international dimension", 2019年1月12日、 Санкт・ペテルブルグ国立大学東洋学部

サヴェリエフ・イゴリ「第一次世界大戦期の在露中国人の越境的空間」シンポジウム「北東アジアの鳴動：朝鮮半島, 中露国境地域, 蒙中露边境」、富山大学、2019年1月27日。

Хирокава Сахо, "Монголд оршин суугч гадаад харьяат нар: газрын асуудалд холбогдох XX зууны түүхэн сурвалжуудаас", The 11 th International Symposium in Ulaanbaatar "Kyakhta and Khüriye: From the Viewpoints of Eurasia" Mongolian National University, Ulaanbaatar, Mongolia, 2018.8.31.

広川佐保「近代モンゴルに暮らした漢人の歴史—「旅蒙商」から「労働者」そして「蒙古帰僑」へ」人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究」／北東アジア学会連携シンポジウム北東アジアの鳴動：朝鮮半島, 中露国境地域, 蒙中露边境、2018年1月27日

Тачибана Макото, Монгол дахь Далай ламын сангийн үйл ажиллагаа: Ханддорж вангийн өрийн жишээн дээр, Олон улсын эрдэм шинжилгээний хурал, Монголчуудын XX зууны эх: Түүх, өв соёл, үнэт зүйл, 2018. 8.18, Улаанбаатар.

橘誠「モンゴル国における関税をめぐる露中の『交渉』—20世紀初頭の外交と多民族共生—」, シンポジウム「北東アジアの鳴動：朝鮮半島問題, 中露国境, 蒙中边境」, 富山大学, 2019. 1. 27.

藤原克美「満洲国における百貨店の役割」シンポジウム「北東アジアの鳴動：朝鮮半島, 中露国境地域, 蒙中露边境」、富山大学 (共催：北東アジア学会)、2019年1月27日、富山大学

ムヒナ・ジナーラ (藤原克美訳)「女性と戦争：戦時における女性の個人生活 (1943年のスターリィ・オスコルールジャヴァ間鉄道建設を例として)」『セーヴェル』、査読無、35号、2019年 (Forthcoming)

[雑誌論文]

Hiroki Oka. "The Mobility of Mongolian Banner Subjects in the Mid-Qing Era." *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*, No.76, 2019 (印刷中)

松野周治・堀江典生・三村光弘, 「鼎談：北東アジア経済圏の現実と展望」『経済』第281号, 2019年, pp. 109-130 (査読なし)。

堀江典生, 書評:Савельев И. Р., Китайцы на Белом море: История трудовой миграции 1915-1919 годы. М., Союз Дизайн. 2017. 304с., 『ロシア史研究』第102号, 2018年, pp. 121-125 (査読なし)。

Norio Horie, Community maintenance by migrant workers in rural Tajikistan, В. С. Белозеров (ред.) Миграционные процессы : проблемы адаптации и интеграции мигрантов, Сборник материалов IV международной научно-практической конференции, Издательство Северо-Кавказского федерального университета, 2018, С.163-168. (査読なし)

堀江典生「海外に活路を見いだす出稼ぎ労働者たち：その暮らしと故郷との絆」『ウズベキスタンを知るための61章』明石書房, 2018年, pp. 312-316 (査読なし)

Igor Saveliev. "Chinese Labor in the Russian War Effort" David Wolff, Yokote Shinji, Willard Sunderland (eds), *Slavica*, Bloomington: Indiana, 2018年9月, pp. 259-282.

サヴェリエフ・イゴリ「革命の人質—ロシアにおける中国人契約労働者、1916-1918年」『ロシア史研究』第102号、ロシア史研究会、2018年11月、67-80頁。

Igor Saveliev. Homeland and Diasporic Space: Transnational Practices of Central Asian and Sakhalin Koreans, *Eurasia Border Review*, no.9, 2018, fall issue, pp.29-44.

橘誠「清朝崩壊後のモンゴル・チベット関係—蒙蔵条約の同時代的意義に着目して」『下関市立大学論集』(査読なし), 62-1, 2018.5, pp.71-83.

藤原克美「1930年代チューリン百貨店のロシア人」『セーヴェル』、査読有、34号、2018年、85-99頁。

藤原克美「ワシントン D.C. における中国のロシア人関係資料収集—ナショナル・アーカイブおよび議会図書館の利用に関して—」『セーヴェル』、査読有、35号、2019年 (Forthcoming)。

<最終年度報告>

研究題目	東北アジア辺境地域多民族共生コミュニティ形成の論理に関する研究
代表者	岡 洋樹
<p>共同研究の最終年度には全体を通して何が明らかになったのか、当初の目的も含めてその成果を800字程度でまとめてください。図版がある場合、別途JEPGで送ってください(2枚まで)。Webで公開します。</p>	<p>本研究は、18～21世紀の時期、大清国・中華民国・中華人民共和国、帝政ロシア・ソ連・ロシア連邦という広大な領土をもつ国家の統治下にあった東北アジア諸地域(とくに中国東北部、モンゴル、ロシア・シベリア及び極東)において見られた人の移動の様態と、受け入れ側の移民に対する対応などの検討を通じて、移民と移住先の住民との社会的共生関係の形成に関わる課題群の解明を目的としたものである。研究グループは、露中国境地域班と、中蒙辺境地域班によって構成した。17世紀にユーラシア東部を支配下においた清朝の統治は、中国本土をモンゴルを含む地域で平和な安定した時期を現出した結果、中国北部からモンゴル、東三省に及ぶ広い地域で活発な人の移動を生み出した。この人の動きは、従来考えられていたような内地からの余剰人口の北上だけでなく、モンゴルの盟旗属下のモンゴル人の出稼ぎ労働、巡礼、交易のための所属旗からの外出と越境移動を含んだ。清朝北方領土で活性化した移動は、内地経済の北方への拡大とともに、19世紀末にはロシア極東へも及ぶ。モンゴル同様人口希薄な極東・シベリアでは労働力の不足が慢性化しており、中国や朝鮮半島からの労働力移入は不可欠であった。一方中国東北部や外モンゴルに進出したロシア資本は、ハルビン等の拠点において百貨店事業を展開したが、その活動は露・中・日といった近隣の文化・経済に密接な結びつきをもった。また1911年末に独立を宣言したモンゴルでは、ロシア資本と従来からモンゴルを商圏としていた漢人商人が競合したが、モンゴル独立政府による関税の賦課を巡って協働する側面もあった。20世紀後半になると、社会主義体制に包摂された中・露・蒙の三国で、社会主義建設のための経済支援が行われたが、この過程で中国人労働者がモンゴルに入った。しかし中蘇対立後、モンゴルにおける中国人の地位は不安定なものとなり、1983年の強制送還に至る。中国の経済力と膨大な人口の進入は、中国と国境を接するロシアやモンゴルにとって労働力として歓迎される一方で、ゼノフォビックな警戒をも生み出している。21世紀初頭のロシアでは中国人移民の存在をディアスポラと見るか否かが議論されたが、ロシア側に存在する警戒感に対して、実際の移民の脅威は過大に評価されている。以上の研究を通じて、人口希薄な中国北方辺境やモンゴル、シベリア・極東は、労働力の不足という問題を共通して抱えてきたのであり、外国、とくに中国や朝鮮からの労働力移入は不断に進行したといえる。その結果、移民を脅威とする言説を生み出している。この移民に対する要請と警戒がない交ぜになった状況は、18世紀以来の東北アジアに通底する問題であり続けてきた。しかしその一方で、移民と移住先住民の間にはデ・ファクトな共生関係が生み出されてきたことが、各研究分担者の研究から明らかにされた。将来の地域の発展は、かかるデファクトな共生を基盤としていくことが考えられ、東北アジア地域理解に重要な視点を示していると考えられる。</p>
<p>成果公開状況、計画(研究者又は所属研究分野が作成した研究内容又は研究成果に関するWebも含む)</p>	<p>研究成果を論文集として刊行の予定。</p>

(3) 上廣歴史資料学研究部門報告書

【平成30年度実績報告書】

◇はじめに—平成30年度の活動—

平成29年度より東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門は第二期を開始し、平成24年度からの第一期から通算すると今年度は7年目の活動を展開することができた。公益財団法人上廣倫理財団 前会長 故上廣榮治先生には、上廣歴史資料学研究部門の設立から温かいご理解を賜り、「地域とともに歩む歴史学」を掲げた調査・研究に邁進させていただいている。上廣榮治先生のご冥福をお祈り申し上げ、記して深謝の旨を表したい。また、現会長 上廣哲治先生には、変わらず上廣歴史資料学研究部門に対して多大なご支援を頂戴していることを心より御礼申し上げる次第である。

上廣歴史資料学研究部門（以下、「部門」）の人員構成は部門長の平川新、専任教員として准教授1名、助教2名を配置し、今年度も部門の調査・研究活動を積極的に推進することができた（友田昌宏助教の任期満了に伴う退任、10月1日付けで藤方博之助教が着任）。また、今年度は事務補佐員6名（うち1名は期間限定）を雇用し、歴史資料の整理作業や写真撮影をおこないながら、それぞれの資料保全に関する技術・知識が高められた。事務補佐員の作業は部門の活動を補完しながら、第二期の目標のひとつである人材育成という観点からも有益な発展をなしており、今後も組織全体の活発な動きを目指していきたい。

例年と同じく、歴史資料保全活動や古文書講座を中心的事業に据えながら、新規事業への挑戦などを含みつつ、今後につながる活動の模索にも意欲的に取り組んでいる。東北大学はもとより、宮城県下の自治体や地域団体から部門との連携を期待する声が数多くあり、学術・社会両面の貢献を意識しながら、日々の調査・研究を一段と高めていく必要性を痛感している。

今年度も歴史資料保全活動を主軸に共同事業を展開する東北大学災害科学国際研究所人間社会対応研究部門歴史資料保存研究分野（以下、「災害研」）、NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク（以下、「宮城資料ネット」）と継続して協力体制を構築し、調査・研究・発信のさまざまな場面で連携することができた。たとえば、2018年4月に開催された宮城県柴田郡川崎町の講演会では災害研と部門の共同調査による成果が示され、部門の事務補佐員による宮城資料ネット保管資料の撮影作業なども順調に進んでいる。今後も両組織との協力・連携を通して、歴史資料の有効な活用方法を検討していきたい。

古文書講座は1年間で合計13講座・185回の講義・のべ3,337名（実数およそ400名）を記録した。基本的には前年度とほぼ同じ規模で推移しているが、大きな変化となったのは部門春季古文書講座・秋季古文書歴史講座（合計10回）を東北アジア研究センター主催・部門運営に切り替えたことである。部門が手掛ける古文書講座への参加希望は年々増加しており、どのような方向性が最適であるのかを議論しながら、さまざまな方策を練ってきた。スタッフと時間の限度があることは承知のうえで、できるだけ各方面からの要請に応じられるよう努めていきたい。

以下、本報告書で今年度の成果や個別事業の取り組みについて詳しく説明していきたい。

◇部門スタッフ紹介

部 門 長：平川 新 副部門長・准教授：荒武賢一郎
助 教：高橋 陽一、友田 昌宏（9月30日退任）、藤方 博之（10月1日着任）
事務補佐員：後藤 三夫（NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク会員）
竹内 幸恵（NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク会員）
佐々木結恵（宮城県公文書館専門調査員）
高橋 直道（東北大学大学院文学研究科博士前期課程1年）
石澤 夏巳（東北学院大学文学部歴史学科4年）
吉田佐智子（白石古文書サークル会員、白石市図書館調査期間のみ）

◇第2期（平成29～33年度）：テーマ「地域から考える歴史資料学」

5つの活動目標

1. 歴史資料保全活動
 2. 歴史資料学の調査と研究プロジェクト
 3. 歴史資料学の人材育成
 4. 地域連携
 5. 歴史資料の公開
-

◇平成30年度 上廣歴史資料学研究部門 主な活動成果

【古文書目録作成・撮影作業】

石巻市庄司恵一氏所蔵史料、石巻市林家文書、大河原町佐藤家文書、加美町塩沢家文書、栗原市阿部楼文書、栗原市大津和子氏所蔵史料、栗原市岩ヶ崎中村家文書、黒澤家文書、白石市渡辺家文書、白石市一條家文書、白石市図書館所蔵資料、仙台市大槻家文書、東松島市（旧矢本町）姉齒家文書、南三陸町遠藤家文書、北海道当別町吾妻家文書

※太字・下線付き＝目録作成または撮影作業を次年度も継続（その他は作業完了）

【古文書・歴史講座】

〈通年〉

- 岩出山古文書を読む会・岩出山教室（協力：部門、毎月2回、於大崎市岩出山地区公民館）
- 片平古文書会（協力：部門、毎月2回、於仙台市片平市民センター）
- 白石古文書サークル（協力：部門、毎月1回、於白石市中央公民館）
- 学生向け古文書を読む会（主催：部門、前期・後期授業期間毎週1回、於学内）
- かわうち古文書村（協力：部門、毎月1回、於せんだい環境学習館たまきさんサロン）
- もみじの会（協力：部門、毎月1回、於東北学院大学）
- 東北アジア研究センターくずし字入門ゼミ（主催：部門、毎月2回、於学内）

〈定期〉

- 白石市中央公民館「初めての古文書講座」(主催：部門・白石市教育委員会・白石市中央公民館、前期2018年5月16日～8月8日、後期10月3日～11月14日、全10回)
- 東北アジア研究センター春季古文書講座(企画・運営：部門、2018年6月8日～7月13日、全5回)
- アメリカ・シカゴ大学「2018 Reading Kuzushiji Workshop」(主催：シカゴ大学東アジア研究所〈CEAS〉、協力：部門、2018年6月11～15日)
- 東北大学夏季古文書講座(主催：歴史文化NW事業東北大学拠点、企画：部門、2018年8月20～24日)
- 東北アジア研究センター秋季古文書歴史講座(企画・運営：部門、2018年11月9日～12月14日、全5回)
- 仙台市博物館くずし字講座「はじめての「くずし字」」(主催：部門・仙台市博物館、2019年1月16日～2月6日、全4回)

【展示会】

- 利府町郷土資料館平成30年度ミニ企画展「明治・大正時代の利府Ⅱ～史料からみる学校の歴史～」(監修：部門、主催：利府町郷土資料館、2018年4月28日～6月24日、ギャラリー・トーク6月22日)
- 秋保温泉岩沼屋特別展示「仙台市橘家文書」(監修：部門、2018年8月1日～2019年3月)
- 白石市図書館「郷土を知る月間2018企画展 戊辰戦争と白石」(主催：白石市図書館、協力：部門、2018年10月11日～12月6日、)
- 国登録有形文化財佐藤屋企画展「戊辰戦争と大河原」(主催：佐藤屋プロジェクト、協力：部門、2018年10月19～21日、於大河原町佐藤屋)

【講演会・セミナー】

- 講演会「川崎の記憶～古文書からよみがえるふるさとの歴史～」(主催：部門・災害研・川崎町教育委員会、2018年4月21日、於川崎町山村開発センター)
- 公開セミナー「非母語話者への文語文教育を考えるー日本研究のリテラシー養成に向けてー」(主催：東北大学高度教養教育・学生支援機構 言語・文化教育センター、共催：部門、2018年8月9日、於学内)
- 第1回上廣歴史資料活用講座(主催：部門、2018年12月1日、於学内)
- 大崎市岩出山公民館主催「初めての古文書講座 公開講演会一講座：地域の歴史を学ぶ◎岩出山VI一」(共催：部門・岩出山古文書を読む会、2019年3月3日)
- 東北アジア研究センター古文書講座・古文書歴史講座関連企画講演会「みちのく歴史講座」(主催：部門、共催：東北大学東北アジア研究センター、2019年3月22日、於学内)

【来訪】

- 東北アジア研究センター外国人客員研究員アルド・トリーニ氏(イタリア・ヴェネツィア、カ・フォスカリ大学<通称：ヴェネツィア大学>准教授、2018年6月30日～9月1日)

1. 歴史資料の保全活動

◎概要：今年度の成果

今年度の歴史資料保全活動は、部門スタッフが主体となって**15件の文書群**について調査・整理・文書目録・写真撮影・分析の作業をおこなった（**撮影コマ数：約48,000コマ、文書目録作成：6,016点**）。このうち前年度からの継続は5件、新規に着手したものは10件である。継続分については白石市渡辺家文書など数千点から2万点以上の大きな文書群で、関係する資料調査組織・自治体・宮城資料ネット・災害研と協力しながら、随時作業を進めていく形で対応してきた。新規着手分は、部門の保全活動をご存じの方から依頼を受けて調査を開始したものや、宮城資料ネットが所蔵者から依頼を受けて保管する歴史資料などが多くを占める。前者は主催する古文書講座・歴史講演会のほか、専任教員が成果をまとめた著作などの普及で宮城県下における積極的な活動が認知されたことを示している。それとあわせて宮城資料ネットや災害研にも多くの調査依頼があり、それらをできるだけ早く対応すべく、部門では宮城資料ネット保管資料の整理や写真撮影に協力した。

人員の配置では、部門専任教員3名、学内で従事する事務補佐員5名、学外調査の事務補佐員1名、外部の目録作成担当者2名、そして岩出山古文書を読む会の有志や宮城資料ネットの会員各位など、歴史資料保全活動に理解を示し、ボランティアで協力してくださる皆様のおかげをもって古文書調査が支えられている。また、自治体の教育委員会文化財担当者や学芸員の方々にもご支援をいただき、各地において歴史資料を守り、そして継承することへの理解は年々増してきていると実感できた。以下にも詳述するように歴史資料の取り扱いを通じて、このような部門と関係各位の連携を強化できたことはひととき大きな収穫といえよう。

◇平成30年度：歴史資料保全活動一覧

・大河原町佐藤源之家文書（主担：荒武）

所蔵者の佐藤源之氏（東北大学東北アジア研究センター教授）より2018年9月に実家（宮城県柴田郡大河原町、国登録有形文化財「佐藤家住宅」）の土蔵で古文書を発見したので調査をしてほしいとの要請があった。同家の古文書は以前、宮城資料ネットで保全活動が実施されて東北歴史博物館に寄託済であるが、今回は新たに443点の所在を確認することができた。10月から11月にかけて全点を借用し、事務補佐員によって封筒詰め・写真撮影作業をおこなった（11月27日、所蔵者へ撮影画像とともに原本を返却）。写真画像をもとに文書目録作成（担当：松岡京子）を実施し、所蔵者へ完成した文書目録を提供する（2019年4月の予定）。

おもな内容としては、明治時代初期から後期にかけて毎年作成される「日記（佐藤家の記録）」が極めて重要なほか、歴代当主が収集した書籍類（江戸時代から明治・大正時代）も貴重な資料といえる。日記の記述については今後の課題であるが、佐藤家の手掛けていた養蚕・生糸・醸造・土地経営などについて解明する糸口になり、これは大河原町周辺の近代史研究にも寄与するであろうと推測している。昭和時代初期に建てられた邸宅は国有形登録文化財になっており、現在では地域の伝統文化を発信する拠点にもなっている（後述：「大河原町佐藤屋プロジェクト企画展」）。歴史資料と建造物の研究を進めることにより、今後の地域文化継承の原動力になることが期待される。

・加美町塩沢家文書（主担：藤方）

塩沢家は、代々仙台藩伊達家に仕えた武士（はじめ知行高259石、のち300石）であった。仙台藩士の系譜を伝える『伊達世臣家譜』によると、塩沢五郎左衛門が子どもを亡くして死去した際、2代

藩主・伊達忠宗がこれを憐れみ、牢人・水野市郎右衛門清次に塩沢家の名跡を継がせたという。清次は、元和8年(1622)に改易となった最上家の旧臣である。塩沢家の屋敷地は、仙台北下と加美郡下新田村(現・加美町下新田)に所在したが、現在は前者に本家、後者に塩沢日出夫氏一家(本文書の所蔵者)が居住している。第二次世界大戦中に古文書を仙台から下新田へ移動させたために戦災を免れ、その際に建てた倉庫のなかで今日まで文書群が残ることになった。

調査のきっかけは、加美町文化財保護審議委員を務める渡邊哲氏より、部門に文書群の情報が寄せられたことである。また、渡邊氏や塩沢家と交友関係にある獣医師・遠藤眞幸氏からも部門に連絡があり、調査に際して所蔵者との仲介の労をとっていただいた。2018年11月2日に高橋・藤方で塩沢家を訪問して文書群の概要を把握し、同年12月・2019年1月・3月に合計3回の調査を実施した(それぞれ第1・2・3回とする)。調査着手段階から史料群は倉庫から母屋に搬出されていた状態(便宜上「母屋分」とする)で、書籍類が大多数を占めていた。書籍以外では、塩沢家と所縁のある里見家(仙台藩士、2代仙台市長・里見良顕を輩出)関係の書簡類が木箱1箱にまとめられており、新たな史実の発見が注目される。これまで3回の調査では藤方・高橋のほか、事務補佐員3名(後藤三夫、竹内幸恵、佐々木結恵)も同行して作業にあたった。第2回には荒武も作業に加わるとともに、関係者への挨拶をおこない、今後の協力関係への依頼と打ち合わせを進めている。所在地で文化財保護行政を所管する加美町教育委員会からも吉田桂氏(同教委文化財係長)をはじめ、毎回数名の参加によって作業へご協力いただいている。

現在までの作業内容は、史料に番号を付与しながら中性紙封筒・収納箱へ収納していき、第3回までに母屋分(約2000点)は全て完了した。さらに第2回調査時には、倉庫のなかに近世・近代のものとみられる文書の存在が判明し、第3回にこれら新出分の概要調査をおこなった。今後は、引き続き塩沢家母屋を拝借し、封筒詰めと写真撮影を進め、目録作成・分析に向けた基盤を整備していく予定である。本文書群には、近世・近代における周辺地域の状況や、武士(士族)としての塩沢家の実態に迫ることができる史料が含まれている可能性があり、研究進展が期待される。

・川崎町佐藤仁右衛門家文書(主担：高橋)

柴田郡川崎町青根温泉の佐藤仁右衛門家は、江戸時代以来温泉旅館「不忘閣」を経営する旧家である。同家の文書は、2012年に地元の文化財保護委員からの依頼を受けて調査に入ってから、部門と宮城資料ネットが協力して保全活動を続けてきた。すでに総数約2万5000点の古文書の撮影と概要目録作成が終了しており、調査自体は一定の区切りができています。今年度は古文書を土蔵に保存する作業をおこない、館内の古文書展示用パネル4点を新調した。また、佐藤家の許可を得て古文書の画像・目録のデータを川崎町教育委員会に提供し、所蔵者・自治体・部門の三者でデータを保管する体制が完成した。今後、部門の共同研究や地元の郷土史研究など多方面で活用が期待される。

佐藤仁右衛門家文書は、これまで講演会(2回)・現地報告会(1回)の開催に加え、書籍(1冊)・史料集(2冊)の刊行、古文書講座での活用、さらには不忘閣内の常設展示(継続中)といった形で成果の発信をおこなってきた。部門では調査主体となったのみならず、歴史資料調査方法の普及、各種講座による郷土史理解や古文書解読能力の向上といった教育面でも大きな成果をあげた。

・白石市渡辺家文書(主担：荒武)

白石市渡辺家文書の調査・目録作成は2013年8月から継続しているが、今年度は荒武と松岡が目録作成を担当し、現在までのところ目録化は総計25,600点(今年度だけで3,400点、2019年3月現在)となった。暫定的な試算として残り8000点余りの未整理があり、順次内容の把握に努めたい。白石

市教育委員会が担当する写真撮影も順調に進んでおり、全体の調査は大過なく予定通りにおこなわれている。

【作業分担】

①文書を1点ごとに封筒へ収納、文書箱への収納〈担当：白石市教育委員会生涯学習課〉

②封筒・箱詰め完了した文書を1点ずつ目録作成およびデータ入力〈担当：部門〉

☆参考：部門ホームページ 白石市渡辺家文書目録（Ⅰ～Ⅲ巻）PDF ファイル公開中

<http://uehiro-tohoku.net/guide.html>

・白石市図書館所蔵資料（主担：荒武）

2013年度より白石市図書館からの要請に応じて、部門では同館の貴重書庫に保管されている歴史資料および書籍の整理作業に協力してきた。これらの資料は、2011年の東日本大震災時に館内の書架が破損したため、これまで数年間、未整理の状態で見置きする状態であった（どこに何が配架されているのか不明な状態＝一般来館者の閲覧不可、職員も把握できていない）。

そこで昨年度から本格的に着手したのは、①未整理資料・図書の登録および公開、②既存の収蔵資料目録との照合および内容確認・修正、③未整理の地元発行新聞（明治時代から戦後にかけて白石市および近隣で発行された新聞）に関する目録・一覧化、の3点でいずれも館内検索システム登録・白石市役所ホームページへのリスト掲載を目標に据えている。

①2018年10月から翌年1月にかけて吉田佐智子事務補佐員を雇用（15日間）し、「明治記念文庫登録資料リスト」を作成した。吉田事務補佐員による新規登録299件、既存データの修正を含めて合計557件の登録が完了した。②この20年間に白石市図書館収蔵資料目録を3冊作成しているが、これら既存目録の利便性を高めるために統合版を作成することにした。この作業は櫻井和人氏（白石市図書館係長）が担当し、974件の資料・図書をエクセルファイルに入力・修正することができた。③荒武と櫻井氏が作業を進め、地元で発行されていた新聞・広報など33種類を目録化し、明治時代からの7種類については詳細記事一覧（新聞の小見出し・執筆者・キーワードなど）を作成できた。以上の目録・リストは図書館内の端末で検索できるほか、白石市役所ホームページでPDFファイルをダウンロードすることが可能になった。今後、図書館では収蔵資料の活用を目指し、また部門でも次年度から新聞資料の詳細分析を実施予定である。

◎参考1：白石市役所ホームページ「白石市図書館収蔵資料目録改訂版」2019年3月22日

<http://www.city.shiroishi.miyagi.jp/soshiki/31/13440.html>

◎参考2：白石市役所ホームページ「白石市図書館地元発行新聞等の目録」2019年2月7日

<http://www.city.shiroishi.miyagi.jp/soshiki/31/13110.html>

・白石市遠藤家文書（主担：友田）

遠藤家は中世から伊達家に仕える名士で、江戸時代には代々の当主が仙台藩の重臣（宿老）を務めていた。膨大な量を誇る遠藤家文書は、かつて宮城資料ネットで写真撮影をおこない、その後は白石古文書の会により文書目録が作成された。このうち中世文書についてはすでに白石市で資料集が刊行されているが、江戸時代以降については未だ研究が進んでいない。

その状況を打開するべく、2016年度から櫻井和人氏（白石市図書館係長）・天野真志氏（国立歴史民俗博物館特任准教授）・栗原伸一郎氏（東北大学大学院文学研究科学術研究員）、そして友田が参加して江戸時代以降の文書閲覧を開始した。この成果として幕末・明治期の当主遠藤允信（仙台藩奉行、維新後は政府に出仕、神祇少佑、退官後は塩竈神社宮司などを歴任）に関する資料集の刊行を目指し

てきた。

資料集の構成は、第1章「遠藤允信と幕末の政局」（栗原）、第2章「神官としての遠藤允信」（天野）、第3章「明治期の遠藤家と允信」（友田）で、櫻井氏がこれを統括した。2018年度は資料集刊行に向けて作業が完了し、刊行は2019年の予定である。

◎参考：遠藤允信（えんどう・さねのぶ）…天保7年（1836）生～明治32年（1899）没。幕末-明治時代の武士、神職。19歳で陸奥（むつ）仙台藩の奉行（家老職）となる。藩論を尊攘（そんじょう）にみちびこうとし、佐幕派に敗れ文久3年（1863）閉門。維新後は奉行にもどり、戊辰戦争後の処理にあたる。その後平野神社、塩竈（しおがま）神社などの宮司をつとめた。明治32年4月20日死去。64歳。通称は文七郎。号は睡竜齋。

・白石市一條家文書（主担：荒武）

2017年度から調査を開始した白石市一條家文書は、白石市教育委員会生涯学習課が借用・撮影した文書458点の目録作成を完了した（担当：野本禎司）。これを基礎として一條家や地域の歴史的变化を示す文書の内容分析に着手しつつある。さらに文書調査と並行して、2018年12月には敷地内にある一條家墓地の調査を白石市教育委員会が実施し、江戸時代前期の墓碑などが現存している事実も明らかとなった。一條家が鎌先温泉の経営を始めた時期には諸説あるが、少なくとも江戸時代前期には当地を拠点にしていたことがわかる。文書・建築・墓地調査の成果は、2019年度予定の講演会（2019年11月、白石市中央公民館大ホール）を予定しており、その後は出版物などの計画も視野に入れながら総合的な地域史研究へつながるよう努めたい。

・南三陸町遠藤重幸家文書（主担：藤方）

遠藤重幸家は、大久保（現・南三陸町志津川字大久保）のうち水尻屋敷というところに居住して、屋号を桑原といった。伝来する文書群は、近代以降における同家の経営関係が多い。同家では養蚕業を展開したことが確認でき、大正14年（1925）には11代佐治右衛門が本吉郡養蚕同業組合の志津川町桑園基本調査委員を、昭和31年（1956）には12代静夫が志津川町養蚕連合会の大久保養蚕農業組合長を務めるなど、当地域の養蚕業において主要な役割を果たした。このほか、明治43年（1910）に設立した大久保青年会に関わる史料も伝存している。この文書群は、宮城資料ネットによって全点の写真撮影がおこなわれている（4556コマ）。その写真を利用して藤方が目録作成に取り組み、2018年度は約100点の入力をおこなった。

・北海道当別町吾妻家文書（主担：友田→藤方）

江戸時代に仙台藩の一門・岩出山伊達家の家臣であった吾妻（あがつま）家文書の調査である。幕末・明治期の当主謙は維新後、旧岩出山伊達家中の当別入植・開拓において主君伊達邦直とともに中心的役割を担った。また、謙の後継者となった子息・吾妻阿蘇男は当別村長を務めるなど地域振興に貢献した人物である。このような経緯から吾妻家文書は、明治維新から戦後にいたるまでの当別町の歴史を知るうえで欠かせない歴史資料だが、それに加えて江戸時代の大崎市岩出山の地域史に関係する古文書も多数含んでおり、いずれも貴重な史実を内包している。

吾妻家文書は2015年度から所蔵者である吾妻高志氏、行雄氏（東北大学大学院農学研究科教授）の依頼を受けて、部門と岩出山古文書を読む会の共同で整理に着手し、2017年度末で整理・撮影作業が完了し（約9000点）、2018年8月初旬に原本が当別町に移管された。これをうけて、部門から友田が8月24日に岩出山古文書を読む会の会長の菊地優子氏と当別町を訪れ、今後の保存活用などにつ

いて当別町教育委員会と話し合う機会を持った。また、当別町では吾妻家文書寄贈を記念して、当別町伊達記念館にて吾妻家文書の展示会を開催したが、それにあわせて、8月25日には友田が「岩出山伊達家の当別移住と吾妻謙」と題して講演し、100名以上の来場者があった。

当別町では引き続き町史編纂（当別村の成立から現在まで）を計画しており、地域のなかで歴史資料の活用が期待される。また、吾妻家文書には江戸時代初期の伊達政宗関係の書状が含まれており、2019年3月の「講座地域の歴史を学ぶ：岩出山」で、講師の佐藤憲一氏（前仙台市博物館長）がその研究成果を紹介している。部門と岩出山古文書を読む会では、江戸時代の岩出山伊達家に関する文書を中心に研究を進めていく予定である。

◇平成30年度：事務補佐員作業

今年度は、後藤三夫（月曜日・木曜日）・竹内幸恵（月曜日・木曜日）・佐々木結恵（月曜日）・高橋直道（木曜日）・石澤夏巳（木曜日）の5人の事務補佐員が勤務し、おもに宮城資料ネットが保管している古文書の撮影に従事した。具体的には以下の各家の古文書であり、**撮影総コマ数は2019年2月末時点で約48,000コマ**である。これらの撮影画像は宮城資料ネットおよび所蔵者と共有し、今後の調査・研究において活用していきたい。

〈今年度撮影の宮城資料ネット保管古文書〉

栗原市岩ヶ崎・中村家文書、栗原市一迫川口・大津和子家資料、栗原市若柳・阿部楼文書、黒澤家文書、石巻市・庄司恵一氏所蔵史料、東松島市（旧矢本町）・姉齒家文書、中新田町・中勇家文書、涌谷町・花井家文書 = 左記の撮影作業は完了

◇平成30年度：文書目録作成の外部委託

今年度は松岡京子氏（神戸大学大学院人文学研究科非常勤講師）と野本禎司氏（駒澤大学文学部非常勤講師）に文書目録作成を委託した。

〈今年度：部門事業全体の文書目録作成〉

- 大河原町佐藤源之家文書 443件（終了）担当：松岡
- 加美町米谷家文書 73件（終了）担当：松岡
- 白石市渡辺家文書 1490件 担当：松岡 ※（内部）荒武作成分約1920件
- 白石市一條家文書 458件（終了）担当：野本
- 南三陸町遠藤重幸家文書 100件 ※（内部）藤方作成分約100件
- 白石市図書館所蔵資料 557+974=1531件 ※荒武・櫻井・吉田

今年度外部委託分 松岡・野本2464件

内部作成分 荒武1920+藤方100+白石市1531件 **総計6,015件**

〈参考：部門設置からの文書目録外部委託件数〉

2012年度：3,985件	2013年度：15,666件	2014年度：11,730件
2015年度：8,335件	2016年度：4,588件	2017年度：5,820件
<u>2018年度：2,464件</u>		

2. 古文書解読講座

◎概要：今年度の成果（荒武）

部門が大きな事業の柱として重視している古文書解読講座の運営は順調に進めることができた。今年度の部門主催・協力は全13講座で、年間185回の開講、全体ではのべ3,337名（実数は約400名）が受講している。これは学生や社会人を対象にした古文書解読講座を実施し、歴史資料が大切なものであることを広く認識してもらうこと、また古文書解読の技術を習得すること、それらによって地域の文化を継承することなどを主な目的にしている。これからの歴史学を担う人材育成のひとつとして、学生を対象にした講座の意義は大きく、また市民の方々には「わが町」「わが郷土」の歴史や文化を自分の目で確かめてもらい、現代の日本社会を形成してきた祖先たちの姿を知っていただく機会へと結びついている。

今年度の大きな改革は、これまでの部門主催春季古文書講座・秋季古文書歴史講座（全10回）をセンター主催〈部門運営〉の有料制講座に切り替えたことである。これまでの部門講座が展開しているなかで、とくに社会人の受講者および受講希望者は年々拡大し、現行では十分な対応がとれないことがあったため、センターと部門による作業の円滑化、良質な教養講座の提供などを勘案し、新しい制度のもとで学習環境をつくっていく方針を定めた。

また、江戸時代や明治時代の日本を研究テーマにする専門家や学生は海外にも多数存在し、我々と同じく日本の歴史研究に尽力されている。これまで部門では、海外の大学から要請を受けて集中講義形式のワークショップを開催してきた。今年度も5年目となるアメリカ・シカゴ大学で機会を得て、日本の歴史・文学・思想・宗教・美術などを学ぶ大学院生、さらに日本語講師の先生方を含めた教授陣にくずし字解読の重要性を知っていただいた。加えて、学内で実施する古文書を読む会、くずし字入門ゼミは学生を対象に実施するものであるが、両講座とも外国人留学生が積極的に参加し、歴史資料および日本史の理解向上の場を提供している。これによって、「日本を学ぶ」ことにより一層理解を深めてもらい、良質な研究成果が創出されることを願っている。

一般の社会人向け講座は、毎月1回ないし2回開催するもの、春季・秋季におこなう古文書講座・古文書歴史講座、そして初心者向けの期間限定講座を実施した。いずれも熱心に受講する人々の姿勢が目立ち、さらなる解読能力のノウハウを教授する喜びを部門専任教員は強く感じている。

・古文書を読む会（学生対象）（高橋）

古文書を読む会は学生向けの古文書講座で高橋が講師を務めた。今年度は2018年4月から2018年12月まで計18回開催した（前期は毎週、後期は隔週で木曜3校時〈13:00～14:30〉実施、川北合同研究棟4階大会議室）。

今年度の参加者は東北大学の学生（学部1年生～大学院生）が中心であり、常時参加していたのは5名であった。また、昨年度に東北大学附属図書館職員向けの古文書講座を開催したところ、継続希望が多数寄せられたことから、図書館内でも講座の告知をおこなった。この結果、本年度は常時5名の図書館職員が講座に参加している（学生・職員合計10名）。

テキストには仙台北城下の情報を記した往来物や旅行者の紀行文（小津久足『陸奥日記』）を使用した。附属図書館の古典籍には仮名文字（変体仮名）で書かれた史料が多く、こうした史料の解読能力の向上を念頭に置き、テキストを選定した。少人数ゆえにきめ細やかな指導が可能であり、参加者の上達度を見極めながら解読を進めた。アットホームな雰囲気の中で素朴な疑問を出し合えるのも少人数の利点である。学生の基礎学習はもとより、図書館の資料整理にも有益であることなど、さまざまな目的に

資する内容になった。

• 岩出山古文書を読む会・岩出山教室（友田→藤方）

岩出山古文書を読む会は会員数増加などの理由から組織再編（クラス分け）が実施され、2018年4月から「岩出山教室」「古川教室（大崎市古川）」「演習（上級者）」の3コースとなった。部門ではそのうち岩出山教室の講師を引き受け、第1・第3火曜日13:30～15:30（於大崎市岩出山地区公民館）で開催した（なお、古川教室および演習は会員が講師を務めている）。**岩出山教室の受講者は今年度15名程度**である（読む会全体の会員は61名＝2019年3月現在）。

今年度前半は友田が講師を務め、幕末期の仙台藩の国学者・保田光則が書いた旅日記「撫子（なでしこ）日記」をテキストとして輪読した。このテキストは光則が仙台から鳴子に旅行をした際の記録であり、岩出山近辺の地名が頻出することから、受講者の関心も非常に高かった。また、部門と読む会が共同調査を進めてきた吾妻家文書のうち、江戸時代初期の書状について解説をおこなった。このなかには伊達政宗やその四男・宗泰（岩出山伊達家の初代当主）に送られたものが多く、差出人も島津家久・井伊直孝・藤堂高虎など当時の有力大名をはじめ錚々たる顔ぶれが並ぶ。

2018年10月からは藤方が講師を担当した。今年度後期のテキストは、玉造郡下野目村（現・大崎市岩出山下野目）笠原家文書の大崎八幡宮流鏑馬（やぶさめ）関係史料である。同社の神事で代々射手を務めた四家のうちの一家が笠原家である。笠原家から射手としての特権を仙台藩に認めさせようとする複数の願書が提出されていたことが理解でき、受講者には江戸時代の身分集団について考察する契機を提示できた。笠原家文書は2019年3月初めまで継続し、その後は「良元君記録」（茂庭家文書）をテキストとした。茂庭家は仙台藩の重臣（家格は「一族」）であり、松山（現・大崎市松山）の領主であった。同史料は、伊達政宗のもとで活躍した茂庭良元の事跡をまとめたものである。

岩出山古文書を読む会は、吾妻家文書など地域史料の調査や、岩出山公民館と協力して「初めての古文書講座」を開催するほか、今年度も積極的な活動を展開した。部門としても岩出山教室に注力しつつ、同会の多角的な活動を支援することを通じて、知識の蓄積につなげたい。

• 東北アジア研究センター春季古文書講座（高橋、友田）

部門では、毎年春と秋に一般市民向けの上廣歴史資料学研究部門古文書講座・古文書歴史講座を開講してきた。仙台市博物館くずし字講座の受講者のうち、継続を希望する方を受け入れて続けてきた講座で、毎回200名近い参加があり、会場の確保や運営面で問題が生じつつあった（このままでは受講者の新たな受け入れができない状況にあった）。そこで、2018年度は講座を有料制・申込制（先着順）とすることとした。これにより、新規受講希望者の受け入れを継続して、学習意欲の高い方々から優先的に受講していただくことが可能となった。開講に際しては、東北大学の公開講座規程にのっとり、東北アジア研究センターの公開講座とすることとし、講座名を「東北アジア研究センター春季古文書講座」「東北アジア研究センター秋季古文書歴史講座」とした。また、当年度は春・秋各5回の講座とし、春・秋共に6,000円の受講料（5回分）を設定した。受講料収入は、東北アジア研究センターに30パーセント、部門に70パーセントの割合で、大学運営資金として配分することとなった。

春季古文書講座は、東北大学川内北キャンパスを会場に、2018年6月～7月にかけて開講した。前半3回は友田が、後半2回は栗原伸一郎氏（東北大学大学院文学研究科学術研究員）が担当した。2018年は戊辰戦争から150年ということで、戊辰戦争関連の史料をテキストに取り上げた。1回の講義は13時～14時30分までの90分間である。

講座への申し込みは受講希望者がハガキで行う形をとったが、申し込み開始から数日間で定員の

100名を超える応募があり、先着順で**103名を受講者**とした。みなさん一様に熱心に受講されていた。次年度以降の運営を含め、センター内における連携を図りながら講座の充実に努めていきたい。

• 東北アジア研究センター秋季古文書歴史講座（高橋、藤方）

部門ではこれまで「古文書講座」を各地で開催し、一般市民に歴史資料の魅力を伝え、同時にその読解力を養ってきた。受講者のなかには手近にある古文書を自分たちの手で読み解き、自らの家や地域の歴史を明らかにしようとする積極的な動きもみられるようになってきた。こうした状況をとらえ、2017年度から新たに古文書歴史講座を開講し、講師の研究内容を事例として紹介し、研究をはじめたきっかけ、研究の手順、そして研究成果とその意義などについて講義することとした。古文書を読む時間も設け、参考文献やその調べ方もお伝えし、歴史研究のプロセスを習得してもらうことがねらいである。2018年度も引き続きこうした趣旨で講座を開講し、春季古文書講座と同様、東北アジア研究センターの公開講座として開催した。

本講座は2018年11月～12月にかけて開講した。1回の講義は13時～14時30分までの90分間である。講師は、前半の3回を高橋が、後半の2回を清水翔太郎氏（東北大学史料館学術研究員）が務めた。高橋は「仙台藩の租税」をテーマに、古文書を解説しながら仙台藩の年貢制度の変遷と意義を明らかにした。清水氏は「明君」の日記にみる藩政一弘前藩主津軽信明と秋田藩主佐竹義和を事例に一」をテーマに、藩主の自筆記録をひもときながら江戸時代における領主制の実態を明らかにした。

春季に続きこちらの講座も受講希望者が多数にのぼり、先着順で当選した**101名が受講した**。実証的な歴史研究の方法を学ぶことが、受講者自身の地域や歴史的関心について調べようとする際の参考になれば幸いである。また、長期的には公文書館や郷土資料館、歴史博物館といった資料保存機関の利用者が増加し、歴史学をめぐる環境の活性化につながることも期待される。なお、**春季・秋季両講座を連続受講した75名に「受講修了認定証」を贈呈した**。

• 片平古文書会（荒武→藤方）

今年度前半は荒武が講師を務め、部門で調査を進めている白石市一條家文書や宮城県内の古文書をテキストに毎月第1・第3水曜午後の90分間、会場は仙台市片平市民センター（または近隣の公共施設）にて開催した。2018年10月からは藤方が講師を担当し、佐倉藩堀田家文書を用いて江戸時代の組織や政治状況がわかる素材を提供した。会員も関心をもって講読に取り組んでおり、講座前の自主学習会では文字の検討だけでなく内容に立ち入った討論がおこなわれ、講座中の質問・意見でも重要な指摘が出ている。今後いっそうのレベルアップを意識しながら、講座運営を強化していきたい。

〈参考：片平古文書会〉2013年7月設立 会員数：13名 会長：田邊敦子氏

• 白石古文書サークル（荒武）

白石古文書サークルは毎月1回（最終水曜午前の2時間）、荒武を講師として白石市中央公民館第2研修室で開催中である。今年度最後（2019年3月27日）の例会が発足から通算52回目で、**会員数も前年度より増加して26名**となった。テキストは白石市域の古文書を選び、江戸時代の地域史を理解できるような講義をおこなっている。とくに今年度後半は地域の災害史（白石城の火災、白石川の水害）をテーマに学習の精度を高めてきた。受講者は歴史愛好家や郷土史研究を目指す人、白石城のボランティアガイドなどさまざまで、共通して地域の文化理解に熱心な顔ぶれである。また、今年度から新たに「自習用テキスト」を配布し、会員各位の自主学習に役立つよう努めている。このテキストは講座で使用するものとは異なり、各自が読み進めていく力を伸ばそうとするために準備した。

講座以外の活動として、毎年3月に開催の「白石市公民館まつり」（2019年3月2日、於：白石市中央公民館）に出展し、サークルの活動紹介（ポスター展示）と小学生対象の「くずし字を書きましょう」のイベントを実施した。活動紹介には多くの来場者が興味を持たれ、また「くずし字」のイベントには小学生18名・成人6名の参加があった。いずれも荒武とサークル会員有志が指導役となって、江戸時代の文化にふれる機会を提供することができた。

〈参考：白石古文書サークル〉

開始：2013年7月 ※白石市中央公民館「初めての古文書講座」参加者有志により結成（2019年3月現在）

会員：鈴木丈夫会長など26名〈白石市23 大河原町1 仙台市1 福島市1〉

・白石市中央公民館「初めての古文書講座」（荒武）

部門と白石市教育委員会、白石市中央公民館が主催する「白石市中央公民館初めての古文書講座」を前期5回（2018年5月～8月）、後期5回（10月～11月）の合計10回開講した。**受講者は前期8名、後期12名**で、いずれも古文書を初めて学ぶという社会人のみなさんであった。まず解読に必要な辞書の活用法や、江戸時代の町・村における特徴、白石市周辺の歴史的知識を紹介し、テキスト（部門で調査中の白石市渡辺家文書や一條家文書）を読むための基礎学習に力を入れた。受講者それぞれに本講座に魅力を感じた目標があり、意欲も非常に高いことが何よりも成果として浮かび上がる。

講座終了後、受講者のうち2名が白石古文書サークルに入会され、学習を継続されることになった。当地に限らず、県下各地で古文書学習の入口を設け、初心者にもわかりやすい講座運営を今後も心がけていきたい。

・仙台市博物館講座「はじめての「くずし字」」（高橋）

2019年1月から2月に仙台市博物館において初級者向けくずし字講座「はじめての「くずし字」」を開催した。これは部門と仙台市博物館の共催事業であり、2013年から7年連続の実施となった。今年度は前半2回と後半2回を異なるテーマで、希望者はどちらか一方のみを受講できることとした（開催は全4回であるが、1人の受講者は2回まで）。この措置は、例年受講希望者が殺到し、抽選による落選者が多数出ているため、1人でも多くの方に学習機会を提供したいとの考えから、最善策としてこのような対応をとるに至った。

前半2回の講師は高橋が務めて「江戸時代の庶民教材を読む」と題し、江戸時代に刊行された『塩竈詣（しおがまもうで）』という仙台北下から鹽竈神社への参詣案内をモチーフにした往来物（子ども用教科書）をテキストに、文字の構成やくずし字の特徴など、古文書解読の基礎事項を解説した。後半2回の講師は黒田風花氏（仙台市博物館学芸員、元・部門調査アルバイト）が「戦国時代の文書を読む」と題し、織田信長や伊達政宗といった著名人の手紙をテキストとして使用した。個人の癖が出やすい書状は難解であるが、初級にもわかりやすいよう、ゆっくりと丁寧に読み進め、受講者の理解度も向上していたと思われる。

主催者として取り組みは落選者が出ないように配慮したが、**両講座とも定員の50名を超える応募**があり、抽選の結果20名程度の落選者が出た。ただし、2回の講座でくずし字の読み方をマスターするのは困難であり、継続を希望する方には次年度以降の部門講座の案内を送付予定である。継続希望者を含めた部門講座の案内発送対象者は、2019年度には400名を超える見込みであり、拡大しつつある市民のなかの「学習熱」と今後の計画立案には深い検討を要する。

• 東北アジア研究センターくずし字入門ゼミ（荒武）

東北大学日本語教育特別課程の留学生受講科目「中上級日本文化演習：くずし字入門」を荒武が担当し、東北大学の文学部・文学研究科・国際文化研究科で学ぶ留学生たちが古文書解読を学習した。この講座は正規の授業終了後、継続して学習を希望する学生に門戸を開く意味で「くずし字入門ゼミ」として毎月2回実施し、東北大学在学中（半年間ないし1年間の交換留学生を含む）の**学生が5名程度参加**している。現在は留学生のほか、虫明美喜氏（宮城教育大学特任准教授、近代日本文学専攻）、高橋直子氏（伝統建築研究所代表、寺社建築史専攻）が出席し、部門で調査した歴史資料を中心に宮城県内の古文書（山元町大條家文書、白石市一條家文書など）の解読を進めている。

内容としては中級もしくは上級の受講を対象としており、解読にとどまらず文書の叙述や用語についても課題を設定し、その理解向上を目指している。今後も毎月2回の講座を実施する計画である。

• かわうち古文書村（高橋）

「かわうち古文書村」と「もみじの会」は部門の活動がきっかけで誕生した、一般市民が運営する古文書サークルである。資料コピー代や会場経費はサークルメンバーの自己負担で賄っている。

かわうち古文書村は、高橋が開講している学生向け「古文書を読む会」に参加されていた社会人有志が中心になって結成された。古文書を読む会は例年初級者向けに開講しているが、宮城資料ネットの会員や社会人入学の学生、高橋が講師をつとめていたNHK文化センター古文書講座の受講者からぜひ参加したいという要請があり、学生たちと一緒に学習する機会を提供した。この社会人有志は継続して参加され、古文書解読能力も高くなっていたため高橋が呼びかけてサークルを結成することになった。**メンバーは10名**で、月に1回程度活動し、テキストは江戸時代の仙台城下に関する地誌『仙台萩』であり、毎回数行ずつ担当を決めて読み進めている。

今年度は継続して『仙台萩』を読み進めたほか、メンバーによる古文書調査もおこなった。後藤三夫氏（部門事務補佐員）の紹介によるもので、江戸時代に鉄砲師範役をつとめた仙台市青葉区の旧家大槻家が所蔵する古文書について保全活動を展開した。大槻家文書の一部はすでに仙台市博物館に寄託されているが、未整理の古文書が同家に残されており、2018年10月から12月にメンバーが同家の倉庫から古文書の搬出をおこない、さらには東北大学内で撮影作業も進めた。文書目録は後藤氏が作成し、鉄砲の免許状や砲術書、さらには仙台藩主の朱印状など約500点の古文書群だということが明らかになり、火縄銃の現物も発見された。いま解明されていない仙台藩の軍制について有益な情報を提供する貴重な資料である。

部門の古文書講座から派生したサークルが実際に調査を担うまでになり、メンバーが率先して作業に参加するようになったことは大変喜ばしい。古文書の解読・調査、そして総合的な歴史資料保全活動を担える人材が着実に育っていることを示す顕著な事例であるといえよう。

※来年度より部門事業ではなく、自主サークルとして活動

• もみじの会（高橋）

古文書サークル「もみじの会」は、例年春と秋に開講してきた部門古文書講座受講者に呼び掛けて結成した。部門主催の古文書講座は年々受講者が増加し、今後会場の確保が困難となることが予想された。そこで部門サポートのもとでの自主運営組織の結成をお願いしたところ、応じてくださった**会員は次第に増えて10名**ほどとなり、毎月2回程度活動している（高橋は月に1回参加）。テキストは江戸時代の旅日記で、会員の知人宅に所蔵されていた文政13年（1830）の伊勢参りの記録である。かわうち古文書村と同様、担当を決めて読み進めており、高橋は適宜アドバイスをしてきた。今年度

で解読作業を終え、次年度には解読文を刊行したいと考えている。

※来年度より部門事業ではなく、自主サークルとして活動

• シカゴ大学「2018 Reading Kuzushiji Workshop」(荒武)

今年で5回目を迎えたシカゴ大学東アジア研究所主催のくずし字ワークショップが、2018年6月11日から15日にかけて開催された。部門からは講師として荒武を派遣し、シカゴ大学やアメリカ各地の大学から参加された**20名の受講者**とともに江戸時代の古文書解読について学習した。最初の3日間は初級者と上級者にクラスを分けて、初めて学ぶ人を対象にしたコース(Beginners class)、高度な解読方法を習得するグループ(Expert class)、それぞれの目標にあわせた授業をおこなった。残り2日間は、部門で調査を進めている宮城県の古文書を中心に日本の歴史・文化がわかるテキストを並べ、受講者同士の議論を交えながら理解を深めることに努めた。とくに初心者と上級者が交互に座る配置で、わからないことを相談する雰囲気を作った意義は大きかったように見受けられる。

受講者たちは「古文書漬け」の5日間を終えてすぐ、16日にはシンポジウムがおこなわれ、荒武の基調講演「日本の古文書調査と活用—情報共有を考える—」をはじめ、7本の研究報告があり、分野を超えた意義深い討論も出席者間で共有することができた。ワークショップで学んだ受講者たちのなかには日本の大学へ留学する学生がおり、本事業はこれからの日本学を牽引する人材育成に貢献しているともいえよう。来年度もシカゴ大学からの要請で引き続きワークショップ開催に協力するが、将来的な構想として相互交流(学生の調査指導・研修受け入れ、部門教員の渡米による指導など)を活発化することも視野に含めていきたい。

• 東北大学夏季古文書講座(荒武)

2018年8月20日(月)から24日(金)の5日間、「東北大学夏季古文書講座」を実施した(主催:歴史文化資料保全の大学共同利用機関ネットワーク・東北大学拠点、企画:部門、講師:荒武)。この講座は、学生・大学院生を対象に東北地方の歴史資料を調査・研究する人材の育成、今後の歴史資料保全やその活用を積極的におこなう環境作りを目的とした集中講義である。

今回の受講生は学内・学外からの応募者4名(学生3・大学院生1)、東北大学日本語教育特別課程で学ぶ留学生3名(韓国・イスラエル・コロンビア出身各1)、特別参加の東北大学教員・研究員4名、**合計11名**であった。講義では初めて学ぶ学生にあわせた古文書の「イロハ」から始まり、江戸時代の東北地方(宮城、秋田、山形)に関する歴史資料を解読する学習をおこなった。最初は文字そのものが読めないという段階から徐々にくずし方の特徴をとらえ、最終的には文章の内容理解まで到達するという流れで、短期集中の講座は予習・復習で多くの時間をとられるものの、基礎がしっかり身につくという成果を得ることができた。このなかから東北アジアくずし字入門ゼミへ参加する留学生があり、また学外の参加者も所属大学などで継続した学習に取り組んでいる。

部門の目標とする人材育成に最適な講座として、来年度は主催を部門と変更し、2019年8月19日から23日の間、本講座をおこなう予定である。

3. 公開講演会・シンポジウム・資料展示

◎概要:今年度の成果(荒武)

今年度の部門主催・協力の公開講演会は5件(来場者約414名)、歴史資料展示が6件で合計11件の事業を展開した。いずれも部門、宮城資料ネット、災害研が展開する歴史資料保全活動と密接にか

かわり、部門で取り組む資料保存や分析の成果を、歴史研究者および社会へ発信する機会になっている。また、自治体との協力は例年と同じく密接になっており、行政機関および市民参加型の事業に着手し、地域社会において「身近な歴史学」を目指す動きにも協力できる体制が整いつつある。

主催事業では、岩出山古文書を読む会と共同で例年開催している「講座地域の歴史を学ぶ◎岩出山」のほか、歴史資料の調査成果を主題にしたシンポジウムなど、部門の蓄積してきた研究活動を披露する機会を作り、多くの来場者に恵まれた。これには外部の専門家との連携など、最新の研究を公表していることも意義深いと感じている。

歴史資料の展示は、調査・研究や公開講演会と並び貴重な成果発信となっている。とくに今年度は戊辰戦争から150年の節目にあたり、各地の企画展に協力してきた。利府町郷土資料館では展示と連動したギャラリー・トークによって来場者に深く歴史資料の醍醐味を感じてもらう機会を設けた(期間中の来場者535名、ギャラリー・トーク出席者22名)。

・歴史・講演会「川崎の記憶～古文書からよみがえるふるさとの歴史～」

2018年4月21日(土)、川崎町山村開発センター(宮城県柴田郡川崎町)において、講演会「川崎の記憶～古文書からよみがえるふるさとの歴史～」を開催した。主催は部門・災害研・川崎町教育委員会、後援は宮城資料ネット・川崎町歴史友の会である。本会は、近年部門や宮城資料ネットが川崎町内で実施してきた古文書調査の成果である『川崎町の文化財12「古文書」』(川崎町教育委員会、2018年3月)の刊行を記念して開催された。講演は、蝦名裕一氏(災害研准教授)「中津山藩から川崎伊達家へ～川崎伊達家文書の調査から～」と、高橋陽一「青根にひたる、青根に生きる～佐藤仁右衛門家文書にみえる温泉・湯治・飢饉～」である。

蝦名氏の講演では、川崎伊達家初代当主伊達村詮(むらあき)の父村和(むらより)が藩主をつとめた中津山藩の立藩から終焉に至るまでが詳しく解説された。さらに町内で進められてきた川崎伊達家文書の調査についてもあわせて紹介された。

高橋からは、これまで川崎町歴史友の会と調査を進めてきた青根温泉佐藤仁右衛門家文書の概要を紹介するとともに、調査資料から郷土史や研究上で興味深い古文書を紹介した。たとえば『青根山薬師堂温泉記』(享保5年<1720>)は、仙台藩5代藩主伊達吉村が著した温泉療養の指南書で、貝原益軒の養生論を参考に青根温泉の入浴法がこと細かく綴られている。現在とは異なる温泉に対する認識がうかがえるのはもちろんだが、当時の藩主の医学的教養がわかる点でも興味深い資料である。また、宝暦年間(1750年代)から天保年間(1830年代)の青根周辺の状況を伝える『(諸用留)』には、1780年代の天明飢饉の際に仙台藩から金銭と大麦が貸与されていたこと、天保飢饉の際には藩からの支援が滞り、代わって地域住民有志が困窮者に米を提供していたことが記されている。官から民へと窮民救済機能が移行していたことが、1つの地域レベルで実態として明らかになった。このように、佐藤家文書は江戸時代の藩主から町・村の住民に至るまで、幅広い階層の人々の考えや暮らしを垣間見ることができる貴重な史料といえよう。

当日の来場者は約100名であった。古文書や郷土史への関心を喚起するうえで、講演会やシンポジウムは大変効果的である。これからも継続して古文書の魅力を広く発信していくことが大切であろう。

・公開セミナー「非母語話者への文語文教育を考えるー日本研究のリテラシー養成に向けてー」

東北大学高度教養教育・学生支援機構言語・文化教育センター主催の公開セミナーに共催という形で部門が協力した(2018年8月9日、於・東北大学川北合同研究棟1階IEHEラウンジ)。これは佐藤勢紀子氏(同機構教授、日本文学・日本語教育専攻)と荒武が近年共同で取り組んでいる留学生向

けの古文・漢文・くずし字教育の現状と課題をテーマに開かれた。報告者にはセンター外国人客員研究員として滞在中であったアルド・トリーニ氏のほか、アメリカおよび日本国内でその事情に詳しい研究者から事例報告をいただいた。部門が直接的に関わるのはくずし字解読の国際的普及というテーマであるが、出席者（約30名）との議論から今後検討をすべき課題もみえてきた。引き続き教育および研究の両面で日本学における歴史分析の意義を主張していきたいと考えている。

・第1回上廣歴史資料活用講座

上廣歴史資料活用講座の目的は、地域の歴史資料館や図書館に勤務する職員（学芸員・司書・文化財担当者・一般職員を含む）に歴史資料学にふれてもらう機会を提供することにある。前年度まで部門教員と外部メンバー（8名）によるワーキンググループをおこない複数回実施し、自治体職員からの要望や大学側の指針を見極めながら本講座の準備を整えてきた。

今年度は第1回講座として2018年12月1日（於・東北大学川北合同研究棟4階大会議室）に開催することができた。講師には高橋守克氏（宮城県文化財保護地区指導員、元多賀城市史遊館長）と竹原万雄氏（東北芸術工科大学准教授）をお招きし、地域の歴史資料を活用する意義と行政・大学の対応という観点からご講演をいただいた。出席者は部門教員を含めて19名で、宮城県・山形県の文化財関係者（自治体職員）が参加され、資料保全や活用の方法、市民からの要望への対応など細かい点を含めて活発な意見交換がおこなわれた。

お二人の講師が積極的に提言された内容を含め、多くの成果と課題を抽出することができたが、大学と行政・市民団体の連携、研究者間の協力、情報共有の方法などについて今後もメンバーの拡充を図りながら取り組むことが全会一致で合意をみた。また、講座そのものを持ち回りでおこなっていくこと（たとえば歴史資料館や図書館など）も想定しつつ、引き続き講座運営を強化していきたいと考えている。

・講座：地域の歴史を学ぶ◎岩出山VI

部門の主催事業「講座：地域の歴史を学ぶ」を、今年度は岩出山公民館主催の「初めての古文書講座公開講演会」と合同して2019年3月3日に開催することとなった。部門ではポスター・チラシ作成と発送、ホームページ上の案内掲載など、広報面を中心に準備を進めた。講師には伊達政宗研究の第一人者である佐藤憲一氏（前仙台市博物館長）をお迎えし、「伊達政宗が宗泰に伝えたもの」というテーマでご講演をいただいた。この主な素材となった「吾妻家文書」は、部門と岩出山古文書を読む会が調査・整理をおこなった文書群である。同文書のなかから発見された江戸時代前期の書状（手紙）について佐藤氏が分析を加え、初心者にもわかりやすく解説する講演で当日は110名の来場があった。

紹介された書状のなかでも、伊達政宗が嫡男・忠宗（仙台藩二代藩主）へ宛てたものからは、四男・宗泰（岩出山伊達家初代当主）への配慮が垣間見えた。このような、政宗の人間性や、親子間の関係性に話がおよぶと、来場者の関心もよりいっそう深まったように見受けられる。また、当時珍重された著名な香木に関する史料についても、佐藤氏による考察成果が詳細に報告された。

今回の講演会は、部門や読む会の活動が、研究進展と成果の地域還元に貢献したものといえ、引き続き研究の深化と地域連携の強化に全力を挙げていきたい。

・第1回みちのく歴史講座

2019年3月22日（金）の午後、東北大学川内北キャンパスで「第1回みちのく歴史講座」を開催した。この講座は、東北大学東北アジア研究センター主催の春季古文書講座・秋季古文書歴史講座の関連企

画として立ち上げ、「みちのく（東北地方）」の歴史・文化について深く勉強をしてみようという目的で開始したものである。

記念すべき第1回の講師にお迎えしたのは高橋美貴氏（東京農工大学教授）で、「山林資源と仙台藩—18世紀前半の史料から見る仙台藩の御林—」と題してお話しをいただいた。ご講演では、現在も東北地方で広がる緑ゆたかな山々を、地域の人々がどのように利用していたのか、そして資源と産業の関係など、時代や分野を超えてさまざまなテーマに波及する内容が大変魅力的だった。当日ご来場くださった方は合計155名にのぼり、講師への質問も大いに盛り上がり、出席者各位の豊富な経験や知識、さらなる学習意欲を改めて認識した。

これまで学内で歴史講演会を開催する機会は少なかったが、今後は定期的に学習できる場を設定できるように努めていきたい。

・利府町郷土資料館平成30年度ミニ企画展「明治・大正時代の利府Ⅱ～史料からみる学校の歴史～」

2018年4月28日（土）から6月24日（日）まで、利府町郷土資料館平成30年度ミニ企画展「明治・大正時代の利府Ⅱ～史料からみる学校の歴史～」が開催された。毎年、部門と利府町教育委員会生涯学習課が共同で実施している企画展示で、今回は利府町内の小学校で大切に保管されてきた学校日誌や学校沿革誌、さらには小学校をめぐる写真資料や新聞記事を紹介し、人々の学びの場を再現できるよう努めた。

期間中には535名の来館者に観覧いただき、5月15日に「大崎タイムス」、5月20日には「河北新報」で展示を紹介する記事が掲載された。また、6月22日（金）にはギャラリー・トークを開催し、参加者各位に展示資料とその背景を詳しく解説した（講師・荒武）。展示を見学された方々からは、所定の用紙に小学校時代の思い出や校舎の風景、また今回の展示に対する感想などを書いていただき、さらなる「歴史の積み重ね」をおこなうことができた（感想文は郷土資料館の記録として保存予定）。

地域の資料を活用すること、そして地域住民の記憶との連関は極めて重要で、学校の文書保全という観点からも継続的に取り組んでいきたい。

・白石市図書館「郷土を知る月間2018企画展 戊辰戦争と白石」

今年戊辰戦争から150年を迎え、各地でイベントや講演会などが数多くおこなわれた。部門が調査を進めている宮城県白石市は、奥羽越列藩同盟を結成するきっかけとなった白石会議で有名な戊辰戦争と関わりの深い町であり、市民の歴史に対する関心も非常に高い。白石市図書館では、2018年10月11日から12月6日に「郷土を知る月間2018企画展：戊辰戦争と白石」を開催し、部門は展示協力という形で資料の解説や翻刻について助言をおこなった。この展示は、およそ20点の図書館所蔵資料を紹介し、地域の歴史を明らかにしようとするもので、その存在について改めて認識する利用者も多く、「地域のなかの戊辰戦争」を知ったという感想も聞かれた。さらに図書館の歴史資料、そして郷土史研究の足跡も紹介され、今後の研究発展にも有益な展示であったと考えられる。

・大河原町佐藤屋プロジェクト企画展「戊辰戦争と大河原」（荒武）

2018年10月19日から21日の3日間、宮城県柴田郡大河原町の佐藤家住宅（「佐藤屋」、国有形登録文化財）で開催された企画展「戊辰戦争と大河原」に、部門は展示協力という形で参加した。これは、今年度保全活動を実施した大河原町佐藤源之家文書（詳細は前掲）から、戊辰戦争および大河原町の地域史に関する歴史資料3点を展示し、来場者に歴史資料への関心を持っていただくとする企画である。展示は佐藤源之氏（同家9代目当主、東北アジア研究センター教授）と地元で積極的な活動を

展開する佐藤屋プロジェクトのメンバーが主体となって進められ、部門では資料の選定や解説文の作成などをおこなった。

佐藤家住宅は毎年数回、一般公開のイベントを実施されてその都度数百人の参加者があり、地域文化継承のシンボリック的存在でもある。2019年3月1日から3日の一般公開イベント「ひなまつり展」には部門から荒武が参加したが、大河原町周辺のみならず県外からも見学に訪れる方々が大勢あった。今後も歴史資料の保存と活用を中心に、佐藤源之氏および佐藤屋プロジェクトの活動に協力していく予定である。

- 仙台市橘家文書展示（高橋）

2018年8月1日から、仙台市太白区秋保温泉の老舗旅館「岩沼屋」で、部門監修の古文書展示がおこなわれている。この展示には「会津御征伐二付御人数面附覚帳」など、今から約150年前の慶応4年（1868）に始まった戊辰戦争に、秋保の「山立獵師」たちが従軍した記録である。山立獵師というのは、田畑を荒らす鳥獣を駆除するために鉄砲を所持することが許された百姓のことである。

戊辰戦争において、当初仙台藩は官軍から会津藩攻撃を命じられた。藩はそれに応じ、慶応4年4月に出兵するが、その際、鉄砲を持っていた秋保の山立獵師（岩沼屋など、温泉旅館経営者が多数含まれる）にも従軍の命令が下った。彼らは福島まで従軍し、兵糧の調達などに従事し、小規模ながら戦闘に巻き込まれたことも史料に記されている。戊辰戦争に参加した仙台藩農兵の戦地での実態がわかる、臨場感に満ちた貴重な記録といえよう。

この古文書は、岩沼屋（橘家）からの依頼を受け、部門で撮影や解説をおこなった（橘家文書は約50点）。展示に際しての解説などの監修は、高橋が担当した。古文書のほか、当時のものとみられるサーベルも展示されている。展示は、当初2019年3月いっぱい終了する予定であったが、好評につき継続されるとのことである。なお、この古文書および展示については『河北新報』（2018年7月16日）でも大きく報道された。

4. 東北大学東北アジア研究センターにおける活動

- ◎概要：今年度の成果

東北アジア研究センターの構成員（教授・准教授・助教・学術研究員）は、センター内の各種委員会に所属し、研究活動を円滑におこなうために職務を遂行している。部門専任教員も、それぞれの委員会に配され、同僚たちとともに任務に就いている。また、大学およびセンターの事業として国際交流における貢献も今年度は担当した。部門教員の研究活動を、広く知っていただく機会、あるいは部門の成果を海外の人々とも共有する試みは今後も意識的に取り組みたいと考えている。

- センター内委員会の業務について〈編集出版委員会〉（高橋）

東北アジア研究センターでは、毎年書籍出版物（専書・読本・叢書・報告）と査読制学術雑誌『東北アジア研究』を刊行している。センター編集出版委員会はこうした刊行物の編集を任務としている。高橋は、このうち書籍出版物の企画書審査や査読を担当した。査読は専門の歴史研究とは全く関係のない論説に目を通すことになり、難しさが伴う作業だが、他分野の研究から新たな知見を得ることもでき、自分自身の視野を広げるよい機会にもなっている。

• センター内委員会の業務について〈広報情報委員会〉(荒武、友田)

東北アジア研究センター広報情報委員会が編集・発行を担当するニューズレターは毎年6月、9月、12月、3月の合計4回発行しているが、本年度は荒武と友田(前期のみ)がこれを担当した。センター内部の議論から、共同プロジェクトの取り組み、調査・研究の紹介など読み物として楽しめる内容の記事を集めるよう紙面に工夫を加えたことが今年度の特色といえる。

• センター内委員会の業務について〈研究推進委員会〉(荒武、高橋)

研究推進委員会では、センター内の研究活動を促進し、その発信についてさまざまな運営を実施している。今年度は荒武と高橋が委員となり、毎月第4月曜日午後のセンター全体会議前に開催される「東北アジア研究談話会」の運営を中心に活動した。発表者は海外からの客員研究員やセンター内の研究者が中心で、これまでの研究や現在進めている研究テーマを15分間程度で発表し、それについて10分間の質疑をおこなう。センターは文理合同の研究組織で、専門分野も多彩であるが、毎回大幅に時間を超過する白熱した議論は私たち部門にとっても大きな学術的刺激を受けている。

※参考：東北アジア研究談話会の記録 センターホームページ参照

• センター内委員会の業務について〈地域研究コンソーシアム委員会〉(荒武)

センターが幹事組織になっている地域研究コンソーシアム(JCAS)の学内委員、およびJCAS本体の運営委員(年次集会担当)を今年度は荒武が務めた(センター内委員会は3名、JCAS運営委員会にはセンターから2名選出)。JCASは、2004年に設立された世界諸地域の研究にかかわる研究組織、教育組織、学会、民間組織などが連携する団体で、現在101の国内機関が参加する。今年度は2018年11月に年次集会が大阪大学で開催され、その準備・運営に携わったほか、年間2回実施される運営委員会に出席し、JCAS賞の審査にも従事した。

◎参考：地域研究コンソーシアムホームページ <http://www.jcas.jp/index.html>

• センター外国人客員研究員の受け入れ(荒武)

東北アジア研究センターでは常時2名の外国人客員研究員を受け入れ、センターの研究者と共同研究や日本における実地調査などを実施している。今年度は2018年6月30日から9月1日のおよそ2か月間、日本文学・日本語教育を専門とされるアルド・トリーニ氏(イタリア・ヴェネツィア、カ・フォスカリ大学准教授)を招聘し、調査・研究活動の連携強化を図った(センター受入教員・荒武)。トリーニ氏は学生時代に京都大学へ留学されて以来、日本研究に尽力されヨーロッパおよびイタリアの日本研究学会でも活躍されている。今回は東北大学附属図書館における資料収集をはじめ、学内における講演・研究報告、さらに他大学での招待講演などで日頃の成果を発表された。部門共催の公開セミナーや荒武の担当する東北大学夏季古文書講座でも発表され、さまざまな情報を共有することができた。

• 部門ホームページと広報活動

歴史資料保全活動や地域連携事業を業務の柱とする部門にとって、成果やイベントの情報を発信する広報活動は重要な任務である。ニューズレター『史の杜』以外に、部門が広報活動として活用しているのがホームページである。

ホームページは2012年10月に開設した(<http://uehiro-tohoku.net/>)。「トップページ」「紹介」「スタッフ」「今年度の活動」「これまでの活動」の項目を設けている。部門スタッフのプロフィールや活動方針を紹介しているほか、各種事業の最新の情報を写真入りで紹介している。講演会やシンポジウ

ムなど部門主催のイベント開催が決定した際はいち早く紹介するように心がけており、イベントの成果や出版物についても随時お伝えするようにしている。また、東北大学内の古文書講座の募集をおこなうほか、2016年から継続して白石市渡辺家文書の調査報告書を全文 PDF ファイルで公開するなど、学術的な情報提供の役割も果たしている。

部門第3期は資料情報の公開も活動計画に含めているため、今後もさまざまな方法を模索しながら、一般市民・研究者の双方にとって有益な資料情報が得られるツールにしていきたい。

◎運営経費：部門負担）年間のサーバ使用料18,264円（1,522円×12ヶ月）

・仙台放送ニュースアプリ・東北大学ポケットガイド「テクルペ」コラム（荒武）

東北大学広報部、仙台放送の依頼を受けて、2018年2月から仙台放送ニュースアプリ、東北大学ポケットガイド「テクルペ」にコラム「日記からみた江戸時代」（荒武執筆、全7回）の連載を開始した。また、仙台放送より再度要請を受けて引き続き毎月1本のペースで歴史にまつわるコラムを連載することになった（2019年3月27日「花粉症の原因は人々を救うためだった」から開始）。今年度は第3回から第7回（最終回）をネット配信しているが、読者からもいくつか感想が寄せられ、スマートフォンやインターネット利用者のなかで歴史に興味を持つ人が多いことを実感した次第である。

◎参考：東北大学ポケットガイド「テクルペ」

http://tohoku-univ.ox-tv.co.jp/article_tag/tarticle-column/

仙台放送ニュースアプリ <http://ox-tv.jp/nc/app/>

5. 刊行物

◎概要：今年度の成果

刊行物は、これまで調査・研究成果を盛り込んだ書籍4点、部門が毎年刊行するニューズレター「史の杜」第7号を2019年3月に出版することができた。とくに今年度は、部門およびセンター主催のシンポジウムに関する成果、歴史資料の調査および分析を公開する調査報告書や資料集が主たる成果となっている。いずれも専門研究者との共同作業である。

・部門ニューズレター「史の杜」第7号

部門の情報発信としてニューズレター「史の杜」第7号を2019年3月に刊行した。その目次は以下の通りである。

〈目次〉

- ・古文書のひろば① 旧仙台藩領温泉古文書の活用と保存（高橋陽一）
- ・古文書のひろば② 譜代大名を支える家臣の日常業務（藤方博之）
- ・古文書のひろば③ 御舟入堀に架設された大代浮動橋と賃銭橋
—宮城県県庁文書と渡辺家文書を通して—（高橋守克）
- ・史料保全の現場から 仙台藩砲術師範家に残された扁額をめぐる雑感（後藤三夫）
- ・上廣歴史資料学研究部門2018年度の活動

数年前から「史の杜」は部門の記録だけではなく、調査・研究の成果を含めていくという編集方針をもっており、今回は部門教員とともに高橋守克、後藤三夫両氏に研究成果の一部をご紹介いただいた。とくに地域密着の調査と研究は本号全体で統一したテーマとなっており、読者各位にも広くご理

解を頂戴できるものと自負している。

- 友田昌宏・菊地優子・高橋盛編『岩出山伊達家の北海道開拓移住―「吾妻家文書」を読む―』（東北アジア研究センター叢書第64号、2018年12月刊）

本書に収録する史料は2016年度に岩出山古文書を読む会と共催した吾妻家文書の展示会で、出陳した史料や岩出山古文書講座でテキストとして取り上げた史料である。

明治元年(1868)の戊辰戦争後、仙台藩は大身の藩士に仕える家臣(伊達家からすると「陪臣」)に対して「永の暇」を出し、家禄の支給を打ち切った。困窮する旧臣を前に、一門・岩出山伊達家の当主・邦直(1835～1891年)は彼らともども北海道に移住することを決断する。北海道移住からその後の当別村開拓まで、邦直を支えて移住者集団をリードしたのが、元家老の吾妻謙(1844～1889年)である。本書は吾妻家に残る膨大な文書から北海道移住にまつわる明治3年から同5年まで史料を収録、講演録もあわせて掲載した。

◎センター負担) 出版製作費約60万円

- 荒武賢一朗編『近世日本の貧困と医療』(シリーズ東北アジアの社会と環境、古今書院、2019年2月刊)

本書は2015年12月におこなわれた東北大学東北アジア研究センター創設20周年記念国際シンポジウムのセッション「歴史資料の保全と活用―19世紀日本の村落社会と生命維持―」(報告者は本書執筆者と同じ)を原稿化したものである。

【目次】

巻頭言(岡洋樹) はしがき(荒武賢一朗)

第1章 近世日本の貧困救済と村社会(木下光生 奈良大学文学部教授)

第2章 近世日本の「俗医学」と医薬市場の空間(スーザン・バーンズ シカゴ大学歴史学部教授)

第3章 天草諸島の人口増大と産業の形成(荒武賢一朗 部門准教授)

第4章 山野からみた明治維新(渡辺尚志 一橋大学大学院社会学研究科教授)

第5章 コレラ流行と「自衛」する村落社会(竹原万雄 東北芸術工科大学芸術学部准教授)

私たちが暮らす現代社会において、人々の生存をめぐる問題は極めて重要である。とくに少子高齢化のすすむ日本では、医療や福祉、さらに労働といったさまざまな懸案が取り沙汰されている。そのような現状において、本書は歴史研究者5名による近世日本の貧困と医療を主題とした論文集であり、歴史のなかで人々が織りなした生存戦略を具体的に実証しようと試みた。

全体として、17世紀から19世紀にかけて展開する「民衆たちの生きる術」と「生命をめぐる攻防」を多様な歴史資料の分析により明らかにした。たとえば、これまで私たちが持つ「江戸時代の村」のイメージは「相互扶助」という言葉が浮かぶ。たしかに領主(江戸幕府や藩)は何もしてくれないわけだが、村落は困窮者に対して手放しで救済することはない。また、印刷技術の進展で江戸時代には大量の医学書が出版されたが、数百ページにわたる専門書に目を通せる者は限られている。それでは一般庶民たちはどのようにして医療情報を手に入れたのだろうか。本書ではその答えとして「チラシ」に注目している。薬の広告には効能や関連する治療法の紹介があり、社会のなかで情報を共有するひとつの回路となっていた。人々が「生きる道」を模索し、より良い可能性をつかんでいる様相を歴史資料から明らかにした点に最大の成果が看取できる。

◎センター負担) 出版製作費70万円

- 友田昌宏編『幕末維新期の日本と世界—外交経験と相互認識—』（東北アジア研究専書21号、吉川弘文館、2019年2月刊）

2017年2月に開催した上廣歴史資料学研究部門開設5周年記念国際シンポジウムのうち、セッション1「歴史資料を切り拓く世界—幕末維新期の日本と世界」の成果を論文集として出版した。執筆者は当日の報告者（友田、ル・ルー ブレンダン氏<帝京大学専任講師> ベルテッリ・ジュリオ・アントニオ氏<大阪大学准教授>、山添博史氏<防衛研究所主席研究官>）のほか、コメンテーターをされた森田朋子氏、司会をされた上白石実氏、そして西澤美穂子氏にも加わっていただき、1冊の本として公表することができた。

内容は、歴史的な問いかけとして「幕末、列強諸国と日本は互いにどのようにとらえていたのか」を主題に、日本に接近する諸国の意図を東アジア情勢の中でとらえつつ、未知の相手をいかに認識し、対峙したのかを思想や文化・風俗の面から考察した。さらに不平等条約下で生じた軋轢と外交問題への対応から日本の条約理解や国内法の整備を論じ、明治維新を19世紀の世界史的視野から多面的に描くものといえる。

◎センター負担) 出版製作費100万円

- 荒武賢一郎・高橋陽一編『江戸時代鹽竈神社神宮文書』（東北アジア研究センター叢書第66号、2019年3月刊）

本書は、江戸時代に鹽竈神社（宮城県塩竈市）の神官をつとめた志賀家・小野家文書の古文書解説文を収載した史料集であり、合わせて両家や神社に関する論説も収載した。主な構成は以下の通りである。

解題：志賀家文書について（高橋陽一）／利府町小野家文書（荒武賢一郎）

論説：鹽竈社家の社務と官位叙任（清水翔太郎）／「二霊祭并先師祭祝詞」からみる鹽竈神社の学問の系譜像（城所喬男）

史料 志賀家文書（第一章 志賀家関係記録／第二章 神社関係記録）

史料 小野家文書（法蓮寺奉行所御用留）

志賀家・小野家文書については、これまで部門が調査をおこなってきた。とくに、志賀家文書に関しては目録作成と解説によって全容解明を進めた結果、その重要性が明らかとなり、広く歴史研究において活用してほしいという所蔵者のご意向によって鹽竈神社博物館に収蔵されている。鹽竈神社は古代以来の歴史を持ち、「陸奥国一宮」と称される東北を代表する神社である。江戸時代には、仙台藩主伊達家が大神主となり、厚い信仰を寄せた。ただ、当時の神社の具体的な動きは現在でもあまり知られていない。本書では、志賀家文書を中心に収載し、普段の神官の動向や神社の活動、さらには神社と周辺地域の関係について明らかにする。収載史料は志賀家の系譜、祝詞、願書、所領関係文書、鹽竈神社の来歴や行事に関する文書など幅広いが、とくに志賀家文書『御幣太夫家伝記』（巻・弐）は江戸時代前期（17世紀～18世紀前半）の、小野家文書『法蓮寺奉行所御用留』は寛政年間（1790年代）の仙台藩・鹽竈神社・法蓮寺と神官たちの動きが詳細に読み取れる貴重な史料である。江戸時代の新たな鹽竈神社史の解明と、宗教史・地域史の発展に寄与することが期待される。

なお、本書の土台となる志賀家文書の解説は、部門リサーチアシスタントとして在籍した城所喬男氏（東北大学大学院文学研究科博士後期課程在籍、日本思想史専攻）、アルバイト勤務を経験した清水翔太郎氏（現・東北大学史料館学術研究員）の成果でもある。

◎センター負担) 出版製作費約60万円

7. 予算支出

【平成30年度予算支出】

今年度予算は公益財団法人上廣倫理財団からの寄附金2992万5千円と、前年度まで繰越金約230万円の合計約3220万円をもとに編成した。ただし、今年度からセンター主催春季古文書講座・秋季古文書歴史講座の有料化に伴い、部門への配分額約86万円が追加されているため、これを含めると約3300万円の予算規模となった。支出としては人件費および運営費に大別され、運営費については各費目の詳細を設定し、適正な執行に努めている。

〈別紙：平成30年度東北大学上廣歴史資料学研究部門決算表（詳細）〉

- 人件費…おおむね予算額の通り
- 文書目録作成…想定より低い支出 *人員増ができなかったため
- 資料保全活動消耗品費…加美町塩沢家文書調査関連が中心
- 資料展示制作費…佐藤仁右衛門家文書関係のみ ※部門展示パネル修正を先送り
- 古文書講座運営費…おおむね予算額の通り
- 公開講演会運営費…講演会開催費用、主催講演会が例年より少なかったため
※部門諮問委員会謝金を含む
- 旅費…やや予算を超過、*調査、助教着任準備打ち合わせ、上廣倫理財団訪問など
- 個人研究費…おもに調査・学会出張旅費
- 備品・消耗品費…予算の1.5倍超、パソコン・プリンタ入れ替え、次年度の準備
(ノートパソコン・プリンタなど備品)
- ニュースレター・ポスター印刷費…想定より低い支出、NL = 2号分を計上
*主催講演会が例年より少なかったため
- 書籍・資料収集費…想定より低い支出、部門調査・研究にかかる図書購入
- 通信費…おおむね予算額の通り

8. 専任スタッフの研究活動

【准教授・荒武賢一郎】

◎平成30年度の研究総括

今年度に公表した研究成果は、主として日本近世史研究の海外へ向けた発信、それとともに地域史研究の深化を目指す論点の拡充に努めた。世界的に、あるいは日本でも「グローバル・ヒストリー」という言葉を用いて、国境を超えた広範なフィールドを意識した研究が盛況である。かつてのような「一国史（日本であれば「日本史」）」の微細な内容分析や、「短期の時期設定（平安時代、明治維新、戦後など）」への批判を含めた長期的かつ大きな枠組みで織りなす歴史の描き方には多くの研究者が魅了されている。しかし、その一方で生活感あふれる身近な課題から議論を組み立て、国際的な比較分析に進むという方法がある。筆者は、この後者にあたる手法が大きな学問体系の構築につながるのではないかと期待している。

身近なテーマとは言いながら、ありそうでない研究の「発見」が重要になってくる。たとえば、日本の歴史において「公務員」はどれぐらいの人数が存在したのか、江戸時代と現代の比較分析ではどのような結果がみえるのか、さらに行政サービスはいつから始まるのか、といった単純な疑問から立脚する

と、基礎研究の重要性が増していく。江戸時代の日本では武士が行政組織の中核にいるが、彼らはどのような仕事をこなしていたのだろうか。その関わりからすると今年度は、研究分担者として参加する科学研究費補助金基盤研究(B)「比較史からみる生活の存立構造1600-2000:家政・市場・財政」のメンバーと、日本・アメリカ・イギリス・ドイツの歴史研究者とともに『Public Goods Provision in the Early Modern Economy Comparative Perspectives from Japan, China, and Europe』(University of California Press, 2019)を出版することができた。この論文集は、公共財供給を主題として日本・中国・ヨーロッパの歴史比較を試みている。地域行政、インフラ整備、森林の利用、貧民救済などの分野で各地の事例を抽出し、社会的特質を探り出そうとした。筆者はそのうち、江戸時代の日本における武士と百姓の関係を紹介し、先述した「武士の仕事とは何か？」を考察した。結果、いままで思いもよらなかった史実と、さらなる課題を見つけることができたが、これを国際比較のなかで論じる意義は一層高まりつつあることを実感している。

地域の歴史から日本史全体を考えてみようという考え方で、『近世日本の貧困と医療』なる論文集を出版した。これは、日本列島における各地の特質を明らかにすると同時に、時代を問わず人間社会の大敵である生活の困窮や病気、災害との格闘を当時の資料に基づいて丹念に分析をおこなったものである。そのなかで筆者は、江戸時代の熊本県天草諸島に注目し、これまでの研究で醸成されてきた「貧困史観」の克服に取り組んだ。この貧困史観とは、天草諸島は人口増加が著しく、地域の農業生産に比べて過剰な人口が存在し、そのため島民たちは貧しい生活を余儀なくされた、という説明であった。しかし、産業分布や人々の職業を細かく調べてみると、農業以外の漁業・商業・林業が活発で、しかも天草諸島にはほかの地域からやってくる移住者も少なからずいたことがわかってきた。農業と人口の不均衡だけで見れば生活水準が低いと判断されるが、多様な産業と人々の生活実態を分析することで新たな歴史像が切りひらかれた好例といえよう。

宮城県を中心に東北地方の歴史資料保全とその活用について、今年度はおよそ15件の文書群調査を実施した。そのなかで高橋陽一助教とともに編集した『江戸時代鹽竈神社神官文書』(東北大学東北アジア研究センター叢書第66号、2019年2月刊)は、非常に大きな成果を得た。鹽竈神社(現・宮城県塩竈市)は古代から陸奥国の一宮として名高い存在で、江戸時代も仙台藩(伊達家)の支配下にありながらその格式を維持している。ただし、大きな神社の組織ゆえに具体相は把握できていないことが多く、地域史研究のなかでも重要な課題に位置づけられてきた。今回の編著ではその解明に迫る糸口が明らかとなり、今後に向けて研究の基礎が構築できたと考えている。

江戸時代の歴史資料に関する国際的理解を深めるため、今年度はアメリカ・シカゴ大学で「くずし字ワークショップ」(2018年6月)を、学内では留学生を対象にした日本語特別教育課程「くずし字入門」(前期・後期)を担当した。日本の歴史資料に注目する海外の研究者や学生は年々増加傾向にあり、その調査や分析の方法を指導する意義は深まっている。また、「東北大学夏季古文書講座」(2018年8月)では日本人の学生と留学生と一緒に学習することで相互理解や新たな交流を促進してきた。国内外に向けて日本の歴史・文化に関する情報発信をさらに充実させ、大きな研究の「塊」ができるような環境作りにも貢献したい。

A. 著作

- 荒武賢一郎編『近世日本の貧困と医療』(古今書院、2019年2月)
- Kenichiro Aratake“Samurai and Peasants in the Civil Administration of Early Modern in Japan” (Masayuki Tanimoto, R.Bin Wong, eds『Public Goods Provision in the Early Modern Economy Comparative Perspectives from Japan, China, and Europe』(University of California Press, 2019))

- 荒武賢一朗・高橋陽一編『江戸時代鹽竈神社神宮文書』（東北アジア研究センター叢書66号、2019年2月）
- 荒武賢一朗「つながりを持つ歴史学の課題—古代史研究に学ぶ—」（『歴史学フォーラム2017の記録』、歴史学フォーラム2017実行委員会、2018年9月）
- 荒武賢一朗「日記からみた江戸時代 第3回：曲亭馬琴の日記」（仙台放送ニュースアプリ・東北大学ポケットガイド「テクルペ」2018年5月21日配信）
<https://tohoku-univ.ox-tv.co.jp/article/diary20180521/>
- 荒武賢一朗「日記からみた江戸時代 第4回：将軍が我が家にやってきた」（仙台放送ニュースアプリ・東北大学ポケットガイド「テクルペ」2018年6月22日配信）
<https://tohoku-univ.ox-tv.co.jp/article/diary20180622/>
- 荒武賢一朗「日記からみた江戸時代 第5回：旅日記が語る文化」（仙台放送ニュースアプリ・東北大学ポケットガイド「テクルペ」2018年8月15日配信）
<https://tohoku-univ.ox-tv.co.jp/article/diary20180815/>
- 荒武賢一朗「日記からみた江戸時代 第6回：庶民たちの生活」（仙台放送ニュースアプリ・東北大学ポケットガイド「テクルペ」2018年9月28日配信）
<https://tohoku-univ.ox-tv.co.jp/article/diary20180928/>
- 荒武賢一朗「日記からみた江戸時代 第7回：日記を付ける殿様」（仙台放送ニュースアプリ・東北大学ポケットガイド「テクルペ」2019年1月28日配信）
<https://tohoku-univ.ox-tv.co.jp/article/diary20190128/>
- 荒武賢一朗「コラム：花粉症の原因は人々を救うためだった」（仙台放送ニュースアプリ・東北大学ポケットガイド「テクルペ」2019年3月27日配信）
<https://tohoku-univ.ox-tv.co.jp/article/hay-fever20199327/>

B. 研究発表、講演

- 荒武賢一朗「日本の古文書調査と活用—情報共有を考える—」2018年6月16日、シカゴ大学歴史学部シンポジウム
- 荒武賢一朗「幕末期における村山郡の百姓と代官所—尾花沢『宗尹日記』を読む—」2019年1月20日、山形県立博物館平成30年度第二回古文書歴史講座

C. その他

- <外部資金>科学研究費基盤研究(B)「比較史からみる生活の存立構造1600-2000:家政・市場・財政」研究分担者(研究代表者・谷本雅之東京大学大学院経済学研究科教授)
助成期間：平成29～32年度
平成30年度分担金：50万円
- NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク理事
- 宮城歴史科学研究会委員
- 白石市歴史文化アドバイザー
- 利府町文化財保護審議会委員
- 岩沼市史近世部会調査執筆員
- 東北学院大学非常勤講師
- 放送大学宮城学習センター非常勤講師(集中講義)

【助教・高橋陽一】

◎平成30年度の研究総括

仙台藩領地域史研究に関しては、東京農工大学教授高橋美貴氏の科学研究費研究課題の分担者を務め、2018年8月に岩手県一関市大東町(旧仙台藩領東磐井郡)周辺の古文書調査を実施した。この地域では、従来旧家である金家の古文書調査をおこなってきたが、本調査ではそれ以外の旧家の古文書の所在状況も確認した。

旅行史研究に関しては、交通史学会大会および国際会議「Meiji Conference」で研究報告した。いずれもこれまでの発表論文に事例などを加え、再構成したものである。また、日本温泉地域学会や国際会議「Japan Russia Workshop」では、旧仙台藩領の温泉古文書の調査に関する報告をおこなった。そのほか、青根温泉佐藤仁右衛門家(川崎町)や秋保温泉橘家(仙台市太白区)など、部門による調査の成果についても報告している。

◎研究内容の紹介

◇報告「近世・近代における景勝地の展開—旅行者と地域住民の視点から—」(交通史学会大会・共通論題「19世紀から20世紀初頭の交通と旅・観光」、2018年5月20日、於目白大学)

寺社参詣史を中心とするこれまでの研究により、近世の旅の性質的な多様性が浮き彫りになってきた。本報告ではこの点を踏まえつつ、景勝地を例に旅行者の階層差や参詣以外の行動を検証し、近世から近代にかけての旅の展開について展望することを課題とした。主な対象としたのは、松島(現宮城県宮城郡松島町)である。

古代・中世の松島は歌枕・霊場として知られており、とりわけ松島湾南部の雄島がそうした場として有名であった。近世には、いわゆる「日本三景」の1つとして自然景観が称えられるようになる一方、雄島では松尾芭蕉50回忌の1740年代以降に、蕉門俳人を顕彰する句碑が多数建立されるなど、松島の景観は変貌を遂げていった。

そうした状況下に松島を訪れた旅行者のうち、知識人は近世に建立された句碑に嫌悪感を示した。追い求めていた歌枕・霊場の風景を実見できなかったことや、著名な名所に俗文化の所産が生み出されたことへの批判が背景にあったものとみられる。ただ、知識人の旅は19世紀初頭をピークにしだいに減少していく。

一方、庶民の松島旅行者の中で雄島を訪れる者はほとんどいなかった。自然景観と瑞巖寺周辺をめぐる、それを称賛するのが庶民たちの行動パターンであった。ありのままの風景を堪能する、いわば観光体験にひたっているともいえる庶民の旅はしだいに増加し、1840年～60年頃にピークを迎えた。

19世紀～20世紀初頭は、伝統的風景観から眼前の自然景観を率直に評価する近代的風景観へと人々の風景観が変容していく時代であったとされる。本報告からは、伝統的風景観からの離脱を余儀なくされている旅行者(知識人)と、そもそも伝統的風景観にとらわれていない旅行者(庶民)が存在することが明らかとなった。

明治30年代以降、松島では自然景観の整備を優先した公園整備事業が進められていった。これはありのままの景観を受容する庶民の旅に比重を置いた観光整備であったといえる。近世・近代における景勝地の観光地への展開過程を描くならば、近代交通誕生以前の人々の風景観、およびその土台をなす歴史・文化・美意識にも注目する必要があるだろう。

◇報告 “Traditional Culture and Modern Administration-The Meiji government’s hot spring policy and local community-” (“Revisiting Japan’s Restoration: Interregional, Interdisciplinary, and Alternative Perspectives” (通称 “Meiji Conference”)、2018年9月27日、於シンガポール国立大学) 明治維新・戊辰戦争から150年となる今年、各地で記念行事が行われているが、それは海外においても例外ではない。2018年9月26日から28日まで、シンガポール国立大学にて、“Revisiting Japan’s Restoration: Interregional, Interdisciplinary, and Alternative Perspectives” (通称 “Meiji Conference”) と題する国際会議が開催された。アジア・欧米・オセアニアの大学から43名が参加して開催された3日間の会議は、3～4本の報告からなる9つのパネルのほか、「Modernity and the Subaltern in Asia」という特別セッションが行われ、真摯で活発な議論が展開された。

幕末維新时期は、「明治維新150年」「戊辰戦争150年」という言葉が併用されていたことから明らかに、日本の地域によって捉え方や理解が異なる時代である。国内でこの種の行事を行う場合、こうした相違が議論の中心に置かれる可能性もある。だが、本会議では、幕末維新时期の日本国内の地域性については等閑されており、それに異を唱える意見もなかった。そして、そうであるが故に多彩な視点・素材からの研究発表が可能となっていた。海外での会議だからこそ実現しえたテーマだったといえるだろう。

本会議では、高橋も研究発表を行った。テーマは「伝統的文化と近代行政」で、江戸時代から明治時代にかけての温泉に関する人々の認識と慣習、行政の政策の変容について検証した。日本の伝統的文化と近代社会の展開との関係を考える一つの素材を提供することを狙った内容である。

温泉入浴は、古代の文献にも紹介されている日本の伝統的文化の1つである。日本で旅が大衆化した近世には、温泉入浴も庶民に広まり、19世紀には温泉の番付も出版されている。この時代の温泉は医療の場として認識されており、人々は病気を治療するため温泉に長期間滞在した。明治時代に入っても、政府は当初温泉を医療施設として位置づけていた。しかし、伝染病対策に迫られ、同時に西洋式温泉療法を認知していくにつれて、明治政府の温泉に対する認識は次第に変化していく。一方、明治20年(1887)以降、温泉では大規模な改良が実施されていく。これは、温泉住民が政府の方針を取捨選択し、地域の利益を優先して進めた改良であった。観光地という新たな温泉の姿が、この改良以降本格的に現れるようになるのである。

◇報告「温泉古文書の活用と保存―旧仙台藩領の温泉を事例に―」(日本温泉地域学会第32回研究発表大会、2018年11月26日、於かみのやま温泉・果実の山あづま屋)

旧仙台藩領の主要な温泉のほとんどは、今日まで継続して営業が続いている。高橋は研究や歴史資料保全活動(文化財レスキュー)のため、秋保温泉佐藤勘三郎家・橘家(宮城県仙台市)、川渡温泉藤島家(同大崎市)、青根温泉佐藤仁右衛門家(同柴田郡川崎町)などの古文書調査に携わり、これを広く活用する取り組みを行ってきた。長年にわたる調査の結果、旧仙台藩領の温泉古文書は温泉そのものの歴史を伝えるだけでなく、周辺の資源管理の状況、さらには災害や歴史的イベントにおける現場の状況を詳細に伝える地域史料としての価値を有していることが明らかになった。また、これまで高橋は地域住民と連携しながら歴史資料を幅広く活用する事業に取り組んできた。秋保・川渡・青根温泉の歴史は一般向けの書籍(『湯けむり復興計画 江戸時代の飢饉を乗り越える』)にまとめると共に、講演会でもお話した。また、佐藤仁右衛門家や橘家の古文書は展示を行っており、市民向け古文書講座のテキストとしても温泉古文書を活用している。

旧仙台藩領においては、NPO法人宮城歴史資料保全ネットワークなどにより古文書をはじめとする歴史資料の保全活動が続けられている。こうした活動への市民の理解をより高めるには古文書を活用し

てその魅力をわかりやすく伝えていくことが必要であろうし、そのことが地域の古文書を地域住民の手で保存していく体制作りにもつながっていくのではないだろうか。また、未指定を含めた文化財の地域での活用を推進しようとする文化財保護法改正の動きに鑑みても、温泉古文書の活用は温泉およびその周辺の地域活性化の重要なツールになりうるのではないだろうか。

◇講演 “Sharing the Outcomes of Historical Materials Conservation Activities with Local Communities”
(Japan Russia Workshop Asian Studies at NSU and TU IV、2019年2月18日、於東北大学)

東北大学はロシアのノボシビルスク国立大学と学術協定を締結しており、毎年研究者の派遣交流を行っている。2019年2月18日・19日にはノボシビルスク国立大学人文学部派遣団が来学し、「日露ワークショップ」が開催された。この中で、高橋は歴史資料保全活動の社会還元について、川崎町青根温泉佐藤仁右衛門家文書を例に講演した。

部門の任務は古文書を中心とした歴史資料保全活動の推進とその成果の社会還元で、特に重点を置いているのは後者である。震災後の歴史資料保全活動は、NPO法人宮城歴史資料保全ネットワークや各地の自治体によって数多く進められてきたが、その成果を地域に伝えていくことが大きな課題として残されている。歴史資料保全活動の成果を広く公表することによって、地域に残る身近な文化財の価値を多くの人を知り、地域の文化財を地域住民の手で守る動きを作り出すことができる。高橋は宮城県柴田郡川崎町の佐藤仁右衛門家文書に関して、歴史資料保全活動の成果を社会で共有していくための取り組みを行ってきた。

佐藤家は江戸時代から温泉旅館を営んでいる旧家で、約2万5000点の古文書を保有している。部門は宮城資料ネットや川崎町役場と協同でこの古文書の調査を行い、保全に向けた措置を進めてきた。その結果、佐藤家文書には、これまで知られていなかった温泉や川崎町の歴史を明らかにできる貴重な内容が含まれていることが明らかになった。活動の成果を還元するため、部門では出版事業・講演会・展示などを企画し、古文書の魅力と価値をわかりやすく一般市民に伝えてきた。こうした取り組みの結果、町民有志によって歴史愛好会が結成されるなど、地域の歴史を主体的に学び、それを守っていく動きが少しずつみられるようになってきた。

今後は、他の地域でもこうした取り組みを進めると共に、活動の若い担い手の育成にも努めていくべきだろう。そして、郷土の文化財を地元住民の手で保存できる体制作りにつなげていかなければならないだろう。

A. 著作

- 荒武賢一郎・高橋陽一編『江戸時代鹽竈神社神官文書』（東北アジア研究センター叢書66号、東北大学東北アジア研究センター）

B. 研究発表、講演

- 高橋陽一「近世・近代における景勝地の展開—旅行者と地域住民の視点から—」
2018年5月20日、交通史学会大会、目白大学
- 高橋陽一 “Traditional Culture and Modern Administration-The Meiji government’s hot spring policy and local community-”
2018年9月27日、“Revisiting Japan’s Restoration: Interregional, Interdisciplinary, and Alternative Perspectives”、シンガポール国立大学
- 高橋陽一「温泉古文書の活用と保存—旧仙台藩領の温泉を事例に—」

- 2018年11月26日、日本温泉地域学会第32回研究発表大会、かみのやま温泉・果実の山あづま屋
- 高橋陽一 “Sharing the Outcomes of Historical Materials Conservation Activities with Local Communities”
- 2019年2月18日、Japan Russia Workshop Asian Studies at NSU and TU IV、東北大学

C. その他

- 〈獲得外部資金〉「近世東北地方における自然資源の利用・管理と地域社会に関わる歴史学的研究」（日本学術振興会科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）研究分担者、助成期間2015年4月1日～2019年3月31日）
- 交通史学会常任委員
- 宮城歴史科学研究会事務局
- 郵政歴史文化研究会研究員
- 岩沼市史近世部会調査執筆員
- 東北学院大学非常勤講師

【助教・友田昌宏】

友田は刊行物で掲出した編著2冊の作業を中心に研究を進めた。その他、2018年度は鶴岡市郷土資料館の展示「庄内の戊辰戦争展」にあわせて7月26日に題して「戊辰戦争における米沢藩と庄内藩」と題して講演、8月14日には東北福祉大学と河北新報社が主催する市民講座「戊辰150年と仙台藩」の第4回で「岩出山伊達家の戊辰戦争と北海道開拓移住」と題して講演した。

※部門における著作物は「出版物」に掲載

【助教・藤方博之】

◎2018年度の研究総括

2018年10月の着任以来、(a) 武士の「家」の実態、(b) 出羽村山地域の支配と地域社会、という二つのテーマを設定して、研究に取り組んできた。(a)については、11月の東北アジア研究談話会にて、着任前からの研究内容をまとめ、今後の方針を示した。山形市大久保家文書調査（山形藩水野家家臣）は、科研費によって技術補佐員1名を雇用し、写真撮影・目録作成に注力した。また、仙台藩内の武家文書の調査に着手し、写真撮影などによって分析素材の収集を進めた（登米伊達家文書（東北大学付属図書館所蔵）など）。さらに、部門の業務で接した文書群のなかからも、(a)に関わるものを見出した（塩沢家文書、花井家文書（いずれも個人蔵））。

(b)については、分析のための基盤を整えている途上である。具体的には区有文書（村木沢文書）、名主家文書（山形大学附属博物館寄託会田家文書）の写真撮影に取り組んでいる。また、以前発表した研究内容を一般向けに再構成した原稿を、タウン誌『やまがた街角』に寄稿した。

◎研究内容の紹介

◇報告「近世大名家臣の『家』をめぐる共同性」（東北アジア研究談話会11月例会、仙台・東北大学、2018年11月）

本報告では、武士の「家」に関する藤方のこれまでの研究をまとめた。概念規定や先行研究について概観したあと、特に藤方が注目する共同性（集団内の共同利益を保障する性質）について論じた。主な分析対象である佐倉藩堀田家について、特徴的な事例を紹介しながら、共同性の現れ方を論じた。最後に、伝存する史料から「家」の存続をめぐる人々の行動・意識を引き続き分析し、その視角から日本近

世社会の構造究明を目指すことを研究目標として掲げた。

A. 著作

- 藤方博之「紹介 木村直樹・牧原成征編『十七世紀日本の秩序形成』」『歴史評論』歴史科学協議会、824号、p.109、2018年
- 藤方博之「戊辰戦争時の佐倉藩柏倉陣屋」『やまがた街角』2019年春号、pp.56-62、2019年

B. 研究発表、講演

- 藤方博之「近世大名家臣の『家』をめぐる共同性」東北アジア研究談話会11月例会、仙台・東北大学、2018年11月
- 藤方博之「コメント」千葉歴史学会近世史部会例会、千葉大学、2019年1月

C. その他

〈外部資金〉

- 「近世・近代移行期に関わる大名家臣（士族）家文書の基礎的調査と研究」科学研究費補助金（若手研究（B））、研究代表者、2015-2017年度、2018年度：213,788円、独立行政法人日本学術振興会
- 「『家』の後継者育成に関する歴史的研究」科学研究費補助金（基盤研究（B））、研究分担者（研究代表者・鈴木理恵広島大学教授）、2018-2021年度、2018年度：530,000円、独立行政法人日本学術振興会

〈学外活動〉

- 歴史科学協議会編集委員
- 国立歴史民俗博物館共同研究員
- 東京理科大学非常勤講師

◇おわりに―平成30年度の活動―

今年度の調査・研究活動はこれまでの蓄積をもとに継続事業を深めながら、新たな取り組みを展開させることができた。歴史資料調査についてはシンポジウムなどの成果とともに資料集を報告書という形で発刊できたことが大きい。また、宮城資料ネットの保管文書について撮影作業を進めることで、宮城県および東北地方の資料保全活動はさらに進化を遂げ、引き続き研究の活性化につながるという見通しも立ちつつある。作業が円滑に発展していくことで、学内・地域のなかで部門の成果が高く評価を受け、歴史学・歴史資料学の盛り上がりにも貢献できたと自負している。

古文書講座の再編と新たな取り組みは第二期全体の計画でも重視してきた。とくに今年度はセンター講座設置という大きな変化があり、今後の動向を含めながら検討を重ねる必要があるだろう。受講者の増加への対処はこれにとどまらず、引き続き良質な環境で多くの方々が学習に向き合うことのできる体制を強化していきたい。

以上の通り、今年度も充実した調査・研究活動を実施することができた。予算面では、財団からの手厚いご支援が何よりもその事業を支えており、円滑な部門事業の執行が実現できたと考えており、部門の研究環境は良好な状態を維持できている。

成果の還元・発信をより一層高め、これまでの課題を克服しながら次年度の活動を進めていきたい。

(4) 研究紹介発表

東北アジア研究センターではセンター教員の研究を相互に理解し関連情報を交換するための「東北アジア研究談話会」を行っている。毎月1回1人ずつ(持ち時間20分)、センター全体主義(構成員は教授、准教授、助教、助手、研究員など)の直後に開催し、コーヒー・お茶を飲みながらフランクな会としてセンター内研究交流・親睦を深めるとともに、共同研究等の企画着想の機会として提供している。発表は、センター教員(客員教員を含む)による各自の研究紹介である。以下に「東北アジア研究談話会」の後援者、タイトルのリストを示す。

東北アジア研究談話会

第54回(2018年4月23日)宮本毅(助教)

「山形県北部最上地域(新庄・向町盆地)の火山灰層序」

第55回(2018年5月28日)寺山恭輔(教授)

「スターリンとソ連極東」

第56回(2018年6月25日)ハーベック・オットー(外国人研究員)

「Towards a short history of land use in Siberia: How to conceptualise it and why it is relevant」

シャリギン・イゴール(外国人研究員)

「地球深部の火成炭酸塩岩の重要性」

第57回(2018年7月30日)デレーニ・アリーン(准教授)

「The role of women in innovation and adaptation among nori cultivators in Miyagi, Japan」

アルド・トリーニ(外国人研究員)

「非漢字圏学習者向けの漢字教育の一考察」

第58回(2018年9月26日)福田雄(助教)

「慰霊祭・追悼式の社会学ースマトラ島沖地震をめぐるアチェの記念式典」

第59回(2018年10月22日)イスラモフ・バフティオル(外国人研究員)

「Post Karimov's Foreign Policy of Uzbekistan」

第60回(2018年11月26日)藤方博之(助教)

「近世大名家臣の『家』をめぐる共同性」

第61回(2019年1月28日)是恒さくら(学術研究員)

「記憶を紡ぐ～土地、人、芸術～」

第62回(2019年2月25日)ゾルザヤ ムンフツェレン(外国人研究員)

「The formation and trend of business ethics in Mongolia」

第63回(2019年3月25日)塩谷昌史(助教)

「19世紀におけるロシア内務省中央委員会の設立と統計制度改革」

また、6月3日には、2018年度の共同研究及び個人研究の報告するための「東北アジア研究センター研究成果報告会」を開催した(口頭発表一件20分程度、およびポスター発表)。こちらの後援者およびタイトルリストは、次々項目「(5)研究成果公開」中の「(B)2015年度に実施された公開講演会、共同研究等」を参照されたい。

(5) 学術協定

(A) 学術協定による海外の学術機関等との連携強化

本センターは、主として東北アジア諸国の研究教育機関との研究交流を行うためのネットワーク構築を進めてきた。このためセンターは、大学間学術交流協定や部局間学術協定を国内外の教育機関と締結し、東北アジア地域研究を遂行するための国際的な環境づくりを行っている。これまでの締結機関及び締結年月日は表に記した通りである。

締結年月日	相手国機関名
1992. 8 .10	★ロシア連邦 ロシア科学アカデミーシベリア支部
1999. 1 .12	☆アメリカ アラスカ大学
2000. 8 .21	★モンゴル モンゴル科学アカデミー
2000.10. 2	◆モンゴル モンゴル科学技術大学ジオサイエンスセンター
2001. 3 . 1	★中国 吉林大学
2001. 6 .25	◆中国 広東省民族宗教研究院
2001.11.16	★モンゴル モンゴル科学技術大学
2002.10. 1	◆ロシア連邦 ロシア科学アカデミーシベリア支部 V.N. スカチョフ森林研究所
2003. 7 . 4	★ロシア連邦 ノボシビルスク国立大学
2005. 9 . 1	◆ロシア連邦 ロシア科学アカデミー極東支部経済研究所
2008. 4 . 1	◆中国 内蒙古師範大学蒙古学学院
2008. 4 .25	◆韓国 高麗大学校中国学研究所
2008. 4 .25	◆韓国 高麗大学校日本研究センター
2008. 9 .22	◆中国 内蒙古大学蒙古学学院
2009. 8 .21	★イタリア フィレンツェ大学
2009. 8 .25	☆イラン テヘラン大学
2009. 9 .30	◆ロシア連邦 ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学・北方民族問題研究所
2011. 9 .28	◆中国 内蒙古師範大学旅游学院
2013. 3 . 1	☆ドイツ ドイツ航空宇宙センター
2014. 2 .25	◆中国 中央民族大学蒙古語文学系
2014. 9 .30	☆ロシア連邦 ロシア国立高等経済学院
2016. 4 . 1	◆ロシア連邦 ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学・北方民族問題研究所(学生交流に関する覚書)
2016. 8 .15	◆ロシア連邦 ロシア科学アカデミーシベリア支部ヴィノグラードフ記念地球化学研究所
2017. 3 .12	◆ロシア連邦 ロシア科学アカデミー森林生態生産研究センター
2018. 5 .21	◆ロシア連邦 モスクワ国立大学情報数理学部

◆部局間協定 ★センターが世話部局となった大学間協定 ☆センターが協力部局となった大学間協定

(6) 研究成果公開

(A) 既刊の刊行物

- 『東北アジア研究』

東北アジア研究センターが主催する、東北アジア地域研究のための学術雑誌。1997年第1号以降刊行。

<第23号>目次

[論文]

- 連続性への希求—香港新界沙田 W 氏族譜の内容分析を通してみる系譜意識—
- 「満州国」以前の東部内モンゴルにおける近代日本の医事衛生調査
- Land improvement under conditions of permafrost: melioratsiia and intended forms of environmental change in Soviet Yakutia

[書評]

- 高倉浩樹編『寒冷アジアの文化生態史』古今書院、2018年

- 『東北アジア研究センター叢書』

- 滝口良（編著）八尾廣・坂本剛・佐藤憲行・松宮邑子・G. ロブサンジャムツ：近現代モンゴルにおける都市化と伝統的居住の諸相 ウランバートル・ゲル地区にみる住まいの管理と実践（2018年12月26日）
- 友田昌宏・菊地優子・高橋盛：『岩出山伊達家の北海道開拓移住—「吾妻家文書」を読む—』（2018年12月14日）

- 『東北アジア研究センター報告』

昨年度の刊行はなし

- 『東北アジア研究センターニューズレター』第1号（1999）～第80号（2019）

本研究センターの活動状況や諸情報を採録した「東北アジア研究センターニューズレター CNEAS」を年4回出版している。学内外の機関等に配布のほか、本センターの活動に協力いただく個人に配布している。2018年度は以下のとおり発行した。

第77号 / 2018年6月29日発行

- 巻頭言「久しぶりのロシア極東」（寺山恭輔）
- 最近の研究会・シンポジウム等
 - ▷ 東北大学東北アジア研究センター公募型共同研究ワークショップ・第4回川内茶会セミナー
 - ▷ 『東北アジア先史「石」文化への学際的視点—地質学・考古学からのアプローチ—』
 - ▷ 東北アジア研究センター公開講演会「玉ぎょく—その起源と東北アジア先史の「石」文化」
 - ▷ 日露ワークショップ2018「Asian Studies at NSU and TU III」
 - ▷ シンポジウム「『東北の近代と自由民権—「白河以北」を越えて』が問いかけるもの」新任・客員教授紹介
- 私の東北アジア研究「民主と独裁の狭間で揺れる香港」（内藤寛子）
- 著書紹介
- 活動風景「沈み込む太平洋プレートの実態解明に向けて」（平野直人）

第78号 / 2018年9月28日発行

- 巻頭言「エネルギー転換とデモクラシー」(明日香壽川)
- 最近の研究会・シンポジウム等
 - ▷東北大学東北アジア研究センター研究成果報告会2017
 - ▷研究成果報告会2017報告「ウランバートル・ゲル地区における住まいの複層的調査を通した都市環境問題解決方策の提言」
 - ▷第5回日露人文社会フォーラム
 - ▷第5回日露人文社会フォーラム報告「東北大学最上川流域先史学プロジェクト(旧石器考古学)の展望」
- 受賞報告
 - ▷石井敦准教授の共著論文受賞
 - ▷田中利和学術研究員、第24回日本ナイル・エチオピア学会高島賞を受賞
- 客員研究員紹介
- 活動風景「日本の環境外交と科学についての研究」(宮後祐充)

第79号 / 2018年12月25日発行

- 巻頭言「加速の時代に」(辻森樹)
- 最近の研究会・シンポジウム等
 - ▷東北大学若手アンサンブルプロジェクト小規模研究会「新たな地域研究方法の創出を目指して——移動・流動とインフラに関する越境的比較研究」
 - ▷第18回共催講演会 東北大学東北アジア研究センター「東北アジア地域の環境・資源に関する研究連携ユニット」
 - ▷第3回災害人文学研究会「ドキュメンタリー映画『廻り神楽』を観る」
 - ▷「みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ 2018」にて作品発表
- 客員教授紹介
- 新任紹介
- 私の東北アジア研究「東アジア社会における結婚移住女性たちと「多文化」への道のり」(李善姫)
- 活動風景「国際会議 “Meiji Conference” 参加記」(高橋陽一)

第80号 / 2019年3月26日発行

- 巻頭言「歴史研究における問題設定」(岡洋樹)
- 最近の研究会・シンポジウム等
 - ▷伊達市噴火湾文化研究所・東北大学東北アジア研究センター 第9回学術交流連携講演会
 - ▷2018年度公開シンポジウム「オーラルヒストリーによる旧ソ連ロシア語系住民の口頭言語と対ソ・対露認識の研究」シンポジウム開催報告
 - ▷「東北アジアを中心としたアジア地域における動物資源利用問題と『人間性』—生業、娯楽、奢侈の観点から」
 - ▷東北アジア研究談話会「近世大名家臣の『家』をめぐる共同性」
- 私の東北アジア研究「ウィーン体制におけるロシア外交」(矢口啓朗)
- 客員研究員紹介
- 著書紹介
- 活動風景「最近の台湾における近現代資料館事情」(上野稔弘)

英文ニューズレター 『The Bulletin CNEAS vol.6』 2019年3月発行

海外の東北アジア研究者および関連研究機関との交流を促進するため、本研究センターの活動状況や諸情報を採録した年一回の英文のニューズレターです。特に、センターでの客員教授、客員研究員との連携を継続・発展させるということも重要な目的としています。

- Focus: Old man Z
- Recent Events: The birth of sitting manners and rei
- Recent Events: Tenth Katahira Festival 2017
- Recent Events: International exchange Novosibirsk State University Japan-Asia Lectures
- Recent Events: Report from Cambodia -thoughts on land-mine removal
- Recent Events: “Jade” – the Origin and the Prehistoric Culture of Northeast Asia
- Awards: Professor Motoyuki Sato wins Kiyasu Award at IEICE
- Awards: The third young researchers’ ensemble workshop award at Tohoku University -Engages area studies aimed at creating Ethio-tabi through Industry-academia-government cooperation with Africa
- Awards: The third young researchers’ ensemble workshop award at Tohoku University Cultural anthropological studies on the relationship between workers and residents of Hirono Town in Futaba District of Fukushima Prefecture
- New Staffs and Visiting Scholars
- Publications
- Letters: Permafrost dynamics and land use in different parts of northern Eurasia (Joachim Otto HABECK, Professor. Institute for Socianthropology, Universität Hamburg (Germany))
- Letters: Research on the origin of the Japanese language (Aldo Tollini, Professor. Ca’ Foscari University, the faculty of Asian and Mediterranean African Studies (Italy))

東北アジア学術読本（東北大学出版会）

昨年度の刊行はなし

東方アジア研究叢書

専書21号：友田昌宏（編者）、西澤美穂子、山添博史、ル・ルー ブレンダン、ベル テッリ・ジュリオ・アントニオ、森田朋子、上白石実「幕末維新期の日本と世界 —外交経験と相互認識—」吉川弘文館（2019年2月15日）

東北アジア学術交流懇話会ニューズレター

第75号 /

- 追悼：西澤潤一先生を偲んで（工藤純一）
- 東北アジア通信：おいしい馬乳酒を捜す地中レーダー（佐藤 源之）
- 東北アジア通信：モンゴルにおける炭鉱の社会に対する否定的影響の低減（ダライバヤン ビヤムバ ジャヴ）
- 会員の広場：東北アジアの変化とともに：40年間の履歴（岡 洋樹）

第76号 /

- 論点：私の震災の記憶（内藤 寛子）
- 東北アジア通信：メディア・イベントとしての慰霊祭・追悼式（福田 雄）
- 東日本大震災後の社会の媒体としてのドキュメンタリー映画（是恒さくら）
- 会員の広場：山形市内での史料調査から大名飛地領に迫る（藤方 博之）

(B) 2018年度に実施された公開講演、共同研究会等

上廣歴史資料学研究部門主催講演会

「川崎の記憶～古文書からよみがえるふるさとの歴史～」

日 時：2018年4月21日（土）13時30分～16時30分

場 所：川崎町山村開発センター3階ホール

報 告：

「中津山藩から川崎伊達家へ～川崎伊達家文書の調査から～」

蝦名裕一（東北大学災害科学国際研究所准教授）

「青根にひたる、青根に生きる～佐藤仁右衛門家文書にみえる温泉・湯治・飢饉～」

高橋陽一（東北大学東北アジア研究センター助教）

主 催：東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門

東北大学災害科学国際研究所

川崎町教育委員会

後 援：川崎町歴史友の会、NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク

公開講義：北極社会と開発

Material Culture and Social Meanings of Fences and Barriers: On the Organisation of Space in a Post-socialist Siberian City

講演者：Otto Habeck 氏（ドイツ・ハンブルグ大学教授 東北大学東北アジア研究センター客員教授）

日 時：2018年5月8日（火）16：00-18：00

会 場：東北大学東北アジア研究センター 430教室

講 師：北極域研究推進プロジェクト（ArCS）東北大学グループ（東北大学東北アジア研究センター）

東北アジア研究センター

2017年度 研究成果報告会

日 時：2018年5月14日（月）10：00～17：50

場 所：東北大学片平キャンパス 片平北門会館2F エスパス

プログラム：

◆10：00 開会

◆10：10～17：40 共同研究発表、ポスター発表

◆17：50 閉会

第5回日露人文社会フォーラム

日 時：2018年5月21日（月）10：15～18：10

場 所：東北大学片平キャンパス・エスパス（北門会館2階）

主 催：東北大学とモスクワ大学

後 援：ロシア連邦大使館、ロシア連邦交流庁

コーディネーター：

RAEVSKY Aleksander 准教授（モスクワ国立大学・心理学部）

塩谷 昌史 助教（東北大学・東北アジア研究センター）

I. 開会式（10：15～10：30）

1. 10：15～10：20 植木 俊哉 理事・副学長（東北大学）の挨拶
2. 10：20～10：25 高倉 浩樹 センター長（東北大学・東北アジア研究センター）の挨拶
3. 10：25～10：30 Semin Nikolay 副学長（モスクワ国立大学）の挨拶

II. 第1部（10：30～12：30）

1. 心理学（10：30～11：30）

司会：RAEVSKY Aleksander 准教授（モスクワ国立大学・心理学部）

10：30～11：00 辻本 昌弘 准教授（東北大学・大学院文学研究科）

「アルゼンチン日系人の経済的適応過程と互助集団」

11：00～11：30 Barabanshchikova Valentina 教授（モスクワ国立大学・心理学部）

「現代組織の職業上の協力の变形について」

2. 考古学（11：30～12：30）

司会：岡 洋樹 教授（東北大学・東北アジア研究センター）

11：30～12：00 阿子島 香 教授（東北大学・大学院文学研究科）

「東北大学最上川流域先史学プロジェクト（旧石器考古学）の展望」

12：00～12：30 Vinogradova Ekaterina 准教授（モスクワ国立大学・歴史学部）

「Backed microliths of late Upper Palaeolithic kamennobalkovskaya culture」

12：30～13：15 昼食休憩

III. 第2部

3. 文学（13：15～14：15）

司会：鳩山 紀一郎 准教授（長岡技術科学大学）

13：15～13：45 沼野 充義 教授（東京大学大学院人文社会系研究科）

「現代日本文学におけるロシアのイメージ」（仮題）

13：45～14：15 Ledenev Alexander 教授（モスクワ国立大学・ロシアの言語文化学院）

「国民性の鏡としてのロシア文学」

4. 言語教育（14：15～15：45）

司会：所 伸一 教授（札幌保健医療大学）

14：15～14：45 Bogomolov Andrei 教授（モスクワ国立大学・ロシアの言語文化学院）

「どのようにロシアの言語と文化を外国の学生に教えれば良いか—現代の方法」

14：45～15：15 柳田 賢二 准教授（東北大学・東北アジア研究センター）

「ロシア語との対照における日本語子音体系の特徴」

15：15～15：45 Chastnykh Valeriy 教授（モスクワ国立大学・ロシアの言語文化学院）

「どのように日本人にロシアをよく見せれば良いかー教育プログラムの成功例」

15：45～16：00 コーヒーブレイク

5. 日本学研究（16：00～17：00）

司会：阿部 恒之 教授（東北大学・大学院文学研究科）

16：00～16：30 尾崎 彰宏 教授（東北大学・大学院文学研究科）

「東北大学発の日本学と日本学国際共同大学院とは何か」

16：30～17：00 Mazurik Victor 准教授（モスクワ国立大学アジア・アフリカ諸国学院）

「文化的自己アイデンティティの問題について」

IV. 総合討論：今後の日露の学術交流ー心理学の成功例を考えるー（17：00～18：00）

17：00～17：10 阿部 恒之 教授（東北大学・大学院文学研究科）

17：10～17：20 Barabanshchikova Valentina 教授（モスクワ国立大学心理学部）

17：20～18：00 総合討論

V. 閉会式（18：00～18：10）

18：00～18：05 山口 昌弘（東北大学・副学長）の挨拶

18：05～18：10 Semin Nikolay（モスクワ国立大学・副学長）の挨拶

東北アジア研究センター 談話会

「スターリンとソ連極東」

日 時：2018年5月28日（月）13：50～14：30

会 場：東北大学 川内北合同研究棟 4F 大会議室（436室）

（川内北キャンパス：仙台市青葉区川内41）

主 催：東北大学東北アジア研究センター

講 師：東北アジア研究センター 教授 寺山恭輔

2018年度夏季国際シンポジウム

移りゆく北極域と先住民社会ー土地・水・氷

On Land, Water and Ice: Indigenous Societies and the Changing Arctic

日 時：2018年7月5日（木）・6日（金）

会 場：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター（SRC）4階会議室（403）

主 催：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター（SRC）、北極域推進プロジェクト（ArCS）

共 催：北海道大学北極域研究センター（ARC）、北海道アイヌ・先住民センター（CAIS）、東北大学東北アジア研究センター、ドイツ歴史研究所（モスクワ）

後 援：地域研究コンソーシアム

東北大学東北アジア研究センター

「東北アジア地域の環境・資源に関する研究連携ユニット」

第17回共催講演会

日 時：2018年7月13日（金）

会 場：C22 conference room at IDE

Part 1. "Development of TEMM", by Dr. Xianbin Liu (IGES);

"Results of TEMM 20 and future tasks", by JangMin Chu (Korea Environment Institute)

Part 2. "International cooperation for tackling air pollution in East Asia: Overcoming fragmentation of the epistemic communities", by Dr. Masaru Yarime (City University of Hong Kong/ University College London/University of Tokyo)

共 催：◎アジア経済研究所新領域研究センター

◎大学共同利用法人人間文化研究機構 (NIHU) ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究推進事業（北東アジアにおける地域構造の変容：越境から考察する共生への道）」東北大学東北アジア研究センター拠点

◎総合地球環境学研究所

日本学術会議第一部夏季部会 公開シンポジウム

「東日本大震災後の10年を見据えて」

日 時：2018年7月29日（日）13：30～16：45

会 場：東北大学川内南キャンパス文科系総合講義棟2階法学部第1講義室

プログラム：

1. 講演

(1)吉原直樹（日本学術会議連携会員、横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院 教授）

「ひとつの復興、いくつもの復興——社会学からのアジェンダ設定に向けて」

(2)佐藤大介（東北大学災害科学国際研究所 准教授）

「『ふるさとの歴史』を救う意味—心理社会的支援としての歴史資料保全の可能性—」

(3)奥山恵美子（前仙台市長）

「復旧・復興のプロセスから見た今後の課題—現場の視点から」

プログラム：

2. 総合討論司会：佐藤嘉倫（日本学術会議第一部会員、東北大学大学院文学研究科 副研究科長）

討論者：町村敬志（日本学術会議第一部幹事、一橋大学大学院社会学研究科 教授）、島田明夫（東北大学公共政策大学院・法学研究科・災害科学国際研究所 教授）、吉原直樹、佐藤大介、奥山恵美子

共同主催：日本学術会議第一部、東北地区会議、国立大学法人東北大学

東北大学東北アジア研究センター

「東北アジア地域の環境・資源に関する研究連携ユニット」

第18回共催講演会

日 時：2018年8月6日(月) 14:15～16:45

場 所：東京サイト 会議室313室 (開場時間：14:00～17:00)

日本橋ライフサイエンスビルディング

テーマ：河流のあるところに守り人を

講演者：劉盛(環境 NGO・グリーン湖南 理事長)

共 催：◎大学共同利用法人人間文化研究機構(NIHU) ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究推進事業(北東アジアにおける地域構造の変容：越境から考察する共生への道)」東北大学東北アジア研究センター拠点

◎中国環境問題研究会

公開セミナー

「非母語話者への文語文教育を考える ―日本研究のリテラシー養成に向けて―」

日 時：2018年8月9日(木) 15:00～17:00

会 場：東北大学川内北キャンパス 川北合同研究棟1階101(IEHE ラウンジ)

主 催：東北大学高度教養教育・学生支援機構 言語・文化教育センター

共 催：東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門

27th Annual Conference of the Northeast Asia Economic Forum

(第27回北東アジア経済フォーラム国際会議)

場 所：TOKYO ELECTRON House of Creativity (東北大学知の館)

日 時：August 9th and 10th, 2018 (2018年8月9,10日)

● August 9th

10:35-12:15

Session 1: Building a Northeast Asia Economic Community and its Extended Regions

13:15-14:45

Session 2: Cross-border Infrastructure and Special Economic Zones in Northeast Asia

15:00-16:45

Session 3: Financial Cooperation in Northeast Asia

● August 10th

9:00-10:15

Session 4: Energy and Environment in Northeast Asia

10:30-12:00

Session 5: Tourism Cooperation in Northeast Asia

13:00-14:15

Panel Discussion on Natural Disaster and Regional Cooperation

14:30-15:15

Closing Session

○ Organized by (主催)

Northeast Asia Economic Forum (北東アジア経済フォーラム) | College of Social Science,
University of Hawaii (ハワイ大学社会科学部)

○ Hosted by (共催)

Tohoku University (東北大学) | 経済学部 | 国際災害科学研究所 | 東北アジア研究センター | 東
北大学研究推進・支援機構地の創出センター

○ under the auspices of (後援)

公益財団法人 仙台観光国際協会

東北大学若手アンサンブルプロジェクト小規模ワークショップ

Transboundary Comparative Study on Mobility, Fluidity and Infrastructure

日 時：2018年9月17日(月) 10:30-15:00

場 所：ロンドン大学東洋アフリカ研究学院 SOAS

主 催：東北大学若手アンサンブルプロジェクト小規模研究会

共 催：東北大学東北アジア研究センター

東北大学東北アジア研究センター

「東北アジア地域の環境・資源に関する研究連携ユニット」

第19回共催講演会

日 時：2018年9月21日(金) 13:30～16:00

会 場：東京サイト 会議室302室 日本橋ライフサイエンスビルディング

講演者：

・顧 阿倫(清華大学・教授)

“Carbon market mechanism and economic impacts”

・邹 毅(北京環境取引所・研究発展部副主任)

“Mechanism Design and Market Performance of Beijing ETS”

コメンテーター：

・林佳介(磐之石環境とエネルギーセンター副主任)

・明日香壽川(東北大学教授)

東日本大震災以後のドキュメンタリー映画から

地域社会・地域文化を考える公開研究会

日 時：2018年10月2日(火) 18:15～20:30

会 場：東北大学川内北キャンパス講義棟B棟101室

プログラム：

第一部 映画上映会 18:15～19:50

第二部 意見交換会 20:00～20:30

[登壇]

遠藤協(『廻り神楽』共同監督・兼プロデューサー)

北村皆雄(『廻り神楽』エグゼクティブプロデューサー)

[ファシリテーター]

小谷竜介(東北アジア研究センター客員准教授、東北歴史博物館副主任研究員)

主 催：指定国立大学災害科学世界トップレベル研究拠点

東北大学東北アジア研究センター災害人文学ユニット

人間文化研究機構 北東アジア地域研究推進事業 国際シンポジウム
「北東アジアにおける地域構造の変容：越境から考察する共生への道」

Regional Structure and Its Change in Northeast Asia:

In Search of the Way to Coexist from the Point of View of Transborderism

日 時：2018年9月22～23日(土、日)

場 所：国立民族学博物館 第4セミナー室

September 22

Opening remarks and general introduction (13:00～13:15)

Nobuhiro KISHIGAMI (National Institutes for the Humanities)

Kazunobu IKEYA (National Museum of Ethnology)

Session1 (organized by Center for Northeast Asian studies, National Museum of Ethnology)

13:15～14:45

Long-Term History on Ecological-Cultural Diversity in Northeast Asia.

Introduction: Kazunobu IKEYA (National Museum of Ethnology)

1: Mark HUDSON (Max Planck Institute for the Science of Human History)

“Ancient Globalisation in Northeast Asia: Integrating Archaeology,
Language and Genetics”

2: Daehwan KIM (National Museum of KOREA)

“A Study on the Diffusion of Wooden chamber in Northeast Asia”

3: Hiroyoshi KARASHIMA (Center for Northeast Asian studies, National Museum of Ethnology)

“Movement of Local Products in Modern Northeast Asia ”

Discussant: Hideyuki OHNISHI (Doshisha Women's College of Liberal Arts)

Session 2 (organized by Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido Univ.)

15:00～16:30

Rethinking the Northeast Asian Community

Chair: Norio HORIE (University of Toyama)

Introduction: Akihiro IWASHITA (Hokkaido University)

1: David WOLFF (Hokkaido University)

"History as a Component of Northeast Asian Region-building: Factors and Perspectives"

2: Shinichiro TABATA (Hokkaido University)

"Advancing Economic Integration in Northeast Asia over the Past Three Decades"

3: Yasuhiro IZUMIKAWA (Chuo University)

"The Trump Shock and Its Impacts on Regional Integration in Northeast Asia"

Discussant: Akihiro IWASHITA

Session 3 (organized by Center for Northeast Asian Studies, Tohoku Univ.)

16:45 ~ 18:15

Drastic Change of the Energy/ Climate Policy in the East Asia

Chair: Jusen ASUKA (Tohoku University)

Introduction: Jusen ASUKA (Tohoku University)

1: Alun GU (Tsinghua University)

"Carbon Market Mechanism and Economic Impacts"

2: Yi ZOU (China Beijing Environment Exchange)

"Mechanism Design and Market Performance of Beijing ETS"

3: Jusen ASUKA (Tohoku University)

"Changing China, Korea, Taiwan and stagnating Japan"

Discussant: Kenji TAKEUCHI (Kobe University)

September 23

Session 4 (organized by Center of Far Eastern Studies, Univ. of Toyama)

※ Session 4参加希望者は下記連絡先までメールで連絡をお願いいたします (9月20日まで)。

Contact us for attending Session 4 by e-mail below (by 20 Sept.).

9:15 ~ 10:45

Sustainable Utilization of Forest Resources in Northeast Asia

Chair: Hiroko IMAMURA

1: Naoya WADA (University of Toyama).

"Spatial Variations of Forest Vegetation Affected by Fire in Zeysky Nature Reserve, Far Eastern Russia"

2: Masashi YAMAMOTO (University of Toyama).

"China's Forest Policy Change and Its Effect on Wood Trade"

3: Gaku ITO (NIHU & University of Toyama).

"Exploring Masses and Frictions: Bayesian Model Averaging Applied to the Gravity Model of Trade"

Discussant: Hiroko IMAMURA

Discussant: Chao HE (Beijing Forestry University)

Session 5 (organized by Institute for North East Asian Research, The Univ. of Shimane)

11:00 ~ 12:30

The Start of Modernization

Chair: Atsushi INOUE (The University of Shimane)

1: In-Sung JANG (Seoul National University)

"Yu Gil-Jun's Conception of a Civilized Society and the Scottish Enlightenment: An Aspect of Acceptance and Transformation of Modern Thought in Korea"

2: Xiao-dong LI (The University of Shimane)

“Acceptance and Development of Modern Jurisprudence in China: Focusing on Liang Qichao”

3: NAHEYA (Inner Mongolia University)

“Study on the History of the Inner Mongolian studying abroad in Japan in the Period of Manchukuo”

Discussant: Atsushi INOUE (The University of Shimane)

Session 6 (organized by Waseda Institute of Contemporary Chinese Studies, Waseda Univ.)

13:30 ~ 15:00

Northeast Asia in Turbulence

Chair: Rumi AOYAMA (Waseda University)

1: Zhongqi PAN (Fudan University)

“Nuclear North Korea as the Game Changer in North East Asia”

2: Dingping GUO (Fudan University)

“The New Dynamics of Regional Cooperation in Northeast Asia”

3: Mong CHEUNG (Waseda University)

“Japan's Strategic Choice in Northeast Asia”

Discussant: Go ITO (Meiji University)

Discussant: Rumi AOYAMA (Waseda University)

15:15 ~ 16:00 General Discussion

Discussant: Kenji KURODA (Center for Modern Middle East Studies, National Museum of Ethnology)

主 催：人間文化研究機構 ネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究推進事業「北東アジア
地域研究」

白石市図書館

「郷土を知る月間2018企画展 戊辰戦争と白石」

日 程：2018年10月11日～ 12月6日

会 場：白石市図書館 2階ロビー

主 催：白石市図書館

協 力：東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門

伊達市噴火湾文化研究所・東北大学東北アジア研究センター

第9回学術連携交流講演会

日 程：2018年10月26日(金) 18:30 ~ 20:45 (18:00開場)

会 場：だて歴史の杜カルチャーセンター視聴覚室

●講演 1

「深海底へのサンプルリターン—現在と過去の太平洋深海底へ—」

講師：平野 直人(東北大学東北アジア研究センター地球化学研究分野准教授)

●講演2

「慰霊祭・追悼式の社会学―津波記念行事にみられる災禍との向き合い方―

講師：福田 雄（東北大学東北アジア研究センター災害人文学研究ユニット助教）

主 催：伊達市噴火湾文化研究所，東北大学東北アジア研究センター

公開研究会「ドキュメンタリー映画『被ばく牛と生きる』を観る」

日 程：2018年11月13日（火）18：15～20：30

会 場：東北大学川内北キャンパス講義棟B棟101室

プログラム：

第一部 映画上映会 18：15～20：00

第二部 意見交換会 20：00～20：30

[登壇] 松原保氏（『被ばく牛と生きる』監督）

小倉振一郎氏（東北大学大学院農学研究科陸圏生態学分野 教授）

主 催：東北大学東北アジア研究センター

共 催：指定国立大学災害科学世界トップレベル研究拠点 災害人文学ユニット

人間文化研究機構 北東アジア地域研究推進事業

国際シンポジウム

「動物資源をめぐる文化のデザイン」

日 時：2018年11月23日（金）13：00～17：00

場 所：東北大学東北アジア研究センター 436大会議室

Kalina（中国中央民族大学）

遊猟遊牧文化背景の下での中国エヴェンキ族の生態文明観およびその現状分析

卯田宗平（国立民族学博物館）

なぜ中国の鵜飼ではカワウをドメスティケートするのか

Duo, Limei（中国故宮博物院）

清朝宮廷に所蔵された狩猟図の中の狩猟用武器装備

寺尾萌（首都大学東京）

モンゴルの草原におけるリスクとのつきあい方：ある牧民の臨時避難的越冬をめぐる一考察

主 催：大学共同利用法人間文化研究機構（NIHU）ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究推進事業（北東アジアにおける地域構造の変容：越境から考察する共生への道）」東北大学東北アジア研究センター拠点

公開研究会「ドキュメンタリー映画『赤浜ロックンロール』を観る」

日 程：2018年12月4日（火）18：15～20：30

会 場：東北大学川内北キャンパス講義棟B棟101室

プログラム：

第一部 映画上映会 18：15～19：50

第二部 意見交換会 20：00～20：30

[登壇] 登壇者：小西晴子氏（『赤浜ロックンロール』監督）

坂口奈央氏（東北大学大学院文学研究科社会学研究室博士後期課程）

主 催：東北大学東北アジア研究センター

共 催：指定国立大学災害科学世界トップレベル研究拠点 災害人文学ユニット

2017年度～2019年度東北大学東北アジア研究センター共同研究

「オーラルヒストリーによる旧ソ連ロシア語系住民の口頭言語と対ソ・対露認識の研究」

2018年度公開シンポジウム（兼 科研費（基盤研究（B）（海外））

「オーラルヒストリーによる旧ソ連ロシア語系住民の口頭言語と対ソ・対露認識の研究」

2018年度シンポジウム）

日 時：2018年12月22日（土）13時～18時00分

場 所：東北大学東北アジア研究センター大会議室

（東北大学川内北キャンパス 川北合同研究棟4階436号室）

プログラム：

第1部 13時～15時15分

報告(1) 柳田賢二（東北大学）「日本での報道の片隅に現れたバルト3国のロシア語系住民の現状とそれにかかわる旧ソ連他地域の人々の言説に見られる言語観、民族観および国家観」

報告(2) 堀口大樹（岩手大学）「バルト3国におけるロシア語系住民の言語意識—インタビュー調査をもとに—」

報告(3) クロヤン・ルイザ（KLOYAN Luiza, 名古屋大学大学院博士後期課程）「アルメニアにおけるロシア・ソ連イメージの諸相：回想と現在」

報告(4) 楯岡求美（東京大学）「クラスノダールの“グルジア人”たち：再移住したロシア人の歴史的背景と現在」

報告(5) 中村唯史（京都大学）「アルメニア、ジョージア（グルジア）見聞譚：2018年夏」

休憩 10分

第2部 15時25分～16時5分

ラウンドテーブル：これまでの調査で得られた「旧ソ連文化」に関する認識および今後の研究の方向をめぐって

休憩 25分

第3部 16時30分～18時

講演 アビケエヴァ・グリナラ（ABIKEEVA Gul'nara）

（カザフ中央土木建築アカデミー教授、北海道大学スラヴ・ユーラシア研究センター外国人研究員）

«Образ русского в казахском кино: от "старшего брата" до "невидимки"»
「カザフ映画におけるロシア人の形象：”兄”から”見えざる者”へ」

終了 18時

主 催：2017年度～2019年度東北大学東北アジア研究センター共同研究「オーラルヒストリーによる旧ソ連ロシア語系住民の口頭言語と対ソ・対露認識の研究」研究チーム

東北アジア研究センター公募型共同研究成果発表シンポジウム

「東北アジアを中心としたアジア地域における動物資源利用問題と「人間性」

- 生業、娯楽、奢侈の観点から - 」

日 時：2018年12月23日(日) 10:30-17:00

場 所：東北大学東北アジア研究センター大会議室(436室)

プログラム：

10:30-10:40 趣旨説明

○テーマ“生業”

10:40-11:10 大石侑香(国立民族学博物館学術資源研究開発センター・特任助教)

「シベリアの毛皮動物の狩猟と世界システム—女性の欲望に着目して」

11:10-11:40 辻 貴志(佐賀大学大学院農学研究科・特定研究員)

「フィリピンの鳥の狩猟と「人間性」—なぜヒトは小さきものを守るのか?」

11:40-12:40 昼休み

○テーマ“娯楽”

12:40-13:10 相馬拓哉(早稲田大学高等研究所・講師)

「カザフ・イーグルハンターと騎馬鷹狩文化にみるエコロジーとヒューマニティ」

13:10-13:40 広田 勲(岐阜大学応用生物科学部・助教)・横山 智(名古屋大学環境学研究科・教授)・INGXAY, Phanxay(ラオス農林省政策法律局・副局長)

「ラオス北部の闘牛/肉牛飼育と焼畑システム」

13:40-13:55 休憩

○テーマ“奢侈”

13:55-14:35 風戸真理(北星学園大学短期大学部・専任講師)

「動物飼育の標準化と個別性—北海道のロボット酪農とモンゴル動物文化の多様化」

14:35-15:05 野地恒有(愛知教育大学教育学部・教授)

「〈奢侈=愉悦のかたち〉としての改造技術—日本の金魚(ジキン・トキサン)」

14:35-15:05 休憩

15:20-15:30 コメント(1) 高倉浩樹(東北大学東北アジア研究センター・教授)

15:30-16:00 コメント(2) 蛭原一平(国立民族学博物館・外来研究員)

16:00-17:00 総合討論

公開研究会「ドキュメンタリー映画『ガレキとラジオ』を観る」

日 程：2019年1月15日(火) 18:15～20:05

会 場：東北大学川内北キャンパス講義棟 B 棟101室（宮城県仙台市青葉区川内41）

プログラム：

第一部 映画上映会 18：15～19：35

第二部 意見交換会 19：35～20：05

[登壇] 登壇者：

山国秀幸氏

（『ガレキとラジオ』エグゼクティブプロデューサー）

山内明美氏

（宮城教育大学社会科教育講座准教授）

主 催：東北大学東北アジア研究センター

共 催：指定国立大学災害科学世界トップレベル研究拠点 災害人文学ユニット

シンポジウム

北東アジアの鳴動：朝鮮半島、中露国境地域、蒙中露辺境

日 時：2019年1月26日（土）14：00～18：30、2019年1月27日（日）10：00～15：00

場 所：富山大学経済学部7階大会議室

プログラム：

2019年1月26日（土）

14：00～14：15 開会の辞

遠藤 俊郎（富山大学長）

松野 周治（北東アジア学会長）

堀江 典生（富山大学研究推進機構極東地域研究センター長）

14：15～16：15

セッション1 ロシアと朝鮮半島問題（学会連携企画）

三村 光弘（公益財団法人環日本海経済研究所）：朝鮮半島問題と周辺国の関与

加藤 美保子（北海道大学）：プーチン時代の対北朝鮮政策：軌跡と展望

堀江 典生（富山大学）：ロシアの東方政策と朝鮮半島問題

座長：新井 洋史（公益財団法人環日本海経済研究所）

討論：福原 裕二（島根県立大学）、堀内 賢志（静岡県立大学）、松野 周治（立命館大学）

16：30～18：30

セッション2 朝鮮半島問題に対する多層的視座（北大・富山大拠点企画）

福原 裕二（島根県立大学）：北朝鮮の『安全の保障』から見た非核化問題

池 直美（北海道大学）：『故郷は遠きにありて思うもの』：脱北者を取り巻く現状と課題

柳 学洙（東京大学）：北朝鮮経済の『市場化』：現状と今後の展望

座長：馬 駿（富山大学）

討論：三村 光弘（公益財団法人環日本海経済研究所）、天野 尚樹（山形大学）、金 奉吉（富山大学）

2019年1月27日(日)

10:00～12:00

セッション3 中露国境地域の新たな可能性(北大拠点企画)

岩下 明裕(北海道大学): ボーダースタディーズにおける中露国境地域の意味

中村 正人(『地球の歩き方』編集者): ボーダーツーリズム: 中国東北地方21の国境物語

朱永 浩(福島大学): 中露国境貿易の過去と現在

座長: 田畑 伸一郎(北海道大学)

討論: 堀江 典生(富山大学)、松野 周治(立命館大学)、高屋 和子(立命館大学)

13:00～15:00

セッション4 蒙中露国境における多民族共生(東北大拠点企画)

広川 佐保(新潟大学): 近代モンゴルに暮らした漢人の歴史: 「旅蒙商」から「労働者」そして「蒙古帰僑」へ

サヴェリエフ イゴル(名古屋大学): 第一次世界大戦期の在露中国人の越境的空間

藤原 克美(大阪大学): 満洲国における百貨店の役割

橘 誠(下関市立大学): モンゴル国における関税をめぐる露中の「交渉」: 20世紀初頭の外交と多民族共生

座長: 堀江 典生(富山大学)

討論者: 岡 洋樹(東北大)

15:00 閉会の辞

主 催: 人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究」富山大学・北海道大学・東北大拠点

共 催: 北東アジア学会

M. ゴルザヤア氏講演会

“On a Version of the Manuscript Relating to History of Mongolian Ethical Thinking”

日 程: 2019年1月31日 16:00-17:30

会 場: CNEAS, Tohoku University, Room 334

災害人文学研究会「ドキュメンタリー映画『おだやかな革命』を観る」

日 程: 2019年2月5日(火) 18:15～20:30

会 場: 東北大学川内北キャンパス講義棟B棟101室

プログラム:

第一部 映画上映会 18:15～20:00

第二部 意見交換会 20:00～20:30

[登壇] 登壇者:

渡辺智史氏

(『おだやかな革命』監督)

土屋範芳氏

(東北大学大学院環境科学研究科 研究科長・教授)

主 催：東北大学東北アジア研究センター

共 催：指定国立大学災害科学世界トップレベル研究拠点災害人文学領域

国際シンポジウム

明日の環境エネルギー経済社会に向けて

日 時：2019年2月9日(土) 13:00-16:30 (開場：12:30)

会 場：主婦会館プラザエフ カトレア

プログラム：

第1部 基調講演

金子勝(慶應義塾大学名誉教授・立教大学特任教授)

「21世紀の環境エネルギー経済社会へ」

Tze-Luen Lin (国立台湾大学教授・行政院エネルギー室副執行長)

「台湾のデモクラシーとエネルギーシフト」

YUN, Sun-Jin (ソウル大学教授・大統領諮問委員)

「韓国のデモクラシーとエネルギーシフト」

第2部 明日の環境エネルギー経済社会を創る

佐々木寛(新潟国際情報大学教授、★コーディネーター)

「現代の政治潮流とエネルギーデモクラシー」

田中信一郎(地域政策デザインオフィス 代表理事)

「日本のエネルギー政治の挫折と後退、そして再生へ」

明日香壽川(東北大学教授)

「中国と日本の環境エネルギー政策の対比と提言」

飯田哲也(環境エネルギー政策研究所所長)

「次代の環境エネルギー経済と東アジアエネルギーネットワーク」

・パネル討論

・台湾、韓国、金子先生からコメント

主 催：環境エネルギー政策研究所 (ISEP)

共 催：大学共同利用法人人間文化研究機構 (NIHU) ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究推進事業(北東アジアにおける地域構造の変容：越境から考察する共生への道)」東北大学東北アジア研究センター拠点

Japan Russia Workshop 2019: Asian Studies at NSU and TU IV.

日 程：2019年2月18～19日

会 場：Kawauchi Research Forum 4F, Conference room, Center for Northeast Asian Studies, Tohoku University

18 February, 2019, Monday

15:00-17:00

Opening Remarks:

Chair: Hiroki OKA (Prof. CNEAS. TU)

Lecture 1: (15:10-15:40)

Gregory P. TRENCHER (Associate Prof. Grad. Sch. of Environmental Studies, TU)

“Japan’s transition to a hydrogen society: Opportunities and challenges on the road to decarbonisation”

Lecture 2: (15:40-16:10)

Elena VOYTISHEK (Prof. Institute for Humanities, NSU)

“Boshanlu censers in the incense culture of East Asia”

Lecture 3: (16:20-16:50)

Yoichi TAKAHASHI 高橋陽一 (Assistant Prof. Center for Northeast Asian Studies, TU)

“Sharing the Outcomes of Historical Materials Conservation Activities with Local Communities”

Discussion (16:50-17:00)

19 February, 2019, Tuesday

13:00-17:35

Chair: Hiroki OKA (CNEAS.TU)

Lecture 4: (13:00-13:30)

Viktoriia SLUGINA (Lecturer, Institute for Humanities, NSU)

“Ceremonies of peoples of Siberia taking the oath of allegiance to the Russian Tsar in 17th-18th centuries”

Presentations:

Dmitry SHABANOV (Institute for Humanities, NSU) (13:40-14:05)

“Circumscription theory from general law in history perspective”

Kai TATEUCHI 館内魁生 (Grad. Sch. of Arts and Letters, TU) (14:05-14:30)

“An experimental study about the technical innovations of Japanese pottery in the ninth century: A Case study of sue-pottery in the northeastern region of Japan”

Kaori ISHII 石井花織 (Grad. Sch. of Environmental Studies, TU) (14:55-15:20)

“STUDY ABOUT OF JAPANESE FOREST VOLUNTEERS: from gift exchange and the function of the Sendai City group”

Anastassia RECHKALOVA (Institute for Humanities, NSU) (14:30-14:55)

“Emblems of the Tokugawa Clan”

Coffee break (15:20-15:40)

Ai SAZAKI 佐崎 愛 (Grad. Sch. of Arts and Letters, TU) (15:40-16:05)

“Commemoration of the Dead in the Orthodox Church in Japan”

Ryoichi AOKI 青木竜一 (Grad. Sch. of Arts and Letters, TU) (16:05-16:30)

“The Gongsun Clan of Liaodong (180s -238 C.E.): Local Government or Dynasty”

Haruka FUKUNAGA 福長 悠 (Grad. Sch. of Arts and Letters, TU) (16:30-16:55)

“The description of Chinese modernity showed in the short stories of Mu Shiying”

Comment (16:55-17:15)

Petr PODALKO

(Prof. School of International Politics, Economics and Communication, Aoyama Gakuin University)

Discussion (17:15-17:30)

Closing Remarks

Elena VOYTISHEK (Institute for Humanities, NSU)

東北アジア研究センター公募型共同研究ワークショップ2019

『先史時代の「石」文化への地質学・考古学的分析—「石」に対する破壊・非破壊分析—』

日 時：2月19日 13：00～17：00

場 所：東北大学川内北キャンパス 川北合同研究棟1階 CAHE ラウンジ

主 催：東北大学東北アジア研究センター公募型共同研究「東北アジアの地質的多様性に対する「石」文化の技術的適応」・東北アジア研究センター「東北アジアにおける地質連続性と『石』文化共通性に関する学際研究ユニット」

共 催：東北大学東北アジア研究センター・東北大学大学院文学研究科考古学研究室

趣 旨：先史時代において、「石」は利器や装飾などに用いられ、地域・時期に固有の「石」文化が形成されてきた。近年、「石」文化に対して地質学と考古学の連携による研究が盛んに行われている。しかしながら、「石」文化の資料は、地質学における岩石試料という側面、考古学における文化財という側面をもち、破壊・非破壊分析が併用され、いずれが妥当かという議論が日頃から行われている。本ワークショップでは、学際的に活躍される台湾・中央研究院の飯塚義之氏を招き、化学分析によって明らかにされた先史文化の石材利用についてご講演いただく。その上で、事例研究の紹介や石材分析の実演を通して、「石」に対する破壊・非破壊分析について相互的な検討を試みる。

【プログラム】

開会の挨拶：13：00～

開会の挨拶：阿子島香

趣旨説明：13：10～

趣旨説明 1：辻森 樹

趣旨説明 2：青木要祐

基調講演：13：30～

考古石製遺物の非破壊化学分析（飯塚義之）

研究発表：14：20～

EPMA による黒曜石製石器の原産地分析（青木要祐・佐野恭平・和田恵治）

韓半島における旧石器時代の石材利用（洪 惠媛）

複製石器の3D 形態計測と刺突による破壊実験（熊谷亮介）

資料分析実演（縄文時代石製遺物の蛍光 X 線分析）：15：30～

分析資料の概要（花田杜綺）

ポータブル XRF による分析実演（飯塚義之）

総合討論・資料検討会：16：10～

Tohoku Forum for Creativity, Thematic Programs

Geologic Stabilization and Human Adaptations in Northeast Asia

Workshop 4: Northern Modes of Foraging and

Domestication as an Interaction among Humans, Animals, and Geography

日 時：2019年2月20～22日

1. Pre-event: Workshop for young scholar for Anthropology, Domestication and the North

Date and Time:

February 20, 2019 15:00 - 17:30

Venue:

1F Cahe, Center for Northeast Asian Studies, Kawauchi Campus, Tohoku University

Speaker (13mins talk - 7min QA=20mins *6 -120 mins)

Hiroya NOGUCHI (Hokkaido Museum of Northern Peoples)

Rethinking Domestication: Captive Elephant Management in South India

Yoshinori TOJO (National Museum of Ethnology)

Care, rescue and rehabilitation for sika deer in Nara Park, Japan

Asami TSUKUDA (Kyoto University)

The Relationship between Alpaca, Llama, Vicuna and Herder in the Central Andean Highland of Peru

Ryu YOSHIMURA (Tokyo Metropolitan University)
Farmers' Re-Action to Fruit Trees: A Case Study of Ways of Fruticulture by Nikkei Farmers in Southeast Brazil

Sakurako KORESAWA (Tohoku University)
Anthropological Comparative Perspectives of the Role of Ethno-museums in Indigenous Rights Movement of the Russian Federation and Japan

BAO SHUANGYUE (Tohoku University)
The Changes in the Composition and Utilization of Livestock Caused by the Introduction of Sedentary Farming: A case from Eastern Inner Mongolia, China

2. Tohoku Forum for Creativity, Thematic Programme

Venue:

February 21, 2019 (Plenary Session)

TOKYO ELECTRON House of Creativity 3F, Katahira Campus, Tohoku University

February 21, 2019 (Afternoon Session) - February 22, 2019

2F Seminar Room, AIMR Main Building, Katahira Campus, Tohoku University

Details:

1. Plenary Session (21 Feb 10:30-12:00)

10:30 Welcome address

10:40-11:20 WS3 (Geology): TBD

11:20-12:00 WS4 (Anthropology): Hugh Beach (Uppsala University)

Sustaining Arctic Livelihoods and Sustaining Anthropology in the Anthropocene

Lunch (12:00-13:30)

Session 1 (13:30-15:30) 4*30min

Hiroki Takakura (Tohoku University)

Introduction: Revisiting the North as a triggered space for innovations in human cultural history

Hirofumi KATO (Hokkaido University)

Mobile Technology and Space Perception: archaeological interpretations

David Anderson (University of Aberdeen)

On Hunting and Holding Reindeer: A Knowledge Ecology of Human/Animals Relationships in Eurasia

Shiaki Kondo (Hokkaido University)

Gotta Go and Live!: An Ethnography of (Im)mobility and Foraging Ways of Life in Interior Alaska

Break 15:30-16:00

Session 2 (16:00-17:30) 3*30mins

Shiro Sasaki (National Museum of Ainu Culture)

Cultural adaptation in Far East Russia: from the case of the indigenous people in the Amur Land

Florian Stammer (University of Lapland) and Aytalina Ivanova (North-Eastern Federal University)

How do people help animals adapt to the Arctic, and why should they?

Yuka Oishi (National Museum of Ethnology)

Domestication in fishing-reindeer husbandry complex of Western Siberian Forest from the point of view of environmental history

Banquet (18:00-20:00)

February 22, 2019

Session 3 (10:00-12:00) 4*30mins

Junko Habu (University of California, Berkeley)

Hunter-gatherer mobility, food diversity, and landscape practice: archaeological and ethnographic examples from northern Japan

Charles Stepanoff (Ecole Pratique des Hautes Etudes, Laboratoire d'Anthropologie Sociale)

What Northern husbandry teaches us about the meaning of domestication?

Bruce C. Forbes (University of Lapland)

Tundra Rangelands as Dynamic Social-Ecological Systems: Participatory Approaches to Understanding Patterns and Processes

Juha Kantanen (Natural Resources Institute Finland)

Domestication and adaptation of domesticated animal species to northern environment

Session4 (13:30-15:30) General Discussion (90mins), Technical Discussion (30min)

February 23, 2019

13:00-17:00 Half-day excursion in Sendai

Guided by Dr. Sebastian Boret (Anthropologist, Tohoku University)

Tohoku Forum for Creativity, Thematic Programs

Geologic Stabilization and Human Adaptations in Northeast Asia

Workshop 3: Continental Amalgamation and Stabilization of Northeast Asia:

Stories before the Stone Age

日 程：2019年2月21～23日

Date:

Day 1, February 21

Venue:

February 21, 2019 (Plenary Session)

TOKYO ELECTRON House of Creativity 3F, Katahira Campus, Tohoku University

Plenary Session (10:40-12:00)

Welcome address (10:30-10:40)

Hiroki Takakura (Workshop 4 organizer, Tohoku University)

Tatsuki Tsujimori (Workshop 3 organizer, Tohoku University)

Plenary lecture

Workshop 3 (10:40-11:20), Shigenori Maruyama (Tokyo Institute of Technology) Global climate change in the past and near future: A geological perspective

Workshop 4 (11:20-12:00), Hugh Beach (Uppsala University) Sustaining Arctic livelihoods and sustaining anthropology in the Anthropocene

Session 1 (13:30-15:30) - Amalgamation of Asia

3-min remarks by Tatsuki Tsujimori

13:30-14:00

Daniel Pastor-Galan (University of Salamanca) - The supercontinent cycle and the growth of East Asia

14:00-14:30

Moonsup Cho (Seoul National University) - A new tectonostratigraphic scheme of the Korean Peninsula

14:30-15:00

Yukio Isozaki (University of Tokyo) - Nipponides vs. Altaids

15:00-15:30

Sun-Lin Chung (Academia Sinica / National Taiwan University) - Tibet and beyond: A geochemical perspective on Asian Orogeny

15:30-16:00 Coffe Break

Session 2 (16:00-17:30) - "Second continent" beneath Asia

3-min remarks by Tatsuki Tsujimori

16:00-16:30

Shigenori Maruyama (Tokyo Institute of Technology) ? Concept of the second continent - Why important?

16:30-17:00

Dapeng Zhao (Tohoku University) ? Seismic imaging of the second continent

17:00-17:30

William F. McDonough (University of Maryland / Tohoku University - Testing a proposed "second continent" beneath eastern China using geoneutrino measurements

18:00-20:00

Banquet

Day 2, February 22

Session 3 (09:30-12:00) - Crossover among geological sciences and archeology

3-min remarks by Tatsuki Tsujimori

09:30-10:00

Guanghai Shi (China University of Geosciences) - The Myanmar jadeite jade (feicui) and introduction of the Chinese jadeite culture

10:00-10:30

Yoshiyuki Iizuka (Academia Sinica) - Geochemical sourcing study of nephrite jade in Southeast and East Asian prehistory

10:30-11:00

Ilona Bausch (Kokugakuin University Museum / SISJAC) - Not merely an "accessory": the Role of jade objects in Jomon society

11:00-11:30

Gina Barnes (University of London) - Sanukite, green tuff, and obsidian: Archaeological stones and their geological sources

11:30-12:00

Sergey Krivonogov (Siberian Branch of the Russian Academy of Sciences) - The history of the Aral Sea: Implications from multi-disciplinary study

Session 4 (13:30-15:00) - COAB and PAC-type margin

3-min remarks by Tatsuki Tsujimori

13:30-14:00

Uyanga Bold (Mongolian University of Science and Technology) - Precambrian to early Paleozoic geology of the Central Asian Orogenic Belt

14:00-14:30

Kuo-Lung Wang (Academia Sinica) - Ancient continents among the Central Asia Orogenic Belt:
Evidence from lithospheric mantle xenoliths

14:30-15:00

Inna Safonova (Novosibirsk State University) - Tectonic erosion at Pacific-type convergent margins

15:00-15:30

Discussion with coffee

Day 3, February 23

13:00-17:00 Half-day excursion in Sendai

Guided by Dr. Sebastian Boret (Anthropologist, Tohoku University)

14:00-16:00 Public lecture

Shigenori Maruyama (Tokyo Institute of Technology)

TOKYO ELECTRON Hall Miyagi, Lecture Room #601

東北大学東北アジア研究センター公開講演会

地球生命の起源と進化：ヒトの誕生と現在から近未来の課題まで

日 程：2019年2月23日（土）14：30～16：00（14：00開場）

会 場：東京エレクトロンホール宮城（宮城県民会館）601会議室

講 師：丸山茂徳氏（東京工業大学地球生命研究所・特命教授）

主 催：東北大学東北アジア研究センター

後 援：一般社団法人日本地質学会、東北大学総合学術博物館、NPO 法人地球年代学ネットワーク

岩出山公民館主催

「初めての古文書講座公開講演会 講座：地域の歴史を学ぶ ◎岩出山VI」

日 時：2019年3月3日（日）13時30～15時30分

会 場：大崎市岩出山公民館 2階研修室

講演者：佐藤憲一（元仙台市博物館館長）

タイトル：伊達政宗が宗泰に伝えたもの—吾妻家文書を中心に—

主 催：大崎市岩出山公民館

共 催：岩出山古文書を読む会 東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門

東北大学東北アジア研究センターシンポジウム

Bringing the State Back in: New Frontiers of Governance Studies in China

日 程：2019年3月3日（日）13：00-17：50

会 場：Nihonbashi Life Science Building Room1004

Presenters:

1.Hiroko Naito (Tohoku University)

"Rule of Law" under the Chinese Communist Party's Leadership

2.Parepa Laura Anca (Tsukuba University)

Dynamics of Civil-Military Relations in China

3.Chuanmin Chen (Sun Yat-sen University)

The Representation of China's National People's Congress

4.Xiang Gao (Zhejiang University)

Mobilize towards a Weberian Bureaucracy?

5.Vida Macikenaite (International University in Japan)

Understanding CCP Regime's Resilience: Inter-system career transfers between the Party-state and the SOEs as a tool in governance

Discussants:

Kazuko Kojima (Keio University)

Rumi Aoyama (Waseda University)

Sponsor: Center for Northeast Asian Studies, Tohoku University

Cosponsors: Waseda Institute of Contemporary Chinese Studies, National Institutes for the Humanities

東北アジア研究センター古文書講座・古文書歴史講座関連企画講演会

「みちのく歴史講座」

日 時：2019年3月22日（金）13時～14時30分

会 場：東北大学川内北キャンパス講義棟 C200講義室

講演者：高橋美貴（東京農工大学教授）

タイトル：山林資源と仙台藩—18世紀前半の史料と事例から—

主 催：東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門

共 催：東北アジア研究センター

教員の研究活動
(2018)

寺山 恭輔 TERAYAMA Kyosuke 教授

生年月日／1963年07月18日

東北アジア研究センター基礎研究部門ロシア・シベリア研究分野

連絡先

Tel : 022-795-6077 Fax : 022-795-6077 E-Mail : kyosuke.terayama.a7@tohoku.ac.jp

出身学校

京都大学・文学部・現代史学科 1987年卒業

出身大学院

京都大学・文学研究科・西洋史(現代史学) 博士課程 1993年単位取得満期退学

取得学位

博士(文学) 京都大学 1996年

略歴

1992年～1995年 サンクトペテルブルグ大学歴史学部 研究員

1995年～1996年 九州大学大学院比較社会文化研究科 助手 助手

1999年～1999年 英国バーミンガム大学ロシア東欧研究センター 客員研究員

研究経歴

1992年～2000年 1930年代の日ソ関係

1995年～現在 1930年代ソ連の鉄道・動員・備蓄政策

2000年～2010年 18～19世紀の日本人漂流民と日露関係史料の翻訳

2002年～2004年 ロシアにおける中国学、モンゴル学の歩みと史料収集

2002年～2006年 ソ連における日本人抑留者問題

2003年～2007年 初期コミンテルンと中国

2003年～2010年 プーチン体制下の新生ロシア

2008年～2009年 1930年代のソ連の対モンゴル政策

2008年～2010年 ソ連におけるメディアと検閲

2011年～2015年 スターリンと新疆: 1931～1949年

2015年～2017年 スターリンとモンゴル

2017年～現在 スターリンとソ連極東

所属学会

ロシア史研究会, 日本西洋史学会, 近現代東北アジア地域史研究会

専門分野

地域研究, ロシア・ソ連史, 日露・日ソ関係史

研究課題

- 1930年代のソ連
- 日露関係史
- スターリンの対新疆政策 1931～1949
- ソ連時代の検閲
- スターリン時代の動員政策
- スターリン時代のソ連極東政策
- 戦間期ソ連社会の軍事化に関する研究
- スターリンとモンゴル

研究キーワード

スターリン体制, 日露日ソ関係, ソ連政治史

学内活動(2018年4月～2019年3月)

貴重図書等委員会 2017年4月～2019年3月

担当授業科目(2018年4月～2019年3月)

(全学教育)

歴史学 2005年～現在

歴史学 2008年～現在

(大学院教育)

ユーラシア文化史特論 2000年～現在

ユーラシア文化史研究演習 2000年～現在

科学研究費補助金獲得実績(文科省・学振)(2018年4月～2019年3月)

基盤研究(B) 2017年4月～2020年3月

[スターリン統治下のソ連極東に関する基礎的研究]

研究論文(2018年4月～2019年3月)

- 1) ウズベキスタンにおける日本人抑留・日本人墓地. [ウズベキスタンを知るための60章, (2018), 340-343]
寺山恭輔

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

2018年度前半はソ連共産党中央委員会政治局が行った極東地方に関する決定のうち、1930年代に関するものを網羅的に収集してまとめた。1920年度についてまとめた2017年度の作業を継続するものである。時系列的に政策決定過程を跡付けないと、説得力のある議論が展開できないと考えるためである。それらを参考にしながら、2018年度はスターリンが極東政策を策定するうえで最も頼りに

していた人物ガマルニクの活動、彼とスターリンの関係に焦点をあてた論考を準備している。ソ連の極東政策自体、中央と地方の関係に言及した研究は少なく、ガマルニクの役割についてもドウビーニナ教授の著作を除けばほとんどないが、スターリンの電報なども活用しながら、ガマルニクの果たした役割に焦点をあてた。軍隊の近代化のために必要な先進各国の技術導入、軍や治安機関への人材の登用、鉄道による動員や備蓄問題への対処など、極東だけでなく国家指導における広範な活動をスターリンら首脳と協力しながら遂行していることを明らかにした。これは【東北アジアの社会と環境】シリーズの『戦争前後の国家の連携・対立』に収録される予定である。

この作業は著作『スターリンとソ連極東』執筆のための作業の一環だが、科研費の基盤(B)海外学術調査「スターリン統治下のソ連極東に関する基礎的研究」の2年目にあたる2018年度は、8月2日―30日にロシア極東を訪問し、ハバロフスク地方国立公文書館、ハバロフスク州公共図書館、沿海地方国立公文書館(ウラジオストック)で、2019年2月3日―23日には、モスクワのロシア国立連邦史料館で一時史料を収集し、現在、その解読作業を行っているところである。このほか二次史料(国内外で刊行された論文や書籍)の収集も継続している。人材の不足している極東ソ連には中央から多数のスタッフが派遣されたが、彼らについてのデータ収集も進めた。各人の選抜過程やバックグラウンドを明らかにすることで、中央から地方に供給される人的資源の特徴を明らかにできたらと考えている。

自身の研究にとっても重要で、20年以上刊行が待たれたロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史・考古学・民族学研究所による『ロシア極東の歴史:1923―1941』が2019年初頭に刊行された。上記の課題を遂行するためにも、その書評をまとめているところである。これとは別に、コリマを中心とする「ダリストロイ」における収容所労働に関する著作をまとめた研究ノートも準備している。

帯谷知可編『ウズベキスタンを知るための60章』(明石書店、2018年)に「ウズベキスタンにおける日本人抑留・日本人墓地」と題して第二次世界大戦後の日本人抑留者についてまとめる論考を掲載した。

高倉 浩樹 TAKAKURA Hiroki 教授

生年月日／1968年07月20日

東北アジア研究センター基礎研究部門ロシア・シベリア研究分野

出身学校

上智大学・文学部・史学科 1992年卒業

出身大学院

東京都立大学・社会科学研究科修士課程 1994年修了

東京都立大学・社会科学研究科・社会人類学博士課程 1998年単位取得満期退学

取得学位

学士(史学) 上智大学

修士(社会人類学) 東京都立大学

博士(社会人類学) 東京都立大学

略歴

1997年～1998年 日本学術振興会 特別研究員(DC2)
 1998年～2000年 東京都立大学人文学部 助手
 2000年～2007年 東北大学東北アジア研究センター 助教授
 2002年～2003年 東北大学大学院文学研究科 非常勤講師
 2002年～2012年 東北大学文学部 非常勤講師
 2003年～2013年 東北大学大学院環境科学研究科(協力講座) 助教授、准教授
 2003年～2004年 ケンブリッジ大学スコット極地研究所 客員研究員
 2004年～2006年 国立民族学博物館先端人類科学研究部 客員助教授
 2006年～2008年 国立民族学博物館 特別客員教員(助教授)
 2007年～2013年 東北大学東北アジア研究センター 准教授
 2009年～2010年 北海道立北方民族博物館 研究協力員
 2012年～2013年 東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所 フェロー
 2013年～現在 東北大学東北アジア研究センター 教授
 2013年～現在 東北大学大学院環境科学研究科(協力講座) 教授

研究経歴

2003年～2006年 ロシア民族学史と民族誌知識人：ネイティブ人類学概念をめぐる
 2006年～2008年 シベリア先住民のマイノリティ・ビジネスと社会経済分析
 2007年～2010年 シベリア先住民の歴史認識と文化的アイデンティティの位相
 2007年～現在 シベリアの環境変動と先住民の生態適応
 2008年～現在 民族誌映像の展示実践と地域社会との連携
 2010年～2013年 応用映像人類学と人類学写真史の探求

2011年～現在 東日本大震災に関わる災害人類学研究とその応用実践

所属学会

日本文化人類学会, 国際極北社会科学学会, 日本民俗学会, 生態人類学会

学会活動

東京都立大学社会人類学会 機関誌「社会人類学年報」編集委員 2004年～2006年

北方ユーラシア人類学研究会 世話人 2007年～2009年

日本文化人類学会 第23期編集委員 2008年～2010年

日本文化人類学会 第24期理事・評議員 2010年～2012年

日本文化人類学会 第25期理事・評議員 2012年～2014年

日本文化人類学会 第25期学会誌「文化人類学」編集委員 2012年～2014年

北極環境研究コンソーシアム 第三期運営委員 2015年～2017年

日本文化人類学会 第27期理事・評議員 2016年～2018年

専門分野

文化人類学・民俗学, 地域研究

研究課題

- ・シベリア・ヤクーチアにおけるトナカイ飼育民の近代化
- ・シベリア・ヤクーチアにおけるサハ人による馬群再生産過程についての人類学的研究
- ・ロシアにおけるエスニック・ナショナリズム研究—サハを中心として
- ・サハ人の馬飼養と食文化の実態についての社会経済的研究
- ・ロシア人類学史における民族知識人の役割と評価
- ・北アジア生業類型論再考
- ・サハリン先住民をめぐる歴史叙述についての人類学的考察
- ・シベリアを中心とする比較先住民研究
- ・地球気候変動と北極圏大河川流域住民の生態適応
- ・人類学調査方法と映像媒体
- ・東日本大震災に関わる被災した無形の民俗文化財に関わる人類学的研究
- ・自然災害に関わる人類学研究の方法と応用実践
- ・北極圏の気候変動と地域社会の適応に関する研究

研究キーワード

生業, 気候変動, 災害, 映像人類学, シベリア, 北極圏, 北日本

外部機関における活動 (2018年4月～2019年3月)

Verlag der Kulturstiftung Sibirien | SEC Publications Member of Editorial Board of Studies in Social and Cultural Anthropology 2011年04月～現在

大同生命地域研究賞選考委員会 大同生命地域研究賞推薦委員 2013年04月～現在

Северо-Восточный гуманитарный вестник (ИГиИ ПМНС, СО РАН) Foreign member 2014年04月～現在

Редакционная коллегия выпуска "Востоков едение" 編集委員 2015年10月～現在
 北極域研究共同推進拠点 共同研究推進委員 2016年10月～現在
 東北大学出版会 評議員 2017年04月～2020年03月
 日本学術会議 第24期 会員(地域研究) 2017年10月～2020年09月
 Editorial Advisory Board of Journal Sibirica (Berghahn) Member of Editorial Board 2018年01月～
 2022年12月
 Science Academy of Sakha Republic (Yakutiia), Russian Federation Member 2018年03月～現在
 Editorial Board of Journal "Polar Science" Member 2018年10月～現在

学内活動(2018年4月～2019年3月)

ロシア交流推進室室員 2009年12月～現在
 科研費アドバイザー 2016年9月～現在
 エネルギー研究連携推進委員会 2017年4月～現在
 東北アジア研究センター長 2017年4月～現在
 総長特別補佐(研究) 2018年4月～2019年3月
 「東北大学サイエンスカフェ」ワーキンググループ委員 2018年4月～現在

学位授与数(2018年4月～2019年3月)

博士 1人
 修士 1人
 学士 0人
 法務博士(専門職) 0人
 修士(専門職) 0人
 短期大学士 0人
 準学士 0人
 専門士 0人
 論文博士 0人

担当授業科目(2018年4月～2019年3月)

(学部教育)

文化人類学各論 2002年～現在
 文化人類学各論 2013年～現在

(大学院教育)

文化人類学特論(東北大学文学研究科) 2002年～現在
 地域環境・社会システム学セミナー 2003年～現在
 地域環境・社会システム学修士研修 2003年～現在
 博士インターンシップ研修 2003年～現在
 地域環境・社会システム学研修 2003年～現在
 地域環境・社会システム学博士研修 2003年～現在
 東北アジア歴史人類学 2005年～現在
 文化人類学特論 2010年～現在

宗教学実習 2013年～現在

Advanced Environment Studies 2014年～現在

(他大学)

文化人類学(東北学院大学) 2012年～現在

国際会議 発表・講演(2018年4月～2019年3月)

The role of collective action for the post-quake fishing recovery in coastal Pacific Tohoku and the consequences[Disaster Workshop Coastal Communities and Disaster: Perspectives from Asia (University of Copenhagen)]

(2018年9月17日～2018年9月17日) シンポジウム・ワークショップ・パネル(指名)

国内会議 発表・講演(2018年4月～2019年3月)

仕事場としての深いトンネル坑道：釜石鉱山の持続可能性、鉄鉱石から水へ[第41回 日本映像民俗学の会(沙流川歴史館レクチャーホール)]

(2018年10月21日～2018年10月21日) 口頭(一般)

国際会議 主催・運営(2018年4月～2019年3月)

Geological Stabilization and Human Adaptations in Northeast Asia

(2018年7月1日～2019年2月23日, 日本国, 仙台) [主催] 代表

Northern Modes of Foraging and Domestication as an Interaction among Humans, Animals, and Geography

(2019年2月21日～2019年2月22日, 日本国, 仙台) [運営] 共同責任者

科学研究費補助金獲得実績(文科省・学振)(2018年4月～2019年3月)

基盤研究(C) 2017年4月～2020年3月

[津波被災地の地域農業・漁業復興における在来知と災害リスク軽減研究]

特別研究員奨励費 2017年7月～2019年3月

[グローバルな資源利用の動態によるローカルな持続性挑戦への影響：モンゴルの事例]

著書(2018年4月～2019年3月)

1) 震災復興の公共人類学：福島原発事故被災者と津波被災者との協働(執筆担当部分) 239-262, 289-294. [東京大学出版会, (2019) 1月]

関谷雄一・高倉浩樹

研究論文(2018年4月～2019年3月)

1) Local Agricultural Knowledge as Time Manipulation: Paddy Field Farmers after the Great East Japan Earthquake of 2011. [Asian Ethnology, 77 (1/2), (2018), 257-284] (査読あり)

Hiroki Takakura

2) The Anthropologist as Both Disaster Victim and Disaster Researcher: Reflections and Advocacy. [Crisis and Disaster in Japan and New Zealand (Susan Bouterey Lawrence E. Marceau, eds., Singapore: Palgrave Macmillan), (2019), 79-103] (査読あり)

Hiroki Takakura

- 3) 津波被災後の稲作農業と復興における在来知の役割. [震災復興の公共人類学：福島原発事故被災者と津波被災者(東京大学出版会), (2019), 239-262] (査読あり)

高倉浩樹

- 4) The role of intangible cultural heritage in the disaster recovery in Fukushima. [Proceedings of the Asia-Pacific Regional Workshop on Intangible Cultural Heritage and Natural Disasters, (2019), 81-89]

高倉浩樹

総説・解説記事(2018年4月～2019年3月)

- 1) 気候変動とシベリアー永久凍土と文化の相互作用からわかること. [アジア遊学：アジアとしてのシベリア、ロシアのなかのシベリア先住民世界, (227), (2018), 31-33]

高倉浩樹

- 2) 北極域の先住民と環境へのインパクト. [これからの北極(編集・発行：北極域研究推進プロジェクト事務局), (2019), 47-53]

高倉浩樹

- 3) 北極域の先住民と環境へのインパクト. [国立極地研究所北極域研究推進プロジェクト事務局これからの北極, (2019), 47-53]

高倉浩樹

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

今年度は気候変動に関わる文理融合研究、環境人類学、災害人類学、文化人類学教育において成果を得た。

気候変動研究では、ロシア連邦サハ共和国において永久凍土の融解に関する民族誌的調査を行った。その結果、先行研究においては知られていなかった雪解水の民俗地理と民俗土木技術についての独自の文化が存在することを発見し、今後この領域についてのさらなる調査研究の必要性を確認した。なお、これまでに実施してきた水文気象学や歴史学者達との共同研究の成果の社会発信に関して、北海道立北方民族博物館と協力し、企画展示「融ける大地：温暖化するシベリア・中央ヤクーチア」(2019年2月2日から4月7日)を実現した。これについては、読売新聞(19年2月19日)等7つの新聞で紹介された他、ラップランド大学北極センターでも展示批評が出ている。

環境人類学については、本学の「知のフォーラム」に採択された事業として北極域の先住民社会の歴史とくに伝統的な環境適応の形成について人類学・考古学・動物遺伝学による国際研究集会を主宰者として2019年2月20-22日に開催した。この企画はラップランド大学で北極人類学を国際的に牽引するF. ステムラー教授との共同企画であり、この時期に同氏を客員教授として招聘したほか、関連する海外(7名)・国内(3名)の研究者を招聘し日本のシベリア人類学の潜在性を発信した。なお集会に先立ち若手セッションを設け、院生やポスドク研究者6名と招聘研究者との研究交流を実現した。この成果については次年度以降に国際学術図書の刊行を計画中である。また人間文化研究機構北東アジアプロジェクトに関連し、中国・中央民族大学の研究者を招聘しての国際シンポ(11/23)を実施し、従来のロシア中心の国際交流を拡大することが出来た。

災害人類学については、本学の指定国立大学災害科学拠点事業に領域代表として参画し、宗教社会学・現代芸術学の専門家を研究チームに組み込むと共に、東北歴史博物館とも部局間協定を結び、民俗学の専門家を本学の客員准教授とすることで研究体制を構築した。研究集会としては、9月17-18

日にデンマーク・コペンハーゲン大学の災害研究センターと共催のワークショップを開催したほか、12月7-9日にかけてはユネスコ関連機関であるアジア太平洋無形文化遺産センターに協力し14ヶ国からの48名の参加者による無形文化遺産と防災に関わる国際シンポジウムを実施した。ここでは福島県原発被災と無形文化財の役割について論考を発表したが、年度末までに会議録集として英語で出版された。それ以外には、津波被災地の稲作復興における在来知の役割に関する論文が国際誌 *Asian Ethnology* 誌77号が掲載された他、ニュージーランド研究者との間で国際共著学術図書「*Crisis and Disaster in Japan and New Zealand: Actors, Victims and Ramification*」(Palgrave Macmillan)を刊行した。

文化人類学教育については、兼担する環境科学研究において、モンゴルの農牧複合についての博士論文、シベリアの人—動物関係についての修士論文が合格となったが、それぞれ主査を務めた。

塩谷 昌史 SHIOTANI Masachika 助教

生年月日／1968年07月03日

東北アジア研究センター基礎研究部門ロシア・シベリア研究分野

連絡先

Tel : 022-795-6082 Fax : 022-795-3599 E-Mail : shiotani@cneas.tohoku.ac.jp

出身学校

滋賀大学・経済学部・経済学科 1993年卒業

出身大学院

大阪市立大学・経済学研究科・経済政策博士課程 1999年単位取得満期退学

取得学位

経済学博士(大阪市立大学、2013年3月)

略歴

1999年2月～2006年3月 東北大学助手

2007年4月～2019年3月 東北大学助教

2019年4月～ 大阪市立大学大学院経済学研究科准教授

所属学会

社会経済史学会、経済統計学会、American Association for the Advancement for Slavic Studies、比較
経済体制学会

学会活動

なし

専門分野

経済史

研究課題

内務省中央統計委員会によるロシアの統計制度改革

研究キーワード

ロシア経済

外部機関における活動(2018年4月～2019年3月)

地域研究コンソーシアム運営委員 2010年4月～2019年3月

学内活動(2018年4月～2019年3月)

ロシア交流推進室・室員 2011年12月～2019年3月

担当授業科目(2018年4月～2019年3月)

(全学教育)

基礎ゼミ：ロシア研究入門 2018年

展開ゼミ：ロシア研究入門 2018年～2019年

国際会議主催・運営(2018年4月～2019年3月)

The 5th Social Science and Humanities Forum Between Japan and Russia

(2018年5月21日、日本、仙台)〔主催〕フォーラム全体のコーディネーター

研究報告

塩谷昌史「ロシア内務省・中央統計委員会設立の経緯について」経済統計学会東北・関東支部6月例会、
於：立教大学(2018年6月2日)

Shiotani Masachika, Reform of Russian statistical system by the Home Office in the middle of 19th
century, 国際学術フォーラム「遺産」、於：ノヴォシビルスク国立大学(2018年10月26日)

塩谷昌史「東北アジアと日本：軍事・政治的な相互依存の観点」(招待講演、言語はロシア語)、第5
回全ロシア学術・実践会議 - 軍事の人文的諸問題、於：ロシア科学アカデミー・シベリア支部・学
者会館(2018年11月23日)

塩谷昌史「19世紀半ばにおけるロシア内務省中央統計委員会の設立と統計制度改革」国際商業史研究
会、於：東京大学(2018年12月1日)

著書

Masachika SHIOTANI, "Triple Import Substitution - Russian Cotton Industry in the 19th century", Miki
SUGIURA (ed.), *Linking Clothe/Clothing Globally: The transformation of Use and Value, c.1700-2000*,
Hosei University Publishing, March 2019, pp191-212.

研究論文

- 1) Masachika SHIOTANI, "The Export of Russian Cotton Fabrics and the Commercial Network of
Asian merchants in the first half of 19th century. Part 1", *Vestnik of NSU, Series: History and
Philology*, Vol.17, No.8, 2018, pp49-64.
- 2) Masachika SHIOTANI, "The Export of Russian Cotton Fabrics and the Commercial Network of
Asian merchants in the first half of 19th century. Part 1", *Vestnik of NSU, Series: History and
Philology*, Vol.18, No.1, 2019, pp41-55.

その他研究活動

プロシーディング

Masachika SHIOTANI, Reform of Russian statistical system by the Home Office in the middle of 19th century, *Mezhdnarnodnyy naychnyy forum "Nasledie", Materialy medjudnarnodnoi nauchno-prakticheskoi konferentsii*, Novosibirsk State University, 2018, pp.80-86.

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

東北アジア研究センターにおける最終年度のため研究内容に止まらず、国際交流活動を含めて、2018年度の活動を記しておきたい。

5月21日に東北大学片平キャンパスで、モスクワ大学との共催で「第5回日露人文社会フォーラム」が開催された。2011年にモスクワ大学で第1回を開催して以来、1年半毎に日露間で交互に開催してきた。私は第1回からコーディネーターとして人文社会系の日露の学术交流を担当してきた。第2回以降は、日露学長会議と共同開催で行った。2018年5月18日に北海道大学で日露学長会議が開催された後、日露人文社会フォーラムを仙台で開催した。総勢60名以上の参加となった。今回は、過去4回の開催を振り返り、フォーラムの総括を行った。このフォーラムにより東北大学文学研究科心理学講座とモスクワ大学心理学部との交流が進み、両大学院でスーパーバイズド・ディグリー協定が締結された。東北大学が主催する形では今回のフォーラムが最終回となる。

2018年10月～11月にノヴォシビルスク大学・人文学院から招聘され、客員准教授として滞在した。現地で個人研究を進める傍ら、経済学部の大学院生と人文学院の学部生に「日本経済史」の授業を行った。ロシア人学生との質疑応答は、今後研究を進める上で参考になった。10月25日～27日にノヴォシビルスク大学で国際学術フォーラム「遺産」が開催されたが、このフォーラムで私は「19世紀半ばの内務省による統計制度改革」という題で研究報告を行った。11月23日には、ノヴォシビルスク高等軍人学校主催による「第5回全ロシア学術実践コンファレンス—軍事の諸問題—」で招待講演を依頼され、「東北アジアと日本 - 相互依存の軍事・政治的観点—」という題でロシア軍人の前で講演した。ロシア軍関係者との対話は有意義であり、ロシア軍の改革に関する概要が理解できた。

個人研究では、『雑誌・内務省』（1829～1861）の雑誌記事に基づき、ロシア内務省・中央統計委員会の設立経緯に関する研究を進めた。近代は「国民国家」の時代と言われるが、その「国民国家」を支える基幹制度の一つに統計制度が挙げられる。近代国家は官僚機構を通じて、社会的事象を数量化して統計資料を作成し、政府が政策を策定する際の参考にした。この近代的統計制度は、19世紀半ばに西ヨーロッパで確立される。19世紀にロシアは西ヨーロッパの事例を参考に近代統計制度を整備するが、ロシア内務省・中央統計委員会がその中心に位置した。1858年にロシアはベルギーの統計制度を導入し、中央統計委員会を設立する。全国から収集した統計データと、各省庁が個別に収集した統計データを共に中央統計委員会に集約するのが、このモデルの特徴であった。この制度により、統計データの一元化が図られ、包括的な統計資料の作成が可能となる。

2018年6月2日に立教大学で開催された、経済統計学会東北・関東支部6月例会で、「ロシア内務省・中央統計委員会設立の背景について」という題で研究成果を報告した。経済統計学会には統計制度の歴史の専門家が何人かおられ、貴重なコメントをいただいた。ロシアの統計制度史をヨーロッパや日本と比較分析するのは斬新とのコメントを受けた。2018年12月1日に東京大学で開催された国際商業史研究会で、「19世紀半ばにおけるロシア内務省・中央統計委員会の設立と統計制度改革」と題して報告を行った。英国史研究者からは、近代統計制度と英国国教会の関係について助言をいただいた。フランス史研究者からは、英仏が競争を通じて国際統計制度を掌握する過程が、英仏が競争を

通じて世界標準時を制する過程と似ているとの指摘を受けた。現在進めるロシアの統計制度史が、統計制度史家や各国史研究者から支持され、研究への自信が深まった。

2018年12月～2019年3月に、ゾルザヤ・ムフツェレン氏（モンゴル国立芸術文化大学・准教授）をセンターの客員准教授として招聘した。彼女の専門はモンゴルの企業倫理である。ゾルザヤ先生は仙台の中小企業へのインタビュー調査を望まれたため、3月初めに仙台商工会議所に協力を依頼し、後藤淳氏（仙台商工会議所）に4社を紹介していただいた。3月にゾルザヤ先生と共に、橋浦隆一氏（今野印刷株式会社社長）、福田大輔氏（福田商会代表取締役）、西牧潤（セイトウ社代表取締役）、斉藤孝志（サイコー代表取締役）にお会いし、インタビューを行った。モンゴルと日本との企業経営の違いや、日本企業の特徴が、この調査を通じて明らかになった。何れの企業も仙台の地域的发展と自社の成長の両方を考えておられ、仙台への社会的責任を負っておられた。今回のインタビュー調査の成果は、2019年度内にモンゴルの学術雑誌に発表される予定である。

岡 洋樹 OKA Hiroki 教授

生年月日／ 1959年07月21日

東北アジア研究センター基礎研究部門モンゴル・中央アジア研究分野

連絡先

Tel : 022-795-6083 Fax : 022-795-6083 E-Mail : okah@cneas.tohoku.ac.jp

出身学校

早稲田大学・文学部・東洋史学科 1984年卒業

出身大学院

早稲田大学・文学研究科・史学(東洋史) 博士課程 1991年単位取得満期退学

取得学位

修士(文学) 早稲田大学 1986年

博士(文学) 早稲田大学 2005年

略歴

1990年～1992年 早稲田大学文学部 助手
 1992年～1993年 群馬大学教育学部 非常勤講師
 1992年～1996年 早稲田大学第二文学部 非常勤講師
 1993年～1996年 日本学術振興会 特別研究員(PD)
 1996年～1996年 日本国外務省研修所 講師
 1996年～1996年 日本大学法学部 非常勤講師
 1996年～1996年 東京外国語大学 非常勤講師
 1996年～現在 東北大学東北アジア研究センター 助教授
 1996年～現在 東北大学東北アジア研究センター 教授
 1997年～現在 東北大学大学院国際文化研究科 助教授
 2000年～2001年 東北学院大学文学部 非常勤講師
 2003年～現在 東北大学大学院環境科学研究科 助教授
 2005年～2006年 尚絅学院大学総合人間科学部 非常勤講師
 2013年～現在 東北大学東北アジア研究センター

研究経歴

1997年～1999年 「比丁冊」をつうじて見た清代モンゴルの盟旗制度の実態に関する研究
 1997年～2000年 モンゴルにおける交易拠点の研究
 1997年～2000年 モンゴルにおける関帝信仰の研究
 1999年～2001年 清代公文書史料による内モンゴル旗社会の研究
 2001年～2002年 戦間期モンゴルの政治・社会システムの研究

2002年～現在 モンゴルにおける環境変動と遊牧社会の研究

所属学会

史学会, 内陸アジア史学会, 東方学会, 日本モンゴル学会, 早稲田大学東洋史懇話会, 東北大学国際文化学会, 満族史研究会, 北東アジア学会, 近現代東北アジア地域史研究会

専門分野

モンゴル史

研究課題

- モンゴルにおける交易拠点の比較研究
- モンゴルにおける歴史的環境変動と遊牧社会の研究

研究キーワード

モンゴル, 清朝, 社会構造

担当授業科目 (2018年4月～2019年3月)

(全学教育)

モンゴル語Ⅰ 2002年～現在

モンゴル語Ⅱ 2002年～現在

展開科目・総合科目「東北アジア：文化と環境の多様性」 2016年～現在

(大学院教育)

文化環境学博士セミナー 2016年～現在

東洋近世史特論 2017年～現在

国際会議 発表・講演 (2018年4月～2019年3月)

Sharing Life at the Bottom: "Slaves" in the Qing Era Mongolia [第四届清朝与内亚国际学术研讨会]

(2018年6月30日～2018年7月1日, 中国, 長春) 口頭 (招待・特別)

Манжийн үеийн Монголд Манжийн хууль эс хэрэгжсэний учир [Евразийн нүүдэлчдийн түүхэн замнал: төр, нийгэм, соёл]

(2018年9月6日～2018年9月7日, モンゴル, Ulaanbaatar) 口頭 (招待・特別)

Historical view of Pre-Modern Mongolia and the Creation of National History [Japan Asia Lecture]

(2018年10月29日～2018年10月29日, ロシア, Novosibirsk) 口頭 (招待・特別)

Imperial Rule and Migrants: The Qing's Governance [The 16th Annual Meeting of the Northeast Asia Academic Network (NAAN)]

(2018年11月9日～2018年11月11日, 日本国, 富山) 口頭 (招待・特別)

国内会議 発表・講演 (2018年4月～2019年3月)

家畜泥棒から見た清代のモンゴル [日本モンゴル協会講演会]

(2018年6月2日～2018年6月2日, 東京) 口頭 (招待・特別)

国際会議 主催・運営 (2018年4月～2019年3月)

Евразийн нүүдэлчдийн түүхэн замнал: төр, нийгэм, соёл

(2018年9月6日～2018年9月7日, モンゴル, Ulaanbaatar) [主催]

Japan Russia Workshop 2019: Asian Studies at NSU and TU IV

(2019年2月18日～2019年2月19日, 日本国, Sendai) [主催] ワークショップ企画運営、司会

国内会議 主催・運営 (2018年4月～2019年3月)

人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究」・北東アジア学会連携シンポジウム「北東アジアの鳴動：朝鮮半島、中露国境地域、蒙中露边境」

(2019年1月26日～2019年1月27日, 富山) [主催] セッションのコーディネーター、オーガナイザー

東北アジア研究センター講演会「李暁東先生講演会」

(2019年3月20日～2019年3月20日, 仙台) [主催] 講演会の企画、運営

科学研究費補助金獲得実績 (文科省・学振) (2018年4月～2019年3月)

基盤研究 (B) 2015年4月～2019年3月

[東北アジア辺境地域多民族共生コミュニティ形成の論理：中露・蒙中辺境に着目して]

著書 (2018年4月～2019年3月)

1) 中央ユーラシア史研究入門 (執筆担当部分) 第8章 (清代以後のモンゴル) 187～199頁. [山川出版社, (2018) 4月]

小松久男, 荒川正晴, 岡洋樹

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

本年度は、昨年度に引き続き、人間文化研究機構「北東アジア地域研究推進事業」の東北大学拠点運営するプロジェクト研究ユニット「北東アジア地域の環境・資源に関する研究連携ユニット」代表として、同事業拠点の運営に注力するとともに、同事業の島根県立大学拠点研究分担者として、同拠点のテーマである「近代的空間の形成」に関わる研究を行った。その成果の一部は、2019年1月11日に島根県立大学北東アジア地域研究センター拠点で行われた研究会で「清代モンゴル史に関する歴史記述における近代性——「封禁政策」論をめぐって——」と題して報告した。また本年度は研究代表者を務める科学研究費補助金基盤研究 (B) 「東北アジア辺境地域多民族共生コミュニティ形成の論理：中露・蒙中辺境に着目して」 (平成27～30年度) の最終年度にあたり、研究成果を論文としてまとめるとともに、成果報告として、1月26～27日に富山大学で開催されたシンポジウム「北東アジアの鳴動：朝鮮半島、中露国境地域、蒙中露边境」のセッション4「蒙中露辺境における多民族共生」を組織し、四年間の研究グループの成果を報告した。科研費基盤 (B) の成果としては、論文「The Mobility of Mongolian Banner Subjects in the Mid-Qing Era」をまとめ、東洋文庫欧文紀要『Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko』に投稿したほか、中国長春の東北師範大学で開催された国際会議「第四届清朝与内亚国际学术研讨会」で「Sharing life at the bottom: “Slaves” in the Qing era Mongolia」と題する報告を行った。また9月6～7日には、モンゴル国ウラーンバートルで国際シンポジウム「ユーラシア遊牧民の歴史的道程：国家・社会・文化」をモンゴル科学アカデミー歴史学・考古学研究所、中国内モンゴ師範大学旅游学院、ロシア科学アカデミー・シベリア支部人文学北方民

族問題研究所と共催し、「Манжийн хууль эс хэрэгжээний учир（満洲の法が実効性を持たなかった事情）」と題する報告を行った。また11月1～3日に富山大学で開催された The 16th Annual Meeting of the Northeast Asia Academic Network (NAAN) でも、「Imperial Rule and Migrants : The Qing's governance on the cross-boundary activities of migrant people in Mongolia」と題して、科研費による研究成果の一部を報告した。今年度は、四年間にわたり研究代表者として実施してきた科研費基盤(B)の成果として、国際会議での報告3件、英文論文1件をまとめた。

柳田 賢二 YANAGIDA Kenji 准教授

生年月日／1960年08月15日

東北アジア研究センター基礎研究部門モンゴル・中央アジア研究分野

連絡先

Tel : 022-795-7638 Fax : 022-795-7638 E-Mail : kenji.yanagida.b1@tohoku.ac.jp

出身学校

東京外国語大学・外国語学部・ロシア語学科 1983年卒業

出身大学院

東京大学・人文科学研究科・露語露文学 博士課程 1989年単位取得満期退学

取得学位

文学修士 東京大学 1986年

略歴

1989年～1992年 東海大学文学部 非常勤講師

1990年～1992年 静岡大学教養部 非常勤講師

1992年～1993年 東北大学教養部 講師

1993年～1995年 東北大学言語文化部 講師

1995年～1997年 東北大学言語文化部 助教授

1997年～2007年 東北大学東北アジア研究センター 助教授

2007年～現在 東北大学東北アジア研究センター 准教授

研究経歴

2001年～現在 中央アジア多言語社会におけるロシア語に関する研究に従事

所属学会

日本ロシア文学会

学会活動

日本ロシア文学会 東北支部事務局 2003年～2015年

日本ロシア文学会 ロシア語教育委員 2008年～2011年

日本ロシア文学会 日本ロシア文学会2014年(第64回)大会実行委員 2013年～2014年

専門分野

ロシア語学, 言語接触論

研究課題

- 現代ロシア語の音韻論的研究
- 中央アジア多言語社会における言語接触に関する研究

研究キーワード

言語接触, ロシア語, 中央アジア, 音韻論, 音声学

学内活動 (2018年4月～2019年3月)

学務審議会外国語委員会 委員 2004年4月～現在
学務審議会外国語委員会 ロシア語教科部会長 2004年4月～現在
ロシア交流推進室員 2014年3月～現在
国際交流委員 2014年3月～現在
教務委員 2014年4月～現在
広報情報委員 (センター HP 多言語化担当) 2017年4月～2019年3月
教務委員 2017年4月～2019年3月
国際交流委員 2017年4月～2019年3月
広報情報委員 (センター HP 多国語化担当) 2017年4月～現在
ハラスメント相談担当窓口 2017年4月～現在

担当授業科目 (2018年4月～2019年3月)

(全学教育)

基礎ロシア語Ⅰ 2018年～2018年
展開ロシア語Ⅰ 2018年～2018年
展開ロシア語Ⅲ 2018年～2018年
基礎ロシア語Ⅱ 2018年～2019年
展開ロシア語Ⅱ 2018年～2019年
展開ロシア語Ⅳ 2018年～2019年

(大学院教育)

地域環境・社会システム学セミナー 2003年～現在
言語システム論 (隔年開講) 2018年～2018年
地域環境学特論 2018年～2018年

国際会議 発表・講演 (2018年4月～2019年3月)

ロシア語との対照における日本語子音体系の特徴 [第5回日露人文社会フォーラム]

(2018年5月21日～2018年5月21日, 仙台) シンポジウム・ワークショップ・パネル (指名)
日本での報道の片隅に現れたバルト3国のロシア語系住民の現状とそれにかかわる旧ソ連他地域の人々の言説に見られる言語観、民族観および国家観 [2017年度～2019年度東北大学東北アジア研究センター共同研究「オーラルヒストリーによる旧ソ連ロシア語系住民の口頭言語と対ソ・対露認識の研究」2018年度公開シンポジウム (兼 平成28年度～31年度科研費 (基盤研究 (B)) (海外)) 「オーラルヒストリーによる旧ソ連ロシア語系住民の口頭言語と対ソ・対露認識の研究」2018年度シンポジウム] (2018年12月22日～2018年12月22日) 口頭 (一般)

国内会議 発表・講演 (2018年4月～2019年3月)

共同研究「オーラルヒストリーによる旧ソ連ロシア語系住民の口頭言語と対ソ・対露認識の研究」[東北大学東北アジア研究センター研究成果報告会 2017]

(2018年5月14日～2018年5月14日) その他

ロシア人にとってパラドキシカルな日本語なまり —日本語のモーラ言語性と母音無声化および前舌子音音素の少なさの干渉について [日本ロシア文学会東北支部 2018年度研究発表会]

(2018年7月14日～2018年7月14日, 秋田) 口頭 (一般)

国際会議 主催・運営 (2018年4月～2019年3月)

国際会議 2017年度～2019年度東北大学東北アジア研究センター共同研究「オーラルヒストリーによる旧ソ連ロシア語系住民の口頭言語と対ソ・対露認識の研究」2018年度公開シンポジウム (兼平成28年度～31年度科研費 (基盤研究 (B) (海外)) 「オーラルヒストリーによる旧ソ連ロシア語系住民の口頭言語と対ソ・対露認識の研究」2018年度シンポジウム)

(2018年12月22日～2018年12月22日, 日本国, 仙台) [主催] 研究代表者兼シンポジウム主宰者

その他研究活動 (2018年4月～2019年3月)

現代中央アジア諸国における民族間共通語としてのロシア語に関するフィールドワーク (フィールドワーク) 2007年～現在

現代中央アジア諸国におけるロシア語単一話者のロシア語に関するフィールドワーク (フィールドワーク) 2013年～現在

科学研究費補助金獲得実績 (文科省・学振) (2018年4月～2019年3月)

基盤研究 (B) 2016年4月～現在

[オーラルヒストリーによる旧ソ連ロシア語系住民の口頭言語と対ソ・対露認識の研究]

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

本年度は自らが代表を務める2017年度～2019年度センター共同研究「オーラルヒストリーによる旧ソ連ロシア語系住民の口頭言語と対ソ・対露認識の研究」(同名の2016年度～2019年度科研費課題 (基盤研究 (B) (海外)) を兼ねる) による現地研究を続けるとともに研究分担者らとの連絡を緊密に行い、2018年12月22日にはカザフスタン人とアルメニア人の研究者各1名を招いて公開シンポジウムを行った。

この科研費研究を構想する段階で「ロシア語系住民」という語を用いたのは、柳田が毎年訪れているウズベキスタンでロシア人を含む欧州系住民 (注: 出自を問わず現在ではロシア語が母語となっている) を指す語として用いられている «русскоязычный» (英語に直訳すれば “Russian-linguaged”) を直訳したというに過ぎない。しかし、2014年春のロシアによるクリミア併合の口実の一つに「ロシア語系住民を守る」ことが挙げられていたことに端的に表れているように、この語は全く予想外に政治的にホットとなってしまった。ロシアとウクライナの関係は極度に悪化してウクライナ東部での親露派による自称「人民共和国」とウクライナ政府軍の間の戦闘が現在もなお続き、両国のテレビは連日「荒唐無稽」と形容するほかないプロパガンダを執拗に見せて自国民を半ば呆れさせながらも着実に敵愾心を煽っている。そして、現在非常に緊張関係にあるのはロシアとウクライナの間だけではなく、ロシアとバルト3国の間も同じである。バルト3国はソ連時代を「占領による暗黒時代」と規定

して否定し、EUに加盟して人権尊重の自由主義国を標榜しているが、その反面、国家語として定めた民族語（エストニア語、ラトビア語、リトアニア語）の検定試験に合格していないロシア語系住民に対しては就職を制限し、市民に「通報」を奨励しつつ「言語警察」的行政機関を使ってロシア語使用を抑圧している。うちエストニアとラトビアは国家語の検定試験に合格していないロシア語系住民には参政権すら与えない。さらにラトビアでは外国語が絶対必要な業種を除き求人条件に外国語の能力を要求することを法律で禁止し、企業側の「経営の自由」までも侵害している。しかもこの両国はNHKの取材があるたびに「ソ連時代にはエストニア語／ラトビア語の使用が禁じられていた」という嘘をさりげなく挟み込む。バルト3国は現にNATOにも加盟しており、親露国ベラルーシとロシアの飛び地カリーニングラード州に挟まれたリトアニアでは志願者に軍事訓練を施し、また学校での軍事教練を開始した。一方エストニアにはドイツ軍を含むNATO空軍が駐留するのみならず、国家公認の民兵組織までもが出現している。いずれも「仮想敵」としているのはもちろんロシアである。ところがこの国々が密告奨励まで用いて追求しているのは「1国＝1民族＝1言語」という妄想なのである。

2018年度のこの科研費および共同研究による研究の最大の成果は、ロシアのみならずバルト3国、カフカース、中央アジア諸国という旧ソ連諸国においては気候風土、民族集団、母語、宗教、生業、生活様式といったあらゆる面での非常な多様性にもかかわらずそれらの違いを横断する「ソビエト文化」と呼ぶべきものが形成されており、それがいずれの国においても現在に至るまで拭い難く残っているということに気付いたことにある。上では「プロパガンダ国家」、「全体主義的国家観」、「警察国家」、「密告社会」といったソビエト文化の負の側面に言及したが、ソ連時代には否定的側面だけではなく無料でアパートが支給されたことや、夏のバカンスには庶民でもごく安い航空運賃と宿泊費でヤルタやオデッサのような保養地へ行って3～4週間も休むことができるなど、肯定的な側面も大にあった。

ロシアのみならず中央アジアとカフカースにおいても、フルシチョフ期以前に学校教育を受け、勤労年代の全てをソ連国民として過ごした高齢のロシア語系住民とは対独戦の戦勝国ソ連の極盛期を事実上の支配民族の成人として過ごした人々である。それゆえ、独ソ不可侵条約の秘密議定書により自らの意思と無関係にソ連国民にされてしまったバルト3国の現地民族の人々とは違い、この人々が「ソ連が懐かしいし、もし帰れるものならソ連に帰りたい」と願ったとしても何の不思議もなく、現にそう願っているのである。

柳田はこれまでの3年間にわたるモスクワ郊外とウズベキスタンでのオーラルヒストリー聞き取りにより旧ソ連のロシア語系住民のこうした内面の一端を見ることができたが、こうした事実認識に立てばロシアの民族主義者たちのデモでロシア正教のイコンとソ連時代の国旗と軍旗やスターリンの肖像が共存していることに何の不思議も矛盾もないことが容易に理解できる。それらはいずれも独ソ戦を勝ち抜きベルリンを陥落させたロシアの最も誇るべき瞬間を象徴するものだからである。このことに気付いたことも今年度の重要な成果であると言えることができる。

瀬川 昌久 SEGAWA Masahisa 教授

生年月日／1957年09月10日

東北アジア研究センター基礎研究部門中国研究分野

連絡先

Tel : 022-795-7695 Fax : 022-795-7695 E-Mail : msegawa@cneas.tohoku.ac.jp

出身学校

東京大学・教養学部・教養学科・文化人類学 1981年卒業

出身大学院

東京大学・社会学研究科・文化人類学 修士課程 1983年修了

東京大学・社会学研究科・文化人類学 博士課程 1986年中退

取得学位

教養学士 東京大学 1981年

社会学修士 東京大学 1983年

学術博士 東京大学 1989年

略歴

1986年～1989年 国立民族学博物館 助手

1989年～1993年 東北大学教養部 助教授

1993年～1996年 東北大学文学部 助教授

1993年～1996年 東北大学大学院国際文化研究科 助教授

1996年～2003年 東北大学大学院国際文化研究科 教授

1996年～現在 東北大学東北アジア研究センター 教授

2003年～現在 東北大学大学院環境科学研究科 教授

2007年～2009年 東北大学東北アジア研究センター

所属学会

日本文化人類学会（日本民族学会より2004年4月に名称変更）

学会活動

日本文化人類学会（日本民族学会より2004年4月に名称変更） 評議員（1994-1995、2002-2003、2006-2010、2014-2015） 1994年～現在

日本文化人類学会（日本民族学会より2004年4月に名称変更） 理事（1994-1995、2002-2003、2006-2009、2014-2015） 1994年～現在

日本文化人類学会（日本民族学会より2004年4月に名称変更） 理事、学会誌編集委員書評主任
2006年～2008年

専門分野

文化人類学

研究課題

- 宗族組織の人類学的研究
- 華南漢族のエスニシティ
- 中国の「民族」の文化人類学的研究

研究キーワード

親族, エスニシティ, 華南, 地方文化

学外の社会活動(2018年4月～2019年3月)

京都大学地域研究統合情報センター運営委員(その他) 2007年4月～現在

東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所運営委員(その他) 2009年4月～現在

オープンキャンパス・研究所公開等(2018年4月～2019年3月)

リベラルアーツサロン(企画) 2009年10月～現在

担当授業科目(2018年4月～2019年3月)

(大学院教育)

2014年 東北アジア地域社会論・環境社会人類学セミナー 2015年～現在

科学研究費補助金獲得実績(文科省・学振)(2018年4月～2019年3月)

基盤研究(C) 2018年4月～2021年3月

[現代中国人の歴史意識に関する研究—族譜編纂活動の分析から]

研究論文(2018年4月～2019年3月)

- 1) 連続性への希求—香港新界沙田W氏族譜の内容分析を通してみる系譜意識. [東北アジア研究, 23, (2019), 1-40] (査読あり)

瀬川昌久

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

本年度は、科研費・基盤研究(C)「現代中国人の歴史意識に関する研究—族譜編纂活動の分析から」が採択された。同研究課題は、「族譜」の中に見られる「歴史」や「伝統」についての叙述の分析を通じて、人々をそのような私的歴史叙述へと駆り立てる動機の解明に迫るとともに、父系出自の系譜認識が彼らの歴史意識自体にどのような影響を与えているかを明らかにすることを目的としたものである。この研究経費を基に、東京大学東洋文化研究所等での資料収集活動とその分析に鋭意取り組み、年度末には学術論文「連続性への希求—香港新界沙田W氏族譜の内容分析を通してみる系譜意識」(『東北アジア研究』23号1-40頁)を公表した。同論文の内容は、香港新界のある宗族が明代中期から清代後期にかけて記録し続けた族譜を分析材料とし、特にその系譜記録に関する族譜本体部分を詳細に分析することを通じて、そこからこの宗族の成員たちがたどった約400年間の人口動態を明らかにする

とともに、彼らが何を重視し、どのような価値意識に基づいて祖先についての情報を記録し続けたのかについて考察を加えたものである。従来の族譜研究は、序文に記された倫理観や歴史意識の研究、あるいは系譜を用いた著名人の出自の探索などに中心が置かれ、族譜の本体部分である一般宗族成員の生没記録それ自体への詳細な分析が行われることは希であった。本研究はその丹念な分析に取り組むことを通じて、族譜という東アジアにおいて長期的持続性をもつ文化要素の存在理由に迫ろうとする論考であり、また、民衆の中に身体化され儀礼化されて存在するところの超世代的な時間の流れについての意識やそれを超えて持続すべきであると考えられた価値について理解することを目指す考察である。それは、従来の文化人類学における中国研究はもとより、中国史研究の中でも試みられたことのない新しい視点を拓く重要な研究である。

明日香 壽川(張 壽川) ASUKA Jusen (CHO Jusen) 教授

生年月日／1959年10月26日

東北アジア研究センター基礎研究部門中国研究分野

連絡先

Tel : 022-795-7557 Fax : 022-217-7557 E-Mail : asuka@cneas.tohoku.ac.jp

出身学校

東京大学・農学部・農芸化学 1984年その他

出身大学院

欧州経営大学院・経営学研究科 修士課程 1991年修了

東京大学・工学系研究科・先端学際工学 博士課程 1996年単位取得満期退学

取得学位

農学修士 東京大学 1986年

経営学修士 欧州経営大学院 1990年

学術博士 東京大学 2000年

略歴

1987年～1988年 スイス実験外科医学研究所 研究員

1990年～1992年 ファルマシア・バイオシステムズ(株)日本支社 企画管理部経営企画課プロジェクトマネージャー

1996年～1997年 電力中央研究所 経済社会研究所 研究員

1997年～2004年 東北大学東北アジア研究センター 助教授

2000年～2004年 東北大学文学研究科科学技術論 助教授

2002年～2003年 京都大学経済研究所 客員助教授

2003年～2004年 東北大学環境科学研究科環境科学・政策論 助教授

2004年～現在 東北大学東北アジア研究センター 教授

2004年～現在 東北大学文学研究科科学技術論 教授

2004年～現在 東北大学環境科学研究科環境科学・政策論 教授

2010年～2013年 (公益財団法人)地球環境戦略研究機関 気候変動グループ ディレクター

研究経歴

1995年～現在 現在越境汚染問題、気候変動問題、中国のエネルギー環境問題、排出量取引制度、エネルギー・ミックス、環境国際協力

所属学会

環境経済政策学会, 環境社会学会, 国際アジア共同体学会, 計画行政学会, アジア政経学会

学会活動

- 環境経済・政策学会 理事 2005年～現在
 中国環境問題研究会 代表 2006年～現在
 国際アジア共同体学会 理事 2013年～現在

専門分野

環境エネルギー政策, 環境エネルギー安全保障, アジアの環境問題

研究課題

- アジアの環境問題に関する研究
- 環境安全保障システムの構築に関する研究
- 地球温暖化政策の政治経済学的分析

研究キーワード

国際エネルギー環境協力, 地球温暖化問題, 排出量取引, 貿易措置、クリーン開発メカニズム, 炭素税, エネルギー・ミックス, 国際競争力, 環境 ODA, 中国の環境エネルギー問題

外部機関における活動 (2018年4月～2019年3月)

- Climate Policy 学術誌査読 2000年01月～現在
 エネルギー・資源学会誌 学術誌査読 2000年01月～現在
 Environmental Economics and Policy Studies 学術誌査読 2003年01月～現在

行政機関・企業・NPO等参加 (2018年4月～2019年3月)

- 環境省(国) 中央環境審議会地球環境部会気候変動国際戦略専門委員会 委員 2004年4月～現在
 (社) 海外環境協力センター(その他) 理事 2007年4月～現在
 地球環境センター(国) JCM 支援委員会 委員 2012年4月～現在

科学研究費補助金獲得実績(文科省・学振) (2018年4月～2019年3月)

- 基盤研究(C) 2016年4月～現在
 [パリ COP21の結果を踏まえた各国の温室効果ガス削減目標および政策の分析評価]

著書 (2018年4月～2019年3月)

- 1) 環境経済・政策学事典(執筆担当部分)長期目標としての2度. [環境経済・政策学会, (2018) 5月]
明日香壽川
- 2) 「エネルギー計画 2050」構想: 脱原子力・脱炭素社会にむけて(執筆担当部分) パリ協定に逆行しない日本のエネルギー政策および気候変動政策を策定するために. [(2019) 2月]
明日香壽川

研究論文 (2018年4月～2019年3月)

- 1) 環境問題のデパートから環境専制主義へ? 最新中国環境エネルギー状況. [エネルギーデモクラシー, (2018)] (査読あり)
明日香壽川

- 2) 石炭火力発電所建設問題と日本気候変動政策：地域の足元から地球規模で考える。[環境と公害, 47 (4), (2018), 56-63] (査読あり)
明日香壽川, 大塚直, 島村健, 桃井貴子, 宮本憲一, 山下英俊, 長谷川公一
- 3) 変えられる中国と変わらない日本：脱炭素と再生エネルギー。[世界, (907), (2018), 120-130] (査読あり)
明日香壽川
- 4) ガラパゴス化する日本のエネルギー・温暖化政策。[経済, (2018), 105-115] (査読あり)
明日香 壽川

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

2018年度は、世界ではパリ協定と整合性がある各国目標引き上げのプロセスに関する議論、国内では、第5次エネルギー基本計画の内容に関する議論が行われた。特に日本では、エネルギーミックスにおいて、相変わらず原発と石炭火力が重要視されており、それに対して、原発の温暖化対策としてのデメリットおよびメリットに対する議論が注目された。明日香は、このような議論や具体的なエネルギーおよび温暖化問題に関わる制度設計に資するために、「エネルギー・ミックスと温暖化目標を考える日本の研究者グループ」の一員として、具体的な2050年自然エネルギー 100%のシナリオ策定などに関する論文作成などに積極的に関わった。また、市民団体であるeシフトおよび原子力市民委員会のメンバーとして、多くのシンポジウムで、原発と石炭を重視するエネルギー基本計画や政府の施策について、その問題点などについて発表した。また、中国における温暖化政策や大気汚染対策に関して、具体的な制度設計としての排出量取引制度などについて現地調査を行なった。さらに、東アジアでのエネルギー転換の状況を把握し、国際比較をするために、韓国、台湾、中国の研究者とのネットワークを構築した。

上野 稔弘 UENO Toshihiro 准教授

生年月日／1965年09月11日

東北アジア研究センター基礎研究部門中国研究分野

連絡先

Tel : 022-795-7655 Fax : 022-795-7655 E-Mail : t-ueno@cneas.tohoku.ac.jp

出身学校

筑波大学・比較文化学類・比較・地域文化学 1988年卒業

出身大学院

筑波大学・歴史・人類学研究科・東洋史 博士課程 1997年単位取得満期退学

取得学位

文学士 筑波大学 1988年

文学修士 筑波大学 1990年

略歴

1997年～1998年 千葉大学 非常勤講師

1997年～2001年 文部省初等中等教育局 教科書調査官心得

1998年～2001年 東京女学館短期大学 非常勤講師

所属学会

日本現代中国学会, 歴史人類学会, アジア政経学会, 社会文化史学会, 東アジア地域研究学会

学会活動

地域研究コンソーシアム運営委員会 運営委員(研究企画部会) 2010年～2017年

専門分野

中国現代史, 地域研究, 文化人類学・民俗学

研究課題

- 中国現代史における民族問題
- 公文書活用による中国民族問題研究

研究キーワード

中国, 民族, 民族問題, 少数民族, 民族政策, 民族関係, 民族史

学内活動(2018年4月～2019年3月)

- 外国語委員会中国語・朝鮮語部会委員 2001年4月～現在
- 外国語委員会学習環境専門部会委員 2001年4月～現在
- 外国語委員会中国語・朝鮮語部会長 2006年4月～2019年3月
- 編集出版委員会委員 2015年4月～現在
- 国際文化研究科等安全衛生委員会委員 2017年4月～現在
- 男女共同参画委員会委員 2018年4月～2019年3月
- 片平まつり実行委員会委員 2018年12月～2019年3月

担当授業科目(2018年4月～2019年3月)

(全学教育)

- 基礎中国語Ⅰ-1 2017年～現在
- 基礎中国語Ⅰ-2 2017年～現在
- 基礎中国語Ⅱ-1 2017年～現在
- 基礎中国語Ⅱ-2 2017年～現在
- 展開中国語Ⅰ-1 2018年～現在
- 展開中国語Ⅰ-2 2018年～現在

(大学院教育)

- 地域環境・社会システム学セミナー 2003年～現在
- 東北アジア比較社会組織論 2004年～現在
- 東北アジア民族誌論 2018年～2018年
- 文化環境学概論 2018年～2018年

その他研究活動(2018年4月～2019年3月)

- 台湾における民国期民族政策文献の検索・収集(フィールドワーク) 2003年～現在
- 米国研究機関等所蔵の中国民国期民族政策文献の検索・収集(フィールドワーク) 2008年～現在
- 英国諸機関所蔵の中国边疆民族問題関係資料の検索収集(フィールドワーク) 2010年～現在

総説・解説記事(2018年4月～2019年3月)

- 1) 活動風景「最近の台湾における近現代資料館事情」.[東北大学東北アジア研究センター東北大学東北アジア研究センター ニュースレター, (80), (2019), 8-8]
上野稔弘

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

2018年度は前年度に続き20世紀前半中国の边疆民族問題に関する史料の収集・整理に注力した。海外での文献調査については、2018年7月および2019年3月の2回にわたり台湾・國史館の台北館と新店館、ならびに国家図書館、國立台湾大學図書館等の諸機関を訪問し、中華民国期の边疆民族問題に関連する史料の閲覧・収集を行った。國史館の史料公開に関してはWebによるデジタル史料の公開範囲が順次拡大しており、特に昨年度の段階では台北館のデジタル閲覧室で限定公開していた外交部公文書が日本においてもWeb上での閲覧が可能となった。そのため今年度の史料収集に際しては台北館での史料閲覧は短時間で終了し、新店館における原本史料の閲覧・収集に時間を割いた。デ

デジタル化未着手の内務部史料および呉忠信関連の個人史料については許可を得た範囲でデジタルカメラによる撮影収集を行った。その上で昨年度に続き呉忠信日記の閲覧ならびに筆写による収集を進めた。今回は呉忠信の新疆省主席在職期に前後する時期の日記を中心に閲覧し、呉忠信の新疆問題に対する姿勢を、イリ叛乱勢力との交渉に当たり呉忠信辞任後に省主席に就いた張治中との対比という形で知ることができた。この調査に先立ち呉忠信が草稿を作成した『主任日記』の影印本について所蔵する新潟大学図書館よりコピーを取り寄せており、その影印本で欠落した記述部分を呉忠信日記で確認した。本年度の調査成果はこの方向で史料収集を継続することへの手応えを感じさせるものであった。今年度も科研費等の外部研究資金を獲得できない状況が続いたが、上記成果を基に海外・国内における文献調査における経費面での制約は昨年度以上に厳しさを増している。そのため史料収集の進捗度及びその成果として執筆中である『蒋介石と中国边疆（仮題）』の脱稿についても、遅れを挽回できない状況が続いているが、海外調査と国内調査のより緊密な連携により研究を着実に推進し、成果の早期公表に向けて注力している。現在進行中の呉忠信関連史料の閲覧・収集もその一環であるが、その分量と史学的価値に鑑みて、呉忠信による民国期边疆民族政策の実務的展開についての分析部分を先行的にまとめて公表することも念頭に置き研究を進めている。

石井 敦 ISHII Atsushi 准教授

生年月日／1974年09月25日

東北アジア研究センター基礎研究部門日本・朝鮮半島研究分野

連絡先

Tel : 022-795-6076 Fax : 022-795-6010 E-Mail : ishii@cneas.tohoku.ac.jp

出身学校

東京工業大学・工学部・機械科学科 1997年卒業

出身大学院

筑波大学・社会工学研究科・都市・環境システム専攻 博士課程 2001年中退

取得学位

経済学修士(経済学) 筑波大学 1999年

略歴

2001年～2004年 独立行政法人国立環境研究所 アシスタントフェロー

研究経歴

1997年～2001年 温室効果ガス削減のための国際協力プロジェクトについての研究に従事
2000年～現在 国際環境レジームの科学アセスメントについての研究に従事
2005年～現在 炭素隔離技術の社会的側面に関する研究に従事
2005年～現在 日本の捕鯨外交についての研究に従事
2011年～現在 国際漁業資源ガバナンスについての研究に従事
2013年～現在 東アジアの越境大気汚染についての研究に従事
2015年～現在 ジオエンジニアリングについての研究に従事

所属学会

環境経済・政策学会, 国際関係論学会, 日本国際政治学会

学会活動

環境経済・政策学会 2012年大会実行委員会 委員 2011年～2012年
環境経済・政策学会 理事 2012年～現在
日本国際政治学会環境分科会責任者 分科会責任者 2013年～2015年

専門分野

政治学, 科学社会学・科学技術史, 環境影響評価・環境政策, 国際関係論

研究キーワード

国際環境問題, 科学アセスメント, 科学社会学, 外交科学, 越境大気汚染, 炭素隔離技術, 国際漁業資源ガバナンス

報道 (2018年4月～2019年3月)

Japan in Focus: Japan loses its bid to lift a ban on commercial whaling (出演・執筆 その他 Australian Broadcasting Corporation) 2018年9月

日本の捕鯨に警戒強く 対象ミンクは準絶滅危惧 IWC総会閉幕 (出演・執筆 新聞 岩手日報) 2018年9月

捕鯨問題を多面的に検討 (出演・執筆 新聞 水産経済新聞) 2018年12月

REVIEW - Japan's Decision To Resume Commercial Whaling Sparks Backlash Of Eco Activists (出演・執筆 その他 Sputnik News Agency) 2018年12月

Channel NewsAsia (出演・執筆 テレビ Mediacorp Pte Ltd.) 2018年12月

特集ワイド: 日本の商業捕鯨は国際法違反? IWC脱退「留飲が下がった」… だけでいいのか (出演・執筆 新聞 毎日新聞) 2019年3月

外部機関における活動 (2018年4月～2019年3月)

日本学術会議 フューチャー アースの推進と連携に関する委員会 参考人 2018年05月～2018年05月

Earth System Governance Project Senior Research Fellow 2018年05月～現在

Earth System Governance Project Scientific Steering Committee 2018年11月～2021年11月

担当授業科目 (2018年4月～2019年3月)

(大学院教育)

地域環境・社会システム学修士セミナー 2005年～現在

地域環境・社会システム学修士研修 2005年～現在

地域環境・社会システム学博士セミナー 2006年～現在

国内会議 発表・講演 (2018年4月～2019年3月)

クジラをめぐる国際政治 [一般公開講演会「世界の捕鯨を考える」]

(2018年12月2日～2018年12月2日) その他

科学研究費補助金獲得実績 (文科省・学振) (2018年4月～2019年3月)

基盤研究 (B) 2016年4月～2020年3月

[グローバル時代における海洋生物資源法の再構築—国際・国内法制度の連関の視点から]

研究論文 (2018年4月～2019年3月)

1) 統合知を創出するための境界オブジェクトとしての人類世. [学術の動向, 23 (4), (2018), 82-84]

石井敦

2) Governance for Climate Engineering. [Oxford Research Encyclopedia of Climate Science, (2018)]

(査読あり)

杉山昌広, 石井敦, 朝山慎一郎, 小杉隆信

- 3) Domestic sources of international fisheries diplomacy: A framework for analysis. [Marine Policy, 94, (2018), 256-263]
J. S. Barkin, Elizabeth R. DeSombre, Atsushi Ishii, Isao Sakaguchi

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

1. 石井准教授は、地球環境変動ガバナンスに関する社会科学の分野では世界最大の研究団体である地球システムガバナンスプロジェクト (Earth System Governance Project) の科学諮問委員会の委員 (2018年11月から3年任期) に就任した。同委員の取り組みとしては、同プロジェクト全体の運営や年次大会の運営などに携わることになる。同プロジェクトは、独自のジャーナル、ワーキングペーパー、マサチューセッツ工科大学出版会やケンブリッジ大学出版会によるシリーズ本の発行や、リサーチフェローの研究ネットワークの運営、同プロジェクトの科学計画に基づいた年次大会の開催などを行なっている。
2. 石井准教授は、地球システムガバナンスプロジェクト (Earth System Governance Project) の科学計画の執筆 (2016年～2018年11月まで) に貢献した。同計画は、2018年11月からの10年間の関連研究の枠組みや方向性を決める非常に重要な文書であり、そのため、同計画は同プロジェクトの関係者によるレビュー、その対応のための修正を経て、採択された。
3. 石井准教授は、平成26年度「気候工学 (ジオエンジニアリング) のガバナンス構築に向けた総合研究の可能性調査」 (社会技術研究開発センターによる研究助成) で実施した超学際科学の成果である共著論文 (Sugiyama, M., Asayama, S., Kosugi, T., Ishii, A., Emori, S., Adachi, J., … Yoshizawa, G. (2016). Transdisciplinary co-design of scientific research agendas: 40 research questions for socially relevant climate engineering research. Sustainability Science) が Sustainability Science 誌の2017 Sustainability Science Best Paper Awards における Most Outstanding Paper を受賞した。同受賞は、超学際科学の一環として、関連ステークホルダーと協働で研究課題の抽出を行ったワークショップの成果を参加者全員の共著による査読論文の形で発表したという意味で、日本で初めての試みが評価された結果であるといえる。受賞論文は、気候変動緩和のために意図的な大規模改変を行うジオエンジニアリングを研究するにあたって、どんなリサーチクエストionsに取り組むべきなのかをステークホルダーと研究者が共設計し、その成果を報告している。この共設計はただ単に、集まって議論し、リサーチクエストionsを同定すればいいというものではない。ステークホルダーは多様な価値観を持っている。例えば、ジオエンジニアリングに対して賛成と反対の価値観を持つステークホルダーをそれぞれ尊重してリサーチクエストionsを選択していかなければならない。したがって、この試みのコアチーム (私の他に、東京大学の杉山昌広氏、早稲田大学の朝山慎一郎氏、立命館大学の小杉隆信氏、国立環境研究所の江守正多氏) は、まず、この試みはジオエンジニアリングを推進するものでも、反対するものでもない、という中立性を貫徹することに最新の注意を払った。また、同論文のイノベーションの一つとして、リサーチクエストionsを選択するために行う投票においては、賛成票が一票でもあれば、当該問題は残す、という形式を採用した。これによりなるべく多くの価値観を反映できるようリサーチクエストionsの選択を目指した。日本では多数決は「多数派の押し付け」であると捉えられていることが非常に多い。しかし、実は、あまり議論が得意ではないアクターが投票によって確実に自らの意見を反映させることができるようになる、などのメリットもあるのである。

デレーニ・アリン・エリザベス Delaney Alyne Elizabeth 准教授

生年月日／1970年11月13日

東北アジア研究センター基礎研究部門日本・朝鮮半島研究分野

略歴

- 1993年 5月 Macalester College, St.Paul, MN, USA 卒業 (B.A. Anthropology/Japan Studies)
 2003年 4月 University of Pittsburgh 卒業 (Cultural Anthropology; Certificate in Asian Studies)
 2003年 4月 Institute for Fisheries Management and Coastal Community Development, Post-doctoral Fellowship, Hirtshals, Denmark
 2007年 7月 Aalborg University, Department of Planning, Aalborg, Denmark Assistant Professor
 2008年 7月 Aalborg University, Department of Planning, Aalborg, Denmark Associate Professor

学位 (Academic Degrees(Speciality))

- 博士 文化人類学
 学士 文化人類学・日本学

所属学会

- 日本文化人類学会
- International Association for the Study of the Commons
- Society for Applied Anthropology
 - Topical Interest Group, Risk and Disasters
- American Anthropological Association (AAA)
 - Anthropology and Environment Section
 - Culture and Agriculture
 - East Asia Section
- European Association for Social Anthropology
 - Disaster and Crisis Anthropology Network
- The European Association for Japanese Studies
 - Japan Anthropology Workshop (JAWS)

研究分野 Research area

文化人類学・民俗学・漁業管理・

研究課題 Research theme

- 社会的・環境サステナビリティのため社会科学の利用の研究 [Using social science for social and environmental sustainability] (2018-2019)
- 科研C「津波被災地の地域農業・漁業復興における在来知と災害リスク軽減研究」(Using ethnography to understand the role of Local Ecological Knowledge in the recovery of farming and fishing in the post-3.11 Era)

研究キーワード Keywords

沿岸文化、災害、映像人類学、漁業権、入り会い、社会的持続可能性とレジリエンス、日本、グリーンランド、ヨーロッパの漁業地、social impact assessment

外部機関における活動 activities at outside resources

Editorial Advisory Board of the Journal of *Maritime Studies*

Editorial Advisory Board *Nature Conservation*

Member of the Board

Centre for Maritime Research (MARE), Amsterdam, the Netherlands

行政機関 (government agencies) ・ 企業 (companies) ・ N P O等参加

Sea and Shore, The North Sea Centre, Hirtshals, Denmark. 2012-present

International Scientific Advisory Committee Member

Dutch Pulse Trawl Research Programme 2015-2019. Ministry of Economic Affairs and Agriculture, The Netherlands

大学院担当 (Master & Doctor Courses Classes)

大学院環境科学研究科

文化生態保全学分野

オープンキャンパス・研究所公開等

ホームページ

http://www.cneas.tohoku.ac.jp/e_data/staff/delaney/delaney.htm

学会活動・学会役員

Ex officio member of the Board, International Association for the Study of the Commons

主要著書 main books

2017. *Partnerships and Power Games: Natural Resources Governance and Management in the Okavango Delta*. Magole, L. and A. Delaney (eds.). DARMA Book Series. Lit Verlag: Austria. 256 pp. 01 Jun 2017

Book chapters

Arias-Schreiber, M., Linke, S., Delaney, A.E. and Jentoft, S., 2019. Governing the Governance: Small-Scale Fisheries in Europe with Focus on the Baltic Sea. In *Transdisciplinarity for Small-Scale Fisheries Governance* (pp. 357-374). Springer, Cham.

Delaney, A. and L. Magole, 2017. "Partnerships and the strategy to 'kill' power games in the Okavango Delta natural resources management and governance" pp 183-192 in Magole and Delaney (eds.) *Partnerships and Power Games: Natural Resources Governance and Management in the Okavango Delta*. DARMA Book Series. LIT Verlag: Austria.

Magole L. and A. Delaney, 2017. “Successes and Challenges of an Integrated Natural Resource Management Strategy in the Okavango Delta Ramsar Site” pp 1-15 *in* Magole and Delaney (eds.) *Partnerships and Power Games: Natural Resources Governance and Management in the Okavango Delta*. DARMA Book Series. LIT Verlag: Austria.

Snyder, Hunter T., R.B. Jacobsen and A. Delaney, 2017. “Pernicious Harmony: Greenland and the Small-Scale Fisheries Guidelines *in* Jentoft (ed.) *FAO Voluntary Guidelines on Small Scale Fisheries: A Global Perspective*. Springer Press.

Delaney, A. and N. Yagi., 2017. “Voluntary Guidelines for Securing Sustainable Small-Scale Fisheries: Lessons on Sustainable Fisheries Management and Poverty Eradication from Japan” (pp. 313-332) *in* Jentoft (ed.) *FAO Voluntary Guidelines on Small Scale Fisheries: A Global Perspective*. Springer Press.

主要論文 main articles

- 1) Ounanian, K., Carballo-Cárdenas, E., van Tatenhove, J.P., Delaney, A., Papadopoulou, K.N. and Smith, C.J., 2018. “Governing marine ecosystem restoration: the role of discourses and uncertainties.” *Marine Policy*, 96, pp.136-144.
- 2) Ignatius, S., Delaney, A. and Haapasaari, P., 2019. Socio-cultural values as a dimension of fisheries governance: The cases of Baltic salmon and herring. *Environmental Science & Policy*, 94, pp.1-8. (April 2019)

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

My research and applied research focused on social sustainability and resilience in two areas:

- using social science for social and environmental sustainability; and
- investigating social sustainability and resilience in Japanese coastal communities post-3.11

Using social science for social and environmental sustainability has included research and applied research internationally, as well as domestically. Internationally, I have provided advice to policy makers and managers on how social science should be included in research and management of natural resources for the Dutch Pulse Trawl Research Programme (Ministry of Economic Affairs and Agriculture, The Netherlands Dutch Ministry of Economics and Agriculture, June 2018) and into management and policy (Expert working group on social indicators for the STECF – Scientific, Technical, and Economic Committee for Fisheries, October 2018). For both, I presented what type of social data should be compiled, how to get the data, and how social data can be used, such as in social impact assessments.

Domestically, my research focused on local knowledge, cultural heritage, and innovation in Japanese coastal communities for social sustainability and resilience. During this year’s research, I uncovered different types of innovative activities by seaweed cultivators- and women using seaweed- and showed how this gives locals a new sense of purpose and identity. This research was presented at the workshop “Coastal Communities and Disaster: Perspectives from Asia” at Copenhagen University’s Copenhagen Center for Disaster Research with the paper, “Take it to the People: Innovation among fishing cooperative association members in post-tsunami Japan.”

My work on resilience and adaptation also extends to coastal cultural heritage where my work is on-going into how heritage can foster resilience in coastal communities; research included working internationally to develop a framework for preserving and utilizing cultural heritage.

From my research I have had two publications which are related to using social science for environmental sustainability. The first involved using social science methods for analyzing marine habitat restoration, for the ultimate improvement of management; the second, involved transdisciplinary methods (social and environmental science) for better management of the Baltic Sea.

For reference:

Publications

Ounanian, K., E.C.Cardenas, J. van Tatenhove, A. Delaney, K. N. Papadopoulou, C. Smith. 2018. "Governing marine ecosystem restoration: the role of discourses and uncertainties" *Marine Policy*.

Arias-Schreiber, M., Linke, S., Delaney, A.E. and Jentoft, S., 2019. Governing the Governance: Small-Scale Fisheries in Europe with Focus on the Baltic Sea. In *Transdisciplinarity for Small-Scale Fisheries Governance* (pp. 357-374). Springer, Cham.

2018-19 Projects:

- 社会的・環境サステナビリティのため社会科学の利用の研究 [Using social science for social and environmental sustainability] (2018-2019)
- 科研C「津波被災地の地域農業・漁業復興における在来知と災害リスク軽減研究」(Using ethnography to understand the role of Local Knowledge in the recovery of farming and fishing in the post-3.11 Era)

宮本 毅 MIYAMOTO Tsuyoshi 助教

生年月日／1970年07月01日

東北アジア研究センター基礎研究部門日本・朝鮮半島研究分野

連絡先

Tel : 022-795-7477 Fax : 022-795-7477 E-Mail : t-miya@cneas.tohoku.ac.jp

取得学位

修士(理学) 東北大学 1995年

博士(理学) 東北大学 2012年

略歴

1997年～2007年東北大学東北アジア研究センター 助手

2007年～現在東北大学東北アジア研究センター 助教

所属学会

日本火山学会, 日本鉱物科学会, 日本地質学会

専門分野

火成岩岩石学, 自然災害科学, 火山地質学

研究課題

- 霧島火山群の地質学的・岩石学的研究
- マグマ混合過程に関する研究
- マントル捕獲岩に関する研究
- 中国・白頭山における火山伝承に関する研究
- 火山灰土壌中から小規模噴火の痕跡を読む

研究キーワード

火成岩岩石学, 火山地質

外部機関における活動(2018年4月～2019年3月)

十和田火山防災協議会 委員 2016年04月～現在

担当授業科目(2018年4月～2019年3月)

(全学教育)

自然科学総合実験 2004年～現在

(学部教育)

野外調査演習 1997年～現在

地学実験 2007年～現在
地球物質科学実習Ⅰ 2007年～現在
地殻岩石学実習Ⅰ 2007年～現在
地殻岩石学実習Ⅱ 2013年～現在
岩石学実習Ⅱ 2013年～現在
夏期フィールドセミナー 2018年～2018年

国内会議 発表・講演(2018年4月～2019年3月)

十和田火山・噴火エピソードBの噴火推移[日本地球惑星科学連合2018年大会]
(2018年5月20日～2018年5月24日)口頭(一般)
十和田火山・中湖カルデラ形成期の活動推移[日本火山学会2019年度秋季大会]
(2018年9月26日～2018年9月28日)口頭(一般)

研究論文(2018年4月～2019年3月)

- 1) 白頭山北麓、10世紀噴火のラハール堆積物の埋没樹木の¹⁴C ウィグルマッチング年代. [福岡大学理学集報, 48(2), (2018), 43-48]
澤田恵美, 木村勝彦、八塚慎也、中村俊夫、宮本毅、中川光弘、長瀬敏郎、菅野均志、金旭、奥野充

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

近年、直径が数km程度である小型カルデラの形成過程を明らかにすることを目的に、青森・秋田県県境の十和田火山の中湖カルデラの活動について調査・研究を行ってきた。特にこれまでは中湖カルデラの活動の中で規模の大きな2つの噴火エピソード(噴火エピソードC(7600年前)と噴火エピソードA(西暦715年))についてその噴火推移を明らかにしてきた。本年はその両噴火の間に発生した小規模噴火である噴火エピソードBの噴出物を研究対象とし、調査・研究を行った。噴火エピソードBでは、これまで噴火後期に外来水が関与する噴火に移行したと考えられてきたが、噴火の最初期から外来水の関与を確認でき、現在の中湖のような湖水の溜まった凹地が、噴火開始時から存在していたことが明らかとなった。中湖カルデラはこれまで前述の規模の大きな2つの噴火エピソードのいずれかで形成されたと議論が分かれていたが、最初の大規模噴火である噴火エピソードCの活動終了時には、カルデラの原型が形成されたといえる。また、詳細な噴出物調査から、噴火エピソードBでは小規模な噴火が断続的に繰り返しており、噴火エピソードCの末期の噴火活動と規模も含めて大変類似したものであったことが明らかとなった。

陥没カルデラ形成では、大量のマグマが放出されることと並行して、カルデラ床にあった古い地質ブロックが破碎されつつ、カルデラ内部へ向けて崩落していくことで、地表に窪地(カルデラ)が形成される。カルデラ地形の原型を形成した噴火エピソードCでは、噴火の初期に大量のマグマ(降下軽石)を1日程度の間放出するが、その後は噴火エピソードBと同様な断続的な小規模噴火へと移行し、マグマが非常にでにくい環境にあったといえる。これは崩落を始めた地質ブロックが火道内で目詰まりを起こすことで、マグマの上昇・噴出を阻害したためであると推定される。一方、最新の活動である噴火エピソードAでは最終的には大規模な火砕流の放出へと至っており、マグマは再び噴出しやすい環境にあったと考えられ、これは目詰まりを起こした地質ブロックがマグマ溜り内へと沈降して、目詰まりが解消するとともに大量のマグマを押し出したと考え、中湖カルデラの一連の

活動推移を説明することが可能である。以上の点から、中湖カルデラは噴火エピソード C～A の複数のイベントによって形成され、その形成過程を詳細に復元することができた。

以上のような複数回の噴火活動での形成過程という小型カルデラ火山の形成過程はあまり知られていないが、今回の結果は複数のイベントにまたがって小型カルデラの形成が進行する 1 つのケーススタディといえる。今回の結論に加えて、噴火エピソード A でカルデラ形成が完了したと考えられることから、次の噴火では大規模な噴火には至らない可能性が高いことも指摘できた。これは昨年度十和田火山の災害予想図の作成に関わってきたが、十和田火山の活動の将来予測として、重要な知見を得られたと考えられる。

千葉 聡 CHIBA Satoshi 教授

生年月日／1960年09月24日

東北アジア研究センター基礎研究部門地域生態系研究分野

連絡先

Tel : 022-795-7813 Fax : 022-795-7813 E-Mail : schiba@biology.tohoku.ac.jp

出身学校

東京大学・理学部・地学科 1986年卒業

出身大学院

東京大学・理学研究科・地質学 博士課程 1991年その他

略歴

1991年～1999年 静岡大学理学部

1999年～1999年 東北大学大学院生命科学研究所

研究経歴

1985年～1985年 小笠原諸島陸産貝類の進化生物学的研究

1990年～1990年 種多様性の長期的変動に関する理論的研究

1991年～1991年 陸産貝類の遺伝学的、生態学的研究

1991年～1991年 軟体動物の進化プロセス、適応放散

所属学会

日本生態学会, 日本古生物学会, Society for the study of evolution, American Society of Naturalist,
日本進化学会

専門分野

進化生態学, 集団遺伝学, 古生物学

研究課題

- 陸生貝類の進化に関する研究
- 島の生物群集の進化と保全に関する研究
- 海洋生物の種多様性の空間的、時間的パターンの形成維持機構
- 外来種の侵入と定着機構の解明
- 海洋生物のホスト-パラサイト系
- 東北アジア地域の生物地理学

研究キーワード

進化, 多様性, 種分化, 軟体動物, 陸産貝類, 外来種, 小笠原

行政機関・企業・NPO等参加(2018年4月～2019年3月)

環境省(国) 小笠原世界遺産候補地科学委員会 委員 2006年11月～現在
 (国) 環境省・プラナリア対策・陸産貝類保全検討会委員 2009年4月～現在
 (国) 小笠原諸島ネズミ類対策検討会委員 2009年4月～現在
 (国) 小笠原諸島修復事業検討委員会委員 2010年4月～現在
 (地方公共団体) 父島ノヤギ排除検討委員会委員 2010年4月～現在
 (国) 小笠原諸島森林生態系保護地域保全管理委員会アドバイザー 2011年4月～現在
 (地方公共団体) 父島外来植物対策委員会委員 2012年4月～現在
 (国) 小笠原諸島科学委員会委員 2013年4月～現在
 (国) 小笠原諸島生態系保全アクションプラン改定WG委員 2013年4月～現在
 (国) 新たな外来種の侵入・拡散防止WG委員 2013年4月～現在
 (国) グリーンアノール対策WG委員 2013年4月～現在

学内活動(2018年4月～2019年3月)

生命科学研究所入試委員会委員 2013年4月～現在
 入試委員会委員 2014年4月～現在

担当授業科目(2018年4月～2019年3月)

(全学教育)
 生命科学C 2003年～現在
 自然科学総合実験 2005年～現在
 (学部教育)
 群集生態学 2001年～現在
 動物生態学実習 2001年～現在
 生物学演習 2010年～現在
 短期留学生受入プログラム講義 2010年～現在
 (大学院教育)
 保全生物学特論 2013年～現在

科学研究費補助金獲得実績(文科省・学振)(2018年4月～2019年3月)

基盤研究(B) 2017年4月～2020年3月
 [脅威が創出する多様性：ロシアとベトナムに見る進化爆発]

その他の競争資金獲得実績(2018年4月～2019年3月)

地球環境研究総合推進費 2005年6月～現在
 [脆弱な海洋島をモデルとした外来種の生物多様性への影響とその緩和に関する研究]

研究論文 (2018年4月～2019年3月)

- 1) First record of the slug species *Semperula wallacei* (Gastropoda: Eupulmonata: Veronicellidae) in Japan.. [BioInvasions Records, 7, (2018), in press] (査読あり)
Hirano, T., Yamazaki, D., Uchida, S., Saito, T., & Chiba, S.
- 2) Endangered freshwater limpets in Japan are actually alien invasive species. [Conservation Genetics, 19, (2018), 947-958] (査読あり)
Saito, T., Van Tu Do, Prozorova, L., Hirano, T., Fukuda, H., Chiba, S.
- 3) Phylogeography of freshwater planorbid snails reveals diversification patterns in Eurasian continental islands.. [BMC Evolutionary Biology, 18, (2018), 164] (査読あり)
Saito, T., Hirano, T., Prozorova, L. A., Do Van Tu, Sulikowska-Drozd, A., Sitnikova, T., Surenkhorloo, P., Yamazaki, D., Morii, Y., Kameda, Y., Fukuda, H., Chiba, S.
- 4) Recent lake expansion triggered the adaptive radiation of freshwater snails in ancient Lake Biwa.. [Evolution Letters, 2, (2018)] (査読あり)
Miura O., Urabe M., Nishimura T., Nakai K., Chiba S.
- 5) Snails wearing green heatproof suits: the benefits of algae growing on the shells of a intertidal gastropod.. [Journal of Zoology, (2018)] (査読あり)
Kagawa O., Chiba S.
- 6) Insights into the evolution of shells and love darts of land snails revealed from their matrix proteins.. [Genome Biology and Evolution, 11, (2019), 380-397] (査読あり)
Shimizu K., Kimura K., Isowa Y., Oshima K., Ishikawa M., Kagi H., Kito K., Hattori M., Chiba S., Endo K.
- 7) Relationship between contrasting morphotypes and the phylogeny of the marine gastropoda genus *Tegula* in East Asia. [Journal of Molluscan Studies, 84, (2019), 24-34] (査読あり)
Yamazaki D., Hirano T., Uchida S., Miura O., Chiba, S.

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

1. 東北アジア地域の陸水生態系の成立過程と変遷に関する研究

• 自然史について

陸水生態系の主要な要素であり、かつ調査、収集が容易な点ですぐれたモデルである淡水貝類を用いて、その進化史と群集の成立過程を解明した。環境省のレッドリストに多く掲載されているにもかかわらず、これまで全く研究が行われてこなかったヒラマキガイ類とミズシタダミ類の遺伝的および種多様性の実態を解明するとともに、分子遺伝学的手法を用いて、東北アジア地域におけるそれらの群集の成立過程の解明に成功した。これらのグループはユーラシア北部と南部にそれぞれ異なる系統が成立し、第三紀にそれぞれの系統が繰り返し日本に移住したことがわかった。そして日本の島嶼化とともに、急速に列島内で種の多様化を生じたことが示された。東北アジアおよび日本で淡水貝類が遂げた歴史とその群集の成立過程を、ロシア、中国から東南アジアに至る幅広い地域の資料をもとに推定した初めての研究例である。これらの研究は2編の国際誌として発表された。

これまで数十年にわたり謎とされてきた琵琶湖の淡水貝類、琵琶湖固有カワニナ類の起源の解明に成功した。次世代シーケンス技術を用いたゲノムワイドの解析により、琵琶湖の固有カワニナが、40万年前の湖の拡大によるニッチの拡大に駆動され、2種を起源として一気に十数種に分化したことを示した。この成果は米国際誌に掲載された。

- 人間活動との関係について

淡水貝類のカワコザラ類のうちで唯一環境省のレッドリストに掲載されているスジイリカワコザラが、実は在来種ではなく、北米由来の外来生物（メリケンコザラ）あることを分子遺伝学的な解析から実証した。また文献や遺跡の資料から、在来のカワコザラは江戸時代までは日本に広く生息していたが、明治時代以降に侵入した北米由来のメリケンコザラに駆逐され、現在は局所的に分布する絶滅危惧種になっていることを明らかにした。これは日本の生物相を、暗黙のうちに日本在来と考えることに対する問題提起として重要な成果である。またこの成果はレッドリストの意義や選定方法そのものに大きな問題があることを示す点で重要である。この成果は英国国際誌に発表されるとともに、Nature 誌の research highlight に取り上げられ、"The invasive snail that fooled zoologists" というタイトルで紹介された。

2. 東北アジア海洋生物の自然史

- 多様性の起源

日本周辺海域—オホーツク海～東シナ海の沿岸域は、同緯度では世界で最も海洋生物の種多様性が高い地域である。しかしその理由や成立過程は不明である。この問題を解明するため、特に多様性の高いグループとして世界的に知られる本地域の巻貝類をモデルとして、分子遺伝学的手法を用いて研究を行った。その結果、食用としても知られるバテイラ類が、形態では区別できない同胞種を含む一方、住み場所の多様性が種多様性に関係することを解明した。従来、バテイラのように浮遊幼生期をもつ潮間帯の巻貝類は、遺伝的分化に乏しいと考えられていたが、その考えを否定する結果であり、これまで実際の種多様性を低く見積もっていたことを示す重要な成果である。この成果は英国国際誌に発表された。

- 多様化のプロセス

日本沿岸から東シナ海にかけて分布する潮間帯の巻貝スガイは、殻に共生藻類を付着させることが古くから知られていたが、それにどのようなメリットがあるのかは全く謎であった。野外調査の結果、特に日当たりが強く高温となる岩礁域では、スガイの殻上に共生藻類が著しく発達することが示された。このことから、共生藻類は殻内の温度を低下させることによって、スガイの潮間帯上部という厳しい環境への進出を可能にしているという仮説を立て、実験的に検証を行った。その結果、殻に共生藻類が付着していることによって水分が保持され、殻が冷やされることで、スガイが高温環境に進出できることが実証された。これは共生が生物の新しい環境への進出をもたらすことを示す重要な成果である。また貝類も「壁面緑化」による熱負荷低減を実現していることを示す、初めての発見である。この成果は英国国際誌に発表されるとともに、英国 New Scientist 誌に取り上げられ、"Some snails wear jackets made of algae to protect them from the sun" というタイトルで紹介された。

鹿野 秀一 SHIKANO Shuichi 准教授

生年月日／1954年01月01日

東北アジア研究センター基礎研究部門地域生態系研究分野

連絡先

Tel : 022-795-7563 Fax : 022-795-7563 E-Mail : shikano@cneas.tohoku.ac.jp

出身学校

東北大学・理学部・生物学 1977年卒業

出身大学院

東北大学・理学研究科・生物学 博士課程 1982年修了

略歴

1982年～1986年 東北大学理学部 教務系技官

1986年～1995年 東北大学理学部 助手

1995年～1997年 東北大学大学院理学研究科 助手

1997年～2007年 東北大学東北アジア研究センター 助教授

2007年～現在 東北大学東北アジア研究センター 准教授

所属学会

日本生態学会, 日本微生物生態学会, 日本陸水学会

専門分野

生態・環境, 環境動態解析, 系統

研究課題

- マイクロゾウムにおける環境変化に対する相互作用の影響
- 細菌群集の系統的多様性
- 湖沼の環境と食物網

研究キーワード

群集, 生態系, 環境, 湖沼, 湿地

行政機関・企業・NPO等参加(2018年4月～2019年3月)

(地方公共団体) 宮城県・伊豆沼・内沼自然再生協議会 委員 2008年4月～現在

担当授業科目(2018年4月～2019年3月)

(学部教育)

生物学演習 I 2004年～現在

環境生物学 2005年～現在

その他研究活動 (2018年4月～2019年3月)

西シベリア塩性湖チャニー湖沼群の環境と生物群集の調査(フィールドワーク) 2001年～現在

宮城県・伊豆沼における環境と食物網解析(フィールドワーク) 2006年～現在

著書 (2018年4月～2019年3月)

- 1) 東北アジアの自然と文化(執筆担当部分)西シベリア湿地生態系の食物網研究. [東北大学出版会, (2019) 3月]

鹿野秀一

研究論文 (2018年4月～2019年3月)

- 1) Hypoxia within macrophyte vegetation limits the use of methane-derived carbon by larval chironomids in a shallow temperate eutrophic lake. [Hydrobiologia, 822, (2018), 69-84]

Yasuno N, Sako Y, Shikano S, Shimada T, Ashizawa J, Fujimoto Y and Kikuchi E.

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

西シベリア・チャニー湖湿地生態系において食物網に寄生者・宿主関係を組み込むことに関する共同研究を、ロシア科学アカデミーシベリア支部動物分類学生態学研究所の Yurlova Natalya 主任研究員たちと日本側メンバーとして鹿野秀一ほか、滋賀県立大学浦部美佐子教授、国立環境研究所金谷弦研究員と継続している。寄生者の吸虫類は、中間宿主の巻き貝から水中へ多数のセルカリア幼虫を放出し、それらが他の捕食者の餌となることから、セルカリア幼虫は水界の食物網において量的に重要であることが報告されている。そこで水中へ放出されたセルカリア幼虫が同所的に生息する水生動物にどのくらい摂食されるか、西シベリアのチャニー湖河口域において採集した吸虫を用いて室内実験を行ってきた。今年度はこれらの実験結果から3種の吸虫のセルカリア幼虫 (*Echinoparyphium aconiatum*, *Plagiorchis multiglandularis*, *P. elegans*) が6種類の水生動物(ミジンコ類、カメムシ類、等脚類、ヨコエビ類、カゲロウ類幼虫、イトトンボ類幼虫) に摂食されるか、また摂食される場合の消費速度について解析した。ヨコエビ類はどの種のセルカリア幼虫も速い速度で摂食できた。また、吸虫の種によって摂食できる水生動物が異なったが、多くの種類の水生動物がセルカリア幼虫の捕食者となる可能性がみられた。一方、*Plagiorchis* 属のセルカリア幼虫はこれらの動物の餌となるだけでなく、いくつかの動物を中間宿主として感染でき、被食者と寄生者の役割を持っていた。これらの結果から寄生者の自由生活ステージ(セルカリア幼虫など)は食物網内において動物の餌資源として食物網内にリンクを持っていることが推定でき、これらの成果の一部は、2018年9月にイルクーツクで開催された国際会議「Freshwater Ecosystems – Key Problems」において「Trematode parasite larvae as a potential food source for aquatic animals in an estuarine ecosystem」のタイトルで口頭発表を行った。

宮城県北部平地に位置する伊豆沼は、ハス群落の面積が2007-2008年では湖面の約40%だったが、近年は80%以上を占めるよう拡大し、夏季にはハス群落内での湖水の溶存酸素濃度の低下が観測されている。一方、伊豆沼では夏季に堆積物中で生成したメタンがメタン酸化細菌に消費され、そのメタン酸化細菌を底生生物のユスリカが消費するメタン系経路が炭素循環において重要であることが、

安定同位体比の分析によって明らかになっていた。ハス群落が湖面の40%程度の時期では、このメタンを介した経路は8月から9月にピークがみられた。しかし、近年ハス群落が湖面をおおく覆うようになると、8月から9月では湖水が低酸素状態でメタン酸化が活発にならず、溶存酸素濃度が回復する10月から11月にメタン系経路が活性化するように時期がシフトしていることが明らかになった。このように水生植物の生育状態はメタン系経路の活性化する時期にも影響を与えることが示唆された。この成果は、*Hydrobiologia* (822:69-84, 2018) に掲載された。

辻森 樹 TSUJIMORI Tatsuki 教授

生年月日 / 1972年02月23日

東北アジア研究センター基礎研究部門地球化学研究分野

連絡先

Tel : 022-795-3614

出身学校

島根大学・理学部・地質学科 1994年卒業

出身大学院

金沢大学・理学研究科・地学専攻 修士課程 1996年修了

金沢大学・自然科学研究科・物質科学専攻 博士課程 1999年修了

取得学位

博士(理学) 金沢大学 1999年

略歴

1999年～2000年 金沢大学大学院理学研究科 特別研究員 (PD)

2000年～2001年 岡山理科大学自然科学研究所 研究員 (株式会社蒜山地質年代学研究所研究員)

2001年～2004年 岡山理科大学自然科学研究所 特別研究員 (PD)

2002年～2003年 スタンフォード大学地質学環境学科 客員研究員

2004年～2006年 スタンフォード大学地質学環境学科 客員研究員 / 海外特別研究員

2006年～2006年 金沢大学ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー 講師 (非常勤機関研究員)

2006年～2008年 岡山大学地球物質科学研究センター 助手 / 助教 (職制変更による)

2009年～2015年 岡山大学地球物質科学研究センター 准教授

所属学会

日本地質学会, 日本鉱物科学会, 日本地球惑星連合, アメリカ地質学会, アメリカ鉱物学会, アメリカ地球物理連合, 東アジア考古学会

学会活動

日本地質学会 執行理事 2016年～現在

専門分野

地質学, 岩石・鉱物・鉱床学

研究キーワード

固体地球科学, 地質学, 岩石学, 地球化学

学外の社会活動 (2018年4月～2019年3月)

一般普及講演 (主催: 一般社団法人 日本鉱物科学会) (講演会・セミナー) 2018年9月～2018年9月

外部機関における活動 (2018年4月～2019年3月)

Journal of Metamorphic Geology (John Wiley & Sons) Editorial Review Board Member 2012年01月～現在

International Geology Review (Taylor & Francis) Editorial Board Member 2013年01月～現在

Geologica Acta 誌 (Biblioteca de Geologia: UB-CSIC) Managing Scientific Editor 2013年01月～現在

Associated Editor Island Arc (John Wiley & Sons) 2016年01月～現在

Russian Geology and Geophysics (Elsevier) Editorial Board Member 2018年07月～現在

PLOS ONE (Public Library of Science) Academic Editor 2018年08月～現在

学位授与数 (2018年4月～2019年3月)

博士 0人

修士 0人

学士 0人

法務博士 (専門職) 0人

修士 (専門職) 0人

短期大学士 0人

準学士 0人

専門士 0人

論文博士 1人

国際会議 発表・講演 (2018年4月～2019年3月)

Jadeite ('jadeite jade') in Japan: An overview [International Conference of the Society for East Asian Archaeology]

(2018年6月9日～2018年6月9日) 口頭 (一般)

In-situ boron isotope geochemistry of forearc serpentinites in the California Coast Ranges [XXII Meeting of the International Mineralogical Association (IMA2018)]

(2018年8月13日～2018年8月13日, Melbourne (Australia)) 口頭 (基調)

国内会議 発表・講演 (2018年4月～2019年3月)

Nature of slab-derived fluids in Pacific-type subduction zone: Oxygen and hydrogen isotope studies of phengites from Renge and Sambagawa metasedimentary rocks, Japan [日本地球惑星科学連合 2018年大会]

(2018年5月24日～2018年5月24日, 千葉) ポスター (一般)

大佐山ひすい輝石岩の熱水性ジルコンのリチウム濃度累帯構造: 沈み込み帯流体の実像を探る [日本鉱物科学会 2018年年会]

(2018年9月～2018年9月, 山形) 口頭 (一般)

大佐山産ひすい輝石岩中のジルコン Hf 同位体比に記憶されたプロトジャパン像 [日本地質学会第

125年学術大会]

(2018年9月～2018年9月, 札幌) 口頭(一般)

プレート境界岩の未読情報総合解析：プロセスと経年変化の理解に向けて [日本地質学会第125年学術大会]

(2018年9月～2018年9月, 札幌) 口頭(招待・特別)

学術受賞(2018年4月～2019年3月)

Publons Peer Review Awards 2018 2018年

[Publons]

科学研究費補助金獲得実績(文科省・学振)(2018年4月～2019年3月)

特別研究員奨励費 2016年10月～2019年3月

[超海洋パンサラッサー古テチス海インタフェイスのテクトニクス復元]

基盤研究(B) 2018年4月～2021年3月

[プレート境界岩の未読情報総合解析：局所同位体比分析によるプロセスと経年変化の理解]

研究論文(2018年4月～2019年3月)

- 1) In-situ lithium isotope geochemistry for a veined jadeitite from the New Idria serpentinite body, California: Constraints on slab-derived fluid and fluid-rock interaction. [Lithos, 318-319, (2018), 376-385] (査読あり)
Takahashi N., Tsujimori T., Chang Q., Kimura J.-I.
- 2) In-situ Sr-Pb isotope geochemistry of lawsonite: A new method to investigate slab-fluids. [Lithos, 320-321, (2018), 93-104] (査読あり)
Hara T., Tsujimori T., Chang Q., Kimura J.-I.
- 3) Finding of talc- and kyanite-bearing amphibolite from the Paleoproterozoic Usagaran Belt, Tanzania. [Journal of Mineralogical and Petrological Sciences, 113 (6), (2018), 316-321] (査読あり)
Mori K., Tsujimori T., Boniface N.
- 4) Retrograde pumpellyite in the Yunotani garnet blueschist of the Omi area, Japan: An update on the cooling path. [Journal of Mineralogical and Petrological Sciences, 114 (1), (2019), 26-32] (査読あり)
Shinji Y., Tsujimori T.
- 5) Boron isotope variations of Franciscan serpentinites, northern California. [Lithos, 334-335, (2019), 180-189] (査読あり)
Yamada C., Tsujimori T., Chang Q., Kimura J.-I.

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

2015年9月の着任後、本学で3年半(2015年度後半、2016年度、2017年度、2018年度)わたって教育・研究に従事し、明確なアウトカムを創出してきた。2018年度は、2016年度及び2017年度の卒業研究を5編の国際共著論文として発表した他、国際学会で招待基調講演と招待講演をそれぞれ1件、行った。公表論文の被引用回数は安定して伸び、Scopusで2,300回を越えた他、

GoogleScholar で3,000回を越えた。また、研究に関して、Publons からピア・レビュー（査読）の表彰を3年連続で受賞した。トランスディシプリンの超学際的な研究成果として、本学「知のフォーラム」のワークショップを成功させた他、デンマーク国立博物館の考古学分野の研究者を代表として共同でデンマーク科学高等教育庁の国際共同研究ネットワーク構築支援プログラムに申請したプロポーザルが新規に採択された。

平野 直人 HIRANO Naoto 准教授

生年月日／1973年08月28日

東北アジア研究センター基礎研究部門地球化学研究分野

連絡先

Tel : 022-795-3618 Fax : 022-795-3618 E-Mail : nhirano@cneas.tohoku.ac.jp

出身学校

山形大学・理学部・地球科学科 1996年卒業

出身大学院

筑波大学・地球科学研究科・地質学専攻 博士課程 2001年修了

取得学位

博士(理学) 筑波大学 2001年

略歴

2001年～2002年 東京大学海洋研究所 研究員
 2002年～2004年 東京大学地震研究所 研究員
 2002年～2004年 東京工業大学理学部 研究員
 2004年～2006年 東京工業大学大学院理工学研究科 研究員
 2006年～2007年 カリフォルニア大学サンディエゴ校スクリプス海洋研究所 研究員
 2007年～2008年 東京大学理学部地殻化学実験施設 研究員
 2008年～2008年 金沢大学フロンティアサイエンス機構 研究員
 2008年～2013年 東北大学東北アジア研究センター 助教

研究経歴

1995年～2002年 マリアナ海溝に沈み込む海山の年代層序
 1996年～2003年 房総半島南部嶺岡帯の玄武岩類による第三紀プレート配置の復元
 2000年～2011年 環伊豆衝突帯のオフィオライト岩類によるプレート配置の復元
 2001年～現在 新種の火山・プチスポットの成因
 2002年～現在 西太平洋プレート上の海山群の年代学
 2010年～現在 南鳥島の形成史
 2012年～現在 プチスポット火山の二酸化炭素放出量
 2013年～現在 根室帯に貫入するアルカリマグマの成因
 2015年～現在 海洋プレート下のアセノスフェアの化学組成
 2015年～現在 北海道付加体に取り込まれたアルカリ玄武岩の成因

所属学会

日本地質学会, 日本鉱物科学会, 日本地球化学会, American Geophysical Union, 日本地球惑星科学連合

学会活動

日本地球化学会 評議員 2010年～2011年
日本地球化学会 広報委員 2012年～2013年
日本地球化学会 広報委員 2014年～現在
日本地質学会 代議員(地方支部区) 2014年～現在

専門分野

地質学, 地球宇宙化学, 岩石・鉱物・鉱床学, 固体地球惑星物理学

研究課題

- 太平洋プレート上の新種の火山・プチスポット海底火山
- 新種の火山から放出される地球の炭素循環
- 沈み込むプレートの変形と火山発生
- 根室帯白亜紀前弧火成活動の成因解明

学外の社会活動(2018年4月～2019年3月)

伊達市噴火湾文化研究所東北大学東北アジア研究センター第9回学術連携交流講演会(講演会・セミナー) 2018年10月～2018年10月

担当授業科目(2018年4月～2019年3月)

(学部教育)

野外調査演習 2009年～現在
野外調査演習 2010年～現在

国際会議 発表・講演(2018年4月～2019年3月)

Tectonic reconstructions and origin of Cretaceous greenstones, Tokoro Belt, NE-most of Japan[JpGU 2018]

(2018年5月20日～2018年5月20日, 日本国, Chiba) ポスター (一般)

H₂O/F ratios in asthenosphere inferred from volatile compositions of petit-spot lavas[JpGU 2018]

(2018年5月21日～2018年5月21日, 日本国, Chiba) 口頭 (一般)

Submarine Petit-Spot Volcanoes Induced by the Plate Flexure Prior to Subduction[Submarine Volcanoes: Windows into Earth's Dynamic Interior]

(2018年11月3日～2018年11月4日, 日本国, Tokyo) 口頭 (招待・特別)

A broad distribution of accreted intraplate volcanic edifice in the Late Cretaceous Tokoro greenstone belt, NE-most of Japan[AGU Fall Meeting 2018]

(2018年12月10日～2018年12月14日, アメリカ合衆国, Washington D.C.) ポスター (一般)

Directly ascending asthenospheric melt erupted atop outer rise: the preliminary report of cruise KS-

18-09, R/V Shinsei[AGU Fall Meeting 2018]

(2018年12月10日～2018年12月14日, アメリカ合衆国, Washington D.C.) ポスター (一般)
Volatile composition of asthenosphere below NW Pacific lithosphere revealed by petit-spot basalt[AGU Fall Meeting 2018]

(2018年12月10日～2018年12月14日, アメリカ合衆国, Washington D.C.) 口頭 (一般)

国内会議 発表・講演 (2018年4月～2019年3月)

Sr isotope ratios identify origins of detrital materials in ferromanganese crusts: implication for tectonic and climatic impacts to submarine environment [日本地球惑星科学連合2018年大会]

(2018年5月23日～2018年5月23日, 千葉) 口頭 (一般)

Missing carbonate and petit-spot silicate liquid immiscibility [日本地球惑星科学連合2018年大会]

(2018年5月23日～2018年5月23日, 千葉) 口頭 (一般)

アセノスフェアから速やかに上昇したプチスポット「直プチ」調査 [ブルーアース・サイエンス・テク 2019]

(2019年2月20日～2019年2月20日, 東京) ポスター (一般)

プチスポット玄武岩が示す北西太平洋アセノスフェアの揮発成分組成 [ブルーアース・サイエンス・テク 2019]

(2019年2月21日～2019年2月21日, 東京) ポスター (一般)

科学研究費補助金獲得実績 (文科省・学振) (2018年4月～2019年3月)

基盤研究 (C) 2017年4月～2020年3月

[海底岩石から直接読み解く沈み込むプレートの変動履歴]

その他の競争資金獲得実績 (2018年4月～2019年3月)

山田科学振興財団研究援助 2017年10月～2019年3月

[新型火成活動「前弧アルカリマグマ」の成因と古地理の解明]

研究論文 (2018年4月～2019年3月)

1) Direct ascent to the surface of asthenospheric magma in a region of convex lithospheric flexure. [International Geology Review, 60 (10), (2018), 1231-1243] (査読あり)

Yuki Sato, Naoto Hirano, Shiki Machida, Junji Yamamoto, Masao Nakanishi, Teruaki Ishii, Arashi Taki, Kazutaka Yasukawa, Yasuhiro Kato

2) Rare earth elements and yttrium (REY) variability with water depth in hydrogenetic ferromanganese crusts. [Chemical Geology, 493, (2018), 224-233]

K. Azami, K. Azami, N. Hirano, N. Hirano, S. Machida, S. Machida, K. Yasukawa, K. Yasukawa, Y. Kato, Y. Kato, Y. Kato

総説・解説記事 (2018年4月～2019年3月)

1) 沈み込む太平洋プレートの実態解明に向けて. [The Newsletter CNEAS, (77), (2018), 8-8]
平野直人

2) Rare earth elements and yttrium (REY) variability with water depth in hydrogenetic

ferromanganese crusts. [Chemical Geology, 493, (2018), 224-233]

K. Azami, K. Azami, N. Hirano, N. Hirano, S. Machida, S. Machida, K. Yasukawa, K. Yasukawa, Y. Kato, Y. Kato, Y. Kato

- 3) 「深海底へのサンプルリターン」—現在と過去の太平洋深海底へ—。[Newsletter 噴火湾文化, (13), (2019), 3-4]

平野直人

- 4) 伊達市噴火湾文化研究所・東北大学東北アジア研究センター 第9回学術交流連携講演会。[(80), (2019), 2-2]

平野直人

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

沈み込むプレートの構造や変動過程は、これまで調査船による海底音響測深を用いた海底地形観測 (e.g. Fujiwara et al., 2011) や、地震波による海底下の構造探査 (e.g. Kodaira et al., 2014) により議論されてきた。また、沈み込むプレート自身に引っ張られて発生する正断層群による地形であり、海溝海側斜面に特徴的な構造であるホルストアンドグラデーベン構造から海水が地下に浸透し、沈み込むプレートの性質を変えてしまっている可能性を示す観測事実も示された (Fujie et al. 2018)。一方で、沈み込むプレート自身の構造や構成岩石が分かっておらず、プチスポット火山の発見 (Hirano et al., 2006) も含め、沈み込むプレートそのものの概念が変わる可能性があり、本研究課題はその岩石そのものを採取し、沈み込むプレートの組成変化や構成岩石の情報を確立していく必要がある。本研究では、沈み込むプレート上で活動するプチスポット火山とそれに関連するプレートの構造について、海底調査を行った。8月に行った東北海洋生態系調査研究船「新青丸」KS-18-9航海では、プチスポット火山の中でも特異な岩石種、化学組成 (低 Si、高 Na、高 CO₂ など) を示す火山噴出物の岩石試料採取を集中的に行った。これら構成鉱物や斑晶鉱物量の解析から、マグマが上昇する間の交代作用 (リソスフェアとの化学組成の同化) が少なく、マグマ源のアセノスフェアの物質そのものに近い成分である事が確認されている (Pilet et al., 2016; Sato et al., 2018)。溶岩は海水起源の鉄マンガンクラストを被覆しておらず、噴出が極めて若いと判断できる結果が得られた。これら岩石についての共同研究をドイツ・バイエルン地球科学研究所、シンガポール・ナンヤン理工大学とともに進めた。

本年度8月に行った調査航海では、沈み込む太平洋プレート上でごく最近活動した海底噴出岩石を得ることができ、研究成果は次ぎに示すとおり学術論文が International Geological Review に掲載された (Sato, Hirano et al., 2018)。また、沈み込むプレートの構成岩石としてプチスポット火山を被覆する鉄マンガンクラストの詳細な化学組成が判明し、水深5000メートルを超える深海底特有の希土類元素組成が Chemical Geology から報告された (Azami, Hirano et al., 2018)。これら溶岩の、H₂O・CO₂・ハロゲン元素の各揮発成分組成についての報告を American Geophysical Union 2018 Fall Meeting において2件 (Hirano et al., 2018; Katsuragi, Hirano et al., 2018)、Japan Geoscience Union 2018 Meeting において1件 (Katsuragi, Hirano et al., 2018) それぞれ発表した。更に、11月に行われた国立科学博物館国際シンポジウム“Submarine Volcanoes: Windows into Earth's Dynamic Interior”では、世界に分布する様々な海底火山のひとつとしてプチスポット火山に関する招待講演を行った (Hirano, 2018: “Submarine Petit-Spot Volcanoes Induced by the Plate Flexure Prior to Subduction”)。

北海道東部における未解明地質解明プロジェクトについても進展が得られた。千島列島から知床～大雪山にかけて太平洋プレート沈み込みに伴う火山弧が発達する。プレート沈み込み帯の海溝での巨大地震や火山弧の形成は、日本列島の発達過程における典型例として位置づけられるが、その火山弧

と海溝の間の冷たい領域「前弧」である根室半島・浜中町から北方領土の歯舞群島・色丹島にかけて、なぜかマグマ活動が確認される。火山弧と海溝の間の冷たい領域にはマグマが存在し得ない場所と考えられ、このような事例は世界に類を見ない。また、この地質が原因で本地域は極めて希有な自然環境と生態を持ち合わせた独特のシステムも存在する。この未解明の地質の成因解明を進めている。年度得られた岩石試料や地質情報を元にした、化学分析や現地露頭情報を元に地質図を作成を進め、岩石の解析からは、本地域の地質基盤が形成された原因として、現在とは異なる特殊な環境で形成されることが判明した。本研究に関して Japan Geoscience Union および American Geophysical Union 国際学会における発表 2 件 (Sakai, Hirano et al., 2018) 行い、国際誌の学術論文投稿準備 (および投稿中) を進めている。

後藤 章夫 GOTO Akio 助教

生年月日／ 1966年06月15日

東北アジア研究センター基礎研究部門地球化学研究分野

出身学校

北海道大学・理学部・地球物理 1990年卒業

出身大学院

北海道大学・理学研究科・地球物理学 博士課程 1997年修了

取得学位

博士(理学) 北海道大学 1997年

略歴

1998年～ 1999年 財団法人 地震予知総合研究振興会 研究員

1999年～ 現在 東北大学東北アジア研究センター 助教

研究経歴

1990年～ 現在 マグマレオロジーの実験的研究

1999年～ 現在 火山爆発

2012年～ 現在 蔵王火山表面活動調査

所属学会

日本火山学会, 日本鉱物科学会, 日本地球惑星科学連合

専門分野

火山学

研究課題

- マグマのレオロジー
- 火山爆発
- 蔵王火山表面活動調査

研究キーワード

マグマ, レオロジー, 火山, 爆発

担当授業科目 (2018年 4月～ 2019年 3月)

(全学教育)

自然科学総合実験 2004年～現在

(学部教育)

夏期フィールドセミナー 1999年～現在
 地球惑星物質科学実習Ⅳ 2007年～現在
 野外調査演習 2012年～現在
 フィールドセミナーⅠ 2012年～現在

(その他)

Dynamics of the Earth 2013年～現在

国内会議 発表・講演 (2018年4月～2019年3月)

伊豆大島溶岩のレオロジー特性と内部組織 [日本火山学会秋季大会]
 (2018年9月26日～2018年9月28日, 秋田) 口頭(一般)
 第17回同位体科学研究会
 (2019年3月8日～2019年3月8日, 八王子) 口頭(一般)

その他の競争資金獲得実績 (2018年4月～2019年3月)

共同研究費 2018年4月～2019年3月
 [玄武岩質溶岩流の流動・変形特性の比較研究]

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

1. 蔵王火山調査

蔵王火山が2011年の東北地方太平洋沖地震で活発化する可能性を考え、データが遠隔取得できない表面現象の変化を捉えるため、2012年から継続している現地調査を2018年度も実施した。2018年1月に大きな火山性微動と継続的な傾斜変動により、2015年以来となる二度目の火口周辺警報が出され、活動度の変化が注目された。

2018年度は山頂火口湖の御釜に5回、最新の噴火が1940年に起こったとされる丸山沢噴気地熱地帯に5回足を運んだ。丸山沢噴気地熱地帯の噴気温度には上昇が見られ、7月には2012年の調査開始以来最高となる104.2℃が記録された。2015年の火口周辺警報が出たあとも噴気温度の上昇が見られており、地下の活動度上昇が地表まで及んでいることが示唆された。一方で、1939年と1966年の活発化に際して高温・高濃度の温泉湧出があった、御釜東方1.6kmの振子沢と濁川の合流付近(新関温泉)では、火口周辺警報が出された2015年に30℃を越える温泉の湧出が再開したが、2016年には湧出量の激減と温度の低下が起り、2018年には採水できないほどに活動が衰えていた。2018年1月の活発化の影響はここには現れていないと判断された。

御釜には7月に、2017年に続き2本目となる温度計を設置した。2017年に設置した温度計には、2017年の9月末から10月初めに一週間ほどかけて3℃ほどの温度上昇が記録されていたが、同様の変化が2018年の同時期に起こっていることが11月に回収したデータで明らかになった。二本の温度計で測定されたことからこの変化は間違いなく起こっていたと確認されたが、前年との類似性から、火山活動ではなく季節変動による温度変化と考えられる。現状で、御釜には熱活動はないと判断された。

一方で、京都大学と山形大学の共同調査により、御釜の湖底に小さな丘状の地形が発見された。我々の過去の調査データを見直したところ、同じ地形が確認されるとともに、それが柔らかい物質でできていることが推定された。周囲から転がり込んだ岩ではないと考えられることから、熱水噴出などで

できた堆積地形の可能性がある。現在の御釜で熱活動は確認されていないので、この地形の成因を明らかにするのは重要である。水中ドローンを用いた湖底の調査を行いたい。

2. 玄武岩質溶岩のレオロジー特性

2016, 2017年度の東京大学地震研究所との共同研究で、伊豆大島の年代や産状の異なる溶岩の粘性係数を一軸圧縮により測定したところ、いずれの溶岩もほぼ固体と見なせるほど流動性の乏しい状態から、数度の温度上昇で急激に変形が進む現象が観察された。実験後の試料はひび割れ、表面は外に押し出されるようにめくれ上がるなど、流動ではなく脆性破壊で変形したと推定される構造が見られた。このような変形特性の原因と、それがほかの玄武岩質溶岩にも共通なのかを明らかにするために、2018年度の共同研究で三宅島1983年溶岩、富士剣丸尾第一及び第二溶岩の粘性係数測定を行った。また、伊豆大島溶岩の実験後の試料と、実験と同じ温度まで加熱した試料を電子顕微鏡で組織観察し、実験中に液体だった部分の化学組成からその粘性係数を推定し、観測から得られた値と比較した。

粘性係数測定では、三宅島1983年溶岩、富士剣丸尾第一及び第二溶岩も伊豆大島溶岩同様に温度上昇による急変形が起り、脆性破壊的な構造も見られた。表面が酸化により硬化した可能性を考え還元雰囲気中での実験も行ったが、急変形が起こる温度が15℃ほど下がったものの、一部の伊豆大島試料を除いて表面の脆性破壊的な構造に違いは見られなかった。表面酸化の影響は本質的ではなく、脆性破壊的な変形は用いた玄武岩質溶岩に共通した特徴であることが確かめられた。

一連の実験では、加える圧縮力が大きいほど低い温度で脆性破壊的な急変形が起こった。このことは結晶が少ないほど弱い力で脆性破壊が起こることを意味するが、Cordonnier et al. (2012) は結晶が多いほど液体部分に変形が集中し、より脆性破壊が起こりやすくなるという逆の実験結果を報告している。我々が観察した破壊は、従来報告されているのとは別の変形モードで起こっていることが考えられる。

伊豆大島の1950-1951年噴火で観測から推定された溶岩流の粘性係数には、1950年はわずか15℃で2桁以上の変化がある、1950年の1048℃のほうが1951年の1038℃より2桁以上高粘性であるなど(村内, 1950; Minakami, 1951), 不可解な点があった。実験試料の液体部分の粘性係数は、温度上昇に対して一旦下がったあと、1070℃から1090℃にかけて上昇し、その後また低下することが化学組成から推定された。これが観測された粘性逆転の一因かもしれない。一方で、水による粘性低下を考慮しても、溶岩流中の液体部分の粘性係数は観測された値と同程度かやや高い。さらに結晶による溶岩流全体の粘性増加を考えると、観測された粘性係数は低すぎる。脆性破壊が起こったあとの動きやすい状態での前進が、観測された低い見かけ粘性の原因と考えられる。

工藤 純一 KUDOH Jun-ichi 教授

生年月日／1955年12月28日

東北アジア研究センター基礎研究部門環境情報科学研究分野

連絡先

Tel : 022-795-6084 Fax : 022-795-6084 E-Mail : kudoh@tohoku.ac.jp

出身学校

秋田大学・鉱山学部・金属材料 1980年卒業

出身大学院

東北大学・工学研究科・金属工学 博士課程 1987年修了

取得学位

工学修士 秋田大学 1982年

工学博士 東北大学 1987年

略歴

1986年～1987年 東北大学選鉱製錬研究所 助手

1991年～1996年 東北大学大型計算機センター 助手

1996年～2001年 東北大学大型計算機センター 助教授

2001年～現在 東北大学東北アジア研究センター 教授

所属学会

電子情報通信学会, 情報処理学会, IEEE, 画像電子学会

学会活動

IGARSS 論文査読員 2000年～現在

IEEE TGARS 論文誌査読員 委員 2004年～現在

専門分野

環境動態解析

研究課題

- シベリア画像データベースシステムの構築
- 東北アジア地域の植生解析
- シベリア森林火災検出システムの構築
- リアルタイムシベリア環境モニタリングシステム
- 1メートル級衛星画像の融合処理

- 衛星画像による越境大気汚染・黄砂の可視化
- 衛星画像を用いた黄砂の抽出
- 大規模森林火災の管理による二酸化炭素削減構想
- 越境大気汚染衛星画像データベース構築

研究キーワード

画像融合処理、大気汚染可視化、森林火災、CO2 削減、リモートセンシング

報道 (2018年 4月～ 2019年 3月)

フジTV プライムニュースイブニング「東京都心も初の夏日か“汚染物質”も迫る！」(資料提供 テレビフジテレビ) 2018年 4月

学内活動 (2018年 4月～ 2019年 3月)

学友会茶道部部长 2003年 4月～現在
評価分析室員 2004年 4月～現在

担当授業科目 (2018年 4月～ 2019年 3月)

(大学院教育)

画像理解学 2001年～現在
情報基礎科学ゼミナール 2001年～現在
情報基礎科学研修A 2001年～現在
情報基礎科学B 2001年～現在
博士基盤研修 2001年～現在
博士専門研修A 2001年～現在
博士専門研修B 2001年～現在
博士ゼミナール 2001年～現在
広域情報処理論 2013年～現在

その他研究活動 (2018年 4月～ 2019年 3月)

森林火災の管理による CO2排出量取引構想(フィールドワーク) 2009年～現在

科学研究費補助金獲得実績(文科省・学振) (2018年 4月～ 2019年 3月)

研究成果公開促進費・データベース 2018年 4月～ 2019年 3月
[越境大気汚染衛星画像データベース]

研究論文 (2018年 4月～ 2019年 3月)

- 1) Development of a new dust index NDLI for Asian dust extraction system based on Aqua MODIS data and monitoring of trans-boundary Asian dust events in Japan. [International Journal of Remote Sensing, 40 (3), (2019), 1030-1047] (査読あり)
Kalpoma Kazi A, Izumi Nagatani, Koichi Kawano & Jun-Ichi Kudoh

- 2) Kalpoma Kazi A, Izumi Nagatani, Koichi Kawano, Jun-Ichi Kudoh,
Development of a new dust index NDLI for Asian dust extraction system based on Aqua MODIS data and monitoring of trans-boundary Asian dust events in Japan, International Journal of Remote Sensing, Volume 40, Issue 3, 1030-1047, 2019. (査読あり)

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

大規模森林火災の管理による二酸化炭素削減構想は、モスクワ大学とロシア科学アカデミー森林生態生産研究センター(旧国際森林研究所)と Research on CO₂ Reduction System by the Huge Forest Fires Control for Global Warming Problem を国際共同研究として実施中である。特筆事項として、FAO(国際連合食糧農業機関)林業局森林火災管理減災部ピータームーア氏に研究進捗の評価を承諾して頂いた。最近の報告では、世界中で行っている省エネにもかかわらず地球温暖化の原因とされる二酸化炭素は増加しているため、森林火災から排出する二酸化炭素の削減が注目され始めた。

現在公開中の越境大気汚染衛星画像データベース (<https://tapsidb.cneas.tohoku.ac.jp/public/>) は、2018年度の登録利用者数が2,800名を越え、約27万 Hits、ならびに、約57GBytes のデータがダウンロードされた(Webalizer ver.2.33)。特筆事項として、2019年2月末に北海道でPM2.5が急上昇し、空は霞がかかったような状態になった。この時点で、札幌管区気象台は原因が分からず、PM2.5を予測するスプリンターズからも分からない状況が続いていた。実は、2019年2月中旬から中国北東部及びロシアアムール川沿いで草原火災や森林火災が散発的に発生していた。さらに、火災からの煙は日本海を越え本州に到達していたことが本画像データベースから分かっていた。特に、2月21日は大きな煙の一団が日本海に達し、22日に北海道を通過したことを確認していた。この状況は3月上旬まで続いた。

この情報と衛星画像は、北海道文化放送を通じて全道に配信され注目を集めた。さらに、フジテレビめざましテレビ、CBC テレビゴゴスマを通じて全国にも配信された。

なお、本画像データベースは昨年に続き平成31年度科研費研究成果公開促進費(データベース)に採択された。

佐藤 源之 SATO Motoyuki 教授

生年月日 / 1957年12月15日

東北アジア研究センター基礎研究部門資源環境科学研究分野

連絡先

Tel : 022-795-6075 Fax : 022-795-6075 E-Mail : sato@cneas.tohoku.ac.jp

出身学校

東北大学・工学部・通信工学 1980年卒業

出身大学院

東北大学・工学系研究科・情報工学専攻 博士課程 1985年修了

取得学位

工学博士 東北大学 1985年

略歴

1985年～1989年 東北大学 助手(工学部)
1988年～1989年 ドイツ連邦国立地球科学資源研究所
1989年～1990年 東北大学 講師(工学部)
1990年～1997年 東北大学 助教授(工学部)
1997年～現在 東北大学 教授(東北アジア研究センター)
2008年～2011年 東北大学 ディスティンクイッシュト・プロフェッサー
2009年～2013年 東北大学 東北アジア研究センター センター長

研究経歴

1985年～1990年 地熱開発のための地下計測技術
1990年～現在 地中レーダ(GPR)の開発
1997年～現在 合成開口レーダ(SAR)の応用
2000年～現在 地表設置型レーダ(GB-SAR)による防災・減災技術
2002年～現在 人道的対人地雷検知除去技術に関する研究と現場応用
2005年～現在 バイスタティックレーダに関する研究
2008年～現在 3DGPR(3次元地中レーダシステム)を用いた遺跡調査
2012年～現在 アレイ型GPRによる震災復興のための社会貢献

所属学会

電子情報通信学会, The Institute of Electrical and Electronics Engineers (IEEE), 物理探査学会, 日本地熱学会, 資源・素材学会, Society of Exploration Geophysicists(SEG), European Association of Geoscientists & Engineers(EAGE), Applied Computational Electromagnetic Society, 日本文化財探査学会, 石油検層学会 (SPWLA)

学会活動

物理探査学会 理事 2003年～2014年
 石油検層学会 (SPWLA) 理事 (日本支部) 2003年～現在
 IEEE Geoscience and Remote Sensing Society 東京支部 支部長 2006年～2007年
 IEEE Geoscience and Remote Sensing Society AdCom member 2006年～2014年
 電子情報通信学会 電磁界理論研究会 副委員長 2013年～2015年
 IEEE Sendai Chapter 副会長 2014年～2016年
 電子情報通信学会 電磁界理論研究専門委員会 委員長 2015年～2017年

専門分野

電磁波応用計測, リモートセンシング, 地下計測工学

研究課題

- ボアホールレーダ
- 地中レーダ
- リモートセンシング
- 人道的地雷検知除去
- 合成開口レーダ
- 地上設置型合成開口レーダ (GB-SAR)
- 環境計測と防災・減災技術

研究キーワード

地中レーダ, 地下計測, リモートセンシング, 人道的地雷検知

学外の社会活動 (2018年4月～2019年3月)

金属鉱業事業団 鉱物資源探査に係る研究会委員 (その他) 1995年2月～現在
 電子情報通信学会電磁界理論研究会専門委員 (その他) 1996年10月～現在
 Editorial Board, The International Journal of Subsurface Sensors and Applications (その他) 1999年7月～現在
 物理探査学会 (その他) 2004年5月～現在
 出前授業 (小中高との連携) 2008年12月～現在
 佐藤屋プロジェクト (大河原町) (その他) 2012年4月～現在
 夢ナビライブ (公開講座) 2012年7月～現在
 警察大学校災害警備専科講義 (講演会・セミナー) 2017年6月～現在

行政機関・企業・NPO等参加 (2018年4月～2019年3月)

(独) 石油天然ガス・金属鉱物資源機構 (その他) 金属資源探査技術開発研究会 委員 2005年4月～現在
 環境省 (国) 国内における毒ガス弾等に関する総合調査検討会 委員 2006年5月～現在
 (財) 原子力環境整備促進・資金管理センター (その他) 地層処分モニタリングシステム検討委員会 委員 2006年6月～現在

学内活動(2018年4月～2019年3月)

校友会陸上競技部部长 2004年4月～現在

学位授与数(2018年4月～2019年3月)

博士 2人

修士 1人

学士 0人

法務博士(専門職) 0人

修士(専門職) 0人

短期大学士 0人

準学士 0人

専門士 0人

論文博士 0人

担当授業科目(2018年4月～2019年3月)

(学部教育)

電磁気学Ⅰ 1991年～現在

機械知能・航空研修Ⅰ 2004年～現在

機械知能・航空研修Ⅱ 2004年～現在

卒業研究 2004年～現在

電磁気学Ⅱ 2005年～現在

エネルギー環境コース入門 2015年～現在

(大学院教育)

環境リモートセンシング学 2002年～現在

地球環境計測学特論 2003年～現在

地球システム・エネルギー学修士セミナー 2003年～現在

地球システム・エネルギー学修士研修 2003年～現在

修士インターンシップ 2003年～現在

地球システム・エネルギー学概論 2003年～現在

博士インターンシップ研修 2003年～現在

地球システム・エネルギー学博士セミナー 2003年～現在

地球システム・エネルギー学博士研修 2003年～現在

GRSS レーダー夏の学校 2016年～現在

(その他)

物理探査学会ワンデーセミナー「地中レーダ」 2006年～現在

GRSS SAR 夏の学校 2018年～2018年

国際会議 発表・講演(2018年4月～2019年3月)

GPR applied to Humanitarian Demining and UXO clearance[IET International Radar Conference 2018]

(2018年10月17日～2018年10月17日,, 南京)口頭(基調)

国内会議 発表・講演 (2018年4月～2019年3月)

- 近距離レーダとその応用 ―地球環境、防災、遺跡、地雷― [第77回 情報通信研究会]
 (2018年10月4日～2018年10月4日, 東京) 口頭 (招待・特別)
- 科学技術と震災復興、地域振興をめざして [仙南サミット]
 (2019年1月30日～2019年1月30日) 口頭 (招待・特別)

学術受賞 (2018年4月～2019年3月)

- フェロー会員 2019年
 [電子情報通信学会]

特許 (2018年4月～2019年3月)

- (公開中)
 合成開口処理を伴うセンサ
 2013年7月19日出願 (2013-150994) 2018年4月18日公開 (2013-150994)

その他研究活動 (2018年4月～2019年3月)

- 地中レーダによるウランバートルの地下水計測 (フィールドワーク) 1990年～現在
 東北アジアにおける電磁波地下計測 (フィールドワーク) 1997年～現在
 カンボジアにおける地雷除去活動 (フィールドワーク) 2009年～現在
 GB-SAR による宮城県栗原市地滑りモニタリング (フィールドワーク) 2011年～現在
 アレイ型地中レーダ「やくも」による津波被災者搜索活動 (フィールドワーク) 2014年～現在
 南阿蘇村 GB-SAR による地滑りモニタリング (フィールドワーク) 2017年～現在

科学研究費補助金獲得実績 (文科省・学振) (2018年4月～2019年3月)

- 基盤研究 (A) 2014年4月～2019年3月
 [圧縮センシングと最適空間サンプリングによる地雷検知用レーダ・イメージングの効率化]

その他の競争資金獲得実績 (2018年4月～2019年3月)

- SIP (戦略的イノベーション創造プログラム) 2014年12月～2018年4月
 [地上設置型合成開口レーダおよびアレイ型イメージングレーダを用いたモニタリング]

著書 (2018年4月～2019年3月)

- 1) Target Scattering Mechanism in Polarimetric Synthetic Aperture Radar. [Springer, (2018) 4月]
佐藤源之

研究論文 (2018年4月～2019年3月)

- 1) Dual Sensor "ALIS" for Humanitarian Demining. [MineAction 2019, (2018)]
Motoyuki Sato, Kazutaka Kikuta, Iakov Chernyak (査読あり)
- 2) Introduction of the advanced ALIS: Advanced landmine Imaging System. [Defense and Commercial Sensing, (2018)] (査読あり)
Motoyuki Sato

- 3) UXO clearance operation in Laos. [Defense and Commercial Sensing, (2018)] (査読あり)
Motoyuki Sato and Yoshihiko Kadoya
- 4) 人道的地雷除去用センサ ALIS. [第138回(平成30年度春季)学術講演会, (2018)]
佐藤源之, 菊田和孝
- 5) Near Range Radar Imaging Based on Block Sparsity and Cross-Correlation Fusion Algorithm. [IEEE Journal of Selected Topics in Applied Earth Observations and Remote Sensing, 11 (6), (2018), 2079-2089] (査読あり)
佐藤源之
- 6) Dual Sensor “ALIS “ for Humanitarian Demining. [Int. GPR Conference, (2018)] (査読あり)
Motoyuki Sato, Kazutaka Kikuta, Iakov Chernyak
- 7) Asphalt pavement stripping detection of an airport taxiway by multi-static GPR system “YAKUMO”. [Int. GPR Conference, (2018)] (査読あり)
L. Zou, K. Kikuta, M. Sato
- 8) A simplified velocity estimation method for monitoring the damaged pavement by a multistatic GPR system YAKUMO. [Int. GPR Conference, (2018)] (査読あり)
Li Yi, Lilong Zou, Motoyuki Sato
- 9) 舗装体表面変位の干渉レーダによるモニタリング. [安全・安心な生活と ICT 研究会 (ICTSSL), (2018)] (査読あり)
Lilong Zou, Motoyuki Sato
- 10) TWO-SCALE TWO-COMPONENT MODEL WITH FULLY POLARIMETRIC ALOS-2 DATA. [IGARSS2018, (2018)] (査読あり)
Yuta Izumi, Joko Widodo, Husnul Kausarian, Sevket Demirci, AyakaTakahashi, Josaphat Tetuko Sri Sumantyo, Motoyuki Sato,
- 11) NOVEL ALGORITHM FOR HIGH RESOLUTION PASSIVE RADAR IMAGING WITH ISDB-T DIGITAL TV SIGNAL. [IGARSS2018, (2018)] (査読あり)
Weike Feng, Jean-Michel Friedt, Grigory Cherniak and Motoyuki Sato
- 12) PASSIVE SAR IMAGING WITH ISDB-T DIGITAL TV SIGNAL. [IGARSS2018, (2018)] (査読あり)
W. Feng, G. Cherniak, J.-M Friedt, and M. Sato,
- 13) AIRSHIP BASED MIMO RADAR: ANALYSIS OF SAR IMAGING AND INTERFEROMETRIC PERFORMANCES. [IGARSS2018, (2018)] (査読あり)
Weike Feng, Giovanni Nico, Olimpia Masci and Motoyuki Sato
- 14) DUAL SENSOR “ALIS “FOR HUMANITARIAN DEMINING. [IGARSS2018, (2018)] (査読あり)
Motoyuki Sato and Kazutaka Kikuta
- 15) Contribution of Electromagnetics to Humanitarian Demining and UXO Clearance. [PIERS2018, (2018)]
Motoyuki Sato
- 16) 大規模土工事における地表設置型合成開口レーダを利用したのり面計測. [土木学会第73回学術講演会, VI-676, (2018), 1351-1352]
中谷匡志、大沼和弘、宇津木慎治、佐藤源之
- 17) 地上設置型合成開口レーダを用いた大規模切土のり面動態観測の検討. [日本リモートセンシング学会誌, 38 (4), (2018), 347-351] (査読あり)

- 中谷匡志、大沼和弘、佐藤源之
- 18) Handheld Bistatic Subsurface Radar Using Accelerometer. [PIERS2018, (2018)] (査読あり)
Kazutaka Kikuta, Motoyuki Sato
- 19) Development of a Simple Ground-Based Synthetic Aperture Radar System for Monitoring Fault Creep. [PIERS2018, (2018)] (査読あり)
Yuya AKIYAMA, Naoki MIYATA, Masahiro YOSHIDA, Katsumi KURITA and Motoyuki SATO
- 20) Evaluation test of Dual sensor ALIS for landmine detection in Cambodia. [PIERS2018, (2018)] (査読あり)
Motoyuki Sato
- 21) GB-SAR Interferometry Based on Dimension-Reduced Compressive Sensing and Multiple Measurement Vectors Model. [IEEE Geoscience and Remote Sensing Letters, (2018), 1-5] (査読あり)
佐藤源之
- 22) Image Reconstruction and Processing Algorithm of GPR for Humanitarian Demining Sensor ALIS. (査読あり) [ICEAA2018, (2018)]
M. Sato, K. Kikuta
- 23) Evaluation of ALIS GPR for Humanitarian Demining in Colombia and Cambodia. [ICEAA2018, (2018)] (査読あり)
M. Sato, K. Kikuta
- 24) Near Range Radar Image Reconstruction Algorithm by Weighted Envelopes Transformation. [IEEE Geoscience and Remote Sensing Letters, 15 (10), (2018), 1515-1519] (査読あり)
Iakov Chernyak and Motoyuki Sato
- 25) Passive bistatic radar using digital video broadcasting–terrestrial receivers as general-purpose software-defined radio receivers. [Review of Scientific Instruments, 89 (104701), (2018)] (査読あり)
WeiKe Feng, Jean-Michel Friedt, Grigory Cherniak, and Motoyuki Sato
- 26) Measurement of Pier Deformation Patterns by Ground-Based SAR Interferometry: Application to a Bollard Pull Trial. [IEEE Journal of Oceanic Engineering, 43 (4), (2018), 822-829] (査読あり)
Giovanni Nico, Giuseppe Cifarelli, Gianluca Miccoli, Filippo Soccodato, WeiKe Feng , , Motoyuki Sato , Salvatore Miliziano, and Maurizio Marini
- 27) 近距離レーダとその応用 —地球環境、防災、遺跡、地雷—. [第77回 情報通信研究会, (2018)]
佐藤源之
- 28) EVALUATION OF HORIZONTAL LAYERS BY CROSS-HOLE BOREHOLE RADAR:. [The 24th Formation Evaluation Symposium of Japan, (2018)] (査読あり)
Tsogtbaatar Amarsaikahn, Motoyuki Sato
- 29) GPR Applied to Humanitarian Demining and UXO clearance. [IET Radar Conference, (2018)] (査読あり)
Motoyuki Sato
- 30) WiFi-based imaging for ground penetrating radar applications–fundamental research and experimental results. [IET Radar Conference, (2018)] (査読あり)

- Weike Feng, Jean-Michel Friedt, Zhipeng Hu, Motoyuki Sato
- 31) ALIS Dual Sensor for Humanitarian Demining. [Advanced Reserch Workshop on Explosives Detection, (2018)] (査読あり)
Motoyuki Sato
- 32) Survey of Beach Ridge Structure by GPR: Case Study at Coastal area of Watari, Miyagi, Japan. [SEG-J the 13th International Conference, (2018)] (査読あり)
Kazuki FUJISAWA, Kazutaka KIKUTA, Motoyuki SATO
- 33) Fundamental Study of Borehole radar to evaluate subsurface structure. [SEG-J the 13th International Conference, (2018)] (査読あり)
Tsogtbaatar AMARSAIKHAN, Motoyuki SATO
- 34) 電波によるピラミッドの探査. [エジプトフォーラム 27, (2018)]
佐藤源之
- 35) 多偏波干渉計測による地上設置型合成開口レーダ (GB-SAR) の高精度大気補正手法の提案. [URSI-F 会合, (2018)]
泉 佑太、Lilong Zou、菊田和孝、佐藤源之
- 36) Passive Radar Delay and Angle of Arrival Measurements of Multiple Acoustic Delay Lines Used as Passive Sensors. [IEEE Sensors Journal, 19 (2), (2019), 594-602] (査読あり)
W. Feng, J-M. Friedt, and M. Sato
- 37) Optimization of a sparse array antenna for 3D imaging in near range. [IEICE Transactions on Electronics, E102-C (1), (2019), 1-5] (査読あり)
佐藤源之
- 38) Passive radar imaging by filling gaps between ISDB digital TV channels. [IEEE Journal of Selected Topics in Applied Earth Observations and Remote Sensing, (2019)] (査読あり)
佐藤源之
- 39) 近距離レーダとその応用 —地球環境、防災、遺跡、地雷—. [ITU ジャーナル, 49 (2), (2019), 22-25]
佐藤源之
- 40) Dual Sensor "ALIS" for Humanitarian Demining. [Multidisciplinary Approach to EOD in the Light of NATO EOD Demonstrations and Trials 2018, (2019), 1-11] (査読あり)
Motoyuki Sato
- 41) GB-SAR 高精度地滑り計測を目的とした多偏波情報による不均一大気位相スクリーン補正手法の提案. [URSI-F 会合, (2019)] (査読あり)
泉 佑太、Lilong Zou、菊田和孝、佐藤源之

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

本年度は科研費を中心とする地雷除去活動の展開、GB-SAR による滑りモニタリングを通じた熊本地震復興援助という 3つの研究を主軸に、数多くの研究を推進した。これ以外にも GPR 遺跡調査など多角的な研究を合わせて行ってきた。

(レーダーによる地滑りモニタリング)

東北大学は栗原市と連携協力協定を締結し、GB-SAR による地滑り計測手法の有効性を検証する目

的で、ジオパークに指定された栗駒山荒砥沢地区にリアルタイム連続モニタリングシステムを2011年11月に設置し、現在に至るまで連続計測を開始している。社会実装の実例として国内でも長期的なGB-SARの利用例はなく、自治体との連携という点でも極めてユニークな研究であると考えている。

また2016年4月に発生した熊本地震において発生した地滑りにより、南阿蘇村において阿蘇大橋ならびに国道57号線が被災し、現在復興作業中である。我々は熊本大学大学院自然科学研究科附属減災型社会システム実践研究教育センター、情報通信研究機構と協力し、南阿蘇村立野地区に地表設置型合成開口レーダ(GB-SAR)を2017年1月に設置し地滑りのモニタリングを開始した。本研究は民間企業との共同研究として一部を実施し、また国土交通省熊本復興事務所と連携をとりながら、実用的な地滑りモニタリング技術として精度を高めている。

(人道的地雷除去活動)

2009年以来、引き続き地中レーダー装置(ALIS)を利用した地雷除去はカンボジア地雷除去センター(CMAC)に2台のALISを貸与し、6人のチームでカンボジア実地雷原における活動を継続している。本活動は、在カンボジア日本大使館、JICAなどとも連携しながら、政府開発援助(ODA)プログラムとして日本からの支援が行えることを目標としている。

2017年度に新型のALISが完成し、これを利用したカンボジアでの評価試験を2018年2月に実施したの続き、2018年10月からカンボジア地雷対策センター(CMAC)による評価試験を受けた。この結果、ALISはカンボジア実地雷原における使用が許可され2019年1月より日本の認定NPO IMCCDならびにJMASと協力し、CMACの下で実稼働を始めた。今後1年間程度、実地雷原でのデータを取得し、技術的なフィードバックをかけていく。

(学会表彰)

特記事項として2018年度の学会発表において、佐藤源之ならびに指導学生が連名の下記3件が表彰を受けたことが挙げられる。

- (1) 馮 為可 (Weike Feng) "WiFi Based imaging for GPR applications: Fundamental study and Experimental results," The excellent paper The IET International radar Conference 2018, 19 October 2018.
- (2) 馮 為可 (Weike Feng), "Near Range Radar Imaging Based on Block Sparsity and Cross-Correlation Fusion Algorithm," IEEE Japan Council AP-S Chapters "IEEE AP-S Japan Student Award" 2019年12月13日
- (3) 泉 佑太, "GB-SAR 干渉処理における不均一大気状態下での大気位相スクリーン補正手法の提案," IEEE GRSS Japan Chapter Young researcher Award, リモートセンシングシンポジウム, 2019年03月08日

菊田 和孝 KIKUTA Kazutaka 助教

生年月日 / 1989年11月28日

東北アジア研究センター基礎研究部門資源環境科学研究分野

出身学校

東京大学・工学部・電気電子工学科 2012年卒業

出身大学院

東京大学・工学系研究科・電気系工学 博士課程 2017年修了

取得学位

(工学) 東京大学 2017年

略歴

2017年～現在 東北大学東北アジア研究センター

研究経歴

2012年～2015年 超広帯域 (UWB) アンテナの開発

2015年～2017年 超広帯域 (UWB) 通信の信号処理アルゴリズムの研究

2017年～現在 地中レーダ位置認識システムの開発

2018年～現在 光電解センサを用いた地中レーダの研究

所属学会

電子情報通信学会

専門分野

計測工学

研究課題

- GPR による地雷探知

国際会議 発表・講演 (2018年4月～2019年3月)

Handheld Bistatic Subsurface Radar Using Accelerometer[PIERS 2018]

(2018年8月1日～2018年8月1日) 口頭 (一般)

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

研究室で開発している地雷探知機 ALIS のイメージング手法を向上させた。ALIS は金属探知機と地中レーダの2種類のセンサが搭載されている。ALIS は利便性のために、手持ちでセンサを前後左右に動かして地面を計測するハンドヘルド型センサである。しかし手の動きは安定しないため、計測す

る際にセンサと地面の距離が変化してしまう。この変化はレーダ性能に悪影響を与え、変化が大きい場合は地雷の位置が特定できなくなる。この距離変化を補正する手法を提案した。コロンビアで取得した実証実験データに手法を適用した結果、出力画像が向上し、地雷がより鮮明に現れることを確認した。これにより、より効率的な地雷探知が可能となるだろう。

地中レーダを用いた空港誘導路の損傷検知について、平面的な電波の伝播速度の変化から異常を検知する手法を提案した。この手法では、舗装体にできる空洞などの異常個所を2次元的に高解像度で捉えることができる。試験場にて計測を行い、1年間のデータから実際に速度変化を確認することができた。

鄒 立龍 Lilong Zou Assistant professor

Birth : 25/01/1988

Division of Geoscience and Remote Sensing, Center for Northeast Asian studies, Tohoku University

EDUCATIONAL BACKGROUND

2013.4 ~ 2016.3 Graduate School of Environmental Studies, Tohoku University, Sendai, Japan
(Ph.D.)

2009.9 ~ 2012.6 College of Geo-Exploration Science and Technology, Jilin University, Changchun,
China. (M.E.)

2005.9 ~ 2009.6 College of Geo-Exploration Science and Technology, Jilin University, Changchun,
China. (B.E.)

PROFESSIONAL EXPERIENCE

2016.4 ~ “Monitoring by using Ground-Based Synthetic Aperture Radar and Array-type Ground
Penetrating Radar” supported by Cross-ministerial Strategic Promotion Program (SIP)
by the Japanese Government

AFFILIATED SOCIETY

IEICE

RESEACH FIELD

Applied electromagnetics

RESEACH TOPIC

Displacement monitoring

RESEACH KEYWORDS

Interferometry; GB-SAR; MIMO Radar; Near filed radar imaging

荒武 賢一郎 ARATAKE Kenichiro 准教授

生年月日／ 1972年12月21日

東北アジア研究センター寄附研究部門上廣歴史資料学研究部門

連絡先

Tel : 022-795-3196 Fax : 022-795-3196 E-Mail : aratake@cneas.tohoku.ac.jp

出身学校

花園大学・文学部・史学科 1995年卒業

出身大学院

関西大学・文学研究科・史学専攻 博士課程 2004年修了

取得学位

博士(文学) 関西大学 2004年

略歴

1996年～2006年 大阪市史料調査会 調査員

2006年～2009年 独立行政法人日本学術振興会 特別研究員

2010年～2012年 関西大学文化交渉学教育研究拠点 助教

2012年～現在 東北大学東北アジア研究センター 准教授

所属学会

近世史フォーラム, 社会経済史学会, 日本史研究会, 宮城歴史科学研究会, 大阪歴史学会, 明治維新史学会, 市場史研究会

学会活動

近世史フォーラム 代表委員 2012年～現在

宮城歴史科学研究会 研究委員 2012年～現在

歴史学フォーラム実行委員会 委員 2014年～現在

専門分野

日本近世, 日本経済史

研究課題

- 近世日本の商業と交流
- 近世・近代日本における尿尿流通の基礎的考察
- 19世紀東北における商人の活動

研究キーワード

日本史

報道(2018年4月～2019年3月)

仙台放送ニュースアプリ コラム：日記からみた江戸時代 第3回 曲亭馬琴の日記(出演・執筆
その他 仙台放送) 2018年5月

惨劇伝える兵士手記：白石の平間さん 研究者と解説、発表(資料提供 新聞 河北新報) 2018年6月
仙台放送ニュースアプリ コラム：日記からみた江戸時代 第4回 将軍が我が家にやってきた(出
演・執筆 その他 仙台放送) 2018年6月

仙台放送ニュースアプリ コラム：日記からみた江戸時代 第5回 旅日記が語る文化(出演・執筆
その他 仙台放送) 2018年8月

仙台放送ニュースアプリ コラム：日記からみた江戸時代 第6回 庶民たちの生活(出演・執筆
その他 仙台放送) 2018年9月

仙台放送ニュースアプリ コラム：日記からみた江戸時代 第7回 日記を付ける殿様(出演・執筆
その他 仙台放送) 2019年1月

仙台放送ニュースアプリ コラム：花粉症の原因は人々を救うためだった(出演・執筆 その他 仙
台放送) 2019年3月

学外の社会活動(2018年4月～2019年3月)

片平古文書会(講演会・セミナー) 2013年7月～現在

白石古文書サークル(講演会・セミナー) 2013年7月～現在

行政機関・企業・NPO等参加(2018年4月～2019年3月)

宮城歴史資料保全ネットワーク(NPO) 事務局員 2017年7月～現在

宮城歴史資料保全ネットワーク(NPO) 理事 2018年6月～現在

学内活動(2018年4月～2019年3月)

社会にインパクトある研究 創造する日本学 2015年10月～現在

東北大学東北アジア研究センター広報情報委員 2017年4月～2019年3月

東北大学東北アジア研究センター研究推進委員 2017年4月～2019年3月

東北大学東北アジア研究センター地域研究コンソーシアム委員 2017年4月～現在

歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク：東北大学拠点事業委員 2018年4月～現在

担当授業科目(2018年4月～2019年3月)

(全学教育)

中上級日本文化演習：くずし字入門 2018年～2018年

中上級日本文化演習：くずし字入門 2018年～2019年

(学部教育)

古文書学 2013年～現在

古文書学Ⅱ 2018年～2019年

日本社会の歴史 2018年～2018年

国際会議 発表・講演 (2018年4月～2019年3月)

日本の古文書調査と活用：情報共有を考える [シカゴ大学歴史学部ミニシンポジウム]
(2018年6月15日～2018年6月15日, アメリカ合衆国, シカゴ市) 口頭 (基調)

国内会議 発表・講演 (2018年4月～2019年3月)

幕末期における村山郡の百姓と代官所：尾花沢『宗尹日記』を読む [平成30年度第2回山形県立博物館歴史文化講座]
(2019年1月20日～2019年1月20日, 山形市) 口頭 (招待・特別)

国際会議 主催・運営 (2018年4月～2019年3月)

2018 Reading Kuzushiji Workshop University of Chicago
(2018年6月11日～2018年6月15日, アメリカ合衆国, シカゴ) [運営] 講師

国内会議 主催・運営 (2018年4月～2019年3月)

歴史学フォーラム 2018
(2018年9月22日～2018年9月22日, 大阪市) [主催] 実行委員

科学研究費補助金獲得実績 (文科省・学振) (2018年4月～2019年3月)

基盤研究 (B) 2017年4月～2021年3月
[比較史からみる生活の存立構造 1600-2000：家政・市場・財政]

著書 (2018年4月～2019年3月)

- 1) Public Goods Provision in the Early Modern Economy : Comparative Perspectives from Japan, China and Europe (執筆担当部分) Chapter3(Samurai and Peasants in the Civil Administration of Early Modern Japan)38～56頁. [University of California Press, (2019) 1月]
Masayuki Tanimoto, R.Bin Wong, Kenichiro Aratake, et al.
- 2) 近世日本の貧困と医療 (執筆担当部分) はしがき iii～vi頁、第3章 (天草諸島の人口増大と産業の形成) 37～53頁. [株式会社古今書院, (2019) 2月]
荒武賢一朗, 木下光生, スーザン・バーンズ, 豊沢信子, 渡辺尚志, 竹原万雄
- 3) 江戸時代鹽竈神社神官文書 (執筆担当部分) 解題 (利府町小野家文書) 9～15頁、201～216頁.
[東北大学東北アジア研究センター, (2019) 2月]
荒武賢一朗, 高橋陽一, 清水翔太郎, 城所喬男

総説・解説記事 (2018年4月～2019年3月)

- 1) つながりを持つ歴史学の課題：古代史研究に学ぶ. [歴史学フォーラム2017実行委員会歴史学フォーラム2017の記録, (2018), 27-33]
荒武賢一朗

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

今年度も専門分野である歴史学 (日本近世史、経済史) における論点の拡充に努めた。世界的に、あるいは日本でも「グローバル・ヒストリー」という言葉を用いて、国境を超えた広範なフィールド

を意識した研究が盛況である。かつてのような「一国史（日本であれば「日本史」）」の微細な内容分析や、「短期の時期設定（平安時代、明治維新、戦後など）」への批判を含めた長期的かつ大きな枠組みで織りなす歴史の描き方には多くの研究者が魅了されている。しかし、その一方で生活感あふれる身近な課題から議論を組み立て、国際的な比較分析に進むという方法がある。筆者は、この後者にあたる手法が大きな学問体系の構築につながるのではないかと期待している。

身近なテーマとは言いながら、ありそうでない研究の「発見」が重要になってくる。たとえば、日本の歴史において「公務員」はどれぐらいの人数が存在したのか、江戸時代と現代の比較分析ではどのような結果がみえるのか、さらに行政サービスはいつから始まるのか、といった単純な疑問から立脚すると、基礎研究の重要性が増していく。江戸時代の日本では武士が行政組織の中核にいたが、彼らはどのような仕事をこなしていたのだろうか。その関わりからすると今年度は、研究分担者として参加する科学研究費補助金基盤研究(B)「比較史からみる生活の存立構造1600-2000：家政・市場・財政」のメンバーと、日本・アメリカ・イギリス・ドイツの歴史研究者とともに『Public Goods Provision in the Early Modern Economy Comparative Perspectives from Japan, China, and Europe』(University of California Press, 2019)を出版することができた。この論文集は、公共財供給を主題として日本・中国・ヨーロッパの歴史比較を試みている。地域行政、インフラ整備、森林の利用、貧民救済などの分野で各地の事例を抽出し、社会的特質を探り出そうとした。筆者はそのうち、江戸時代の日本における武士と百姓の関係を紹介し、先述した「武士の仕事とは何か？」を考察した。結果、いままで思いもよらなかった史実と、さらなる課題を見つけることができたが、これを国際比較のなかで論じる意義は一層高まりつつあることを実感している。

地域の歴史から日本史全体を考えてみようという考え方で、『近世日本の貧困と医療』なる論文集を出版した。これは、日本列島における各地の特質を明らかにすると同時に、時代を問わず人間社会の大敵である生活の困窮や病気、災害との格闘を当時の資料に基づいて丹念に分析をおこなったものである。そのなかで筆者は、江戸時代の熊本県天草諸島に注目し、これまでの研究で醸成されてきた「貧困史観」の克服に取り組んだ。この貧困史観とは、天草諸島は人口増加が著しく、地域の農業生産に比べて過剰な人口が存在し、そのため島民たちは貧しい生活を余儀なくされた、という説明であった。しかし、産業分布や人々の職業を細かく調べてみると、農業以外の漁業・商業・林業が活発で、しかも天草諸島にはほかの地域からやってくる移住者も少なからずいたことがわかってきた。農業と人口の不均衡だけでみれば生活水準が低いと判断されるが、多様な産業と人々の生活実態を分析することで新たな歴史像が切りひらかれた好例といえよう。

宮城県を中心に東北地方の歴史資料保全とその活用について、今年度はおよそ15件の文書群調査を実施した。そのなかで『江戸時代鹽竈神社神官文書』(東北大学東北アジア研究センター叢書第66号、2019年2月刊)は、非常に大きな成果を得た。鹽竈神社(現・宮城県塩竈市)は古代から陸奥国の一宮として名高い存在で、江戸時代も仙台藩(伊達家)の支配下にありながらその格式を維持している。ただし、大きな神社の組織ゆえに具体相は把握できていないことが多く、地域史研究のなかでも重要な課題に位置づけられてきた。今回の編著ではその解明に迫る糸口が明らかとなり、今後に向けて研究の基礎が構築できたと考えている。

江戸時代の歴史資料に関する国際的理解を深めるため、今年度はアメリカ・シカゴ大学で「くずし字ワークショップ」(2018年6月)を、学内では留学生を対象にした日本語特別教育課程「くずし字入門」(前期・後期)を担当した。日本の歴史資料に注目する海外の研究者や学生は年々増加傾向にあり、その調査や分析の方法を指導する意義は深まっている。また、「東北大学夏季古文書講座」(2018年8月)では日本人の学生と留学生と一緒に学習することで相互理解や新たな交流を促進してきた。

国内外に向けて日本の歴史・文化に関する情報発信をさらに充実させ、大きな研究の「塊」ができるような環境作りにも貢献したい。

高橋 陽一 TAKAHASHI Yoichi 助教

生年月日／1977年08月19日

東北アジア研究センター寄附研究部門上廣歴史資料学研究部門

連絡先

Tel : 022-795-3140 Fax : 022-795-3140 E-Mail : yoichi.takahashi.e1@tohoku.ac.jp

出身学校

東北大学・文学部・人文社会学科・日本史専攻 2001年卒業

出身大学院

東北大学・文学研究科・歴史科学専攻日本史専攻分野 博士課程 2009年修了

取得学位

博士(文学) 東北大学 2009年

略歴

2008年～2009年 東北大学東北アジア研究センター防災科学研究拠点グループ リサーチアシスタント
2009年～2010年 東北大学百年史編纂室 教育研究支援者
2009年～2012年 東北大学大学院文学研究科 専門研究員
2010年～2012年 岩沼市史編纂室 市史編纂専門員
2012年～現在 東北大学東北アジア研究センター 助教
2013年～現在 東北学院大学 非常勤講師
2015年～2016年 尚絅学院大学 非常勤講師
2016年～2017年 東北芸術工科大学 非常勤講師

研究経歴

2000年～現在 日本近世史の研究に従事
2011年～現在 歴史資料保全についての研究に従事

所属学会

東北史学会, 交通史学会, 歴史学研究会, 日本史研究会, 宮城歴史科学研究会, 地方史研究協議会, 日本温泉地域学会

学会活動

宮城歴史科学研究会 事務・会計 2012年～現在
交通史学会 常任委員 2016年～現在

専門分野

日本近世史, 旅行史, 歴史資料保存学

研究課題

- 日本近世旅行史の研究
- 藩領社会史の研究
- 歴史資料保存方法論

研究キーワード

日本近世史, 旅, 仙台藩, 温泉, 道中日記, 歴史資料保全

学外の社会活動(2018年4月～2019年3月)

古文書を読む会(公開講座) 2012年4月～現在
川崎町佐藤仁右衛門家文書展示(展示会) 2015年6月～現在

行政機関・企業・NPO等参加(2018年4月～2019年3月)

NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク(NPO) 会員として、古文書をはじめとする文化財の保全活動に従事している。 2003年8月～現在
宮城県岩沼市教育委員会(地方公共団体) 岩沼市教育委員会市史編纂室 岩沼市史近世部会調査執筆者 2013年4月～現在

学内活動(2018年4月～2019年3月)

広報情報委員会 2012年4月～現在

担当授業科目(2018年4月～2019年3月)

(他大学)
生活文化史 2013年～現在

国際会議 発表・講演(2018年4月～2019年3月)

伝統的文化と近代行政—明治政府の温泉政策と地域社会—[Revisiting Japan's Restoration: Interregional, Interdisciplinary, and Alternative Perspectives]
(2018年9月27日～2018年9月27日) 口頭(一般)
歴史資料保全活動における成果の社会共有[日露ワークショップ]
(2019年2月18日～2019年2月18日) 口頭(一般)

国内会議 発表・講演(2018年4月～2019年3月)

江戸時代の旅を読み解く～道中日記と紀行文の世界～ [山形県立博物館古文書歴史講座]
(2015年11月7日～現在, 山形市) 口頭(招待・特別)
青根にひたる、青根に生きる～佐藤仁右衛門家文書にみえる温泉・湯治・飢饉～ [公開講演会「川崎の記憶～古文書からよみがえるふるさとの歴史～」]
(2018年4月21日～2018年4月21日) その他

近世・近代における景勝地の展開—旅行者と地域住民の視点から— [交通史学会大会]

(2018年5月20日～2018年5月20日) 口頭 (一般)

温泉古文書の活用と保存—旧仙台藩領の温泉を事例に— [日本温泉地域学会第32回研究発表大会]

(2018年11月26日～2018年11月26日) 口頭 (一般)

国内会議 主催・運営 (2018年4月～2019年3月)

川崎の記憶～古文書からよみがえるふるさとの歴史～

(2018年4月21日～2018年4月21日, 宮城県柴田郡川崎町) [主催] 講演者

東北大学東北アジア研究センター古文書講座・古文書歴史講座関連企画講演会「みちのく歴史講座」

(2019年3月22日～2019年3月22日, 宮城県仙台市) [主催] 司会進行

著書 (2018年4月～2019年3月)

1) 江戸時代鹽竈神社神官文書. [東北大学東北アジア研究センター, (2019) 2月]

高橋陽一

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

これまで研究を進めてきた日本旅行史研究に関して、交通史学会大会にて「近世・近代における景勝地の展開—旅行者と地域住民の視点から—」、シンガポール国立大学で開催された国際会議“Revisiting Japan’s Restoration: Interregional, Interdisciplinary, and Alternative Perspectives” (通称“Meiji Conference”)にて“Traditional Culture and Modern Administration-The Meiji government’s hot spring policy and local community-”と題して研究報告した。いずれも従来の発表論文に事例等を加え、再構成したものであり、とくに近世から近代にかけての旅先地域の変容過程を明らかにしている。

また、日本温泉地域学会研究発表大会では「温泉古文書の活用と保存—旧仙台藩領の温泉を事例に—」と題し、これまでの調査結果をもとに旧仙台藩領温泉古文書の特徴を明らかにすると共に、その活用が史料の保存につながることをアピールした。東北アジア研究センター主催の国際会議“Japan Russia Workshop”においても、“Sharing the Outcomes of Historical Materials Conservation Activities with Local Communities”と題して古文書調査および成果還元の実践について講演した。所属する上廣歴史資料学研究部門での活動の成果としても位置づけられる内容である。

友田 昌宏 TOMODA Masahiro 助教

生年月日／1977年03月20日

東北アジア研究センター寄附研究部門上廣歴史資料学研究部門

出身学校

早稲田大学・教育学部・社会科地理歴史専修 1999年卒業

出身大学院

中央大学・文学研究科・日本史専攻 博士課程 2008年修了

取得学位

(史学) 中央大学 2008年

略歴

2008年～2012年 中央大学文学部 兼任講師
 2009年～2012年 早稲田大学大学史資料センター 非常勤嘱託
 2009年～現在 中央大学政策文化総合研究所
 2012年～2013年 町田市立自由民権資料館 嘱託(学芸担当)
 2013年～2018年9月 東北大学東北アジア研究センター助教

所属学会

史学会, 明治維新史学会, 東アジア近代史学会, 中央史学会, 国史学会, 東北史学会, 日本風俗史学会, 宮城歴史科学研究会

学会活動

東アジア近代史学会 理事 2012年～2014年

研究課題

- 宮島誠一郎の研究
- 近代日本におけるアジア主義の展開
- 敗者にとっての明治維新

学外の社会活動(2018年4月～2019年9月)

「岩出山古文書を読む会」中級講座(公開講座) 2014年1月～2018年9月

上廣歴史資料学研究部門古文書講座(公開講座) 2014年5月～2018年9月

山形県立博物館平成26年度古文書歴史講座(主催:山形県立博物館、協力:東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門)(講演会・セミナー) 2015年2月～2018年9月

行政機関・企業・NPO等参加（2018年4月～2019年9月）

NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク（NPO）災害科学国際研究所歴史資料保存分野研究室にて行われている被災資料の保全活動に週2日参加。 2013年10月～2018年9月

学内活動（2018年4月～2019年9月）

研究推進委員会委員 2014年4月～2018年9月

広報情報委員会委員 2017年4月～2018年9月

講演（2018年4月～2018年9月）

- ①「戊辰戦争における米沢藩と庄内藩」（2018年7月28日、「庄内の戊辰戦争展」記念講演会、鶴岡市郷土資料館主催）
- ②「岩出山伊達家の当別移住と吾妻謙」（2018年8月25日、「当別町歴史講演会」、当別町教育委員会主催）
- ③「岩出山伊達家の戊辰戦争と北海道開拓移住」（2018年9月14日、歴史講座「仙台藩と戊辰戦争150年」、東北福祉大学・河北新報社・一般社団法人心のふるさと創生会議主催）
- ④「雲井龍雄から受け継がれたもの～米沢の民権家を素材に～」(2018年10月14日、米沢御堀端史蹟保存会主催「上杉メモリアルフェスタ戊辰戦争150年」)
- ⑤「岩出山残留か北海道移住か―旧岩出山伊達家中の選択―」（2018年10月27日、有備館企画展「明治150年軌跡 伊達邦直と家臣段団、ふたつの道の選択―有備館からの出発―」基調講演、大崎市教育委員会主催）
- ⑥「米沢藩の選択～同盟の大義と藩の存亡～」（2018年11月11日、歴史シンポジウム in 白石「戊辰戦争 奥羽の選択～それぞれの列藩同盟～」、白石市教育委員会主催）

研究報告（2018年4月～2018年9月）

- ①「維新时期における国制の模索と福岡孝弟」（2019年1月12日、明治維新史学会例会、於明治大学リバティータワー）

書評（2018年4月～2018年9月）

- ①「書評 小川原正道著『西南戦争と自由民権』」（『民衆史研究』96、87頁～92頁、2018年12月）

広報誌（2018年4月～2018年9月）

- ①「幕末米沢藩の探索周旋活動」（『本郷』139、26頁～28頁、2019年1月）

報道（取材協力）（2018年4月～2018年9月）

- ①「<戊辰戦争150年>列藩同盟の背景考える 宮城・白石で研究者らシンポ」（『河北新報』2018年11月13日朝刊）
- ②「「奥羽越列藩同盟」歴史的意義を再認識 宮城・白石で歴史シンポ」（『福島民友』2018年11月16日）
- ③「【維新再考・明日への伝言】現代編4―友田昌宏さん 東北集い大きな力に」（『福島民友』、2018年12月24日、「維新再考」）
- ④「<奥羽の義 戊辰150年> (39) 開拓志願 北の大地へ移住」（『河北新報』2019年2月7日朝刊）

著書（2018年4月～2018年9月）

- ①『東北の幕末維新一米沢藩士の情報・交流・思想』（単著、吉川弘文館、2018年10月30日）
- ②『岩出山伊達家の北海道開拓移住―「吾妻家文書」を読む』（菊地優子・高橋盛との共編著、東北大学東北アジア研究センター、2018年12月14日）
- ③『幕末維新期の日本と世界―外交経験と相互認識』（編著、吉川弘文館、2019年2月15日）―序章と第Ⅱ部第1章を執筆

藤方 博之 FUJIKATA Hiroyuki 助教

生年月日／1981年03月07日

東北アジア研究センター寄附研究部門上廣歴史資料学研究部門

出身学校

千葉大学・文学部・史学科 2003年卒業

出身大学院

千葉大学・社会文化科学研究科・都市研究専攻 博士課程 2011年修了

取得学位

博士(文学) 千葉大学 2011年

略歴

2012年～2013年 江東区 文化財専門員

2013年～2016年 日本学術振興会 特別研究員(PD)

2016年～2018年 東京大学大学院農学生命科学研究科 特任研究員

2016年～2019年 東京理科大学理工学部 非常勤講師

2018年～2019年 明治大学文学部 兼任講師

2019年～現在 東北大学東北アジア研究センター助教

所属学会

歴史学研究会, 地方史研究協議会, 千葉歴史学会, 比較家族史学会, 関東近世史研究会, 歴史科学協議会

研究課題

- ・大名家臣層の「家」
- ・近代の士族と旧大名家・旧領
- ・大名飛地領における地域運営と支配の実相(特に出羽村山地域)

担当授業科目(2018年4月～2019年3月)

(他大学)

歴史Ⅰ 2016年～2018年

歴史Ⅱ 2016年～2019年

日本近世史 2018年～2018年

国内会議 発表・講演(2018年4月～2019年3月)

近世大名家臣の「家」をめぐる共同性[東北アジア研究談話会11月例会]

(2018年11月26日～2018年11月26日, 仙台) 口頭(一般)

コメント [千葉歴史学会近世史部会 1 月例会]

(2019年 1 月13日～ 2019年 1 月13日, 千葉) 口頭 (一般)

著書 (2018年 4 月～ 2019年 3 月)

- 1) 史料集 佐倉藩幕末分限帳. [明治大学文学部野尻泰弘研究室, (2019) 3 月]
野尻泰弘, 藤方博之, 長谷川佳澄, 林聡香, 水上たかね, 崎島達矢, 鈴木三美子, 黒滝香奈

総説・解説記事 (2018年 4 月～ 2019年 3 月)

- 1) 紹介 木村直樹・牧原成征編『十七世紀日本の秩序形成』. [歴史評論, (824), (2018), 109]
藤方博之
- 2) 戊辰戦争時の佐倉藩柏倉陣屋. [やまがた街角, (88), (2019), 58-64]
藤方博之

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

2018年10月の着任以来、(a) 武士の「家」の実態、(b) 出羽村山地域の支配と地域社会、という二つのテーマを設定して、研究に取り組んできた。

(a) については、11月の東北アジア研究談話会にて、「近世大名家臣の『家』をめぐる共同性」と題して着任前からの研究内容をまとめ、今後の方針を示した。史料調査としては、山形市大久保家文書調査(山形藩水野家家臣)に最も注力した。科研費によって技術補佐員1名を雇用し、山形市での現地調査を4回実施、写真撮影・目録作成を進めた。また、仙台藩に関する武家文書の調査に着手し、写真撮影などによって分析素材の収集を進めた(登米伊達家文書(東北大学付属図書館所蔵)など)。さらに、上廣歴史資料学研究部門の業務で接した文書群のなかからも、(a)に関わるものを見出した(塩沢家文書、花井家文書(いずれも個人蔵))。

さらに、「分限帳」(堀田家文書)を全文翻刻した史料集を刊行することができた(『史料集 佐倉藩幕末分限帳』)。これは、明治大学・野尻泰弘准教授らとともに、2014年より翻刻作業に取り組んできた成果である。また、藤方と長谷川佳澄氏(佐倉市役所)の共著による「解説」を史料集に収めた。「分限帳」は、旧佐倉藩主・堀田家に伝わったもので、同家の家臣団の構造や家臣の履歴を知ることができる史料である。一般的に分限帳というと、家臣名を禄高や役職とともに序列順に記載したものが多く、これに対して本史料は、禄高・役職のほか、各家臣の履歴が細かい字で書き込まれていることが特徴である。しかもこの履歴部分が、他の史料(例えば藩庁が編さんした家臣団家譜)がカバーしていない幕末期の数年間の情報を含んでいるため、本史料は当該期の佐倉藩を研究するうえで、ごく基礎的な史料といえる。これまで履歴部分を割愛した翻刻が行われたことはあったが、全文翻刻の刊行は今回が初めてである。索引も付したため、収録家臣の検索が格段に簡便になる。基礎史料の刊行が少ない佐倉藩研究にとって意義深いのはもちろんのこと、近世武家研究にとっても資する内容をもつ史料集であると考えられる。

(b) については、史料収集と分析を進めている途上である。具体的には区有文書(村木沢文書)、名主家文書(山形大学附属博物館寄託会田家文書)の写真撮影に取り組んでいる。また、戊辰戦争時の村山地域、特に柏倉陣屋(佐倉藩飛地領を支配、現・山形市)の動向について、これまで研究してきた内容を一般向けに再構成し、タウン誌『やまがた街角』88号に寄稿した(論題は「戊辰戦争時の佐倉藩柏倉陣屋」)。一般にはあまり知られていない柏倉陣屋について、研究者以外にも関心が広がることを期待される。

内藤 寛子 NAITO Hiroko 助教

生年月日／1987年01月09日

東北アジア研究センター研究支援部門

出身学校

慶應義塾大学・総合政策学部 2009年卒業

出身大学院

慶應義塾大学・政策・メディア研究科 修士課程 2012年修了

慶應義塾大学・政策・メディア研究科 博士課程 2015年修了

取得学位

博士（政策 メディア） 慶應義塾大学 2017年

所属学会

日本現代中国学会, アジア政経学会

専門分野

地域研究, 政治学

研究課題

- ・権威主義体制における司法機関の政治制度としての役割

研究キーワード

比較政治、地域研究（現代中国政治）

国際会議 発表・講演（2018年4月～2019年3月）

- 1) How Does the Judicial Branch Work under Authoritarianism?: Analysis of the Revision of the Environmental Protection Law in China[60th Annual Conference of American Association for Chinese Studies] (2018年10月6日～2018年10月6日) 口頭（一般）
- 2) 'Rule of Law' under the Chinese Communist Party's Leadership: The Case of Professionalization of the Judges and the CCP's Governance of the People's Court[Symposium Center for Northeast Asian Studies: Bringing the State Back in: New Frontiers of Governance Studies in China] (2019年3月3日～2019年3月3日) シンポジウム・ワークショップ・パネル（指名）
- 3) "Why Authoritarian Leader Needs 'Rule of Law'?: Shifting Power from the Public Security to the People's Court", Small-Group Workshop of Ensemble Project for Young Researchers in Tohoku University: Thinking a New Interdisciplinary Approach in Area Studies, SOAS University of London, September 17, 2018.

- 4) 「歴史的制度論から見る中国の中央・地方関係—四川大地震を事例として—」、東北大学附置研究所若手アンサンブルワークショップ、東北大学、2018年7月4日
- 5) 「1980年代における党政関係の制度化と司法監督の導入—行政訴訟法の制定過程に着目して—」、アジア政経学会春季大会、2018年6月9日・10日、〈審査あり〉

国内会議 発表・講演 (2018年4月～2019年3月)

1980年代における党政関係の制度化と司法監督の導入—行政訴訟法の制定過程に着目して [2018年度アジア政経学会春季大会]

(2018年6月10日～2018年6月10日) 口頭 (一般)

歴史的制度論から見る中国の中央・地方関係—四川大地震を事例として— [第4回東北大学若手研究者アンサンブルワークショップ]

(2018年7月4日～2018年7月4日) ポスター (一般)

執筆活動 (2018年4月～2019年3月)

1. Hiroko Naito, “`Rule of Law` under the Chinese Communist Party’s Leadership: The Case of Professionalization of the Judges and the CCP’s Governance of the People’s Court”, Symposium Center for Northeast Asian Studies: Bringing the State Back in: New Frontiers of Governance Studies in China, Proceeding, March 3rd 2019.
2. 内藤寛子「東北大学若手アンサンブルプロジェクト小規模研究会『新たな地域研究方法の創出を目指して—移動・流動とインフラに関する越境的比較研究』」『東北大学東北アジア研究センターニューズレター』第78号、2頁、2018年12月
3. 内藤寛子「民主と独裁の狭間で揺れる香港」『東北大学東北アジア研究センターニューズレター』第77号、7頁、2018年6月
4. Hiroko Naito, “How Does the Judicial Branch Work under Authoritarianism?: Analysis of the Revision of the Environmental Protection Law in China”, 60th Annual Conference of American Association for Chinese Studies Proceeding, October 6th 2018.
5. 内藤寛子「1980年代における党政関係の制度化と司法監督の導入—行政訴訟法の制定過程に着目して」、アジア政経学会春季大会プロシーディング、2018年6月
6. 内藤寛子「私の東アジア研究『体制の存続』からみる非民主主義体制下の司法機関」『東北大学東北アジア研究センターニューズレター』第76号、5頁、2018年4月

競争的資金獲得状況 (2018年4月～2019年3月)

1. 東北大学附置研究所若手アンサンブルグラント「『越境的移動』の時代を問い直す：シベリア北方少数民族ハンティの事例の検討による越境的地域研究の方法論の構築」、2018年10月～2019年3月
2. 東北アジア研究センター共同研究助成「自然災害の発生による政治・社会構造の変容に関する比較研究」、2018年4月～2019年3月
3. 科学研究費助成事業研究活動スタート支援「歴史的制度論から見る中国共産党と人民法院の政治制度としての役割」、2017年4月～2019年3月

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

2018年度は、権威主義体制下における司法機関と公安機関との関係に関する予備的研究を始め、また研究成果の対外発信に努めた。

第一に、予備的研究として、各種統計データ (Freedom House, WJP Rule of Law Index, The Gedds Wright and Frantz Autocratic Regimes dataset) を用い、政治体制と司法機関の関係について分析を行った。この結果、自由民主主義と司法機関の強化を含む法治の度合いは非常に強い相関関係にある一方で、権威主義体制と法治は有意に働かないということが分かった。つまり、開かれた権威主義体制 (競争的権威主義や協議型権威主義と呼ばれる) であっても法治の度合いが低いところもあれば、閉ざされた権威主義体制であっても法治の度合いが高いところもあるということである。その中で、中国は極めて閉ざされている権威主義体制にあるにもかかわらず、高い法治の度合いにあることがわかった。そして、権威主義体制内の下位分類 (軍事政権、君主制、一党体制、個人独裁) と法治の関係についても同様に調査を実施し、一党体制にある権威主義体制は法治の度合いを高める傾向にあることが分かった。これがなぜ発生するのか、という点について、軍や公安といった暴力機関への監督を、司法機関を通じて合法的に実施し、文民関係の正常化に役立っているのではないかと仮説がある。軍事政権はそもそも軍が政権担当をしているため、政治家が軍を統治するという文民関係は重要ではないし、君主制も血筋といった確固たる要因によって政権担当者が決まってしまうため、暴力機関との争いがおこることは少ないとされている。よって、暴力機関との関係に悩まされる代表的な事例が一党体制および個人独裁になるのではないだろうか。これについて、中国を事例に、各地域における組織の統廃合に着目しながら、研究を進めていく予定である。本研究は、2020年度の科研費若手研究に採択されている。

第二に、研究成果の対外発信として、アジア政経学会春季大会での研究報告 (報告題目: 1980年代における党政関係の制度化と司法監督の導入—行政訴訟法の制定過程に着目して—) および60th Annual Conference of American Association for Chinese Studies での研究報告 (報告題目: How Does the Judicial Branch Work under Authoritarianism?: Analysis of the Revision of the Environmental Protection Law in China) を行った。学会報告に際しては、それぞれ学会プロシーディングを執筆し、アジア政経学会春季大会の報告内容は既に査読論文として投稿済みである。また、東北アジア研究センターシンポジウムとして、「Bringing the State Back in: New Frontiers of Governance Studies in China」と題するシンポジウムを開催した。オーガナイザーとしてだけでなく、当日は報告者として登壇し、「`Rule of Law` under the Chinese Communist Party's Leadership: The Case of Professionalization of the Judges and the CCP's Governance of the People's Court」という題目で報告をした。このシンポジウムに向けて、フルペーパーを執筆した。そして、シンポジウム開催時に収集したそれぞれの報告ペーパーをまとめたものを、英語の編著として出版予定としている。すでに、出版社 (Springer) から、書籍の計画書の許可を頂いた。編著に必要な序論部分についても、すでに執筆を終了している。

福田 雄 FUKUDA Yu 助教

生年月日／1981年06月12日

東北アジア研究センタープロジェクト研究部門災害人文学研究ユニット

連絡先

Tel : 022-795-3842 E-Mail : yu.fukuda.a3@tohoku.ac.jp

出身大学院

関西学院大学・社会学研究科 博士課程 2014年修了

取得学位

博士(社会学) 関西学院大学 2014年

略歴

2015年～2018年 日本学術振興会 特別研究員 PD

研究経歴

2010年～現在 現代日本の慰霊祭・追悼式の調査研究

2015年～現在 インドネシアの津波記念式典の調査研究

2018年～現在 日本およびインドネシアの震災遺構の調査研究

所属学会

The Association for the Study of Death and Society, 「宗教と社会」学会, 日本宗教学会, 日本社会学会, International Sociological Association, International Society for the Sociology of Religion

専門分野

社会学, 災害研究

研究キーワード

社会学, 災害研究, 儀礼研究

国際会議 発表・講演 (2018年4月～2019年3月)

大海嘯の神義論：印尼亞齊海嘯災難追思紀念研究 [東南亞宗教文化多元研討會]

(2018年6月9日～2018年6月9日, , 成大文學院學術演講廳) 口頭 (招待・特別)

Toward the Interdisciplinary Studies of Disaster Humanities: Preserving Tangible and Intangible Folk Cultural Properties by Three-Dimensional Data [国際防災・危機管理研究 岩手会議]

(2018年7月17日～2018年7月17日, , いわて県民情報交流センター「アイーナ」) 口頭 (一般)

国内会議 発表・講演 (2018年4月～2019年3月)

慰霊祭・追悼式の社会学 [伊達市噴火湾文化研究所・東北大学東北アジア研究センター第9回学術連携交流講演会]

(2018年10月26日～2018年10月26日) その他

無形民俗文化財の復興に資する三次元計測に向けて [第3回 文化財方法論研究会]

(2018年11月24日～2018年11月24日) 口頭(一般)

国内会議 主催・運営 (2018年4月～2019年3月)

災害人文学研究会

(2018年3月2日～現在) [運営]

科学研究費補助金獲得実績 (文科省・学振) (2018年4月～2019年3月)

若手研究 2018年4月～現在

[災害遺構の比較社会学—東日本大震災とスマトラ島沖地震を事例として]

研究論文 (2018年4月～2019年3月)

- 1) 苦難の神義論と災禍をめぐる記念式典—アチェの津波にかんする集団と個人の宗教的意味づけ—。[宗教と社会, 24, (2018), 65-80] (査読あり)

福田雄

総説・解説記事 (2018年4月～2019年3月)

- 1) 無形民俗文化財の／による「復興」を考える。[震災学, (13), (2019), 169-173]

福田雄

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

2018年度の研究成果は、以下の三点です。それぞれ従来の研究にはない新しい視点を提示する研究成果です。

第一点目は、災禍のあとに行われる慰霊祭・追悼式にかかわる成果です。2011年以降、私は東日本大震災をめぐる慰霊祭・追悼式にかんする社会調査を実施してきました。これらの成果を踏まえ、インドネシア・アチェのスマトラ島沖地震をめぐる記念式典を検討した結果、アチェのイスラーム文化と結びついた苦難の意味づけの特徴的な形式が見出されました。この知見は、災害のあとに行われる記念式典を、現代社会における苦難へのコーピングを理解するための現象として位置づけるとともに、苦難の神義論という社会学的パラダイムについて経験的研究にもとづく新たな視座を提示しました。この成果は査読付き学術論文(『宗教と社会』第24号)として掲載されたほか、国際学術図書に査読付き英語論文として掲載される予定です(査読をパスし、2019年度中に刊行予定)。

第二点目は、無形民俗文化財の三次元計測にかかわる研究成果です。東日本大震災以降に行われた社会調査は、祭礼や民俗芸能といった無形民俗文化財が被災コミュニティの復興に果たす役割を示唆していました。この知見にもとづき、本研究は無形民俗文化財で用いられる獅子頭や能面といった祭具を3D スキャナーで三次元計測・データベース化することで、被災後の民俗芸能の早期復旧を可能とさせ、ひいてはコミュニティの早期復興を後押しすることを目的としました。今年度は、東北地方沿岸部の獅子頭および和歌山県串本町の祭礼船の三次元計測を行い、その成果を国際会議などの

場で発表してきました。これらの発表の場における議論の成果は、すでにいくつかの場で発表されていますが（『文化財の壺』第6号、『震災学』第13号）、2019年5月に *Journal of Disaster Research* に投稿し、査読付き英語論文として掲載される見込です。

第三点目は、災害人文学研究の企画・管理・運営です。私は本センターの災害人文学ユニットの一員として、全8回の研究会開催に貢献しました。このうち四回は震災にかかわるドキュメンタリー作品の上映とディスカッションを実施する企画でした。これらの研究会は、アカデミアに限らず映像作家や市民との議論のなかで、震災の記憶や経験の伝承について多様な可能性を模索することを目的としています。この事業は指定国立大学災害科学世界トップレベル研究拠点の研究事業の一部として実施されたものであり、この過程で人文学に限らず農学や医学、環境科学など様々な分野の研究者との学際的なネットワークが構築されたほか、東北歴史博物館など地域との連携も強化されました。これらの多様なネットワークの構築が本事業の重要な成果です。

以上述べてきた成果三点は、それぞれ社会学、文化財研究、人文学といった災害にかかわる諸領域において独創的かつ先端的な試みとして位置づけられます。今後は、より国際的なネットワークのなかで議論し、成果が発表されていくものと期待されます。

専属教員以外の研究者の研究活動
(2018)

20世紀ユーラシア史研究ユニット

矢口 哲朗 (学術研究員) [19世紀前半のロシア外交史、国際政治史]

研究報告 (口頭)

矢口啓朗「皇帝ニコライ一世の外交政策におけるヨーロッパ協調の位置づけ」『ロシア・東欧学会 2018年研究大会』, 神戸大学 (兵庫県神戸市), 2018年10月20日 (査読・ペーパー有り)

矢口啓朗「ニコライ一世期のロシアによる会議外交への関与とウィーン体制」『西洋史研究会』, 東北大学 (宮城県仙台市), 2018年11月17日 (査読有り)

学会・アウトリーチ活動

矢口啓朗「ロシア史研究会第62回大会参加記」『ロシア史研ニューズレター』(112), ロシア史研究会, pp. 9-11, 2019年1月.

矢口啓朗「新任紹介」『東北アジアニューズレター』(79), 東北アジア研究センター, p. 6, 2018年12月.

矢口啓朗「ウィーン体制におけるロシア外交: 私の東北アジア研究」『東北アジアニューズレター』(80), 東北アジア研究センター, p. 6, 2019年3月.

最新科学による遺跡調査ユニット

アハメド アンワー セイド アブデルハמיד (学術研究員) [電磁波]

A. S. Abd El-Hameed, A. Barakat, A. B. Abdel-Rahman, A. Allam, and R. K. Pokharel, "Design of Low Loss Coplanar Transmission Lines Using Distributed Loading for Millimeter-Wave Power Divider/Combiner Applications in 0.18 μm CMOS," IEEE Transactions on Microwave Theory and Techniques, no.12, vol.66, pp.5221-5229, August 2018.

災害人文学研究ユニット

是恒さくら (学術研究員) [芸術、デザイン工学]

【講演など】

講座「アラスカ先住民イヌピアットの村で」(道民カレッジ連携講座 教養コース) 北海道立北方民族博物館, 2018年9月29日

講習会「北西海岸先住民の技: チルカット織りのペンダント」(道民カレッジ連携講座 教養コース), 北海道立北方民族博物館, 2018年9月30日

【研究活動】

アメリカ・ニューヨーク州ロングアイランド島の Shinnecock Indian の鯨にまつわる文化の調査, 一般財団法人東北開発記念財団: 海外派遣援助金, 2019年3月

【その他：芸術活動】

作品出品「MULTI LAYERED SURFACES」, NICA: Nihonbashi Institute of Contemporary Art、カナダ大使館高円宮記念ギャラリー、若山美術館、旧平櫛田中邸 | 東京都内 (日本・カナダ・シンガポールのアーティストの国際交流展), 2018年4月 - 6月

個展開催「N.E.blood 21: Vol.67 是恒さくら展」, リアス・アーク美術館 | 宮城県気仙沼市, 2018年5月 - 6月

作品出品「みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ 2018」企画展「現代山形考」, 東北芸術工科大学 | 山形県山形市, 2018年9月

個展開催「ほつれを・まつる ～リトルプレス『ありふれたくじら』2016-2018～」, Cyg art gallery | 岩手県盛岡市, 2018年10月～11月

【その他：メディアでの紹介】

朝日新聞・山形版 / 2018年9月22日, 「ビエンナーレ芸工大の企画展 アートで山形再発見」, 内容: 山形ビエンナーレ2018での発表作品の紹介

TBC 東北放送 / 2018年10月13日, 「サタデーウォッチン! 特集」, 内容: 国内外の鯨に関する聞き書き集の制作活動の紹介

朝日新聞岩手版 / 2018年11月4日, 「捕鯨の記憶をアートに」, 内容: 盛岡市での個展の紹介

盛岡タイムス / 2018年11月5日, 「織り重ねてたどる姿 是恒さくらさんシグで11日まで 個展「ありふれたくじら」」, 内容: 盛岡市での個展の紹介

『ZENBI』全国美術館会議機関誌 [Vol.15] / 2019年1月発行, 東北ブロック・報告「地域に寄り添うということ」(報告: リアス・アーク美術館 学芸員 萱岡雅光), 内容: 石巻市のギャラリーでの展示の紹介

東北アジア地域の環境・資源に関する研究連携ユニット

金 丹 (教育研究支援者) [環境経済学]

【著書】

金丹「东亚区域贸易的发展及其结构变化」『东亚经济的竞合发展与市场营销新趋势』中国经济科学出版社, 2019年2月

金丹「东亚的经济发展与环境影响」『东亚经济的竞合发展与市场营销新趋势』中国经济科学出版社, 2019年2月

【発表】

金丹「東アジア地域の貿易発展とその構造変化」北部湾地域発展戦略シンポジウム, 中国広東海洋大学寸金学院, 2019年3月

【その他】

金丹「河流のあるところに守り人を」東北アジア研究センターニューズレター, 2018年12月

田中 利和 (学術研究員) [生態人類学]

■受賞

田中利和「エチオピア・ウォリソにおける農耕民の足を護る地下足袋の生産・普及に関する実践的研究活動」日本ナイル・エチオピア学会高島賞 2018年(平成30年)4月22日

田中利和「アフリカと足を護り・彩り・測る地下足袋協創の研究事業」JST 第4回 COI2021会議オーディエンス章 2018年(平成30年)12月19日 日本科学未来館

田中利和「アフリカと足を護り・彩り・測る地下足袋協創の研究事業」JST 第4回 COI2021会議 COI2021表彰特別賞 2018年(平成30年)12月19日 日本科学未来館

■科学研究費補助金等競争的資金の受領

「IoT 機器を活用した人と環境調和型の防災・減災機能とジオデザインに関する共同研究」(東北大学若手アンサンブルグラント2017年9月-2018年3月) 研究代表: 高橋秀幸

「足を護りセンシングするアフリカ地下足袋協創に関する研究」(東北大学若手アンサンブルグラント2017年9月-2018年3月) 研究代表: 田中利和

■紙面発表

田中利和(2019) 書評: 高倉浩樹編『寒冷アジアの文化生態史(シリーズ 東北アジアの社会と環境)』古今書院2018,130p. 『アジア・アフリカ地域研究』18-2:197-200.

田中利和(2018)「耕牛皮で農民の足を護る: エチオピアにおける地下足袋の協創に関する実践的研究」『生態人類学会ニュースレター』24:121-125

八下田由恵・田中利和・菅野均志(2018)「よい土とは何か: エチオピア中央高原における有畜農耕の有機物移動に着目して」『生態人類学会ニュースレター』24:38-41

田中利和(2018)「エチオピアの牛耕」『BIOSTORY』30:74-75

田中利和(2018)「田中利和学術研究員 第24回日本ナイル・エチオピア学会高島賞を受賞」『東北アジアニュースレター』78:6

田中利和(2018)「極寒のシベリアの家まわり」『東北大学東北アジア研究センター東北アジア学術交流懇話会』(ウェブ 2018年12月7日配信)

<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/gon2/konwakai/society.html>

■口頭発表(国際会議等)

Tanaka, T. "Area Studies of Movement and Intensiveness: Focusing on Agricultural Complex and Jikatabi Project in Ethiopia" Oral Presentation, Small-group workshop of ensemble project for young researchers in Tohoku University: Thinking a new interdisciplinary approach in Area Studies, Transboundary Comparative Study on Mobility, Fluidity and Infrastructure, Room 250, SOAS Main Building, SOAS University of London, UK. September 17, 2018.

■口頭発表（国内学会等）

田中利和「アフリカと足を護り・彩り・測る地下足袋協創の研究・事業」JST 第4回 COI2021会議、日本科学未来館未来館ホール 2018年12月19日.

田中利和「現代エチオピアにおける牛耕の農耕文化複合」日本文化人類学会東北地区研究懇話会、東北大学文学部文学研究科棟7階701講義室、2018年6月29日.

藤岡悠一郎・田中利和・高倉浩樹・Vanda Ignatyeva 「サハ共和国チュラプチャにおける環境変化に関する住民の認識」第4回日本シベリア学会、於三重大学、2018年6月17日.

田中利和「地下足袋をともにつくる：エチオピアにおける新たな労働履物文化の創造に関する実践的地域研究」口頭発表、第55回日本アフリカ学会、於北海道大学、2018年5月26日.

田中利和「Ethio-Tabi の創造に関する実践的地域研究②：ウォリソにおける地下足袋製作に関する課題」ポスター発表、第27回日本ナイル・エチオピア学会、於東京外国語大学、2018年4月22日.

八下田佳恵・田中利和・菅野均志「共によい土にする：エチオピア中央高原ウォリソにおける有畜農耕民の民族土壌学的研究」ポスター発表、第27回日本ナイル・エチオピア学会、於東京外国語大学、2018年4月22日.

■口頭発表（招待講演・シンポジウム・ワークショップ）

田中利和「エチオピアでの地下足袋プロジェクト：農村でのアントレプレナーシップを目指して」ジェトロ・アジア経済研究所 夏期公開講座コース3 エチオピアの社会を知る：急激な経済成長のなかで変わる社会、於ジェトロ本部5階 ABCD 会議室、2018年8月1日.

田中利和「フィールドワークでアフリカと地下足袋をつくる」山形県立東桜学館中学校平成30年度中学3年「キャンパスツアー」分科会①「若手研究者からのお話」於東北大学川内キャンパスマルチメディア棟6階大ホール、2018年6月27日.

田中利和「アフリカと地下足袋協創の地域研究」東北大学若手アンサンブルワークショップ、於東北大学電気通信研究所1F エントランスホール、2018年7月4日.

田中利和「牛とともに耕す：エチオピアにおける在来犁農耕の未来可能性」アフリカセミナーの会、於仙台国際センター1階研修室、2018年6月21日.

田中利和「アフリカ地下足袋イノベーション」東北大学・山形大学 COI 拠点、若手研究者交流会於山形大学 2018年6月2日.

田中利和「越境する地下足袋：フィールドワーカーとアフリカによる新たな履物文化協創の試み」、NIHU UBRJ Seminar 口頭発表、於北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター4階小会議室(401)、2018年4月26日.

田中利和「海外でのフィールドワーク」口頭発表、福島県立磐城高等学校、於東北大学、2017年4月16日.

李 善姫 (学術研究員) [ジェンダー人類学]

Shinya Uekusa & Sunhee Lee “Strategic invisibilization, hypervisibility and empowerment among marriage-migrant women in rural Japan”, *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 21 Jul 2018, 査読有, <https://doi.org/10.1080/1369183X.2018.1500885>

李善姫「共に生きるのか、使い捨てるのか—問われる人口減少時代対策の本気度」、『生活経済政策』266、2019. 3、査読無

東北大学東北アジア研究センター

〒980-8576 仙台市青葉区川内41

TEL / 022-795-6009 FAX / 022-795-6010

センター長・高倉浩樹

編集担当・評価データ委員会

平野直人（委員長）

石井 敦、菊田和孝、内藤寛子

コラボレーションオフィス

畠山 瑞

2019年12月20日 発行

無断転載を禁ずる

